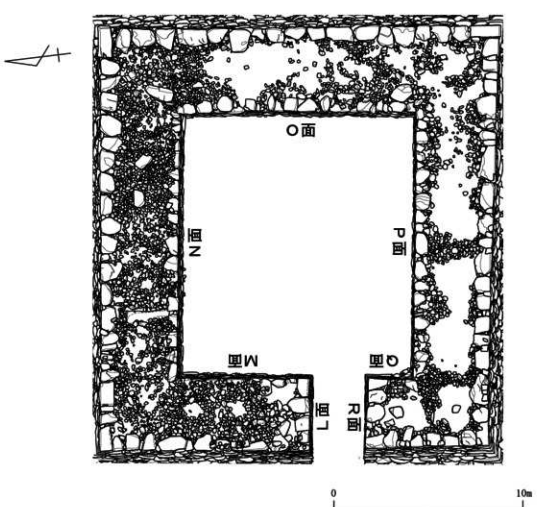
第３節　天守地下１階

１概要（第 129 図）

天守地下１階は，野面石の乱積による４面の石垣で周囲を囲まれた空間を指す。本節では，第２節で報告した玉藻廟基礎を撤去した後に下層で検出した遺構について報告する。平面形は方形を呈し，西側に入口が付属する。天守台の中央より僅かに西寄りに位置する。地下１階の北西隅は天守台北西角から東へ約 3.70m，南へ約 4.00m，北東隅は天守台北東角から西へ約 4.70m，南へ約 4.30m の距離にある。南西隅は天守台南西角から東へ約 3.50m，北へ約 4.00m，南東隅は天守台南東角から西へ約 4.60m，北へ約 4.50m の距離にある。地下１階の規模は上端で東西幅が約 14.00 m，南北幅が約 12.60 m を測り，下端で東西幅が約 13.60 m，南北幅が約 12.20 m を測り，高さは約 2.70 m である。入口の規模は上端で全長約 3.70 m，幅約 3.10 m，下端で全長約 4.30 m，幅約 2.80 m，高さ約 2.70 m である。入口は，天守地下１階の中心より約 2.50 m 南側に位置する。入口の前面には本丸から地下１階へ上がる石段の上段がつながっている。

４面の石垣は，第３章にて前述するようにアルファベットで表記する。入口北壁はＬ面とし，その他の石垣は時計回りにＭ面，Ｎ面，Ｏ面，Ｐ面，Ｑ面，Ｒ面と呼称する。



第 129 図　天守地下１階石垣各面の名称

２ 石垣（第 129・130 図）

L面（第 130 図）

本石垣は天守地下１階の入口の北壁である。高さは中央部で約 2.70 m，全長は天端で 3.80 m を測る。勾配は 86 度とやや急である。石の積み方は花崗岩･安山岩の野面石を用いた乱積であり，東側と西側の西隅角部は花崗岩の切石を用いた完成度の高い算木積であるが，西側隅角部の最上段の石は玉藻廟に伴う階段を設置するため，欠損している。東側隅角部は５石を積上げている。両隅角部の切石には幅 10cm を越える矢穴がある。築石は方形で，角張ったものが多く，規模はやや大振りなものが多い。間詰石は平垣な石が多く使用されており，部分的にヌケが見られるが，概ね良好な状態である。刻印は最上段の東から３石目の築石の正面に「上」，東から２石目の築石の上面に「上」がある。西隅角部の３・４段目の石に錆の痕跡を検出しており，門の筋金の痕跡と考えられる。

M面（第 130 図）

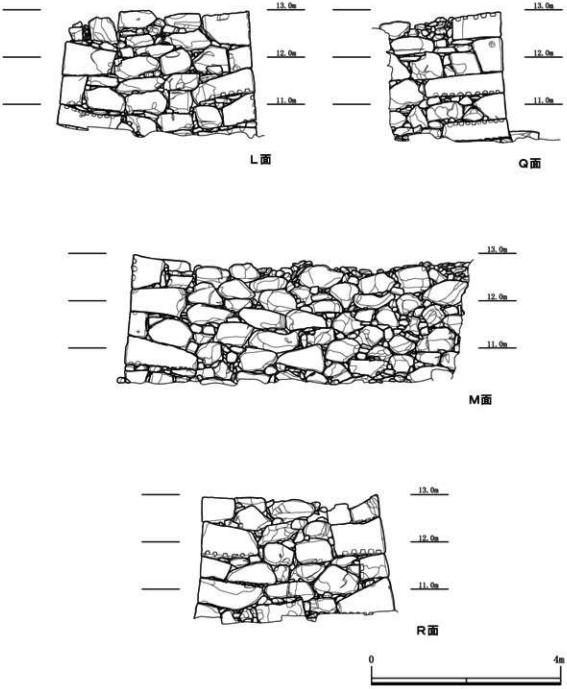
本石垣は天守地下１階の入口より北側の西壁である。高さは中央部で約 2.50 m，全長は天端で約 7.10 m を測る。石垣の勾配は 80 ～ 86 度と変化し，やや急である。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石を用いた乱積であり，南隅角部は花崗岩の切石を用いた完成度の高い算木積であり，５石を積上げており，上から２段目の石を除いて，幅 10cm を越える矢穴が見られる。北隅角部は入隅である。築石は角張ったものや角が取れて丸みのあるものが混在し，規模はやや大振りなものが多い。間詰石は角張った石が多い。石垣最上段の石は玉藻廟建設により欠損するものが多く，間詰石は部分的にヌケが見られるが，概ね良好な状態である。刻印は南隅角部の上から３段目に「×」がある。

N面（第 131 図）

本石垣は天守地下１階の北壁である。高さは中央部で約 2.40 m，全長は天端で約 14.05 m を測る。石垣の勾配は 80 度である。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石を用いた乱積であり，西側と東側の両隅角部は入隅である。築石は角張ったものや角が取れて丸みのあるものが混在し，規模はやや大振りのものが多い。間詰石は方形のものと丸みのあるものがある。最上段の築石は玉藻廟建設に伴って欠損するものや割れているものがあり，特に中央より西側部分の欠損が著しい。間詰石はわずかにヌケが見られるが，概ね良好な状態である。

O面（第 131 図）

本石垣は天守地下１階の東側である。高さは中央部で約 2.30 m，全長は天端で 12.44 m を測る。石垣の勾配は 82 度である。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石を用いた乱積であり，北側と南側の両隅角部は入隅である。築石は角張ったものと角が取れて丸みのあるものが混在し，規模はやや大振りなものが多く，貝殻の付着する石がわずかに見られる。間詰石は角張ったものと丸

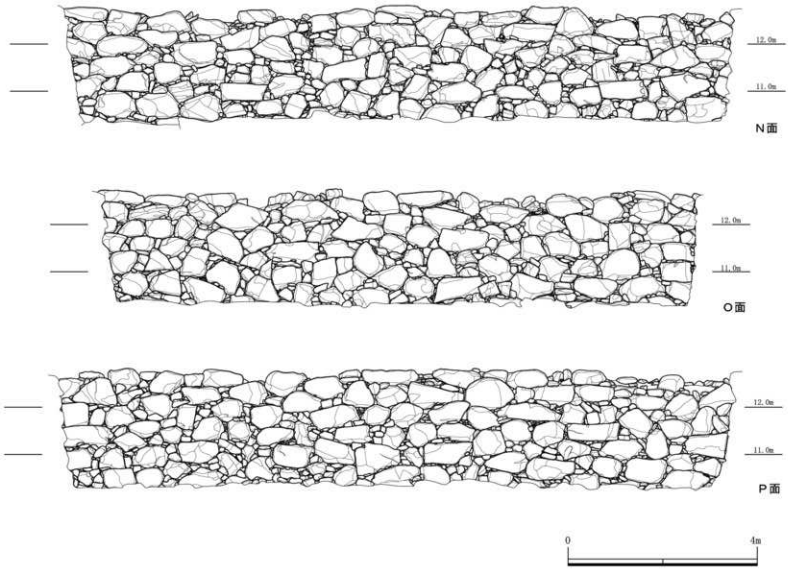


第130図　天守地下1階石垣立面図（1）

みのあるものがある。最上段の築石は玉藻刷建設に伴って部分的に欠損しており，間詰石にはわずかにヌケが見られるが，概ね良好な状態である。

P面（第131図）

本石垣は天守地下1階の南側である。高さは中央部で約2.40 m，全長は天端で14.16 mを測る。石垣の勾配は83度とやや急である。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石を用いた乱積であり，



第 131 図　天守地下 1 階石垣立面図（2）

東側と西側の両隅角部は入隅である。築石は角張ったものと角が取れて丸みのあるものが混在し，規模はやや大振りなものが多く，一部の石に貝が付着するものがある。最上段の築石は玉藻廟建設に伴い欠損しているものがあり，特に西端部の欠損が著しい。間詰石は一部にヌケが見られるが，概ね良好な状態である。

Q面（第130図）

本石垣は天守地下1階の入口より南側の西壁である。高さは北端で2.80 m，全長は天端で2.55 mを測る。石垣の勾配は80～85度と変化する。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石を用いた乱積であり，北隅角部は花崗岩の切石を用いた完成度の高い算木積である。南隅角部は入隅である。築石は角張ったものが多く，規模は大振りなものが多い。北隅角部は最上段と上から3段目と5段目の石に幅10cmを越える矢穴が見られる。間詰石は方形のものが多く，丸みのあるものもある。最上段の築石は玉藻廟建設に伴い欠損する部分があり，北隅角部最上段の石に割れが見られるが，概ね良好な状態である。刻印は北隅角部の上から2石目に「○の中に×」が見られる。

R面（第130図）

本石垣は天守地下1階の入口の南壁である。高さは東端で2.66 m，全長は天端で3.70 mを測る。石垣の勾配は85～88度であり急傾斜である。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石の乱積であり，東側と西側の両隅角部は花崗岩の切石を用いた完成度の高い算木積であるが，西隅角部の最上段の石は土管設置により破損を受けている。東隅角部の上から2段目と4段目の石と西隅角部のすべての石に幅10cmを越える大振りの矢穴が見られる。築石は角張ったものが多く，規模は大振りである。間詰石は角張ったものと丸みのあるものがあり，部分的にヌケが見られ，特に石垣上部のヌケが著しいが，概ね良好な状態である。西隅角部の上から2～4段目の石には垂直方向に錆の痕跡が残存し，門の筋金の痕跡と考えられる。

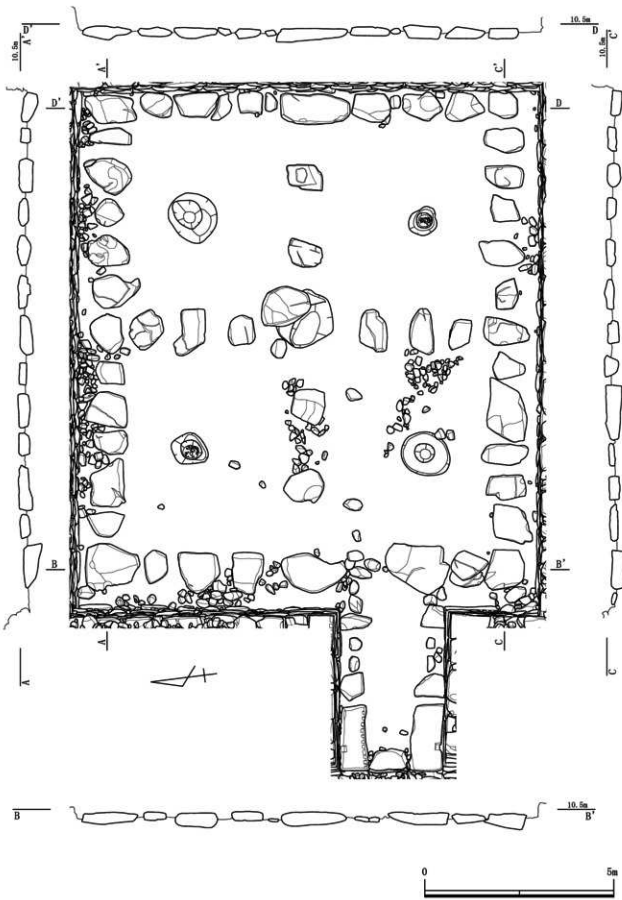
3 礎石（第132・133図）

天守地下1階の床面で検出した礎石であり，総数は58個を数える。天守入口の北側と南側に並んだ6個の礎石を除く52個の礎石は平面「田」の字状に配置されている。礎石の東西幅は約13.30 m，南北幅は約11.60 mである。礎石上面はほぼ水平であり，その標高は10.50 m前後である。最大規模の礎石は西側の礎石列の南から3番目の礎石であり，規模は0.80×1.90 m，厚さ0.40 mを測り，最小の礎石は東側の礎石列の北側から6番目の礎石であり，その規模は0.30×0.50 m，厚さ0.16 mを測る。礎石を設置する工程は，床面を礎石よりやや大きく掘り窪め，その中に上面が水平になるように礎石を置き，床面まで埋めている。掘り込みの深さは0.20 m前後であり，埋土は灰黄褐色シルト質細砂・灰黄褐色シルト質細砂＋淡黄色細砂＋灰白色細砂である。地下1階を囲繞する4面の石垣に沿う礎石は41個であり，東側の礎石列を除く3方向の礎石列は石垣下端より0.20～0.40 m内側に位置するが，東側の礎石列はO面下端に接するような位置にあり，

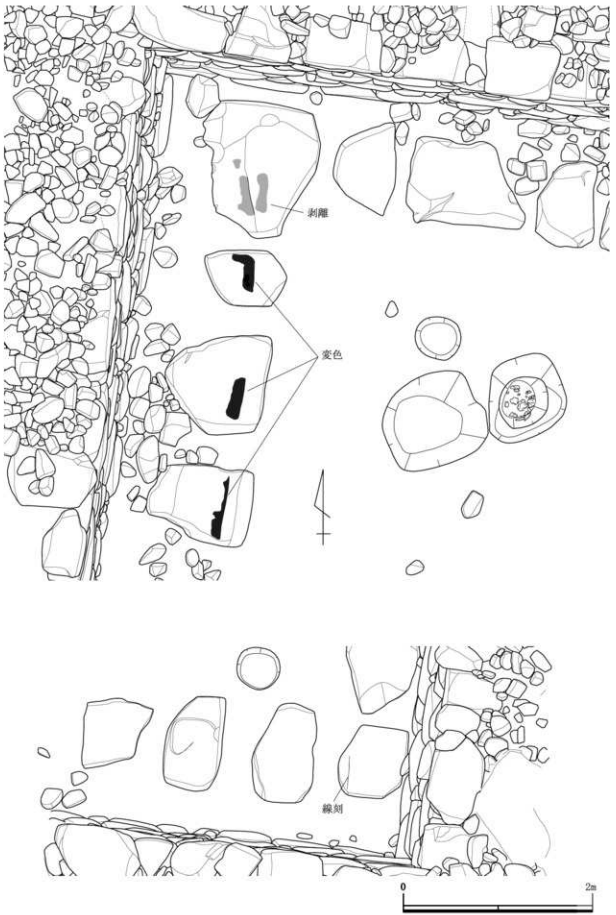
全体としてやや東側に片寄った状態をなす。「口」字状に配された礎石は隣の礎石と接するものから約 1.00 m 離れているものまであり，その間隔は不統一であるが，0.30 m 前後を測るところが多い。中央の「＋」の字状に並ぶ礎石は 11 個あり，東西方向の礎石の間隔は 1.40 m 前後，南北方向では 0.50 m 前後を測り，東西方向の礎石は間隔が広くなっている。礎石の配置は，対面する礎石が一直線上に位置するようになっている。後述するが，礎石の位置は掘立柱・天守１階の礎石との位置に明確な規則性がある。すなわち，掘立柱跡１・２は北から３石目の礎石と一直線上に当たり，掘立柱跡３・４は南から３石目の礎石，掘立柱跡１・４は西から４石目の礎石，掘立柱跡２・３は東から４石目の礎石と一直線上に位置する。また，第３節天守１階において記述するが，「＋」の字状に並ぶ礎石は天守１階において検出した礎石と抜き取り穴との同一線上に位置している。礎石の石材は花崗岩と安山岩の野面石であり，概ね大振りな石である。中心部にある礎石は地下１階の中心から位置がずれており，他の礎石に比べて上面の高さが高く，水平になっていない。第１節で記述したように南西側に抜き取り痕であるＳＫ２を検出しており，この礎石は本来中心にあったものを天守解体時に移動されたと考えられる。

礎石の上面では天守の内部構造を解明する上で重要な各種痕跡を検出した。まず，南東隅の花崗岩の礎石上面には南北方向に直線が刻まれており，その長さは約 0.30 m である。この直線は礎石上部に据える土台の設置位置を示す可能性が考えられる。この線刻から約 0.35 m 東側には加工によってできたものではない可能性もあるが線刻に平行した窪みが認められる。また，西側礎石列の北側から北西隅の礎石を含めて４番目までの礎石の上面には，土台の痕跡と考えられる変色や破損が一直線上に認められる。この線刻と土台痕跡の距離は東西方向で約 11.80 m を測り，１間を６尺５寸と仮定すると東西は 11.82 m となり，柱の芯々間ではなく柱の内法が東西６間となるように設計されていると考えられる。南北方向については土台痕跡は検出できていないが，礎石との位置関係から南北が５間であると考えられる。南東隅の礎石で検出した線刻と窪みの間隔が１尺１寸ないし１尺２寸であり，北西部の礎石で確認された土台痕跡の幅は最低１尺であると認められることから，土台の幅は１尺１寸ないし１尺２寸である可能性が高い。

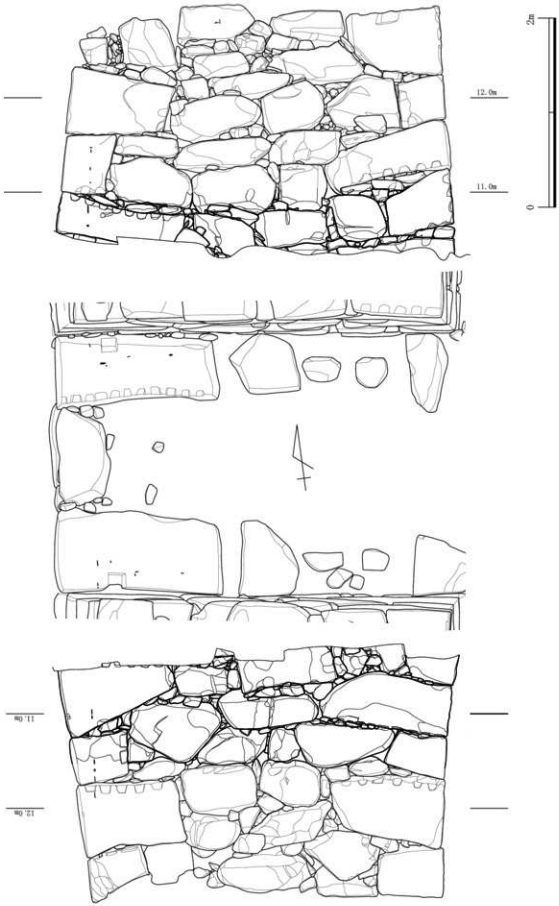
入口の床面には北側と南側に各３個の礎石が配される。礎石上面の標高は 10.41 ～ 10.53 m である。入口最西端にある南側と北側の礎石は長方形の花崗岩の切石であり，北側の礎石の規模は長辺約 1.72 m，短辺約 0.77 m，高さ約 0.60 m を測り，上面と正面に幅 10㎝を越える大振りの矢穴が 16 個ある。南側の礎石の規模は長辺約 1.75 m，短辺約 0.90 m，高さ約 0.70 m を測り，正面に幅 10㎝を越える大振りの矢穴が３個ある。この２個の礎石の上面には方形のホゾ穴があり，その大きさは長さ 18㎝, 幅 15㎝, 深さ 12㎝ である。ホゾ穴の位置は，南側の礎石は西端より 0.55 m 東，北側の礎石は 0.50 m 東である。ホゾ穴の周囲には方形の筋金の錆が残存し，さらに天守台入口の北壁の西隅角部の上から３・４段目の石と南壁の西隅角部の上から２～４段目の石に同様の錆が残存する。この錆を根拠として，この門には太さ１尺４寸×１尺１寸の方形の柱が使用されていたと考えられる。残り４個の礎石は花崗岩・安山岩の野面石であり，0.65 ～ 0.85 m を測るやや小振りである。その間隔は 1.20 m を測る。その間に 0.27 ～ 0.42 m の小振りの２個の石が



第132図　天守地下1階 礎石平・断面図



第133図　天守地下1階礎石線刻・剥離平面実測図



第134図　地下1階入口の石垣に残る錆跡とホゾ穴

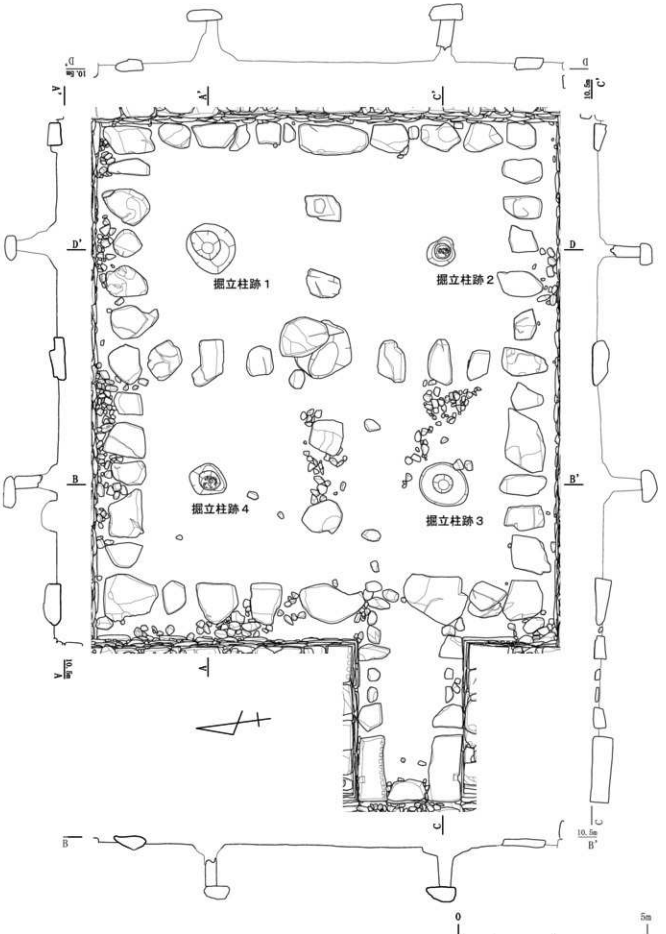
等間隔で並んでいるが，礎石としては小さすぎるので，礎石としては扱っていない。しかし，その石の上面は水平を保ち，礎石と同一の高さであることから礎石と何らかの関係を持つと考えられる。

4 天守の掘立柱跡（第135～141図）

「田」の字状に配置された礎石の４箇所の空白部分の中央において掘立柱跡を検出した。報告に際し発掘調査時に仮称したＳＫ４～７を廃棄し，本報告書では掘立柱跡１～４という名称を新たに設定する。北西部で検出した掘立柱跡１は天守地下１階の北西隅より東4.10 m，南3.00 mの位置にあり，北東部に検出した掘立柱跡２は北東隅より西3.35 m，南2.90 mの位置にある。南東部で検出した掘立柱跡３は南東隅より西3.40 m，北2.90 mの位置にあり，南西部で検出した掘立柱跡４は南西隅より東4.10 m，北2.90 mの位置にある。柱穴の芯々間距離は東西方向，南北方向ともに6.20 mを測る。掘立柱跡１・２は北から３石目の礎石と一直線上に当たり，掘立柱跡３・４は南から３石目の礎石，掘立柱跡１・４は西から４石目の礎石，掘立柱跡２・３は東から４石目の礎石と一直線上に位置する。これらの柱の位置は天守台の中央で柱の内法が３間四方となる位置に相当する。調査時に堀方の平面形を図化できなかったため，図示しえていないが，掘り方が直径1.50～2.00 m，深さ約1.50 mを測り，掘方中央で柱痕を明確に検出した。全ての柱穴の底面には礎石が据えられ，堀立柱跡１・３には直径30㎝余りの柱材が0.70～0.80 m残存し，掘立柱跡２・４は柱材が抜き取られていた。

掘立柱跡1（第138図）

北西部において検出した柱穴であり，ＳＫ３に切られている。柱穴内部には礎石と柱材が残存していた。天守地下１階の床面で検出した柱穴の平面形は円形で，直径は約1.75 mを測る。柱穴の掘り込みは急傾斜であり，底面の直径は1.02 m，床面からの深さは1.45 mを測る。柱穴の中央やや東寄りに柱痕を確認した。柱痕の平面形は東側に膨れる楕円形を呈し，その規模は0.80×0.95 mを測る。床面から0.25 mまでの掘り込みは緩やかな傾斜であるが，その下方はほぼ垂直に掘り込まれている。柱材の上部は床面から0.38 mの深さにあった。残存する柱材の全長は0.75 m，直径0.33 mを測り，樹種はマツ科ツガ属である。柱材は腐食が著しく，遺存状態は非常に悪く加工痕等は不明である。柱穴の底面には礎石が設置されていた。石材は安山岩の野面石であり，大きさは0.82×0.65 m，厚さ0.35 mを測る。礎石上面の標高は9.18 mであり，上面が平坦になるように置かれていた。柱材は礎石の北東隅に柱の３/４が乗る状態であり，礎石の上面には柱材の接地した痕跡が明瞭に残る。柱材は礎石の中央に設置されておらず，柱材と礎石の位置がやや ずれている。埋土は，柱痕部・掘方部・礎石周囲に大別できる。柱痕部は上位から瓦・漆喰を含む浅黄色シルト質細砂，にぶい黄色＋暗灰色細砂，柱材を多量に含む灰黄色細砂の３層であり，締まりがほとんどない状態である。掘方部は淡黄色粘質土のブロックを含む浅黄色＋黄褐色＋暗灰黄色細砂が大部分を占め，下方に暗黄色細砂がわずかに堆積する。掘方部の埋土は固く締まっている。礎石周囲は黄灰色細砂を含む浅黄色細砂の単一層である。



第135図　天守地下1階掘立柱跡平・断面図

柱穴の施工過程を復元すると次のようになる。地下1階床面を直径約1.75 m，深さ1.45 mの穴を掘り，底面を若干埋めて礎石を設置し，礎石の上に柱を立て，掘り出した天守台の盛土をもって柱穴を埋めたと考えられる。柱を立てる際に礎石の中心に柱が設置できない事態が発生したが，礎石を設置し直さず柱をズレた位置に立てている。明治時代に入り天守解体に伴い柱材は基部の0.75 mを残して取り除かれ，柱痕は一気に埋め戻されたと考えられる。

柱痕部から出土した遺物は，菊丸瓦（T 356），平瓦（T 357）であり，柱材が取り除かれた後に入った遺物である。掘方部から出土した遺物は陶器椀（490），同壺（491，492）同擂鉢（493），土師質土器皿（494～497），同羽釜（498），同足釜（499），同火鉢（500），瓦器皿（501），同椀（502～504）であり，柱穴の掘方部を埋めた時に使用した天守台の盛土に含まれていた中世の土器である。

T 356は菊花文で花弁の輪郭を陽刻線で表現し，花弁が16葉である。漆喰が付着する。佐藤分類菊丸瓦Ⅰ類1である。T 357は下端中央に刻印を有し，凹面に使用痕が明瞭に残る。

491の口縁部は水平気味に広がり，口縁端部はわずかに上方に拡張する。492は備前系の壺で，肩部に櫛描波状文が施される。493は内面に5本1単位の卸目がある。

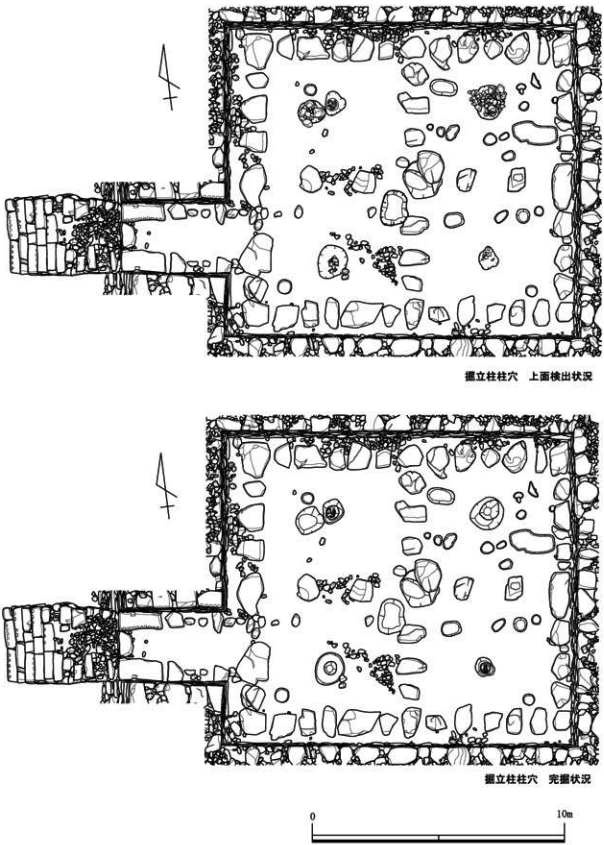
494，495は体部の短い小皿で，494の底部は切り離し後にナデ，495は回転ヘラキリ後にナデが施される。496，497は緩やかな傾斜で立ち上がる体部であり，496の底部は回転ヘラキリ後にナデが施される。

498は断面四角な鍔を持ち，内面に横方向のハケが施され，外面に煤が付着する。499は内傾する口縁部で鍔の端面にハケ，内面にヘラナデが施される。500は火鉢の脚である。

501は体部と口縁部の境に稜を持ち，内面は部分的にヘラミガキが施される。502は口縁部が薄くなり，内面は部分的にヘラミガキが施される。503は外面に指頭圧後ヘラミガキ，内面にヘラミガキが施される。504は短い高台を持ち，内面にヘラミガキが施される。

掘立柱跡2（第139図）

北東隅において検出した柱穴であり，柱穴内部には礎石が残存するが柱は残っていない。天守地下1階の床面で検出した柱穴の平面形は円形で，直径は約1.88 mを測る。柱穴の掘り込みは急傾斜であり，断面はU字形を呈する。底面の直径は約0.95 m，検出面からの深さは1.57 mを測る。柱穴の中央において柱痕を確認した。柱痕の平面形は円形を呈し，その直径は1.35 mを測る。上面から0.50 mまでの掘り込みは緩やかな傾斜であるが，以下はほぼ垂直に掘り込まれている。上層には直径0.10～0.35 mの円礫と瓦片が多量に検出され，天守解体に伴って柱材が抜き取られた後に円礫や瓦片を充填したと考えられる。柱穴の底面には礎石が設置され，大きさは0.85×0.76 m，厚さ0.30 mを測る。石材は安山岩の野面石である。礎石上面の標高は9.22 mであり，概ね水平になるように設置される。埋土は，柱痕部・掘方部・礎石周囲に大別できる。柱痕部は上位から円礫・瓦・漆喰を含むにぶい黄色細砂，円礫・瓦・漆喰を含む浅黄色細砂，暗灰黄色細砂，柱材を含む暗灰黄色細砂，焼土の5層であり，締まりがほとんどない状態である。掘方部は



第136図　天守地下1階掘立柱跡平面図

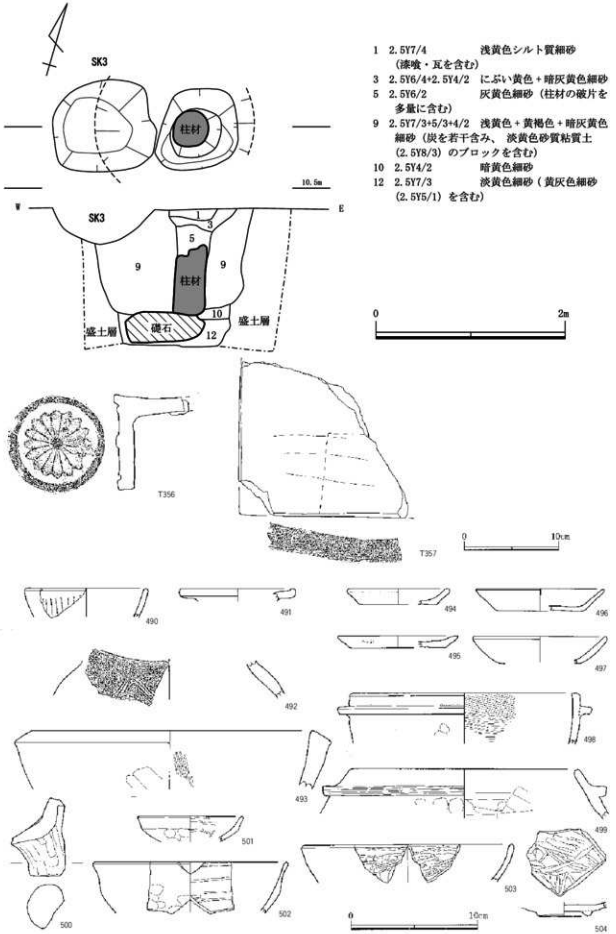
第 137 図　天守地下１階掘立柱跡内礎石平・断面図

淡黄色粘質土のブロックを含む浅黄色＋黄褐色＋暗灰黄色細砂と浅黄色＋黄褐色細砂の２層であり，掘方部の埋土は固く締まっている。礎石の下には黄灰色細砂を含む浅黄色細砂と浅黄色＋淡黄色細砂が堆積し，非常に硬く締まっている。

柱穴の施工過程を復元すると次のようになる。地下１階床面を直径約 1.88 m，深さ 1.57 mの穴を掘り，底面を約 0.20 m埋めて礎石を設置し，礎石の上に柱を立て，掘り出した天守台の盛土をもって柱穴を埋めたと考えられる。柱痕は礎石の中心の位置にあたり，柱は礎石の中央に立つ。明治時代に入り天守解体に伴い柱材は抜き取られ，柱痕は一気に埋め戻された。

柱痕部から出土した遺物は，軒丸瓦（T 358），丸瓦（T 359），平瓦（T 360），輪違い（T 361），滴水瓦（T 362）であり，柱材が取り除かれた後に入った遺物である。掘方部から出土した遺物は，陶器擂鉢（505），土師質土器杯（506），同足釜（507），瓦器椀（508 ～ 510）であり，柱穴の掘り方部を埋めた時に使用した天守台の盛土に含まれていた中世の土器である。

T 358 は右巻き三巴文であり，巴頭部は大きく，巴尾部はやや短い。T 359 は小型の玉縁式丸



第 138 図　天守地下１階掘立柱跡１平・断面図及び出土遺物実測図

瓦であり，凹面には布目・コビキBが残存する。T 360は凹面に使用痕が見られる。T 361は凸面にナデ・ヘラナデが施され，凹面にゴザ目・コビキBが残存する。T 362は二重の亀甲文の中心に十字形に近い四つ葉が描かれる。唐草文は陽刻の線描と囲み線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。

505は備前系擂鉢である。506はやや内湾する体部で，底部は板目後ナデが施される。口縁部には重ね焼き痕がある。507は内傾する口縁部にほぼ水平方向に鍔が付く。

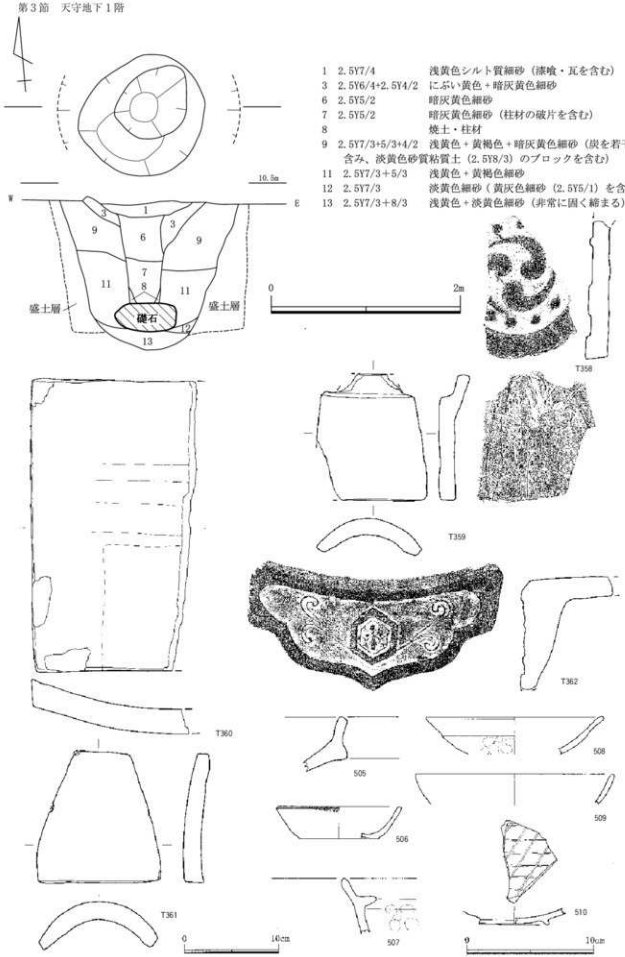
508は口縁部と体部の境に僅かな稜を有し，体部外面は指頭圧，内面はナデ・ヘラミガキが施される。509は内面と口縁部外面にヘラミガキ，体部外面は指頭圧後ヘラミガキが施される。510は内面に斜格子状の暗文が施される。

掘立柱跡3（第140図）

南東隅において検出した柱穴であり，柱穴内部には礎石・柱が残存していた。天守地下1階の床面で検出した柱穴の平面形は円形であり，直径は約1.90 mを測る。柱穴の掘り込みは急傾斜であり，底面の直径は1.20 m，検出面からの深さは1.52 mを測る。柱穴の中央において柱痕を確認した。柱痕の平面形は不整な楕円形を呈し，その規模は0.92 × 0.76 mを測る。上面および上層より瓦が出土した。上面から0.25 mまでの掘り込みは緩やかな傾斜であるが，柱材まではほぼ垂直に掘り込まれている。柱材の上部は検出面から0.30 mの深さにおいて検出した。残存する柱材の全長は0.78 m，直径0.30 mを測り，樹種はマツ科ツガ属である。柱材は礎石の中央部の位置で検出した。柱材は腐食が著しく，遺存状態は非常に悪く加工痕等は不明である。柱穴の底面には礎石が設置され，大きさは0.85 × 0.59 m，厚さ0.40 mを測る。石材は安山岩の野面石である。礎石上面の標高は9.20 mであり，概ね水平になるように設置され，礎石の中央部には柱材の接地した痕跡が明瞭に残る。埋土は，柱痕部・掘方部・礎石周囲に大別できる。柱痕部は上位から瓦・漆喰を含む暗灰黄色＋にぶい黄橙色シルト質細砂，炭と灰を含むにぶい黄褐色シルト質細砂，柱材破片を多量に含む灰黄色細砂の3層であり，締まりがほとんどない状態である。掘方部は淡黄色粘質土のブロックを含む浅黄色＋黄褐色＋暗灰黄色細砂と淡黄色＋黄褐色細砂の2層であり，掘方部の埋土は固く締まっている。礎石周囲は黄灰色細砂を含む淡黄色細砂と灰黄色＋黄灰色細砂の2層であり，固く締まっている。

柱穴の施工過程を復元すると次のようになる。地下1階床面を直径約1.90 m，深さ1.52 mの穴を掘り，底面を約0.10 m埋めて礎石を設置し，礎石の上に柱を立て，掘り出した天守台の盛土をもって柱穴を埋めたと考えられる。柱痕は礎石の中心の位置にあたり，柱は礎石の中央に立つ。明治時代に入り天守解体に伴い柱材は抜き取られ，柱痕は一気に埋め戻された。

柱痕部からの遺物は出土しなかった。掘方部から出土した遺物は，磁器蓋（511），陶器擂鉢（512），土師質土器皿（513），同杯（514），同椀（515，516），黒色土器椀（517，518），須恵質土器杯（519），土錘（C 27）であり，柱穴の掘方部を埋めた時に使用した天守台の盛土に含まれていた中世の遺物である。



第 139 図　天守地下１階掘立柱跡２平・断面図及び出土遺物実測図

511は器高の浅い蓋である。512は備前系で，口縁部が直立し僅かな凹凸がある。513は非常に器高が低く，底部は切り離し後にナデが施される。514は外面にロクロによる稜が明瞭に残る。515は体部外面に指頭圧，内面にナデ・ヘラミガキが施される。516は体部下半にナデが施される。517は外面黒色で，内外面に横方向のヘラミガキが施される。518は短い高台が付き，内面に丁寧なヘラミガキが施される。519の底面は静止糸切りが残存する。C 27は管状土錘である。

掘立柱跡4（第141図）

南西隅において検出した柱穴であり，柱穴内部には礎石が残存するが柱は残っていない。天守地下1階の床面で検出した柱穴の平面形は円形で，直径は約1.55 mを測る。柱穴の掘り込みはフラスコ状を呈し，下方が大きく広がる。底面の断面は礎石の下面に沿うように窪んでおり，その直径は約1.09 m，検出面からの深さは1.48 mを測る。柱穴の中央において柱痕を確認した。その平面形は円形を呈し，直径は1.30 × 1.15 mを測る。上面から0.20 mまでの掘り込みは緩やかな傾斜であるが，以下は礎石の上面までほぼ垂直に掘り込まれている。上面および上層では直径0.10 ～ 0.35 mの円礫と瓦片を多量に検出し，柱材の抜き取り後に円礫や瓦片を充填したと考えられる。柱穴の底面には礎石が設置され，大きさは0.88 × 0.76 m，厚さ0.40 mを測る。石材は安山岩の野面石である。礎石上面の標高は9.19 mであり，概ね水平になるように設置されている。礎石上面の中央やや南寄りの位置で柱材が接していたと考えられる痕跡を検出した。埋土は，柱痕部・掘方部・礎石周囲に大別できる。柱痕部は上位から円礫・瓦・漆喰を含むにぶい黄橙色＋暗灰黄色シルト質細砂，炭と灰を含むにぶい黄褐色シルト質細砂，にぶい黄橙色細砂の3層であり，締まりがほとんどない状態である。掘方部は淡黄色粘質土のブロックを含む浅黄色＋黄褐色＋暗灰黄色細砂と黄灰色細砂を含む淡黄色細砂の2層であり，掘方部の埋土は締まっている。礎石の周囲は黄灰色細砂を含む淡黄色細砂が堆積し，硬く締まっている。

柱穴の施工過程を復元すると次のようになる。地下1階床面を直径約1.55 m，深さ1.48 mの穴を掘り，底面を約0.06 m埋めて礎石を設置し，礎石の上に柱を立て，掘り出した天守台の盛土をもって柱穴を埋めたと考えられる。柱は礎石の中央やや南寄りの位置に立つ。明治時代に入り天守解体に伴い柱材は基部の0.78 mを残して取り除かれ，柱痕は一気に埋め戻された。

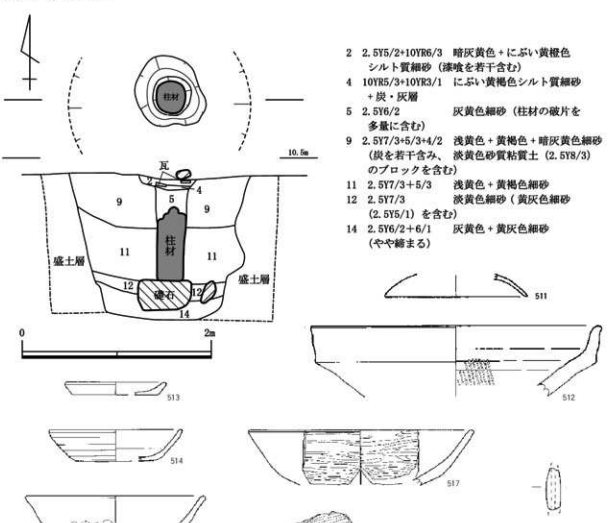
柱痕部から出土した遺物は隅切丸瓦（T 363），熨斗瓦（T 364），鉄板（M 89）である。掘方部から出土した遺物は土師質土器皿（520），瓦器皿（521）であり，柱穴の掘方部を埋めた時に使用した天守台の盛土に含まれていた中世の遺物である。

T 363は釘穴1個を有し，凸面はナデ・ミガキが施され，凹面には布目・コビキBが残存する。

T 364は全面にナデが施され，凸面に漆喰の痕跡が輪状に残る。

M 89は断面長方形を呈し，中央に3個の円孔が残存する。

520は直線的に延びる体部から口縁部に至る。底面はヘラナデが施される。521は外面下半に指頭圧，上半はナデ，内面はナデ・ヘラミガキが施される。

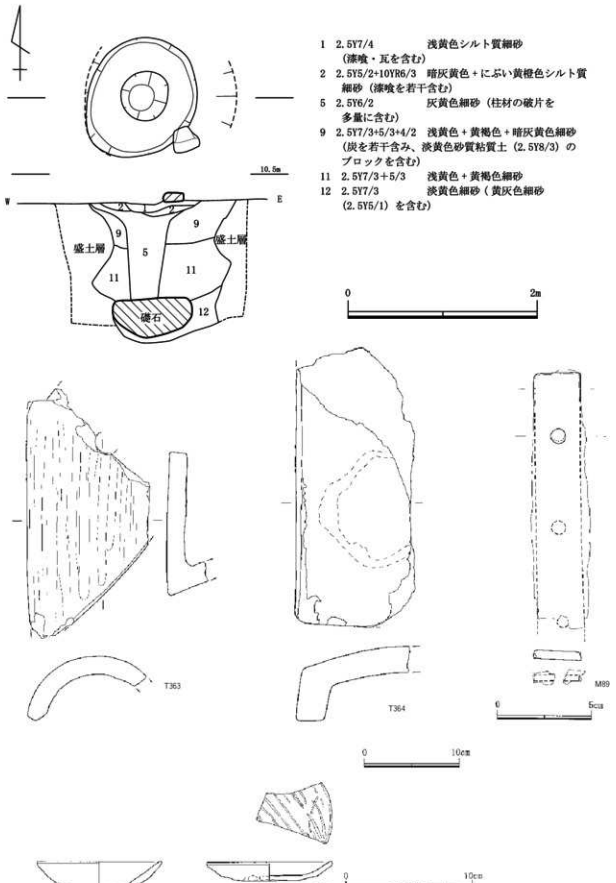


第 140 図　天守地下１階掘立柱跡３平・断面図及び出土遺物実測図

5 小結

天守地下１階は花崗岩を主体とし，安山岩，凝灰岩の野面石を乱積みした石垣によって四方を構築し，その規模は上端で東西幅が約 14.00 m，南北幅が約 12.60 m，下端で東西約 13.60 m，南北約 12.20 m，高さ約 2.70 m を測り，西側には下端の幅約 2.80 m，長さ約 4.30 m を測る入口が付属する。床面において検出した天守の構造に関係する遺構として，礎石と掘立柱がある。

礎石が 58 個検出され，入口の６個を除く 52 個の礎石は「田」の字状に配置される。礎石は，対面する礎石が一直線上に位置するようになっており，掘立柱・天守１階の礎石との位置に明確な規則性がある。すなわち，地下１階の堀立柱跡１・２は北から３石目の礎石と天守１階の西側に検出した礎石抜き取り痕一直線上に位置し，掘立柱跡３・４は南から３石目の礎石，掘立柱跡



第 141 図　天守地下１階掘立柱跡４平・断面図及び出土遺物実測図

１・４は西から４石目の礎石，掘立柱跡２・３は東から４石目の礎石と一直線上に位置する。また，中央にある「＋」の字状に並ぶ礎石は天守１階において検出した礎石と抜き取り穴との同一線上に位置する。礎石の上面には土台の設置位置を示すと考えられる線刻や土台痕跡である変色・破損が検出される。この線刻と土台痕跡の距離は約 11.80 ｍを測り，１間を６尺５寸と仮定すると東西方向の柱の内法が６間となる。南北方向は土台痕跡等が検出できていないが，礎石との位置関係から５間であると考えられる。南側礎石は天守１階の南東隅と南西隅にある礎石と同一線上に位置し，西側礎石は天守１階の北西隅にある礎石抜き取り痕と同一線上に，北側礎石は天守１階の北西隅にある礎石抜き取り痕と同一線上に，東側礎石は天守１階の北東隅にある礎石抜き取り痕と同一線上に位置する。

「田」の字状に並んだ礎石の４箇所の空白部分の中央に柱穴が検出され，礎石と掘立柱を併用した構造であったことが判明する。柱位置は天守台の中央で柱の内間が３間四方になる位置である。柱穴の掘り方は直径約 1.5 ～ 2.0 ｍ，深さ約 1.5 ｍを測り，下部には礎石が据えられている。掘立柱跡２，４は柱材が抜き取られていたが，掘立柱跡１，３は直径約 30㎝の槇科の柱材が 70 ～ 80㎝残存していた第４章第３節で記述するが，分析の結果柱材は槇科に属することがわかっている。第４章第２節で記述するが柱材は放射性炭素Ｃ 14 年代測定法（ＡＭＳ法）による年代測定では 1630 ～ 1660 年の可能性が高いことが示され，松平頼重による改築時に伐採されたものと考えられる。

天守地下１階の床面で検出された礎石や掘立柱から想定される柱位置は，地下１階は内法が東西６間，南北５間となるように設計されており，「田」の字に柱が配され，その中心に内法が３間四方となる位置に掘立柱が四天柱状に入ると考えられる。地下１階の平面の規模に関して『消暑漫筆』では「御天守下の重東西十三間弐尺南北十弐間弐尺」と記載されるが，『小神野筆帖』では「東西六間南北五間」と記載されており，発掘調査で実証された柱位置により『小神野筆帖』の方が信憑性は高いと言える。このような内部構造を城内に現存する櫓と比較すると，「田」の字の平面形態は艮櫓に見られるものであり，四天柱は月見櫓に見られるものであり，天守はこれらの形式を合体させたような構造の可能性が考えられる。

第４節　天守１階

１ 概要（第 142 図）

高松城は建物の老朽化と修繕管理費用が多額におよぶことを理由に明治 17 年（1884）に天守が取り壊された。その後，高松藩祖松平頼重を祀った御廟として玉藻廟が明治 35 年（1902）に建設された。その際に天守の地下１階の床面から石垣で基礎を造りながら地下１階部分を埋立てており，その上に玉藻廟が建てられていた。

天守１階は天守台石垣の天端部分に設けられた平坦面である。天端上面の幅は，北側と南側では 4.00 m，西側で 3.70 m，東側で 4.50 m を測る。玉藻廟解体後の標高は 12.80 ～ 13.00 m である。石垣に伴う裏込め石の検出面より上部には淡黄色粘質土が約 0.20 m 堆積するが，この土は玉藻廟建立に先立って埋立てられたものである。１階部分は玉藻廟建設によって改変を受けており，特に天守台の南東隅を中心とする東側と南側は改変の影響が大きく，石やコンクリートが深い所まで入り込んでいる。

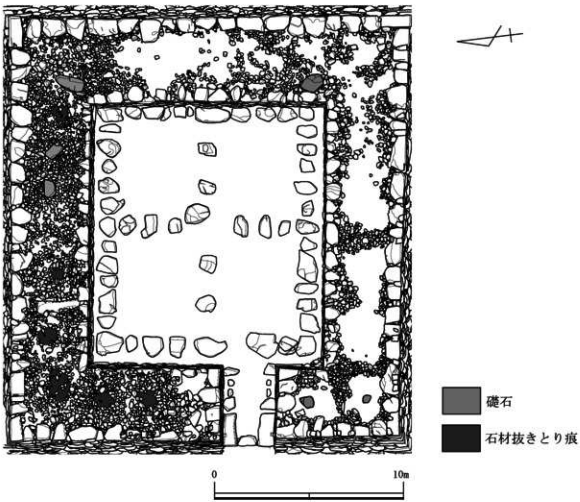
天守１階は石垣に伴う裏込め石で充填されており，その裏込め石上面で礎石と礎石抜き取り痕を検出した。

２礎石・礎石抜取り痕（第 142 図）

１階部分の東側と南側は玉藻廟建設によって大きく改変を受けており，礎石の残存状況は良好でない。西側と北側では北東隅付近で３個，南東隅で１個，南西隅付近で２個の計６個の礎石と北西隅付近で５箇所，北東隅で１箇所の礎石抜き取り痕を検出した。

礎石の規模は，最小で 0.40 × 0.40 m，最大で 0.70 × 1.50 m を測り，石材は花崗岩と安山岩の野面石である。天守１階の北東隅の西側では２個の礎石を検出し，その西側の礎石は天守地下１階で検出した「田」の字状に並ぶ礎石の東から５番目の礎石と同一直線上に位置し，東側の礎石は東から３番目の礎石と同一線上に位置する。南東隅付近と南西隅付近で検出する２個の礎石は天守地下１階の南側礎石列と同一線上に位置する。礎石上面の標高は，北東隅のの西側寄りに位置するそれぞれ２個の礎石が 12.85 m，12.90 m を測り，北東隅の礎石が 12.63 ～ 12.84 m，南東隅付近の礎石が 12.67 m，南西隅の礎石が 12.83 m，南西隅付近の礎石が 12.76 m である。北東隅の礎石を除く礎石はほぼ水平を保っている。

礎石抜取り痕は，石垣に伴う裏込め石が円形ないし不整な円形で検出できない部分から識別しており，６箇所の礎石抜き取り痕を検出した。その規模は直径 0.60 ～ 1.50 m を測る。北西隅付近に検出した５箇所の中で南端の礎石抜取り痕は，天守地下１階の北から３番目の礎石と天守地下１階の掘立柱跡１・２と同一線上に位置し，その北側の礎石抜取り痕は天守地下１階の北側礎石列と同一線上に位置する。北西隅東側の礎石抜取り痕は西側礎石列と同一線上，その東側の礎石抜き取り痕は西から４番目の礎石と天守地下１階の掘立柱跡１・４と同一線上に位置する。北東隅の礎石抜き取り痕は東側礎石列と同一線上に位置する。北西隅東側の礎石抜き取り痕は東側礎石石列と同一線上，そのその」東側の礎石抜き取り痕は４番面の礎石と天守地



第 142 図　天守１階礎石，石材抜きとり痕平面図

下１階の掘立柱跡１・４と同一線上に位置する。北東隅の礎石抜き取り痕は東側礎石列と同一線上に位置する。

天守１階において検出した礎石と礎石抜き取り痕は，天守１階の中央に直線的に並んでいる。北東隅と南東隅付近の礎石を除いておおむね原位置を保っている。また，礎石抜き取り痕は礎石の原位置を示していると考えられる。

３ 小結

高松城の天守は，現存する天守の写真や絵図から１階平面が天守台から張り出すとい特徴を持つ。今回の発掘調査において，礎石と礎石抜き取り痕の一部が検出できたことは天守の内部構造を復元する重要な資料となると思われる。１階部分の礎石・礎石抜き取り痕は若干の改変を受けていると思われるが，地下１階の礎石配置と同一の基準に基づいて配置されているものであり，原位置をほぼ保っていると考えられる。推定できる礎石の間隔は 2.00 ～ 2.50 m であり，地下１階に「田」の字状に並んだ礎石の中央部分の「十」字部分の礎石と周囲の礎石を結ぶ線の延長線上と「口」字状に並ぶ４方向の礎石の延長線上と四隅に１階部分の礎石が設置されていたと推定することができる。

第５節　天守台前面

１ 概要（第 142 ～ 150 図）

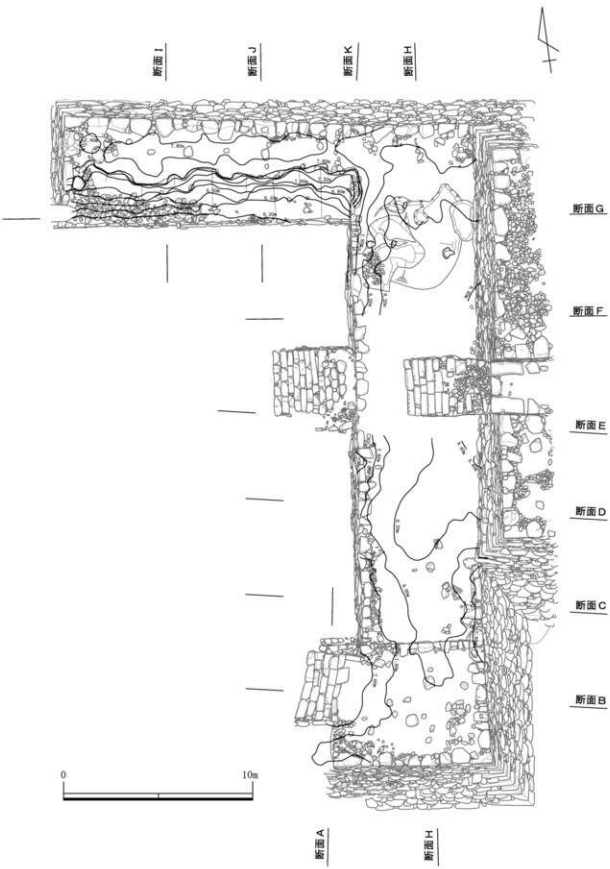
天守台の前面に位置する調査である。調査以前は，中央やや北寄りに玉藻廟へ参拝するための石段が設けられ，松や楠の巨木が植えられていた。地表面の標高は 7.6 m ～ 8.4 m を測り，東側が最も高くなっており，北側と南側方向に緩やかな傾斜をもって低くなっている。

Ｈ面の第１段上面のレベルが高松城に伴う遺構検出面であり，そのレベルより上位に堆積する土層を包含層とする。天守台前面に任意に５m 間隔のグリッドを設定し，土層観察用の畦を８本設定し，断面Ａ～Ｈと仮称する。断面Ａは南多聞との境に南北方向に設定し，断面Ｃ～Ｇは５m 間隔で東西方向に設定し，断面Ｈは調査区を南北方向に横断するように設定する。土層の堆積は基本的に水平堆積をなしており，上層から表土，灰黄色細砂，漆喰を多量に含む灰白色細砂，漆喰を多量に含む浅黄色＋灰黄色シルト質細砂，漆喰を多く含み固く締まる灰白色シルト質細砂，固く締まるにぶい黄色シルト質細砂，漆喰を多く含み非常に固く締まる黄色シルト質細砂，漆喰を含みやや固く締まる浅黄色シルト質細砂の８層に分層できるが，大別すると表土と灰黄色細砂と漆喰を含み固く締まるシルト質細砂に分けられる。

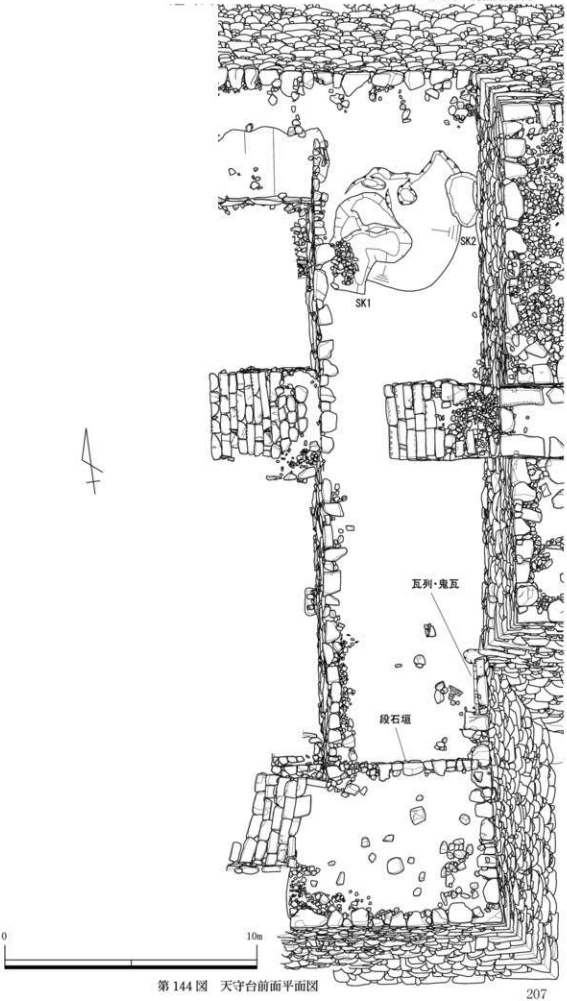
検出した遺構は，天守へ続く階段のうちの上部の石段，段石垣，土坑である。ただし，天守へ続く階段である石段は本丸において下段の石段が検出されており，本丸から天守地下１階に登る一連の石段であることから，第８節にまとめて記載する。また，明確な意味で遺構とは言えないが瓦列と漆喰の崩落を検出し，さらにＨ面の栗石を段石段の北側において検出した。

２ 段石垣（第 151 図）

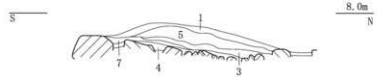
天守台前面の南端から約 6.50 m 北側の位置で検出した石垣である。北側に面を有し東西方向に延びる。全長は 5.50 m，石垣の高さは 0.45 m を測る。基本的に２段積みであるが，西端から約 2.00 m の範囲は上段の石を欠損する。頂部の標高は 7.82 m 前後である。築石は花崗岩と安山岩を使用し，最も大きい築石は 0.85 m の花崗岩の割石であり，全体としてはやや小振りの石が多い。石垣の構造は長方体傾向の石材を横積みして目地を通すが，西端部ではＨ面の栗石と一体化し目地を乱す。下段の築石は小振りの石材を使用している。間詰石は 0.10 ～ 0.25 m の野面右角礫や円礫である。裏込は施工されていない。段石垣南側の遺構検出面は石垣頂とほぼ同じ高さである。段石垣の北側の標高は 7.40 m であり，石垣段差は 0.40 m である。遺構検出面より上方の埋土は漆喰を多く含むシルト質細砂であり，遺構検出面より下の盛土は漆喰を含まない細砂である。この段石垣は，築造時期が不明であるが，本丸南側にある多聞櫓台の本来の北面石垣の位置を示すと考えられる。現在の多聞櫓台は玉藻廟建設に伴う可能性の高い削平で南北幅は約 2.5 m であるが，この段石段を参考に想定される櫓台の天端の幅は約 6.50 m である。



第143図　天守台前面・中川櫓台平面図及び断面図作成位置図

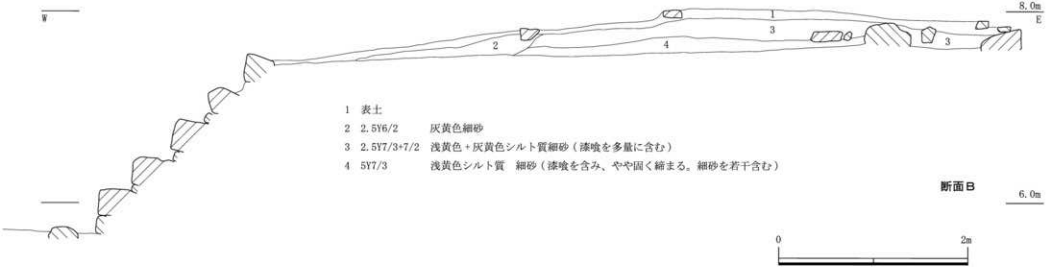


第144図　天守台前面平面図



1　表土
3　2.5Y7/3+7/2　浅黄色＋灰黄色シルト質細砂（漆喰を多量に含む）
4　5Y7/3　浅黄色シルト質　細砂（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）
5　5Y7/2　灰白色シルト質細砂（漆喰を多く含む）
7　2.5Y5/1　黄灰色細砂

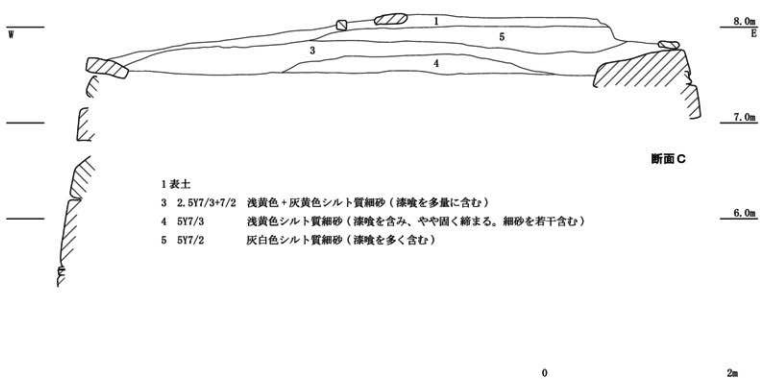
断面A



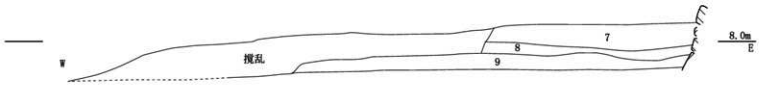
1　表土
2　2.5Y6/2　灰黄色細砂
3　2.5Y7/3+7/2　浅黄色＋灰黄色シルト質細砂（漆喰を多量に含む）
4　5Y7/3　浅黄色シルト質　細砂（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）

断面B

第145図　天守台前面・本丸土層断面図（1）

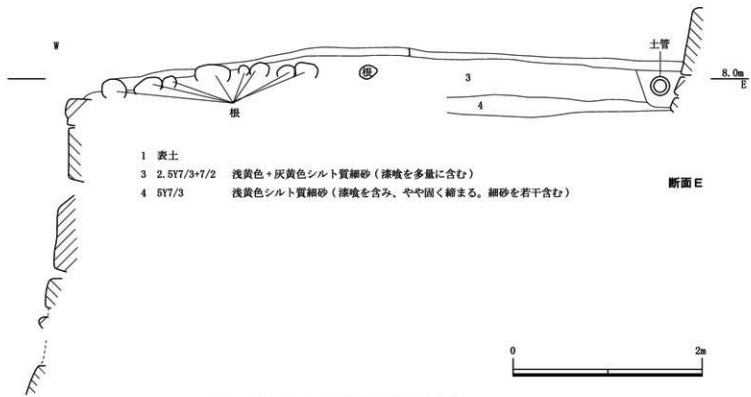


第146図　天守台前面・本丸土層断面図（2）



7　5Y7/2　　灰白色シルト質細砂（漆喰を多く含み、固く締まる）
8　2.5Y6/3　にぶい黄色シルト質細砂（固く締まる）
9　5Y7/3　　黄色シルト質細砂（漆喰を多く含み、非常に固く締まる）

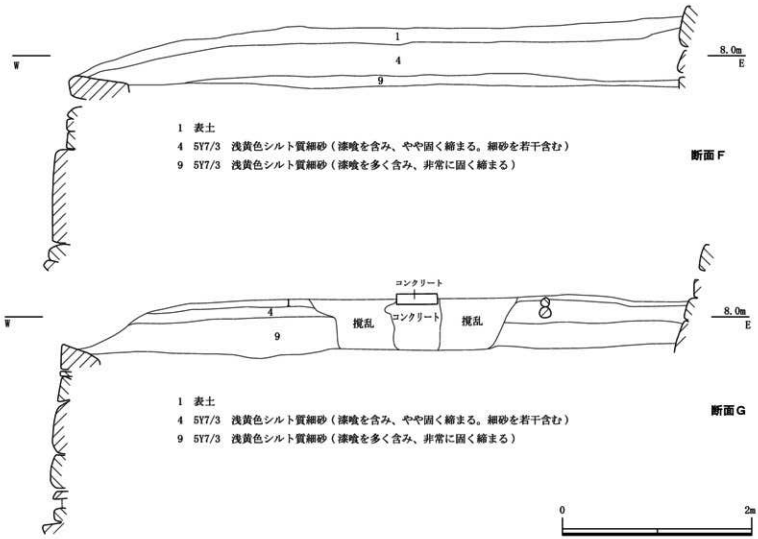
断面D



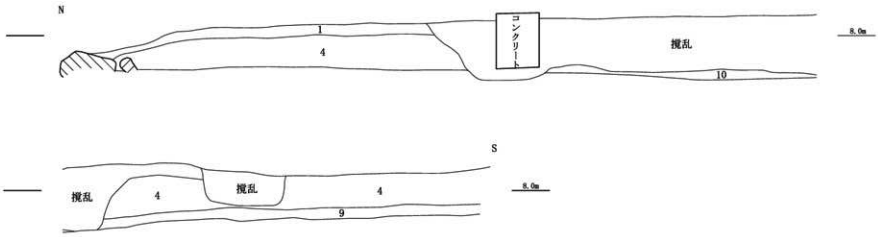
1　表土
3　2.5Y7/3+7/2　浅黄色＋灰黄色シルト質細砂（漆喰を多量に含む）
4　5Y7/3　　浅黄色シルト質細砂（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）

断面E

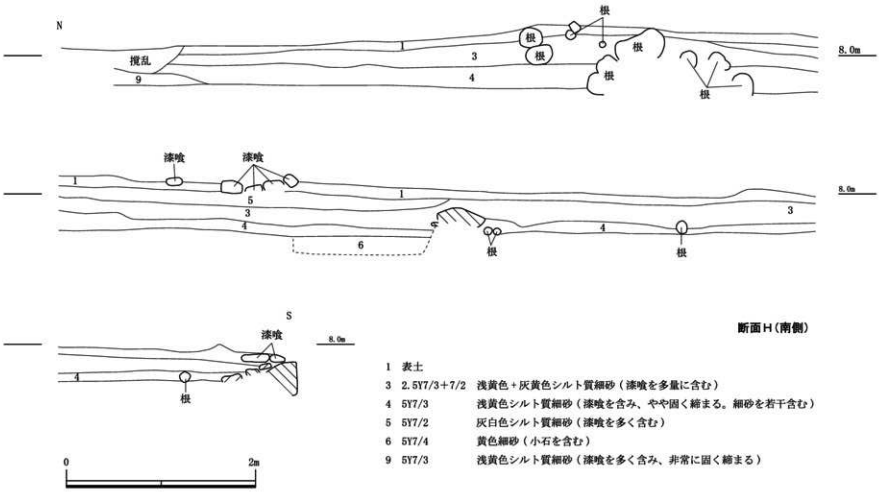
第147図　天守台前面・本丸土層断面図（3）



第148図　天守台前面・本丸土層断面図（4）



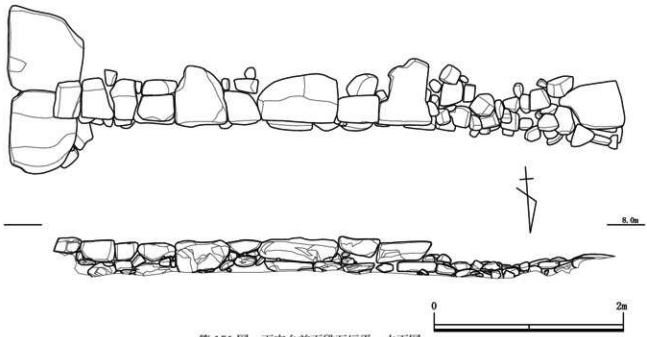
第149図　天守台前面・本丸土層断面図（5）



断面H（南側）

1	表土	
3	2.5Y7/3+7/2	浅黄色＋灰黄色シルト質細砂（漆喰を多量に含む）
4	5Y7/3	浅黄色シルト質細砂（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）
5	5Y7/2	灰白色シルト質細砂（漆喰を多く含む）
6	5Y7/4	黄色細砂（小石を含む）
9	5Y7/3	浅黄色シルト質細砂（漆喰を多く含み、非常に固く締まる）

第150図　天守台前面・本丸土層断面図（6）



第151図　天守台前面段石垣平・立面図

3 土坑

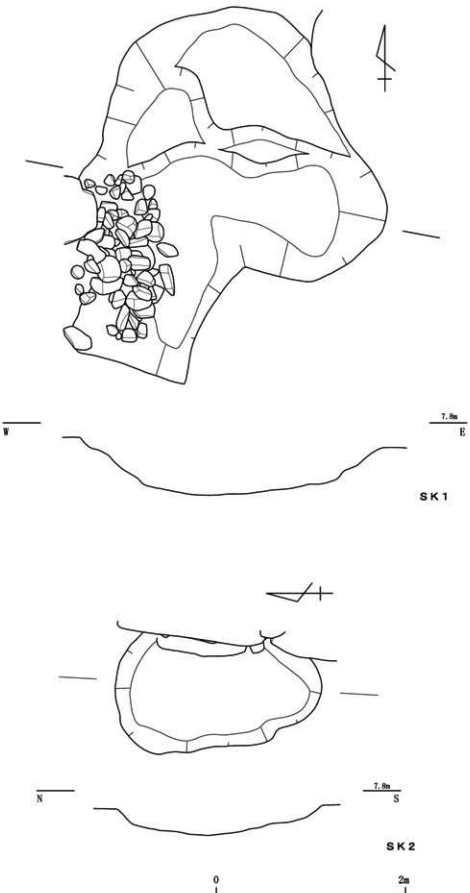
ＳＫ１（第152～154図）

天守台前面の北側において検出した土坑であり，東側は近代の攪乱を受けている。平面形は不整な円形を呈し，南側に大きく膨らんでいる。掘り方は，急傾斜をなす南側を除いて緩やかな傾斜で掘り込まれ，北側には２段のテラスを有する。土坑の規模は，南北方向の長軸 4.02 m，東西方向の短軸 3.25 m を測る。検出面からの深さは，最深部で 0.45 m，１段目のテラスで 0.05 m，２段目のテラスで 0.25 m である。底面は平面形が逆Ｌ字形で，断面が船底形を呈する。西側の掘り込み面にはＨ面石垣の裏栗石である拳大～人頭大の円礫が集中していた。

遺物は，土師質土器擂鉢（522），同土鍋（523），軒丸瓦（Ｔ 365～Ｔ 373），軒平瓦（Ｔ 374，Ｔ 375，），平瓦（Ｔ 376），鬼瓦（Ｔ 377）である。

522 は口縁部がわずかに内傾し，外面に稜を持つ。外面の調整は横方向のハケ，指頭圧後にナデが施され，内面に４本の卸目が残る。523 の口縁部は体部から「く」字形に外反し，口縁端部は上下に肥厚する。

Ｔ 365 は右巻き三巴文で，巴尾が非常に細長く延びて巴の外側に圏線をなし，珠文径が小さく，その数は 16 個である。凹面は布目・コビキＡが残存する。佐藤分類Ⅱ類 12 である。Ｔ 366 は右巻き三巴文で，巴頭部が鉤形を呈し，巴尾部が非常に細長く延び，円形を指向するように巻き込む。珠文径が小さく，その数は 18 個である。佐藤分類Ⅳ類 34 である。Ｔ 367 は右巻き三巴文で，巴頭部が小さく丸く，巴尾部の基部と先端の幅が大差なく細長い。珠文径がやや大きく，その数は 12 個である。佐藤分類Ⅳ類 55 である。Ｔ 368 は右巻き三巴文で，巴頭部が太く，巴尾基部が太く，先端に向かって明瞭に先細りする。珠文は 12 個である。佐藤分類Ⅳ類 109 である。Ｔ 369 は右巻き三巴文で，巴尾部が短く，円形を指向せず巻き込む。珠文は 12 個である。瓦当部外縁に面取りが認められる。佐藤分類Ⅳ類 125 である。Ｔ 370 は左巻き三巴文であり，巴尾基部が太



第152図　天守台前面 SK1・2 平・断面図

く短く，先端が外側に向かって斜放射状に延びるように見える。珠文は12個である。凹面は布目・コビキBが残存する。佐藤分類Ⅳ類157である。T 371は右巻き三巴文で，巴頭部がやや大きく，巴尾部が長く延びる。佐藤分類Ⅳ類136である。T 372は巴尾が細く，珠文径は小さい。T 373は珠文間に「大」の陽刻がある。凹面にコビキBが残る。T 374は中心飾りが陽刻線の菱文であり，唐草は3回反転し，それぞれは連続せず分離している。凹面はヘラナデ，凸面は粗いナデが施される。佐藤分類Ⅲ類4である。T 375は上部の周縁の高さがほとんどなく，唐草は連続的に延びる。T 376は凹面に弓状の突帯を有し，周縁に面取りされる。T 377は鬼瓦の一部であり，内面にケズリが明瞭に施される。

ＳＫ２（第152・155・156図）

天守台前面の北側において検出した土坑であり，ＳＫ１の東側に位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し，南側はやや尖っている。掘り方は，緩やかな傾斜をなし，底面の断面は船底形を呈する。土坑の規模は，南北方向の長軸2.17 m，東西方向の短軸1.15 mを測る。検出面からの深さは，0.20 mである。

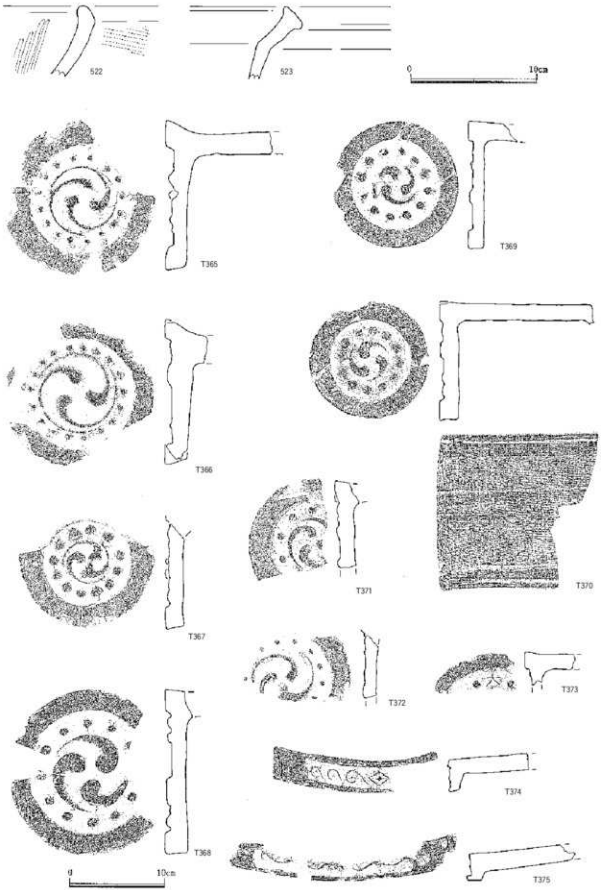
遺物は，軒丸瓦（T 378～T 381），軒平瓦（T 382～T 384），滴水瓦（T 385，T 386），丸瓦（T 387～T 389）である。

T 378，T 379は右巻き三巴文で，内区と外区を画する圏線がある。巴頭部が丸く小さく，巴尾が非常に細長く延びて圏線と繋がる。珠文径が小さく，12個である。T 379の凹面にコビキBが残存し，凸面はナデ・ミガキが施される。軒丸瓦Ⅲ類26である。T 380，T 381は巴頭部が丸く小さく，巴尾部が細長い。珠文径はやや大きく，その数は12個である。T 381は瓦当部外縁に面取りが認められる。軒丸瓦Ⅲ類75である。

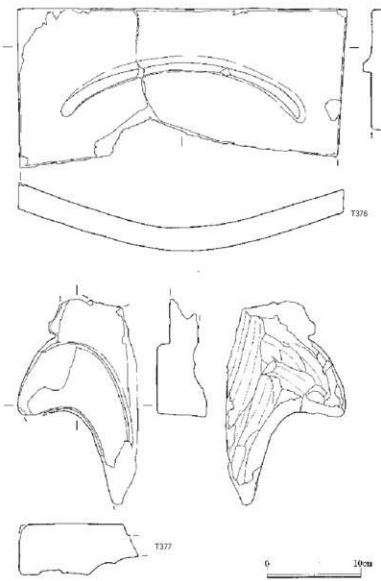
T 382は中心飾りが陽刻線による輪郭の三葉であり，唐草は中心飾り上端側面から延び，上に1転して外側に子葉が派生した後，蔓が内区側面にぶつかる。瓦当上縁に面取りがある。軒平瓦Ⅵ類25である。T 383，T 384は中心飾りに「A」形の意匠を陽刻線で表す。唐草は2転（上・下）し，2転目の唐草の下に唐草に対向するように「～」形の子葉が配される。Y 383の凹面は横方向のナデが施される。軒平瓦Ⅷ類46である。

T 385は中心飾りとして一重の亀甲文の中心に十字形の四つ葉が描かれる。唐草文は太い陽刻線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。瓦当上縁に幅狭い面取りがある。凹面は横方向の粗いナデが施される。T 386は二重の亀甲文の中心に十字形に近い四つ葉が描かれる。唐草文は陽刻の線描と囲み線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。瓦当上縁に幅広い面取りがある。凹面・凸面はナデが施される。

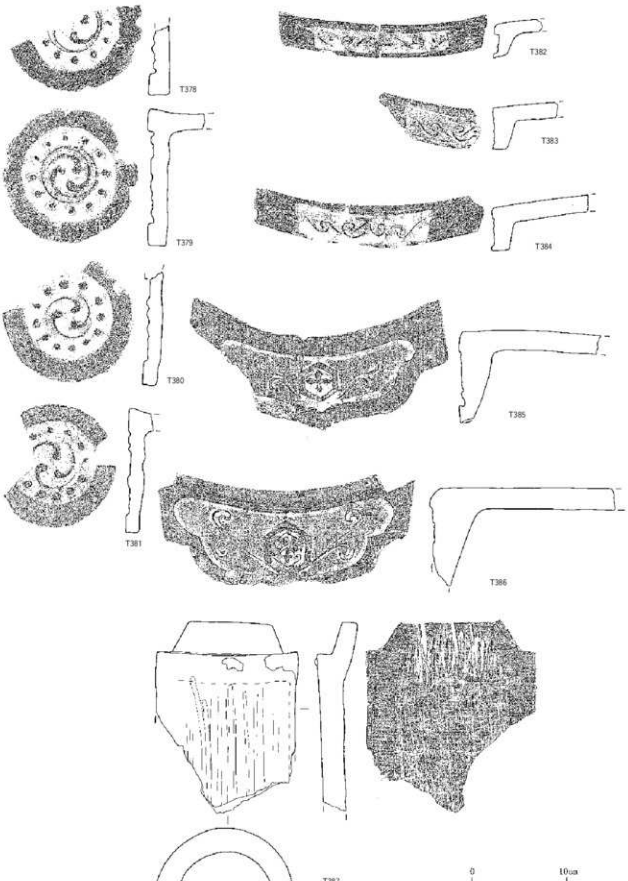
T 387は行基丸瓦であり，2個の釘穴を有する。凸面はナデ・ミガキが施され，凹面には布目・コビキBが残存する。T 388，T 389は玉縁丸瓦であり，T 388は下端付近に浅い溝を有し，凸面はナデ・ミガキが施され，凹面には布目・コビキBが残存する。T 389は凸面側縁に漆喰の痕跡が見られ，凸面はナデ・ミガキが施され，凹面にはゴザ目・コビキBが残存する。



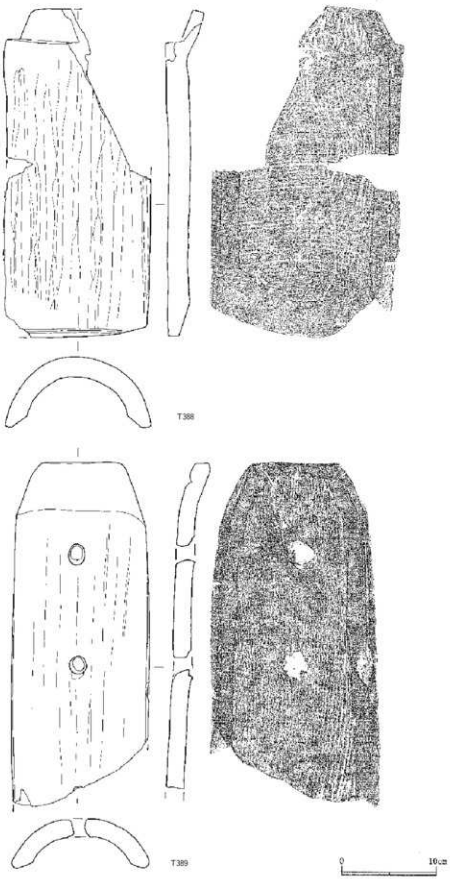
第 153 図　天守台前面ＳＫ１出土遺物実測図（１）



第154図　天守台前面ＳＫ１出土遺物実測図（２）



第 155 図　天守台前面ＳＫ２出土遺物実測図（１）

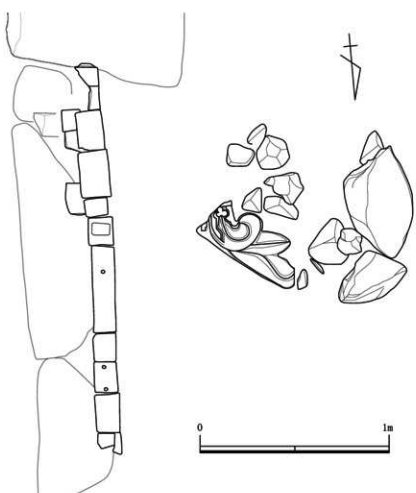


第156図　天守台前面ＳＫ２出土遺物実測図（２）

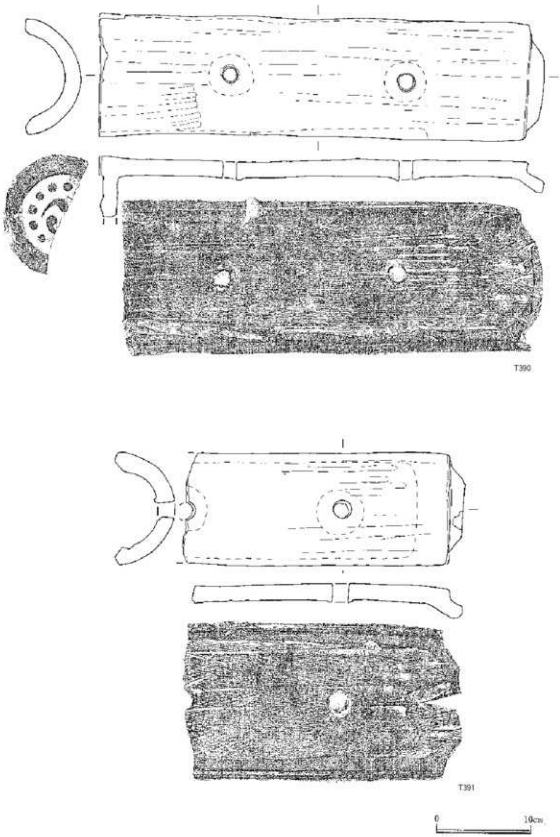
4 瓦列（第 157 ～ 160 図）

天守台前面の南側にある段石垣の北側において検出した瓦列であり，東面する石垣（F 面）の最上位の石の直上で南北方向に直線的に延び，検出長は 4.05 m を測る。瓦列の構成は丸瓦と平瓦の組み合わせであり，丸瓦の最も高い所の標高は 7.78 m である。検出した瓦は丸瓦が 10 枚，平瓦が３枚であり，南端部は平瓦の上に丸瓦を置いているが，その他は丸瓦のみ置いている。丸瓦の長さは 0.10 ～ 0.47 m であり，完形および完形に近い瓦のみ図化する。

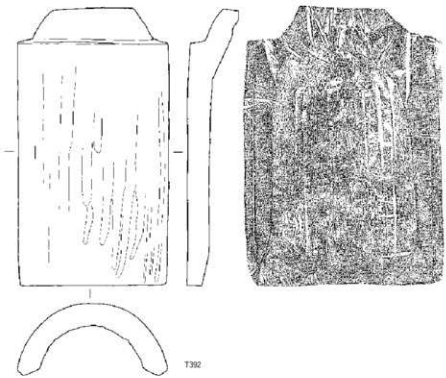
T 390，T 391 は軒丸瓦であり，T 392 ～ T 394 は行基丸瓦である。T 390，T 391 は２個の釘穴を有し，凸面の側縁部と釘穴周囲に漆喰の痕跡が明瞭に確認できる。凸面はナデ・ミガキが施され，凹面には布目・タタキ・コビキＢが残存する。T 390 の瓦当部は右巻き三巴文であり，巴頭部が太く，巴尾部は太く短い。珠文の径は大きい。軒丸瓦Ⅲ類 127 である。T 393，T 394 は全長約 23.5㎝で，凸面はナデ・ミガキが施され，凹面には布目・タタキ・コビキＢが残り，体

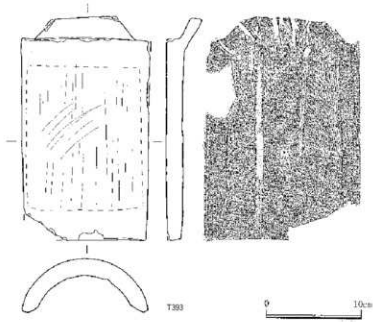


第 157 図　天守台前面瓦列・鬼瓦出土状況平面図

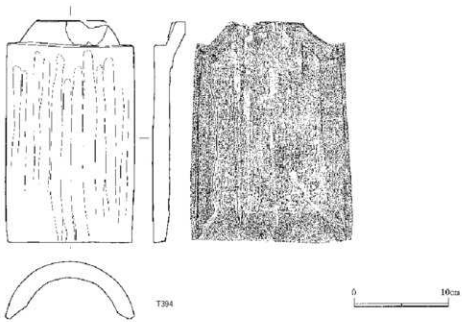


第158図　天守台前面瓦列出土遺物実測図（1）





第159図　天守台前面瓦列出土遺物実測図（2）



第160図　天守台前面瓦列出土遺物実測図（3）

部上端には幅狭い面取りがある。T 393の凸面には漆喰の痕跡が明瞭に確認できる。T 392は全長29.1cmで，凸面はナデ・ミガキが施され，凹面には布目・タタキ・コビキBが残り，体部上端には幅狭い面取りがある。

5 漆喰

天守台前面の北東隅において検出した漆喰であり，東西方向1.45 m，南北方向1.20 mの範囲に折り重なるような状態で出土した。検出した標高は7.80 mである。第4章第1節に詳述するが，分析の結果では漆喰は土佐漆喰の可能性が高いことが判明した。天守に使用された漆喰であると考えられる。

6 包含層出土遺物（第161～177図）

石垣H面とF面の最上位の築石より上位に堆積する第1～5，7～9層より出土した遺物について報告する。

包含層より出土した遺物は，磁器鉢（524），陶器鉢（525），同擂鉢（526, 527），土師質土器皿（528），同杯（529, 530），同火鉢（531），瓦器皿（532），同椀（533），弥生土器甕（534），土錘（C 28, C 29），釘（M 90～M 92），軒丸瓦（T 395～T 442），軒平瓦（T 443～T 460），丸瓦（T 461～T 465），平瓦（T 466～T 473），菊丸瓦（T 474～T 478），鳥衾瓦（T 479, T 480），滴水瓦（T 481～T 489），輪違い（T 490, T 491），隅切丸瓦（T 492, T 493），熨斗瓦（T 494, T 495），鬼瓦（T 496～T 499），漆喰（X 13）である。

524は幅広い高台を持ち，畳付と内面は無釉である。釉は明緑灰色である。525の底部が厚くなっており，高台は幅広い。体部下位と高台・底部はヘラケズリが施される。526は口縁部に明確な

回線を廻らし，内面に9本1単位の卸目が前面にある。527は口縁部が外側に拡張し，内面にわずかに卸目がある。

528は非常に低い器高であり，底部と内面にナデが施される。529はやや内湾気味な体部である。530の体部は僅かに外反する。531は高い高台を有し，竹管による刺突が1個残存する。外面は赤色顔料による塗彩が行われる。

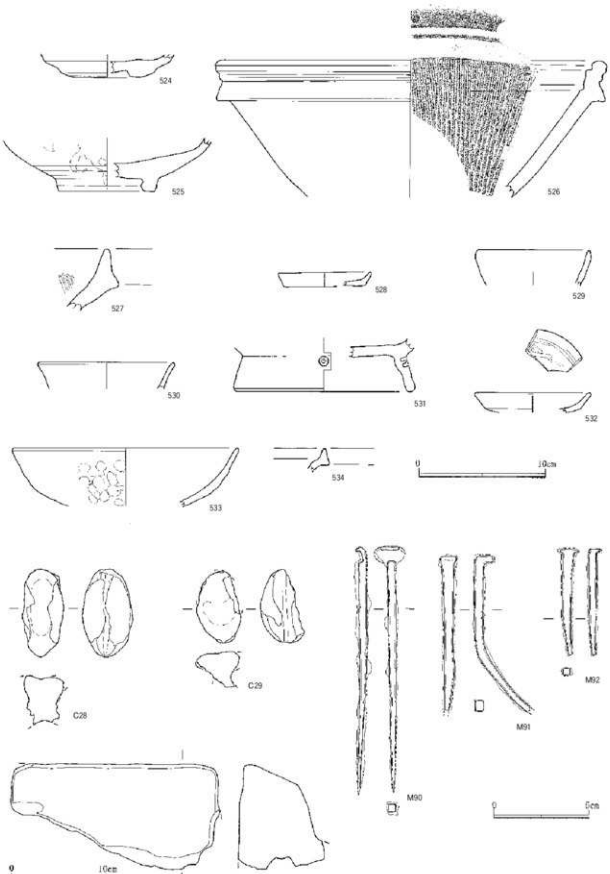
532は底部と体部の境に僅かな稜を有し，内面にヘラミガキが部分的に施される。533は内湾する体部からそのまま口縁部に至る。体部外面は指頭圧とヘラミガキ，口縁部はヨコナデ，内面はナデ・ヘラミガキが施される。

534は口縁端部が上方に拡張し，内外面共に摩滅する。

C 28，C 29は有溝土錘であり，上下面共に中央がやや窪む。

T 395～T 397は右巻き三巴文である。内区と外区を画する圏線があり，隣接する巴尾部は繋がらず，圏線に突き当たっている。T 395，T 396は巴頭部が丸く小さく，巴尾部は細長く延びる。回面は布目・コビキBが残存する。佐藤分類Ⅲ類30である。T 397は巴頭部が大きく，巴尾部は細長く延びる。珠文は径が小さく，間隔が広い。回面はコビキAが残存する。軒丸瓦Ⅲ類である。

T 398～T 433は右巻き三巴文であり，内区と外区を画する圏線がなく，巴尾部は非常に細長く延び，隣接する巴尾部同士も繋がらない。T 398は巴尾部が非常に細長く延び，隣接する巴尾部同士がわずかに空いている。巴頭部は鉤形を呈する。珠文は小さく，その間隔は広い。佐藤分類Ⅳ類34である。T 399の巴頭部は大きく，C字形を呈する。巴尾部は細長く延びる。内区が広い。軒丸瓦Ⅳ類37である。T 400は巴頭部が大きく平坦であり，巴尾部は細長く延びる。珠文は大振りなものと小振りなものが交互に配され，その間隔は狭い。軒丸瓦Ⅳ類38である。T 401～T 403は巴頭部が小さく丸く，対向する巴頭部の間隔が広い。巴尾基部は巴頭部と同じ幅で始まり，先端部に向かって次第に細くなる。佐藤分類Ⅳ類49である。T 404は巴頭部が小さく丸く，基部と先端の幅が大差ない細長い巴尾部をもつ。珠文は大きく，15個を数える。周縁幅が広い。佐藤分類Ⅳ類51である。T 405は巴頭部が小さく丸く，基部と先端の幅が大差ない細長い巴尾部をもつ。巴尾部は大きく巻き込む。佐藤分類Ⅳ類52である。T 406は巴頭部が強く屈曲し，巴尾基部の背面同士が対向する。基部側の巴尾部の巻きは極めて強く，巴尾部は比較的に細長く延びる。珠文は14個である。内区は広い。佐藤分類Ⅳ類59である。T 407は巴頭部が小さく，巴尾先端部が外側に向かって放射状に延びる。珠文は12個でやや小振りである。佐藤分類Ⅳ類63である。T 408～T 413は巴頭部が丸く小さく，断面が低く扁平である。巴尾部はやや短く，断面が低く扁平である。珠文は12個である。T 408は佐藤分類Ⅳ類71であり，T 409～T 411は佐藤分類Ⅳ類75である。T 412，T 413は佐藤分類Ⅳ類79である。T 414～T 419は巴頭部が大振りで，巴尾部はやや長め，巻が強く連続的に隣の巴尾部に近接する。巴文の断面は扁平である。T 414～T 418は佐藤分類Ⅳ類164，T 419は佐藤分類Ⅳ類165である。T 402～T 427は巴頭部が大振りの円形で，巴尾部は基部が太くやや短く延びる。巴文の断面は扁平である。佐藤分類Ⅳ類203である。T 428～T 432は巴頭部が大振りの円形で，巴尾部は基部が太く短く延



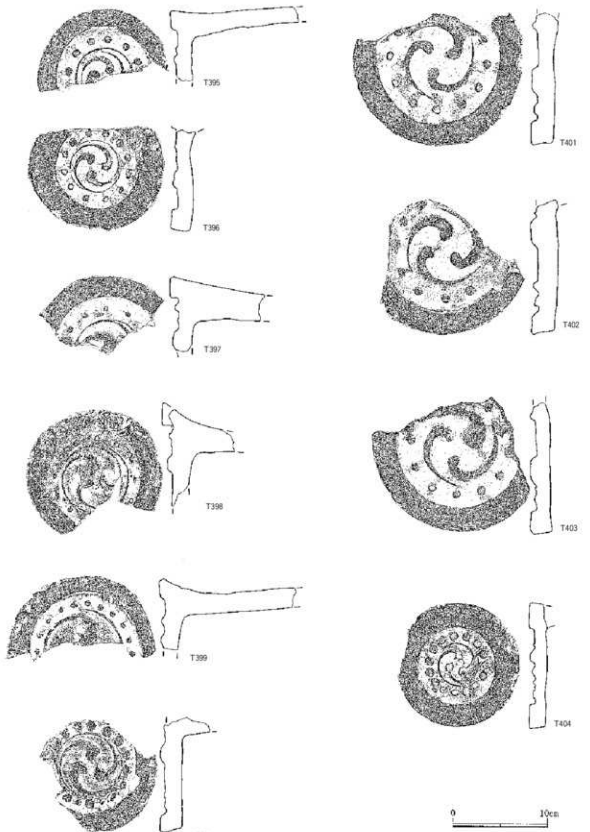
第161図　天守台前面包含層出土遺物実測図（1）

びる。巴文の断面は扁平である。珠文は大振りで接近する。佐藤分類Ⅳ類251である。T 433は三巴文の周囲に珠文を伴わず，巴尾部は短い。佐藤分類Ⅳ類272である。

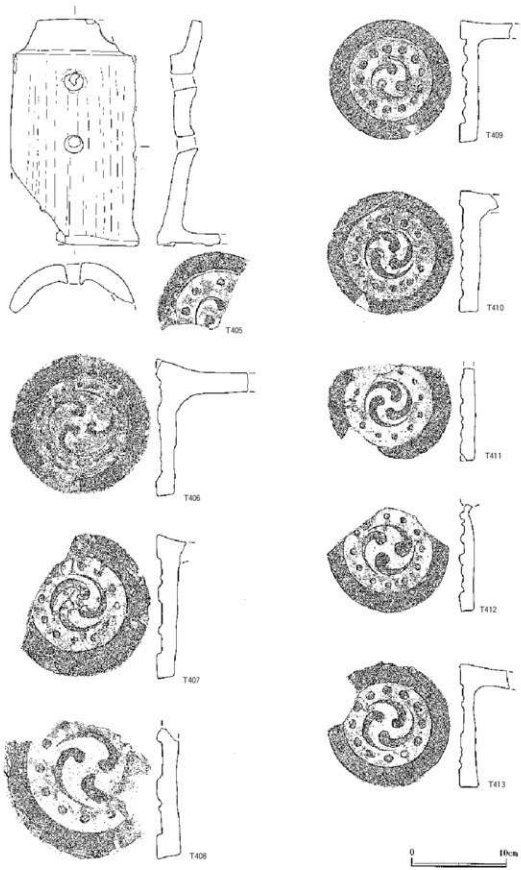
T 434～T 442は左巻き三巴文であり，内区と外区を画する圏線がなく，巴尾部は短く延び，隣接する巴尾部同士も繋がらない。T 434，T 435は巴頭部がやや大振りで，巴尾部は巻が弱く短い。巴文がやや楕円形をなす。珠文は大振りである。佐藤分類Ⅳ類106である。T 436は巴頭部が小振りで，巴尾部は非常に短く，尾部先端が外側に向かって斜放射状に延びるように見える。珠文はやや小振りである。佐藤分類Ⅳ類128である。T 437～T 441は巴頭部がやや大振りで，巴尾部は短く，尾部先端が外側に向かって斜放射状に延びるように見える。珠文はやや小振りである。T 437は佐藤分類Ⅳ類154，T 438～T 440は佐藤分類Ⅳ類158，T 441は佐藤分類Ⅳ類159である。T 442は巴頭部が大きな円形で，巴尾部は短く非常に細身である。佐藤分類Ⅳ類249である。

T 443は直線的な上向三葉文を中心飾りとし，唐草は中心飾り下端から延び，上下に2転する。軒平瓦Ⅴ類19である。T 444は完形品であり，全長24.5㎝，下端幅24.2㎝，上端幅23.0㎝を測る。十六葉の菊花とみられる中心飾りをもち，唐草は中心飾り下端の両側から延び，2転（上・下）する。その外側に子葉が伴う。凹面に使用痕がある。佐藤分類ⅩⅠ類38である。T 445は斜めに歪んだY字形の陽刻線とやや尖った球文を中心飾りにもつ。佐藤分類ⅩⅦ類56である。T 446は左巻き二巴文を中心飾りとし，周囲に6個の球文が巡る。唐草は中心飾り下端から延び，2転（下・上）する。佐藤分類ⅩⅨ類71である。T 447，T 448は肉厚だが平面的で円形に近い宝珠文を中心飾りに持ち，唐草は宝珠下端両側から大きく巻き込んで1転する。唐草の外側にⅤ字形の子葉がある。佐藤分類ⅩⅩ類96である。T 449は唐草の蔓が直線的に連続して延びる。佐藤分類ⅩⅩ類101である。T 450は円形に近い宝珠文を中心飾りに持ち，唐草は宝珠下端両側から延び2転（下・上）する。佐藤分類ⅩⅩ類である。T 450は半裁唐花菱文を中心飾りにもち，唐草文は中心飾り上半の側面から短く延び2転（上・下）する。唐草の外側にⅤ字形の子葉がある。佐藤分類ⅩⅩⅡ類128である。T 451は半裁唐花菱文を中心飾りにもつが，花弁輪郭部の陽刻線は幅広で肥厚する。2転（上・下）する唐草文とY字形の子葉は波状の起伏がデフォルメされている。佐藤分類ⅩⅩⅡ類134である。T 452は半裁唐花菱文を中心飾りにもち，唐草文は中心飾りの下端から3転（上・下・上）する。1転目の唐草はほぼ垂直方向に上がる。3転目の唐草の上にある子葉は長い「～」形を呈する。佐藤分類ⅩⅩⅡ類である。T 453はレリーフ状の下向半裁唐花菱文を中心飾りにもち，2転（下・上）する唐草文と「～」形の子葉がある。1転目の唐草は垂直方向に延びる。佐藤分類ⅩⅩⅢ類156である。T 455～T 457は花弁が細長く軸線を伴わない唐花菱文を中心飾りにもち，連続して延びる唐草文は2転（上・下）し，さらに外側にY字形の子葉が連続する。佐藤分類ⅩⅩⅣ類である。T 458は上に1転する唐草文とその外側に子葉がある。T 459は下に2転する唐草文である。T 460は下・上の順に2転する唐草文をもつ。

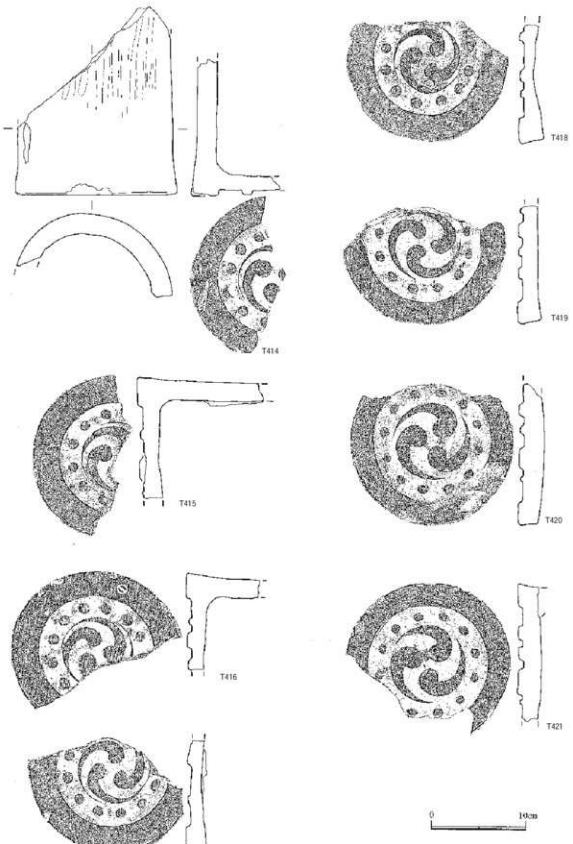
T 461～T 465は玉縁丸瓦である。T 461は下端に幅狭い面取りがあり，凸面は細かいミガキが施され，側縁に漆喰の痕跡が残る。凹面は布目が残存する。T 462，T 463は全長20.8㎝の



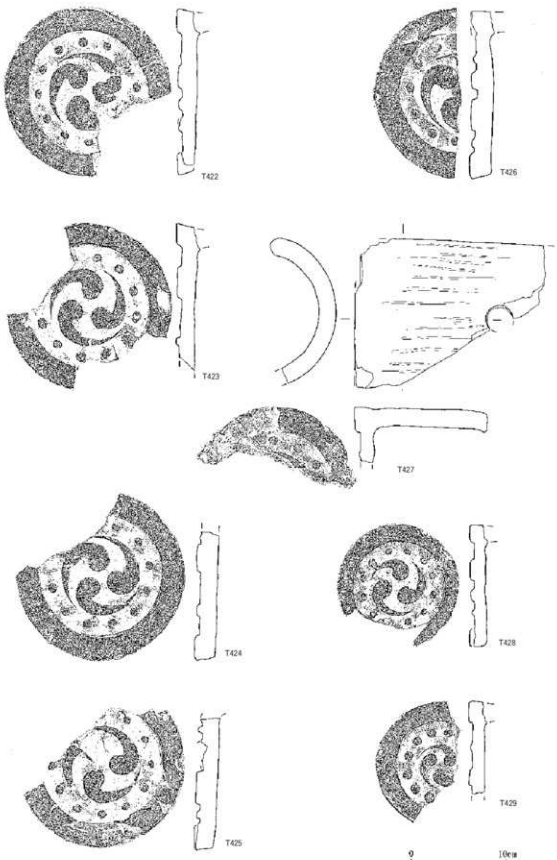
第162図　天守台前面包含層出土遺物実測図（2）



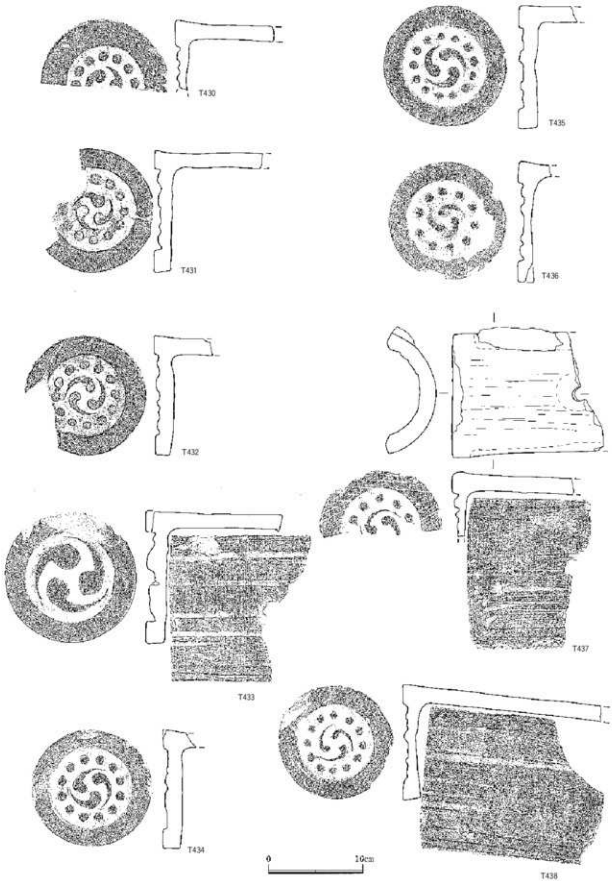
第163図　天守台前面包含層出土遺物実測図（3）



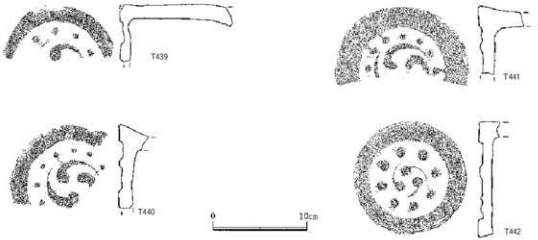
第164図　天守台前面包含層出土遺物実測図（4）



第165図　天守台前面包含層出土遺物実測図（5）



第166図　天守台前面包含層出土遺物実測図（6）



第167図　天守台前面包含層出土遺物実測図（7）

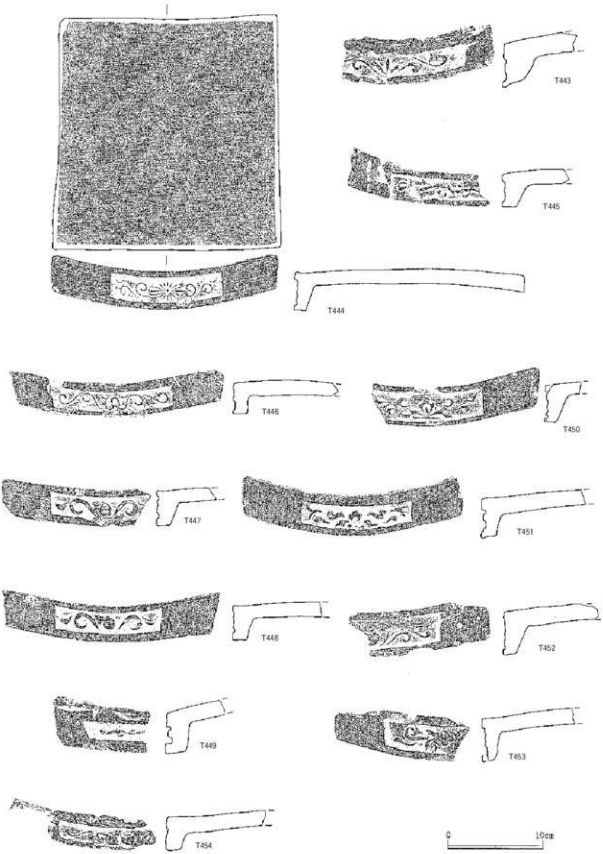
小型であり，玉縁に幅広い面取りがある。凹面は布目・タタキ・コビキBが残存する。T 464は全長26.8cmであり，体部上端と下端に幅狭い面取りがある。凹面は布目・タタキが残存する。T 465は全長28.6cmで，体部上端に幅狭い面取りがある。凹面は布目・タタキ・コビキBが残存する。

T 466は全長27.3cm，上端幅24.3cm，下端幅23.0cmを測り，下端には面取りがある。凹面はナデが施され，使用痕が見られる。T 467は全長31.0cm，下端幅27.5cmを測り，上端と下端に面取りがある。T 468～T 472は下端小口に刻印を有し，T 473は凹面に刻印を有する。刻印はT 468が巻貝形，T 469は三日月形，T 470は丸に一，T 471は丸に十，T 472は菊花形，T 473は菊花形2個である。刻印の位置はT 468，T 469が右側，T 470が中央，T 471，T 472が左側である。T 471，T 472の凸面には弓状圧痕がある。

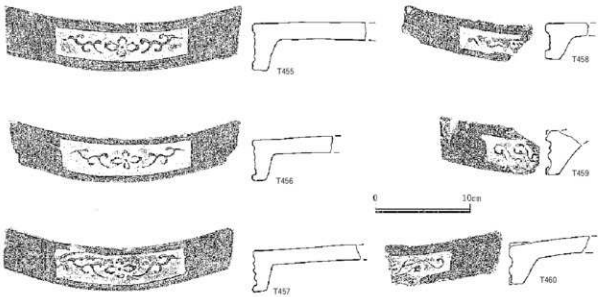
T 474～T 477は菊花文で花弁の輪郭を陽刻線で表現する。花弁は16枚で，花弁先端の輪郭平面が尖り気味で，断面は高く盛り上がる。中房は花弁より高く，輪郭が明瞭である。佐藤分類Ⅰ類である。T 478は陽刻菊花文をもち，花弁の先端が丸く，13葉であると推定できる。佐藤分類Ⅲ類である。

T 479は右巻き三巴文であり，巴頭部が太く，巴尾が細長い。珠文径は大きく，その数は12個である。周縁の幅が広い。瓦当部頂上に釘穴が存在する。凸面は横方向のナデとヘラナデが施される。T 480は左巻き三巴文であり，巴頭部が細く，そのままの幅で巴尾に至る。巴尾は細長く延び，円形を意識するように巻き込む。珠文径は小さく，珠文間隔は広い。

T 481～T 483は中心飾りとして一重の亀甲文の中心に十字形の四つ葉が描かれる。唐草文は細い陽刻線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。瓦当上縁に幅狭い面取りがある。T 481，T 483の凹面には使用痕がある。T 484，T 485は二重の亀甲文の中心に十字形に近い四つ葉が描かれる。唐草文は陽刻の線描と囲み線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。T 484の唐草文は太く，T 485は非常に細い。瓦当上縁に幅広い面取りがある。T 484の瓦当裏面には未貫通の孔1個がある。T 486～T 488は二重の亀甲文の中心に4枚の三つ葉が描かれる。



第168図　天守台前面包含層出土遺物実測図（8）



第169図　天守台前面包含層出土遺物実測図（9）

T 486の唐草文は細い陽刻の線描と囲み線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。T 487，T 488の唐草文は太い陽刻の線描が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。T 489は太い陽刻の線描の唐草文であり，先端は上下に逆転する配置になる。瓦当上縁に幅広い面取りがあり，凹面の側縁が高くなっている。

T 490は行基丸瓦と同様な形であり，凹面側縁に削りが認められる。凸面はナデ，凹面は布目・コビキBが残存する。T 491は直線的な縦断面であり，凹面側縁に削りが認められない。調整は全面ナデが施される。

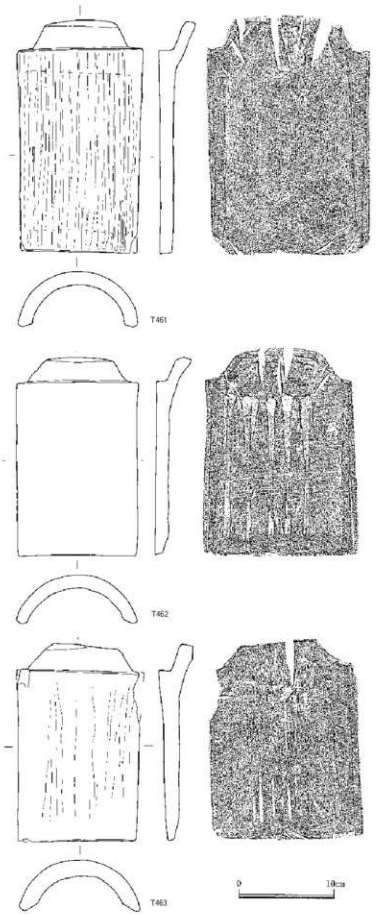
T 492，T 493は丸瓦体部の両端を加工した瓦であり，凹面側縁に削りが認められる。凸面はナデ，T 492の凹面は布目・コビキB，T 493は布目が残存する。

T 494，T 495は凸面にヘラによる刻書が見られる。

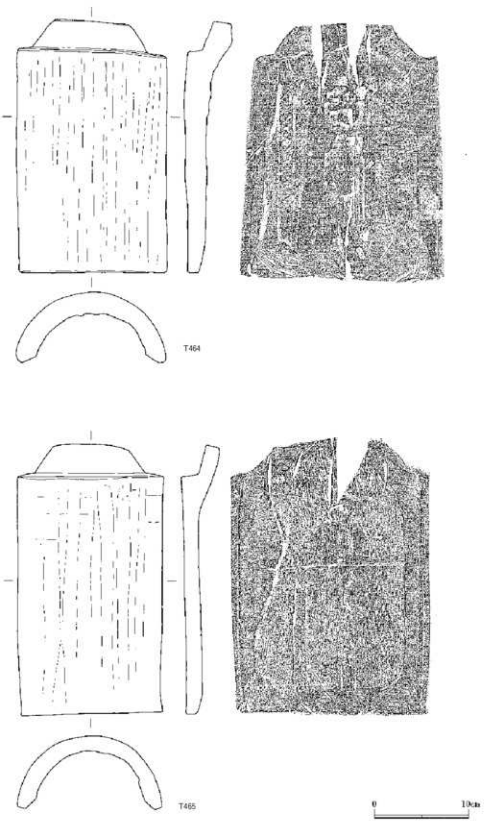
T 496は家紋をあしらった鬼瓦であり，貼り付けられた三葉葵紋の一部である。葵紋は陽刻で表される。裏面はカキ目の顕著な接合部で剥離する。T 497，T 498は飾りの一部である。T 499は鬼瓦の右側の足元であり，先端部分を欠損する。第157図で示すように，瓦列の西側において出土した。現存する長さは61.6cm，最大幅は25.0cm，高さは17.8cmを測る。断面は「コ」字形であり，内側には漆喰が充填されている。表面にはスペード形の彫り込みと長方形の彫り込みがある。

7 小結

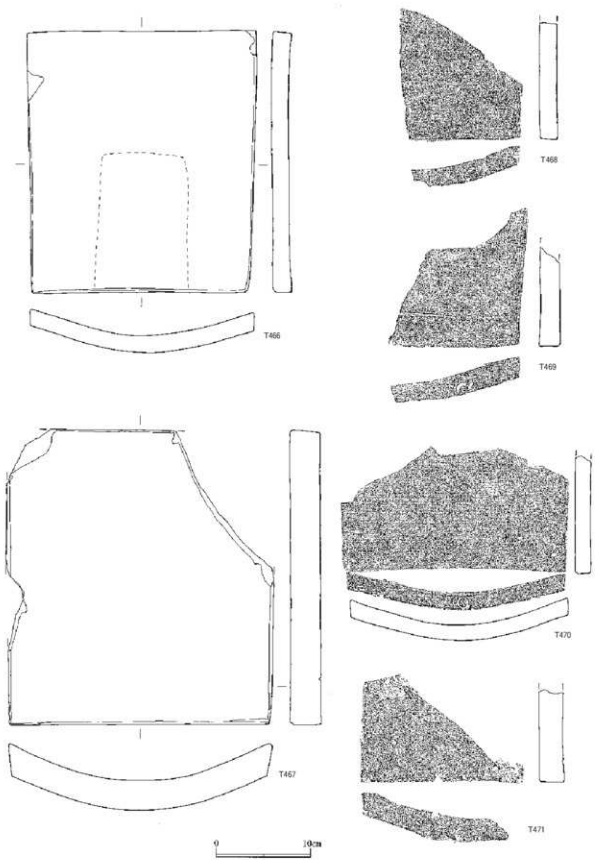
検出した段石垣は，築造時期が不明であるが，第7節で報告する本丸の調査区南端で検出した水路遺構の南側壁と同一線上に位置する。この遺構は石垣前面にあり，同様な遺構は北側の中川櫓台においても確認している。今回の調査対象地外であり，図示できていないが，段石垣は，本



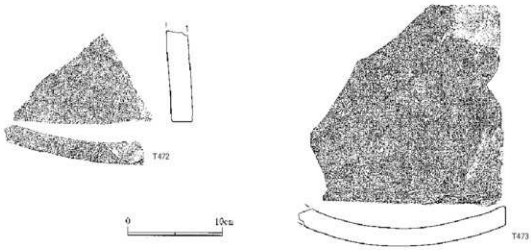
第170図　天守台前面包含層出土遺物実測図（10）



第171図　天守台前面包含層出土遺物実測図（11）



第172図　天守台前面包含層出土遺物実測図（12）



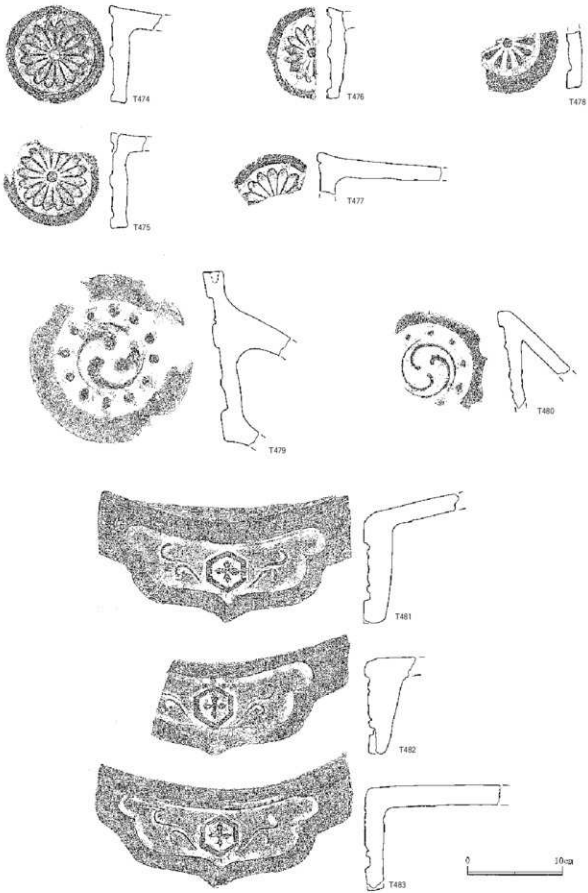
第 173 図　天守台前面包含層出土遺物実測図（１３）

丸南側にある多聞櫓台の北面石垣の本来の位置を示すと考えられる。この段石段を直線的に延長したラインと本丸南側の石垣の間が本来の多聞櫓台とすると，想定される多聞櫓台の天端の幅は南北約 6.50 ｍである。現状の幅は約 2.50 ｍを測るにすぎないが，本来の多聞櫓台は今より 2.5 倍以上の幅をもつと考えられる。絵図ではこの段石垣に続く多聞櫓が西へ延びて本丸南西隅にある地久櫓まで続いているように描かれている。

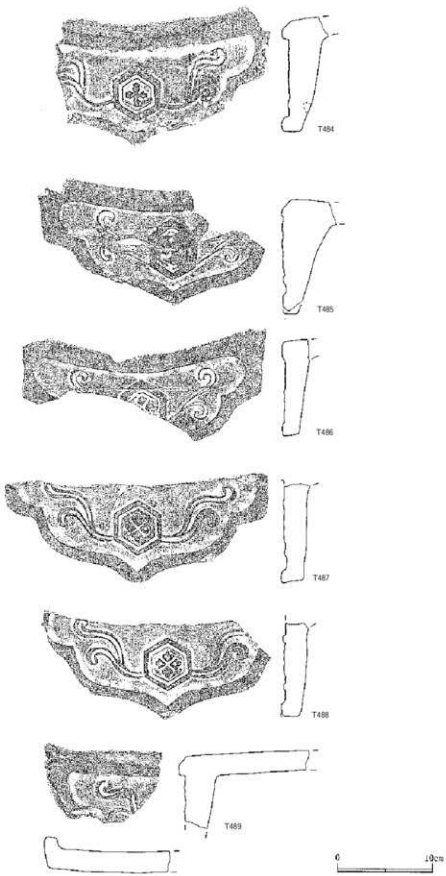
現在の櫓台が幅狭くなった要因は，明治 34 年（1901）の玉藻廟建設に際して天守地下１階を埋立てるために多量に石と土が必要となり，中川櫓台と南多聞櫓台を崩してまかなったと考えられる。削平した後に現在の位置に新たに石垣を築造し，さらに，本丸南東隅に６段の石段を新たに築造したと考えられる。

本調査区の中で天守台付近では，多量の瓦と漆喰が出土する。瓦は軒丸瓦や軒平瓦を中心として丸瓦，平瓦，滴水瓦，鳥衾瓦，菊丸瓦，輪違い瓦，熨斗瓦，鬼瓦など多種多様であり，時期的に古い要素を持つ瓦が含まれている。寺院等の一般的な建物では使用しない滴水瓦や三葉葵の家紋をあしらう鬼瓦，巨大な鬼瓦の鰭部等がある。また，漆喰は北端付近で折り重なるような状態で出土しており土佐漆喰であることが判明した。これらの瓦や漆喰は天守に使用されていたものと考えられる。

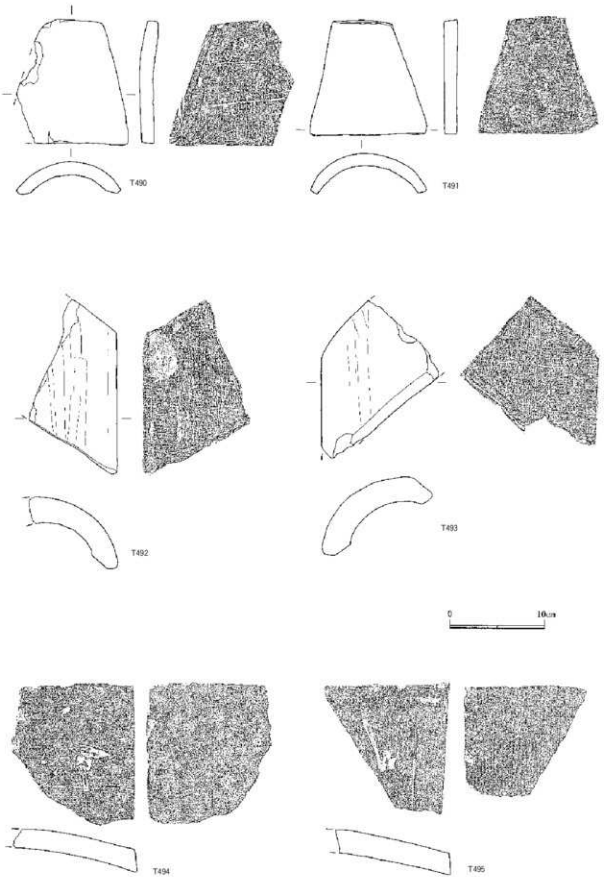
ＳＫ１・２は不定形な形状を呈し，遺構の時期や性格は不明である。しかし，城として機能している治時に天守台前面に土坑を掘ることは考えにくく，埋土が漆喰を含む浅黄色シルト質細砂であり，断面Ｇに示す第９層とほぼ同一土層である。明確な時期を示す遺物は出土していないが，この二つの土坑は廃城後に掘削されたものと考えられる。



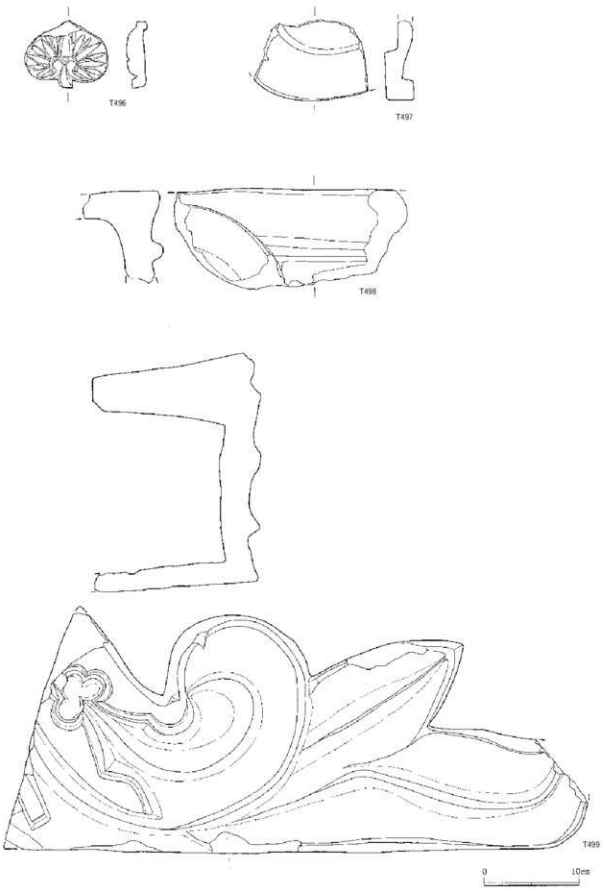
第174図　天守台前面包含層出土遺物実測図（1/4）



第175図　天守台前面包含層出土遺物実測図（15）



第176図　天守台前面包含層出土遺物実測図（16）



第177図　天守台前面包含層出土遺物実測図（17）

第６節　中川櫓台

１ 概要（第 178 ～ 180 図）

本丸の北側に位置し，本丸虎口と天守台の間に所在する多聞櫓台である。「高松城下図屏風」等の絵図には平櫓として中川櫓が描かれている。調査以前の状況は，櫓台の南半は削られて斜面となっており，中の栗石が散乱した状態であった。削平後の斜面の比高差は約 1.60 ｍである。櫓台の北半は改変を受けておらず，中央がやや高くなっているが，ほぼ平坦である。平坦部の幅は 2.30 ～ 3.40 ｍを測り，標高は 7.80 ｍ前後である。現存する南側の石垣は，１段ないし２段の石を残すのみである。しかし，平成 23 年度の発掘調査において，この石垣は明治以降に新たに積上げられたことが判明した。

中川櫓台に５ｍ間隔の土層観察用の畦を３本設定し，それぞれを断面Ⅰ～Ｋと呼称する（第 143 図）。本丸北側石垣（Ｃ面）の第１段上面のレベルを遺構検出面とし，そのレベルより上位に堆積する土層を包含層とする。土層は表土，漆喰を多量に含む浅黄色＋灰黄色シルト質細砂，漆喰を含みやや硬く締まる浅黄色シルト質細砂の３層に分層できる。堆積状態はほぼ水平である。検出した遺構は，礎石である。

２ 礎石（第 181 図）

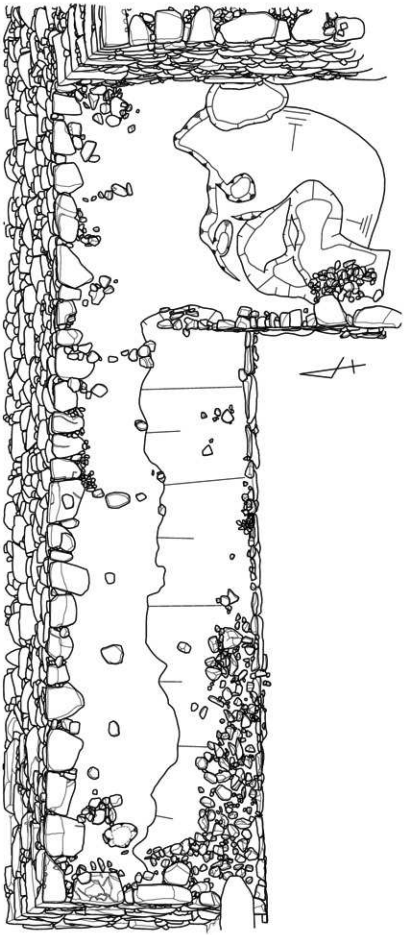
平坦部中央において検出した礎石であり，東側の天守台前面まで延びており天守台の石垣直下まで続いている。礎石の総数は，中川櫓台に９個，天守台前面に２個，合計 11 個である。西端の礎石から東方に５番目までの礎石は芯々間距離で約 2.00 ｍの間隔で直線的に並んでおり，その延長線上にある９～ 11 番目の礎石は芯々間距離でそれぞれ 4.50 ｍ，2.20 ｍを測る。６～８番目の礎石は約 0.50 ｍ南側に位置し，その間隔は 1.40 ｍと 1.30 ｍである。石材は花崗岩と安山岩の野面石であり，方形を呈する石が多い。礎石の大きさは，長軸 0.30 ｍ前後の小振りのものと長軸 0.60 ｍ前後の大振りのものの２種類あり，交互に配されている。礎石上面の標高は 7.80 ｍ前後であり，ほぼ水平である。

３ 包含層出土遺物（第 182 図）

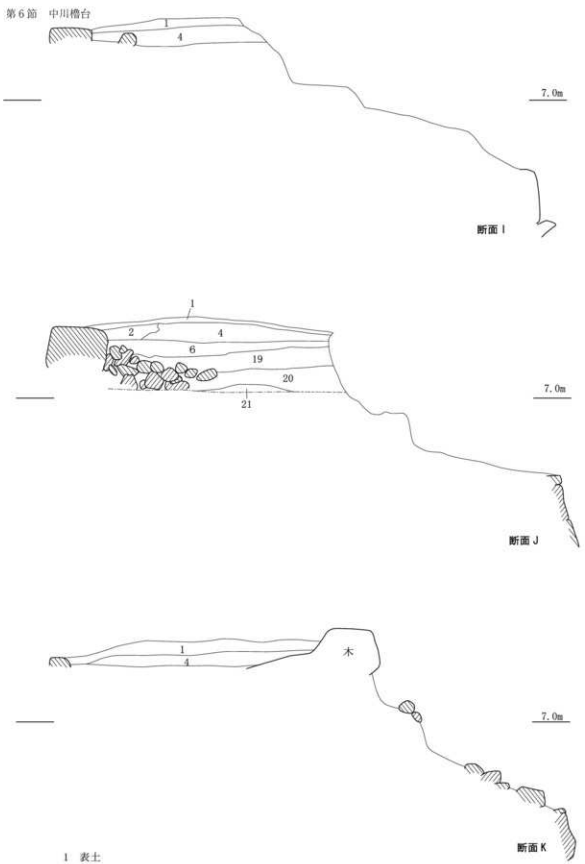
石垣Ｃ面の最上位の築石より堆積する第１・２・４層出土遺物について報告する。

包含層より出土した遺物は，土師質土器焼塩壺（535），軒丸瓦（Ｔ 500），軒平瓦（Ｔ 501）である。535 は焼塩壺の蓋であり，口径は 8.0cm を測り，天井部外面は回転糸切りが施される。

Ｔ 500 は右巻き三巴文であり，巴頭部は大きく，巴尾部はやや短く延び，基部は太いが先端は急激に細くなる。三巴文径は相対的に小さくみえる。珠文は 12 個でやや大振りである。佐藤分類Ⅳ類 124 である。Ｔ 501 は中心飾りに花弁が細長く軸線を伴わない唐花菱文を配し，中心に中房を示す珠文がある。唐草文は中心飾り下側側面から連続的に短く延び，３転（上・下・上）する。



第178図　中山横台平面図（調査前）



1	表土	
2	2.5Y6/2	灰黄色細砂
4	5Y7/3	浅黄色シルト質細砂（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）
6	5Y7/4	浅黄色細砂（小石を含む）
19	2.5Y8/2＋7/1	灰黄色細～粗砂
20	2.5Y8/2	淡黄色シルト質細砂（灰白色細砂を含む）
21	10YR7/2	にぶい黄橙色シルト質細砂

0　2m

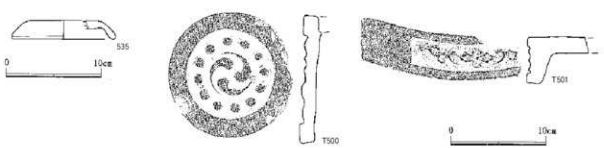
第179図　中川櫓台・本丸土層断面図

第 180 図　中川櫓台・本丸土層断面図

４　小結

中川櫓台は，前述するように「高松城下図屏風」等の絵図には平櫓として中川櫓が描かれている。南半が大きく削平を受けており櫓台としての遺存状態は非常に悪いが，今回の発掘調査での櫓台の規模を復元することができた。詳細は第７節にて報告する。櫓台の南半部が大きな削平を受けた要因として，明治 34 年（1901）の玉藻廟建設に際して天守地下１階を埋立てるために多量に石と土が必要となり，中川櫓台と南多聞櫓台を崩してまかなったのではないかと考えられる。削平した後に現在の位置に新たに石垣を築造するが，１石ないし２石の石を積上げるのみであったため斜面部に中の裏込め石が露呈した状態であった。

検出した遺構は礎石のみである。礎石は東半の一部に乱れがあるが，約 2.00 ｍの等間隔に配されている。香川県立ミュージアム所蔵の「高松城下図屏風」をはじめ多くの絵図では櫓が天守台の石垣に繋がるように描かれている。今回検出した礎石は天守台石垣に接する位置まで検出されており，この礎石は天守台の石垣に繋がる中川櫓に伴うと考えられる。



第 181 図　中川櫓台包含層出土遺物実測図

第７節　本丸

１ 概要（第 183・184 図）

調査以前の本丸内は，玉藻廟の社域として利用されており，手水鉢，手水舎，鳥居各１基，灯籠３対が設置されていた。これら玉藻廟に関連する石造物などは，玉藻廟の解体に伴い，移設した。詳細は高松市教育委員会 2008『史跡高松城跡整備報告書第３冊　玉藻廟解体・記録保存調査報告書』を参照していただきたい。

トレンチ設定に当たっては，石垣の根石の構造・深度の解明と，石垣前面の遺構の検出を目的に行った。まず，本丸の東端で天守台石垣の西面石垣（H面）の根石に沿うように南北方向のトレンチを設定した。以下では本丸東端トレンチと呼称する。続いて，本丸の北端で中川櫓台の南面石垣（I面）に沿うように東西方向のトレンチを設定して発掘調査を行った。以下では中川櫓台南面トレンチと呼称する。両トレンチは本丸北東隅で連結しており，平面形は「逆Ｌ字」形を呈する。調査範囲付近の現地表面の標高は，最も高い北東隅で 6.0 m を測り，緩やかな傾斜で西にむかって下がる。トレンチの西端付近では標高 5.7 m 程度である。各トレンチの調査成果を以下で報告する。

２ 本丸東端トレンチ

本丸の東側端で天守台西面（H面）に沿って南北方向に設定したトレンチである。天守台西面石垣の根石の検出と，本丸東端の遺構検出を目的としてトレンチを設定した。東西長は広い所で５m，狭い所で２m，南北長は 20 m を測る。

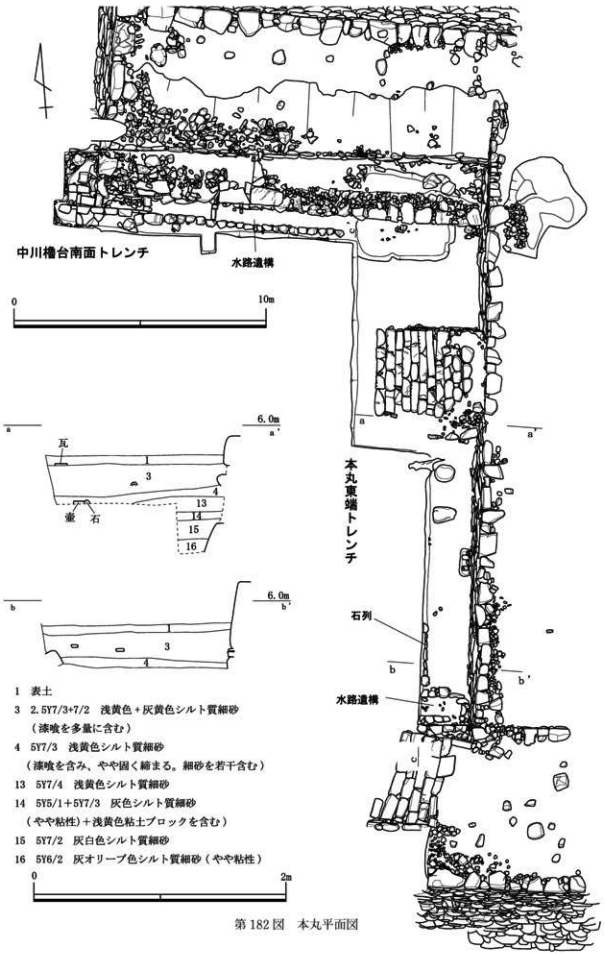
調査範囲の基本層序を見ると，上層から表土，漆喰を多量に含む浅黄色＋灰黄色シルト質細砂，漆喰を含みやや固く締まる浅黄色シルト質細砂に分層でき，ほぼ水平堆積である。ほぼ中央に所在する玉藻廟に伴う石段の基底石の内側の土層は漆喰を多量に含む浅黄色シルト質細砂である。石段の北側では戦後の大きな撹乱を検出した。

（1）根石レベルの確認

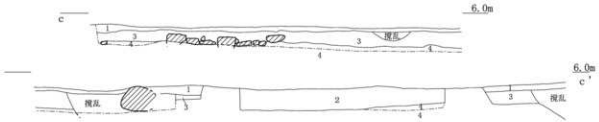
トレンチ中央で根石レベルの確認と，根石の下の地形の有無を確認するために断ち割り調査を実施した（第 182 図断面 A-A'）。その結果，標高 5.4 m付近で根石の底面と考えられる石材を確認することができた。ただし狭小な断ち割り調査にとどめたため，礫敷きや胴木など，地形の有無については確認することができなかった。後述するが中川櫓台南面トレンチでも，中川櫓台南面石垣の根石レベルを確認しており，標高は 4.2 m を測る。それと比較すると，本トレンチで検出した根石レベルは 1.2 mほど高いことになるが，本トレンチの調査時には狭小な断ち割り調査区の中での限定した調査であったため，根石レベルを正確に確認しきれなかった可能性も残る。今後の課題としておきたい。

（2）水路遺構（第 184 図）

本丸の調査範囲南端において検出した石組みの溝である。調査範囲の面積が狭いため検出した


中川櫓台南面トレンチ
水路遺構
0
10m
6.0m
瓦
3
4
13
14
15
16
礫
石
本丸東端トレンチ
石列
水路遺構
1　表土
3　2.5Y7/3+7/2　浅黄色＋灰黄色シルト質細砂
（漆喰を多量に含む）
4　5Y7/3　浅黄色シルト質細砂
（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）
13　5Y7/4　浅黄色シルト質細砂
14　5Y5/1＋5Y7/3　灰色シルト質細砂
（やや粘性）＋浅黄色粘土ブロックを含む）
15　5Y7/2　灰白色シルト質細砂
16　5Y6/2　灰オリーブ色シルト質細砂（やや粘性）
0
2m

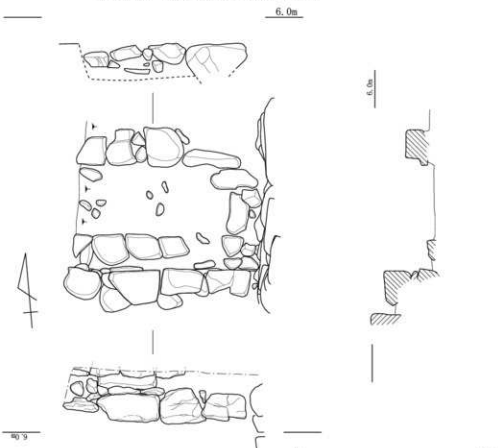
第182図　本丸平面図



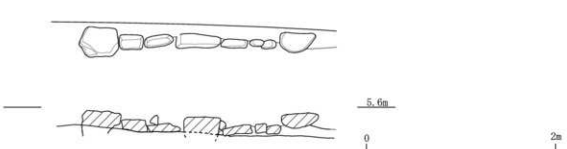
1　表土
2　2.5Y7/3　浅黄色シルト質細砂（漆喰を多量に含む）**流土**
3　2.5Y7/3+7/2　浅黄色＋灰黄色シルト質細砂（漆喰を多量に含む）**流土**
4　5Y7/3　浅黄色シルト質細砂（漆喰を含み、やや固く締まる。細砂を若干含む）**遺構形成面**

0　4m

第 183 図　本丸東端トレンチ西壁断面図



第 184 図　水路遺構平・断・立面図



第 185 図　石列平・立面図

溝の全長は2.00 mであるが，西方向にさらに延びると考えられる。溝の幅は1.20，深さは0.45 mを測る。南側壁は本丸の南東隅の石段より約0.50 m北側に位置する。南側壁は2段積みの石材が残存する。石材は花崗岩と安山岩であり，長方形の石を用いた布積みである。北側壁は1段のみであり，比較的小振りの石を用いている。石材は花崗岩と安山岩と砂岩である。底面には方形に石が同レベルで並べられている。溝上端の標高は5.92 m，底面は5.42 mである。

水路遺構の南壁は現在2段の石材が残存するのみであるが，この南壁と天守台前面において検出した段石垣が平面図上で直線的に並ぶことには注意が必要である。水路遺構の南側には天守台前面にのぼるための石段が位置しているが，この石段は古絵図等には描かれておらず，江戸時代当時には存在しなかった可能性が高い。また，調査範囲外であるため図示はしていないが，本丸の南面北壁石垣は近代以降に大規模な積直しを受けていることが，石積みの技法からも明らかである。総合すると，本丸の南壁付近は本来の形状からかなり改変されていることがわかる。こうした状況を踏まえて，水路遺構南壁の平面的な位置をみると，水路遺構南壁の石垣が本来の本丸南面北壁石垣の位置を示している可能性が高いものと考えられる。櫓台の石垣が水路遺構の側壁を兼ねる様子は後述する中川櫓台南面トレンチで検出した水路遺構とも共通しており，水路と石垣の構造の中で理解できる。現在ここに位置する石階段が近代以降に構築されたと考えられることとともこうした見解は合致するものである。

（3）石列（第185図）

トレンチ南西端において検出した石列である。8個の石がほぼ同レベルの高さで南北方向に並んでおり，東側に面を持つように配置されている。石上面の標高は5.50 m前後を測る。石材は安山岩・凝灰岩の野面石であり，角張った石が多い。トレンチの端で検出した石列であり，どこまで連続するのかについて確認できていない。検出したレベルと堆積層から，水路遺構などとほぼ同時期に機能していた遺構であろうと考えられるが，その性格や用途，形成時期の詳細などについては不明である。

（3）包含層出土遺物（第186～188図）

第182・183図第1～3層出土遺物について報告する。包含層より出土した遺物は，陶器小皿（536），同椀（537），軟質施釉陶器燭徳利（538），土師質土器蛸壺（539），軒丸瓦（T 502～T 505），軒平瓦（T 506，T 507），菊丸瓦（T 508），鳥衾瓦（T 509），丸瓦（T 510，T 511），平瓦（T 512），鬼瓦（T 513），青銅製蓋（M 93），青銅製飾り金具（M 94），釘（M 95，M 96），アルミ帯（X 14）である。

536は擂鉢より出土した小皿であり，見込みに陽刻線で表現する「丸に三葉葵紋」があり，底面に『平田謹製』の刻印がみられる。537は断面方形の高台を持ち，体部下位に稜を持ち立ち上がる。538は片口部分を欠損するのみであり，器厚は非常に薄く内外面とも赤色である。539は体部中央に1個の孔を持ち，内外面に墨書がある。外面体部の下端は横方向のヘラケズリ，内面

に指頭圧が明瞭に施される。

T 502，T 503 は左巻き三巴文であり，内区と外区を画する圏線があり，巴頭部は丸く近接して対向する。巴尾基部は巴頭部と同じ幅で始まり，先端部に向かって次第に細くなり圏線に突き当たって終わる。珠文は小振りである。佐藤分類Ⅲ類 29 である。T 504，T 505 は右巻き三巴文であり，巴頭部はやや大振り，巴尾部は短く，三巴文径が相対的に小さく見える。珠文は 12 個でやや大振りである。佐藤分類Ⅳ類 125 である。T 506 はレリーフ状の下向半裁花菱文を中心飾りにもち，下・上へ２転する唐草文と子葉を伴う。佐藤分類ＸＸⅢ類 156 である。T 507 は中心飾りに花弁が細長く軸線を伴わない唐花菱文をもち，唐草文は中心飾りの下方から上・下・上と３転し，外側に子葉が伸びる。中心飾りの文様は佐藤分類ＸＸⅣ類 160 である。

T 508 は菊花文で花弁の輪郭を陽刻線で表現し，花弁は 16 葉である。佐藤分類Ⅰ類１である。

T 509 は右巻き三巴文であり，巴頭部は大振り，巴尾部はやや長めである。珠文はやや大振りである。佐藤分類Ⅳ類 162 である。

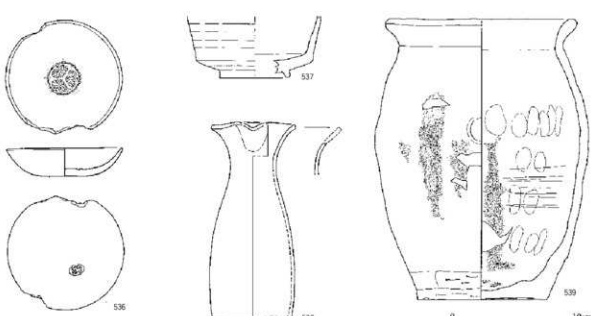
T 510，T 511 は玉縁丸瓦であり，凸面はナデ・ミガキが施され，凹面は布目・コビキＢが残る。T 515 の凸面には漆喰の痕跡が残り，凹面の削り幅は狭い。T 511 の凹面の削り幅は広い。

T 512 は凹面に板ナデ・ナデ，凸面に粗いナデが施され，凹面側縁は狭い面取りがある。

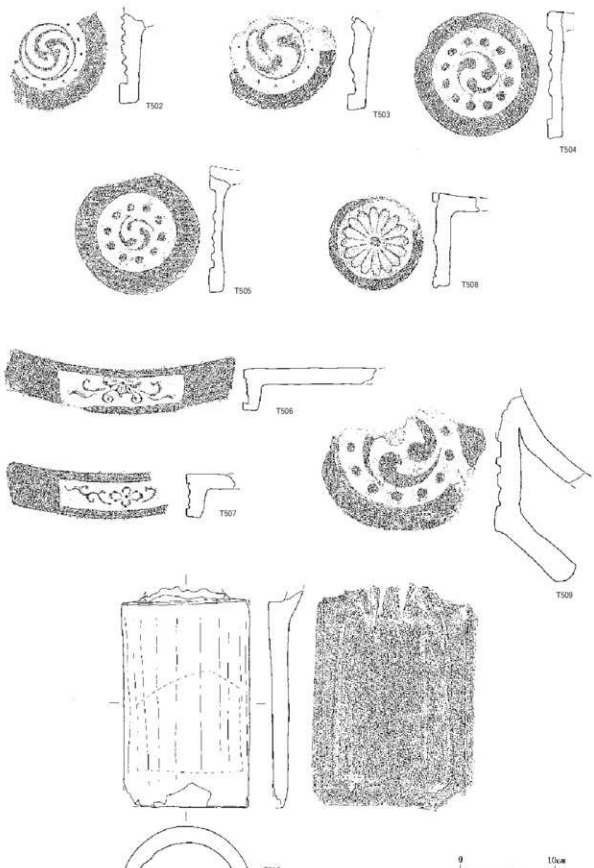
T 513 は中央に三葵紋をあしらった鬼瓦であり，葵紋は陽刻で表現する。

M 93 は口径 7.1㎝で内面に１条の圏線を巡らし，外的要因により湾曲する。M 94 は架空の動物をモチーフとした飾り金具である。M 95，M 96 は断面方形の釘であり，基部は薄くなる。

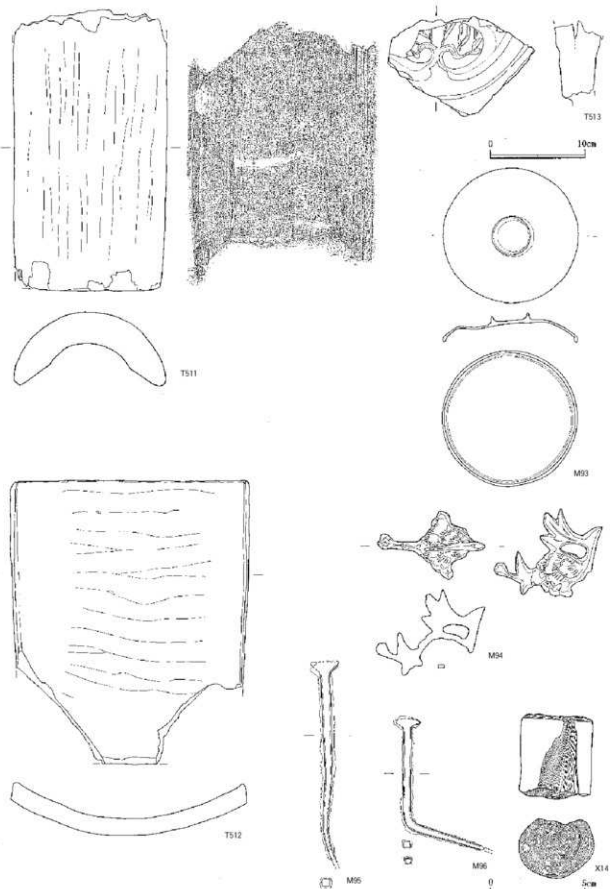
X 14 は第２次世界大戦中に投下されたアルミ帯であり，無線を妨害する目的を持つ。昭和 20 年の高松空襲の際に投下されたものと思われる。



第 186 図　本丸包含層出土遺物実測図（１）



第187図　本丸包含層出土遺物実測図（2）



第188図　本丸包含層出土遺物実測図（3）

（5）小結

本丸東端トレンチでは，東西方向に延びる水路遺構と機能・規模不明の石列を検出した。本丸南面北壁石垣が近代以降に大規模に改変されており，本来の石垣は現存の石垣の北側1ｍ付近に位置していた可能性が高いことが明らかになった。また，トレンチの北端，本丸の北東隅には近現代の大規模な撹乱が及んでおり，遺構の残存状況は不良であることも判明した。これらの成果から，本丸内の北端，南端付近は比較的後世の改変が広く及んでいることが明らかになった。

3 中川櫓台南面トレンチ（第189図）

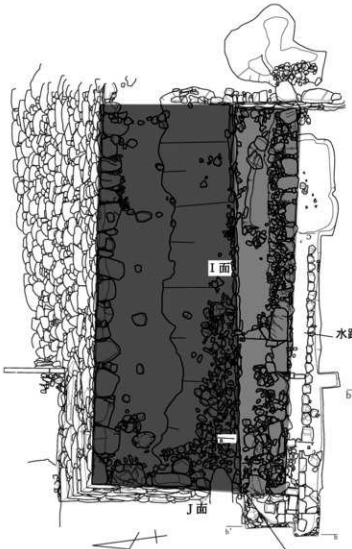
中川櫓台は第3章第6節で詳述したが，近代以降の改変が非常に大規模になされた櫓台である。特に南面は地表面上にわずか1段分程度しか石材が露出していないような状態であった。このため，平成18年度にⅠ面石垣に沿ってトレンチを設定し，発掘調査を行った。この時の調査では，Ⅰ面の南側約1ｍの位置において，石垣の一部とその前面にある水路遺構を検出していた。

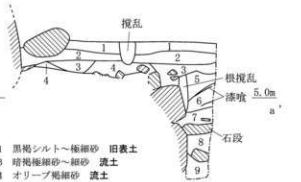
その後，平成22年度に中川櫓台南面石垣の積直し工事を実施する際，Ⅰ面根石のレベルを確認するために追加の確認調査を実施した。詳細は後述するが，調査の結果，それまで中川櫓台の南面石垣であると理解していたⅠ面は近代以降に積み直された石垣で元位置を保っておらず，Ⅰ面の南側およそ1ｍの位置に，本来の中川櫓台南面の石垣に相当する石垣が残存していることが確認できた。このため，平成23年度に追加調査を行い，中川櫓台南面石垣の本来の位置を確認した（第180図）。また，この調査時に中川櫓台南面石垣の前面に設置された水路遺構と中川櫓台と西方の中櫓に架設された櫓門の礎石と考えられる石材を検出することができた。以下ではこれら検出した遺構の詳細について報告する。

（1）発掘調査の進展と石垣検出

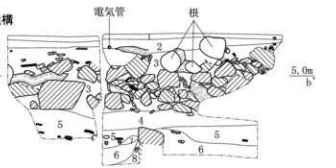
Ⅰ面の石垣石材に沿って掘削を開始したところ，意図的に打ち欠かれた石垣石材を1石確認した（第189図左下写真）。この石材は，Ⅰ面を構成する石材の一つであるが，打ち欠かれた断面の状況から，本来はⅠ面の平面形ラインよりも南側に大きく飛び出す形状の石材であり，地上に露出した部分をⅠ面のプランに合致させるため，意図的に打ち欠いたものであることが明らかになった。さらに，この打ち欠かれた石材の南側から，石材の西面が南北に直線的に並ぶ石材を検出し，さらに南側へ延びる状況を確認した。中川櫓台全体での位置関係を確認すると，西面を形成するＪ面のラインに一致する位置であり，Ｊ面がⅠ面を越えて南側に延伸している状況であることが明らかになった。つまり，先述した打ち欠かれた石材は，本来Ｊ面を形成していた築石であり，Ⅰ面が形成される際にその形状を変形されたものであることが判明したことになる。

上記の状況を踏まえ，当初想定していた中川櫓台の平面形に再考の必要があると考えたため，調査区を南側に拡張し，発掘を実施した。このように遺構の検出状況で複数年度にわたりトレンチの拡張を繰り返したが，第189図に示しているのは，この最後の拡張終了後の平面図である。拡張した範囲で，さらにＪ面が南側に1.5ｍ延伸し，隅角部を経由して東へ折れることを確認した。





1. 表土
2. 2.5Y3/1　黒褐シルト～極細砂　**旧表土**
3. 10YR3/3　暗褐極細砂～細砂　**流土**
4. 2.5Y4/4　オリーブ褐細砂　**流土**
5. 2.5Y5/4　黄褐シルト　**流土・水路内堆積層**
6. 2.5Y4/3　黄褐シルト　漆喰を層状に含む　**流土・水路内堆積層**
7. 2.5Y4/3　オリーブ褐シルト　瓦・漆喰を含む　**流土・水路内堆積層**
8. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐極粗砂～細砂　根攪乱か土器片含む　**盛土**
9. 2.5Y3/2　黒褐砂層（極粗砂～細砂）土器片含む　**盛土**



1. 表土
2. 2.5Y3/1　黒褐シルト～極細砂　**旧表土**
3. 10YR7/1　灰白粗砂　礫・瓦片など多量に含む　**門の埋立て土**
4. 2.5Y4/3　オリーブ褐　極細砂～細砂　漆喰少量含む　**流土**
5. 10YR7/3　にぶい黄橙シルト～細砂　漆喰多量に含む　**流土**
6. 10YR7/2　にぶい黄橙砂質土　漆喰少量含む　**流土**
7. 2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト～極細砂　**流土**
8. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂　**流土・水路底の堆積層**

0
2m

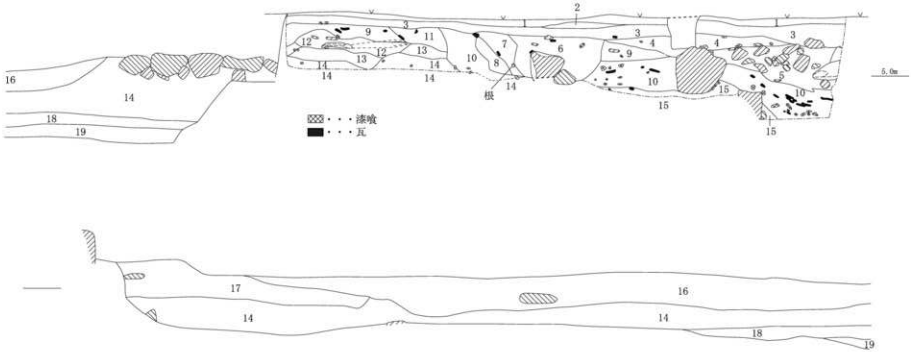
調査前の中川櫓台推定平面形

調査で確認した本来の中川櫓台平面形

I面とI面構築の際に打ち欠かれた石材（北東から）

打ち欠かれた石材の状況（北東から）

第189図　中川櫓台南面トレンチ水路遺構平・断面図



1　表土
2　2.5YR4/2　暗灰黄極細砂～細砂
3　2.5Y3/1　黒褐　シルト～極細砂　**旧表土**
4　2.5Y8/2　灰白極細砂
5　10YR7/1　灰色粗砂　**撹乱**
6　2.5Y7/1　灰白極細砂　**撹乱**
7　5層に黄褐ブロック多く含む　**撹乱**
8　2.5Y4/3　オリーブ褐色　極粗砂　漆喰少量含む　**撹乱**
9　10YR7/1　灰白シルト～極細砂　漆喰含む　**遺構面**
10　10YR7/3　にぶい黄橙色シルト～細砂　漆喰含む　**撹乱**
11　2.5Y8/4　淡黄シルト～極細砂　**遺構面**
12　10YR8/1　灰白シルト～極細砂　漆喰含む
13　10YR4/2　褐色極細砂
14　10YR4/4　褐色極細砂　**水路の底**
15　2.5Y5/2　暗灰黄細砂　**水路底**16　2.5Y7/2　灰黄　砂土（漆喰含む）　**撹乱**
17　10YR6/2　灰黄褐　砂土　締まり極強　**石垣根石の基盤層**
18　10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂（10YR7/1　灰白　シルト混）　**石垣根石の基盤層**
19　10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂～粗砂　瓦片等含む　**撹乱**

0　2m

第190図　中川櫓台南面トレンチ南面壁

隅角部の石材は一部原位置から移動していたものの，概ね遺存状態は良好であった。地表面以下の隅角部石材については野面石を算木積しているが，天守台の石垣で地上に露出している角石に比べてやや小振りで，加工も施していない。隅角部から東側に伸びる石垣は，天守台石垣の西面（H面）に接する地点まで延びている。石材は花崗岩を主体として安山岩を少量含んでおり，大型の石材を野面の乱積で積上げている点が天守台の他の石垣と共通している。また，平面的にみると，中川櫓北面の石垣（C面）とほぼ平行するため，中川櫓台の南面を形成する石垣であると判断した。検出した範囲は東西 10 mにおよぶ。

この新たに検出した断面の石垣の位置を基準に，中川櫓台の規模を確認すると，概ね南北幅が 7.3 mを測り，東西幅は 15.2 mを測ることになる。

（2）水路遺構（第 185 ～ 187 図）

上記の発掘調査で検出した本来の中川櫓台南面石垣の南側で，およそ 1 mの間隔を空けて並行する石垣を検出した。東端は石材が後世の撹乱によって残存しておらず，西端は調査区外へ延びるため，範囲の確定は不能である。東端は大規模な撹乱によって石材が途切れているが，本来は直線的に延伸し，天守台西面石垣（H面）と接していたものと考えられる。この石垣が水路遺構の南壁を構成しており，中川櫓台南面石垣を北壁として，水路が形成されていた。

検出した水路は現況で幅 0.9 m，長さ 11.5 m以上を測る。水路底面は砂礫層であり，石敷き等の構造は認められなかった。この床面の傾斜を見ると，東から西へ向って傾斜し下がっているため，この傾斜に沿った排水経路であったと考えられる。水路の南壁の石垣をみると，石垣石材を盛土の砂層の上に直接並べて施工している。2石以上を石垣状に積重ねた箇所は少なく，多くは1石のみが確認できる。ただし，石垣の上半は削平されている可能性も充分考えられるため，本来の積み方をそのまま反映したものであるとは言い切れない。石材の種類をみると，花崗岩・安山岩・凝灰岩を用いており，安山岩と凝灰岩の比率が他の天守台石垣に比べて高く，特に凝灰岩の量が多い点が指摘できる。凝灰岩の多くは切石で方形に加工されている。こうした凝灰岩の切石を用いた水路は本丸虎口でも確認できており，（第9節 SDI）本丸内の水路施工に当たって選択的に石材を用いている状況がわかる。

水路遺構の中を見ると，水路の底面上に3箇所，間仕切り状の石材を配置している。凝灰岩の切石を水路底に水路に直行する方向に据えている。石材据え付けのレベルを見ると，東より西側が低くなっており，落差は小さいが水路底に段差を設けて施工されたものと考えられる。段差を設けることで，水路底の砂が流出するのを防ぐ堰の役割を果たしたのであろうか。水路底に関しては，砂利を敷き詰めるなどといった流水性を担保するための施工は一切確認できておらず，盛土と同様の砂質土で形成されている。基盤層となる盛土部分も砂質土で構成されているため，水路底から基盤層へ浸透することで排水していた可能性も考えられる。

（3）櫓門の礎石（第191図）

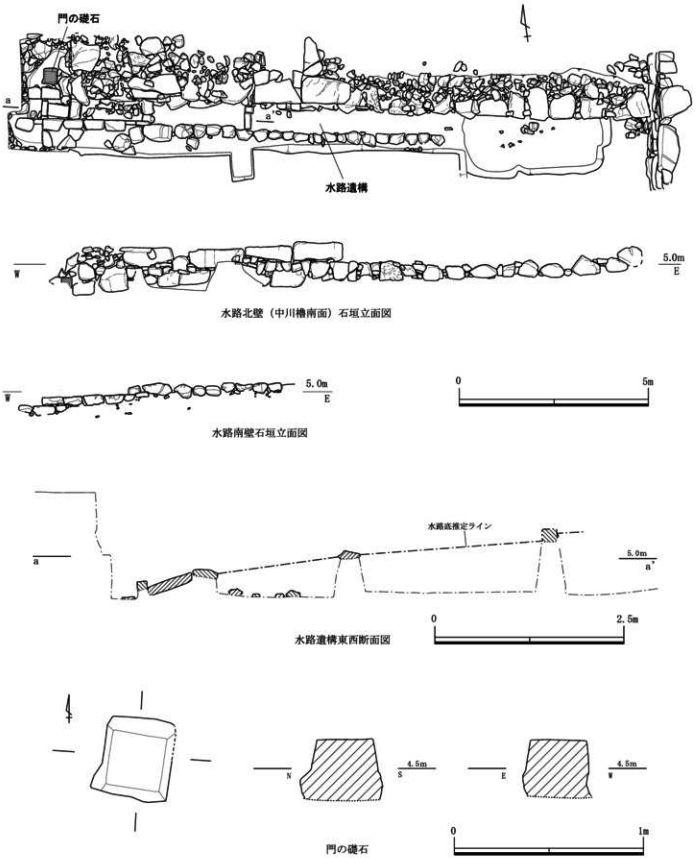
上記の中川櫓台と水路遺構の検出中，門の礎石を1石確認した。検出位置は検出した石垣の隅角部からやや北西の位置である。花崗岩を精緻に加工し，底部に比べて頂部のやや狭い，縦断面台形を呈する立方体に整形している。石材の下半は未整形な自然面が確認できる。地下1階入口で確認されたような，柱材の痕跡（第4節参照）は確認することが出来なかった。古絵図の表現等からこの礎石の評価を考えると，「高松城下図屏風」「讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚」などには，中川櫓と中櫓の間に門の表現がある（写真図版13・15）。本来鞘橋から本丸に向かうには，虎口を抜けたのちに南へ向かって櫓門を通るという，直線的に本丸に至る動線が設定されていたことがわかる。現在この絵図に描かれた中櫓台は後世の大規模な改変により，その位置を確認することが困難な状況である。また，古絵図に門が描かれている範囲については，現在玉藻廟建造時のものと思われる石垣と垣根で完全に遮断された状態であり，本丸に入るには本丸虎口からいったん西側に向かい，階段を上ってから再度東側へ迂回する動線が設定されている。この階段は長大な花崗岩の延石を直方体に切り出し施工したものであり，天守台へ登る階段と比べても後世に作られたものであることは明確である。今回の発掘調査に伴い解体した玉藻廟に登る階段（第6図）とよく似た構造をもっており，こうした階段の設営，ひいては江戸時代までの本丸内の動線の改変は明治期の玉藻廟の築造に伴うものである可能性が考えられる。

古絵図の表現を参考にすると，今回検出した礎石はまさにこの中川櫓と中櫓の間に架されていた門の礎石の一部であると考えられる。ただし，1石のみの検出状況であるため，門の構造・規模などを推定することは困難である。本丸部分の発掘調査を行う際の今後の課題として認識しておきたい。

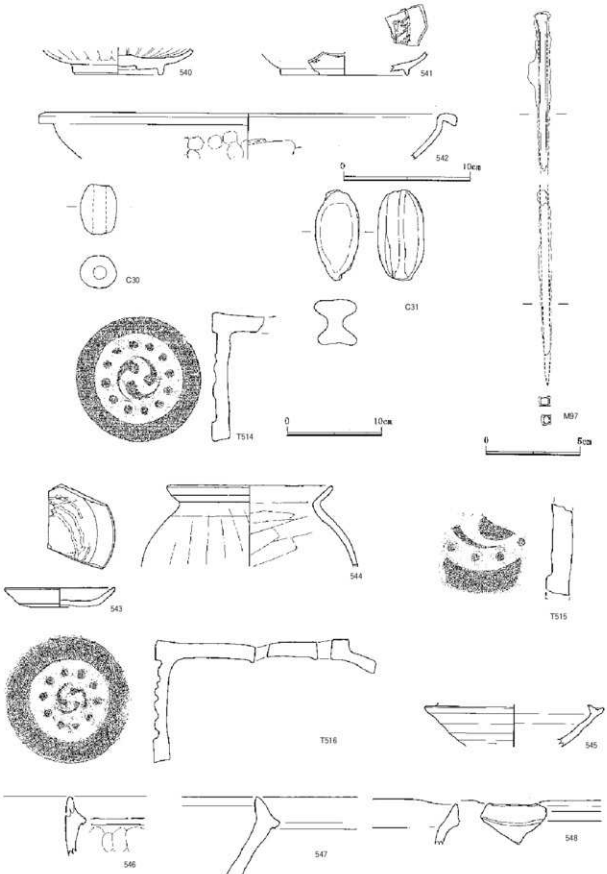
（4）出土遺物

540～541，C30，C31，T514，M97は平成18年度の発掘調査で出土した遺物である。水路遺構の上層で検出した。543・544は表土層から，T514は門を埋めた礫層の中から，T515・T516，543～548，M98は石垣の裏栗石中から，T518～T520は水路遺構の埋土中から，551～561，M100～M102は基盤層となる盛土中からそれぞれ出土した。

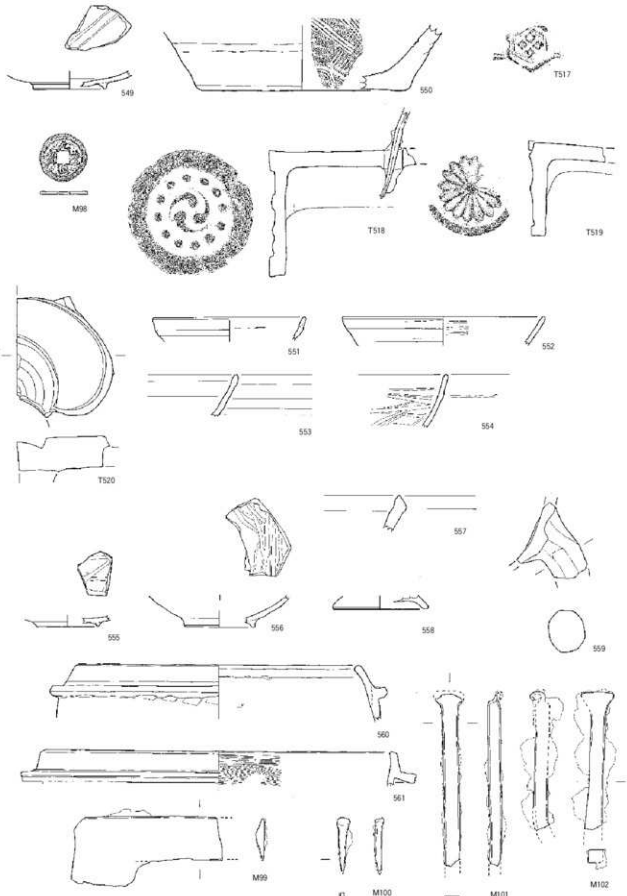
540・541は磁器皿，542は土師質土器焙烙，C 30・31は土錘，T 514は軒丸瓦，M 97は釘である。540は蛇の目凹形高台である。541は畳付が無釉で，内外面に染付けがある。542は口縁部が外下方向に延び，体部外面は指頭圧，内面はヘラナデが施される。C 30は管状土錘，C 31は有溝土錘である。T 514は右巻き三巴文であり，巴頭部は大きく，巴尾部は基部が太く長さが短い。珠文は12個ある。軒丸瓦Ⅳ類153である。543は土師器杯である。内面に複数条の暗文が円弧を巡り施す。544は弥生土器甕の口縁部である。直線的に延びる口縁部と，球状に広がる胴部上半を有す。内面には頸部付近までケズリが及ぶ。T515は巴文の軒丸瓦である。4点以上の宝珠と反時計回りの巴文が確認できる。T516は軒丸瓦である。時計回りの巴文に10点の宝珠が巡る。上面には釘による固定のための穿孔が2箇所施される。545は須恵器杯身である。口



第191図　中川櫓台南面トレンチ水路遺構と門の礎石



第192図　中川櫓台南面トレンチ水路遺構出土遺物実測図（1）



第 193 図　中川橋台南面トレンチ水路遺構出土遺物実測図（２）

縁部は欠損するが，TK43型式に相当する資料である。546は土師器土釜である。口縁部はやや直立する。鍔部は口縁部に比して短い。547は備前焼の擂鉢口縁部である。端部が上下に肥厚する。548は須恵器鉢の注口部である。549は瓦器椀の底部である。内面に直線的な暗文が2条施される。550は須恵器の擂鉢である。内面に不定方向の線刻が施される。T517は滴水瓦である。M98は銅銭である。表面には「元豊通寶」，裏面は無文である。T518は巴文の軒丸瓦である。上部に穿孔が1箇所あり，固定用の釘が1本刺さった状態で遺存している。釘の上端は欠損している。T519は菊丸瓦である。菊花の花弁の輪郭が明確で，佐藤分類Ⅰ類である。T520は鬼瓦である。551は土師器杯である。粘土接合痕が確認できる。552は土師器椀・杯口縁部である。磨耗しているが，内面には暗文状の痕跡が残る。553は須恵器椀杯口縁部である。内外面とも回転ナデを施す。554は瓦器椀の口縁部である。内面に暗文が多数巡る。555は瓦器椀底部である。須恵質に焼成されており，内面に暗文が巡る。556は瓦器椀底部である。底部は貼り付け根が明瞭に確認でき，内面には暗文が密に巡る。557は須恵器鉢の口縁部である。558は焼塩壺の蓋である。頂部にはケズリ痕が明瞭である。559は足釜の脚部である。内面にはハケ目のちナデが施されたことがわかる。560は土釜の口縁部である。口縁部が鍔部に比して非常に長く，やや内傾する。561は土鍋である。鍔部は方形で水平に延びる。M99は断面三角形を呈する鉄製品である。上下両端が刃部をなす可能性も考えられる。M100 ～ 102は鉄釘である。M100は小型の鉄釘で，釘頭から先端にかけて漸次鋭利になる。M101・102は大型の鉄釘で，頂部を鍛打によって薄くし，丸く折り曲げている。

（5）小結

中川櫓台南面トレンチでは，発掘調査の結果，調査前に櫓台の南面を画すると考えていた石垣（Ⅰ面）が櫓台の本来の石垣ではなく，後世に積み直された石垣であることがわかった。門の礎石についての項で一部触れたが，Ⅰ面石垣は玉藻廟の築造後の本丸内に設定された動線を規定する石垣の一部である。また，中川櫓台が大規模に改変され，石材や栗石，盛り土が大量に搬出されたあとに形成されたことが遺構の形成順序から明白であるため，近代以降，とりわけ玉藻廟の築造を契機として形成された石垣である可能性が高いだろう。

また，Ⅰ面石垣の形成に代表される大規模な改変によって，地上にその痕跡を残していなかった中川櫓台南面の石垣を，隅角部を含めて検出することができた。根石まで深いところでは現地表面から1.4 mを測る。この石垣の発見により，中川櫓台の本来の形状を復元することができた。

さらに，中川櫓台南面石垣に面して，水路遺構が東西に延びることを確認した。中川櫓台に多聞櫓が建っていた時には，雨水を排水する機能を有していたのであろう。東端はおそらく天守台西面（H面）まで続き，西端は今回の調査範囲よりも西へ続く。本丸虎口では南北方向に延びる凝灰岩製の水路遺構が検出されており，本トレンチで検出した水路遺構はどこかで屈曲して，これにつながる可能性も考えられる。そうなった場合には，おそらく中川櫓と中櫓の間に架設された門の中心付近で北に向かって折れ，延伸するものと思われる。今後の調査課題である。

最後に，門の礎石を確認できたことで，絵図に描かれた門の存在を確認する手がかりを得ることができた。すでに述べたように，１石のみの検出であり，門の構造や規模を推測することはできないが，当調査区付近の遺構の残存状況がおおむね良好であることが確認できたため，西側へ調査区を設けることでこれらの課題を解決することが出来る公算は高い。今後の課題であり，十分に注意が必要であろう。

４ まとめ

本丸東端トレンチと，中川櫓台南面トレンチの調査成果をまとめて，本丸内の状況を確認しておきたい。まず，水路遺構であるが，本丸の北端と南端付近で，東西方向に排水するための水路を２本確認することができた。本丸内の排水経路は概ね東から西に向かって設定されていたことがわかる。

続いて，本丸内の後世の改変についてであるが，両トレンチともに，本丸内側の石垣を大きく崩し、石材・栗石・盛土を撤去する大規模な改変が及んでいること，その後に石垣は規模を縮小して積みなおされていることを確認した。本丸内の変遷は第５章第１節にて詳述するが，本丸内の，特に櫓台付近は近代以降の改変の影響を大きく受けていることは明らかである。この改変の契機について，文献資料などの直接的な根拠を提示することはできないが，玉藻廟の造成に用いる建築資材を，近在の石垣を壊すことで供給した可能性が考えられる。玉藻廟基礎については，第３章第２節で触れたが，基礎の石垣の中には矢穴の大きな割石や刻印石が複数含まれており，高松城内の石垣の部材を転用したことはほぼ確実である。また，玉藻廟は地下１階を完全に土砂で埋めたて，その上に建築されたことが分かっているが，その大量の土砂の供給源として，最寄の本丸から材料を調達した可能性は高いと考えられる。いずれも直接的な証拠はないが，近代以降の本丸内の改変の契機としては最も蓋然性の高い解釈であると考えられる。

一方で，門の礎石の検出状況や水路遺構の残存状況を勘案すると，地表面以下の遺構については比較的残存状況が良いものと考えられる。今後の調査によって門の構造を含めて，本丸内の遺構の詳細を明らかにすることも可能である。また，中川櫓南面トレンチでは，壁面に漆喰が層を成し，土砂を間層に挟んで互層を成す状況を確認している。それぞれの形成時期は面的な調査を経ておらず不明であるが，本丸内の遺構変遷順序を確認するための鍵層として認識できると考えられる。

第８節　天守へ続く階段

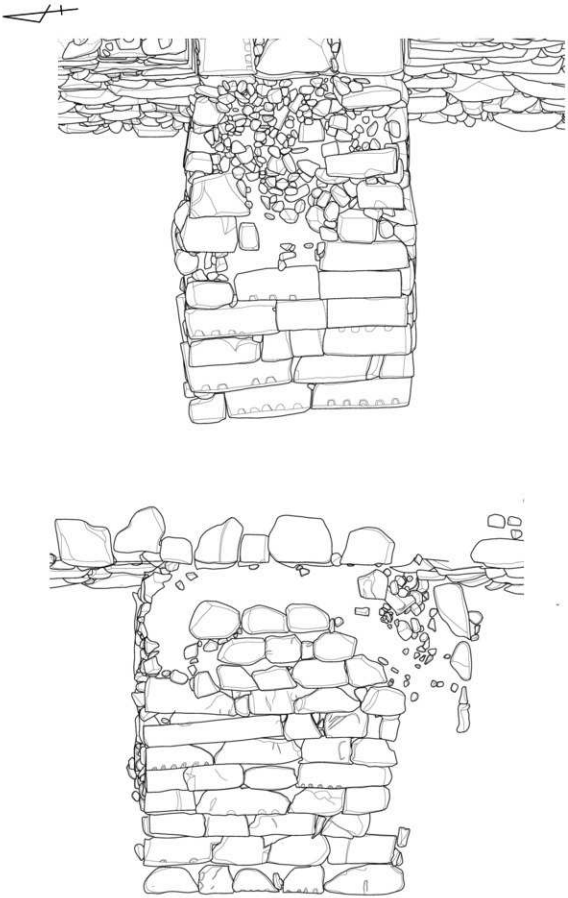
１ 概要（第 195 ～ 198 図）

天守台前面から本丸の東端にかけて，本丸から天守台上部の玉藻廟へ上がるための階段（2008 年に刊行した『石垣基礎調査報告書』で石垣番号 1029 の階段）が設置されていた（第６図）。この階段は明治 35 年の玉藻廟建設にに伴って構築されたと考えられる。その階段を撤去すると本丸から天守地下１階に繋がる石段を検出した。石段は天守台前面から天守地下１階に上がる上段の石段と本丸から天守台前面に上がる下段の石段の二つの石段から構成される。上段の石段は，踏み面をＴ面，北側面をＳ面，南側面をＵ面と呼称し，下段の石段は，踏み面をＷ面，北側面をＶ面，南側面をＸ面と呼称する。

２ 調査結果

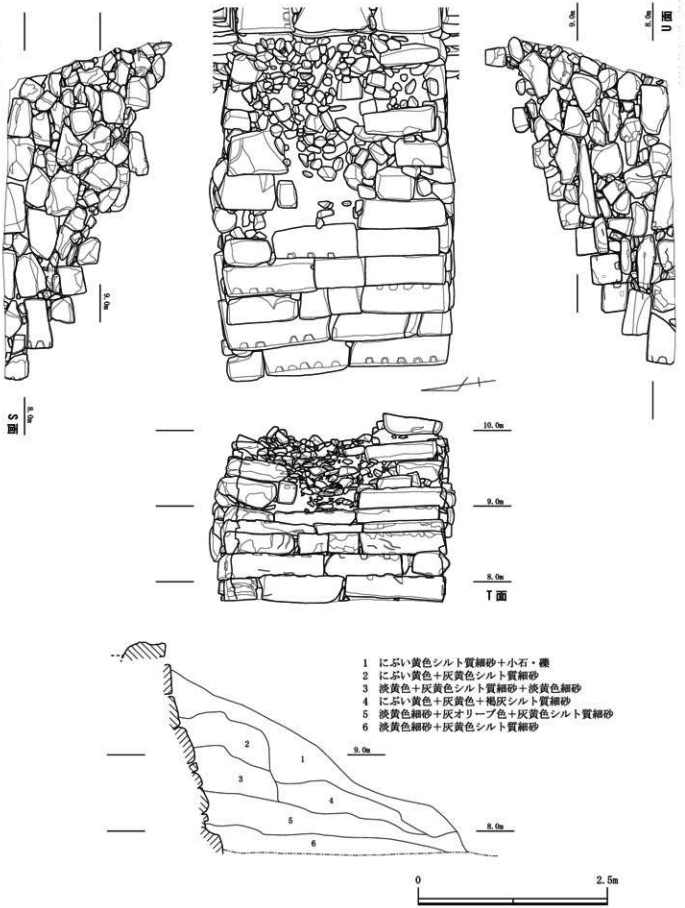
天守台前面から天守地下１階に上がる上段の石段は，上部が壊されており原形を保っておらず，残存する段数は 10 段である。石段の平面形は長方形を呈するが，Ｓ面の中央部がやや膨らんだようになっておりハラミがみられる。石段の全長は約 4.40 ｍを測り，上縁の幅は前方で約 3.00 ｍ，後方で約 2.90 ｍであり，高さは約 2.40 ｍを測る。石の積み方は，部分的に原位置を保っている最上段から４段目までの踏面が安山岩の野面石，踏石が原位置を保つ５段目以下は花崗岩の切石を用いる。踏面１段の蹴上は約 0.30 ｍ，踏面約 0.30 ｍである。踏石の石材は花崗岩と安山岩の切石である。花崗岩には矢穴が残存するものがあり，矢穴の幅は 10cm，深さ２cm を測り，１石に残る矢穴の数は３～７個である。Ｓ面とＵ面の石の積み方は，安山岩と花崗岩の野面石の乱積であり，勾配はほぼ垂直である。刻印は７段目踏石の右側面に長方形，８段目踏石の右側面に長方形がみられる。

本丸から天守台前面に上がる下段の石段は、最上段とＷ面北側の３段目は壊されており原形を保っておらず，さらにＷ面南側とＸ面は玉藻廟に伴う階段設置による破損が著しく，Ｘ面は基底部の１段のみ残存する。石段は 11 段残存しており，破損した最上段を含めると，この石段は 12 段であったと考えられる。石段の平面形は方形を呈するが，Ｖ面の石垣にわずかなハラミがみられる。石段の全長は約 4.30 ｍを測り，下縁の幅は約 4.50 ｍ，高さは約 2.50 ｍを測る。石の積み方は，花崗岩の切石と安山岩の野面石を用いた石段であり，最上段から３段目までの踏面は安山岩の野面石が大部分を占め，４段目から 11 段目は花崗岩の切石が大部分を占める。踏面１段の蹴上は約 0.20 ｍ，踏面約 0.30 ～ 0.40 ｍである。多くの花崗岩に残存する矢穴は幅が４～６cm の小振りのものと９cm の大振りのもの２種類に分けられる。１石に残る矢穴の数は４～ 16 個である。５段目北端の踏石は上面・正面・左側面・裏面にノミ切りがみられる。Ｖ面とＸ面の石の積み方は，安山岩と花崗岩と凝灰岩の野面石の乱積みであり，勾配はほぼ垂直である。Ｖ面の石積みは乱積であるが，中央部に目地がみられる。目地より上部は小振りの石を用いているが，下部は方形の大振りな石を築石として用い，間詰石に小さな石を使用している。Ｗ面の上面で検出した花崗岩の切石に分銅形の刻印が１個見られる。Ｖ面に石積みの違いがあることからこの石段

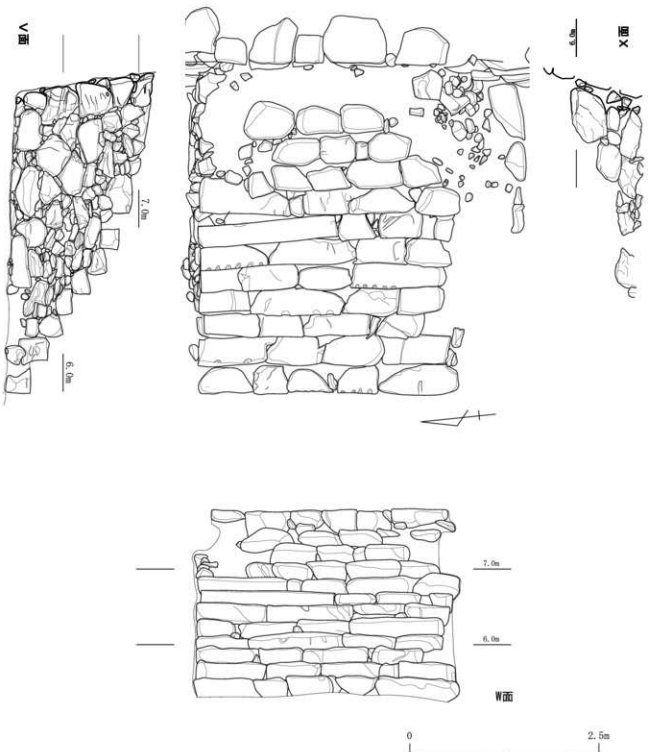


第194図　天守へ続く石段平面図

0　2.5m



第195図　天守へ続く石段（上段）平・断・立面図



第196図　天守へ続く石段（下段）平・断・立面図

は少なくとも1回の改修が行われたと考えられる。

3 出土遺物

本丸から天守台上部の玉藻廓へ上がるための階段を解体した際に出土した遺物は多数あるが，その多くが明治時代のものである。ここでは江戸時代の遺物のみを掲載する。磁器椀（562），鳥衾瓦（T 521），滴水瓦（T 522，T 523），道具瓦（T 524），鬼瓦（T 525，T 526），釘（M 103～M 107），鉄製品（M 108），銅銭（M 109）である。

562は肥前系で，底部付近の器厚が厚い。見込みに簡略した昆虫文がある。

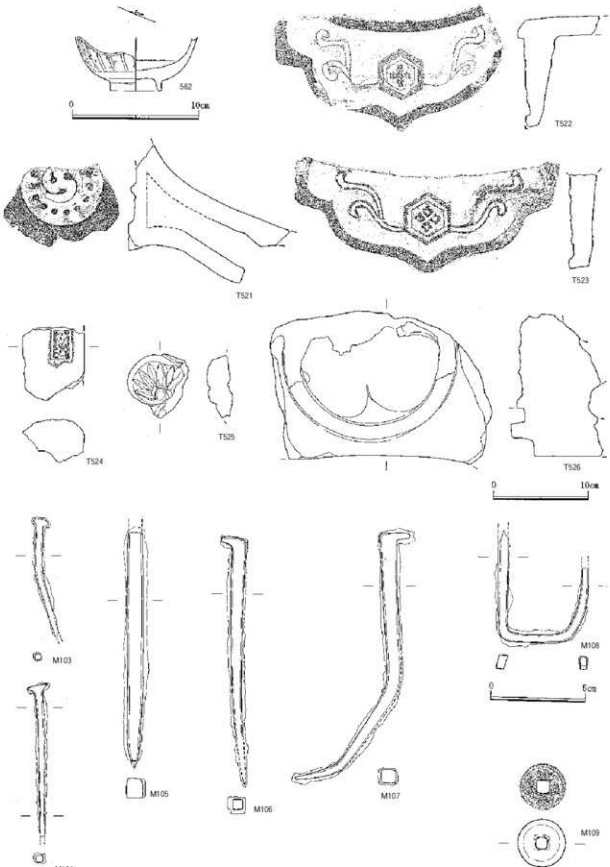
T 521は左巻き三巴文であり，巴頭部は小さく丸く，腹面側が明瞭に括れる。巴尾部は基部と先端の幅が大差なく細長い。珠文は小さく数が多い。佐藤分類Ⅳ類47である。T 522は中心飾りとして二重の亀甲文の中心に十字形に近い四つ葉が描かれる。唐草文は陽刻の線描と囲み線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。瓦当上縁に幅広い面取りがある。T 523は中心飾りとして二重の亀甲文の中心に幅広い四つ葉が描かれる。唐草文は陽刻の囲い線が使われ，先端は上下に逆転する配置になる。T 524は外面に□に囲まれた「瓦師捨七」の刻印が見られる。T 525は鬼瓦の中央にある三葵紋の一部であり，裏面に剥離面がある。T 526は突帯の中の文様区に3等分する剥離面があり，この文様区には三葵紋が施されていたと考えられる。裏面には取手の基部が残る。M 103～M 107は断面方形であり，基部が薄く屈曲する。M 108はU字形で段面長方形である。M 109は宋銭である。

4小結

本丸から天守地下1階へ続く階段は，天守前面に検出された上段の石段と本丸に検出された下段の石段の二つから成り立つ。これらの石段は玉藻廓建設に伴い，新たに造られた階段によって一部破壊されており，特に下段のX面は破壊が著しく基底部付近のみ残存する。

二つの石段の全長と高さはほぼ同一であるが，上段の石段は下段の石段より幅が約1.30 m狭くなっている。その要因として，上段の石段が天守地下1階の入口の幅に合わせたことによると考えられる。踏石は上方が安山岩の野面石、下方が花崗岩の切石を使用しており、花崗岩には刻印や矢穴を有するものもある。矢穴は幅5 cm前後と10cm前後の2種類あり、上段の石段には10 cm前後の矢穴のみ存在するのに対し、下段の石段には大小の矢穴が存在する。側面の石の積み方は乱積みであるが、下段の石段では石垣の下半は大振りの石材を使用しているが上半は小振りの石材を使用している。

上下段ともに、玉藻廓の階段が構築されるまで、あるいは構築された時に大きく改変されていたことがわかる。改変の状況や石積みの方法等から、上段の石段は玉藻廓の階段構築前に壊されていた可能性が高い。高松城の廃城後に、地下1階への進入を防ぐために崩された可能性が考えられる。一方、下段の石積みは、一度崩されたのち再度積み直された跡がある。玉藻廓建設に伴い、階段の傾斜を調整するために改変され可能性が考えられる。



第197図　玉藻廟階段解体に伴う出土遺物実測図

第９節　本丸虎口

１　概要（第 199 図）

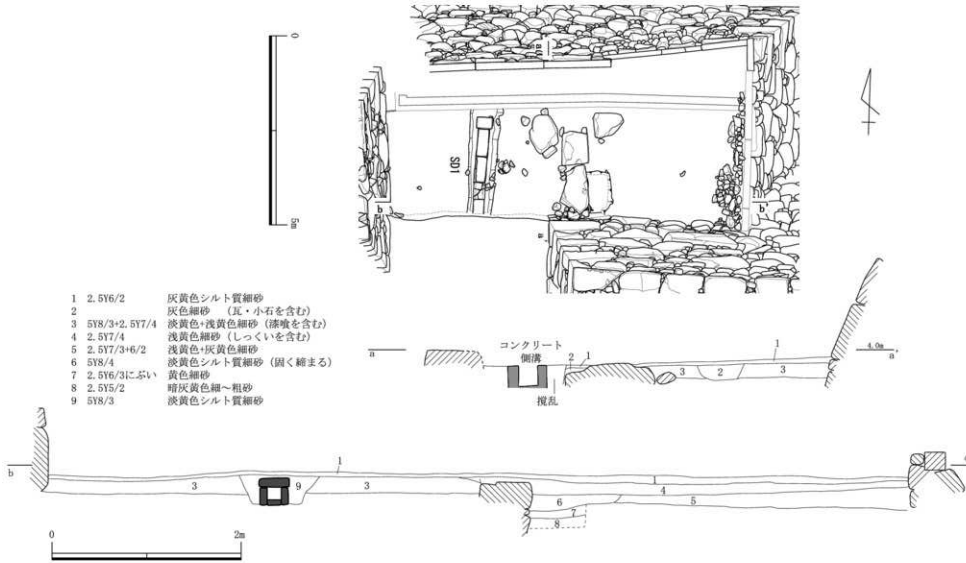
二ノ丸から内堀に架かる鞘橋を渡った所であり，本丸への入口部分に当たる。現況では標高 3.80 ～ 4.00 ｍを測り，南から北方向に緩やかに低くなっている。本丸北側石垣（Ａ面）に沿うようにコンクリートの排水溝が設置されている。今回の調査対象範囲は虎口の中でも北側部分である。調査区の土層は水平堆積をなし，第１層は灰黄色シルト質細砂，第２層は河原・小石を含む灰色細砂，第３層は漆喰を含む淡黄色＋浅黄色細砂，第４層は漆喰を含む浅黄色細砂，第５層は浅黄色＋灰黄色細砂，第６層は淡黄色シルト質細砂，第７層はにぶい黄色細砂，第８層は暗灰黄色細～粗砂である。第１層は調査区の表面を薄く覆い，段石垣より西側の堆積は第１層と第３層であるが，ＳＤ１が第３層を切り込んでいることから，第３層上面が遺構検出面である。段石垣より東側は，第１層の下に第４～８層が堆積するが，堆積状態から判断して第７層以下は高松城に伴う盛土であると考えられる。

２　段石垣（第 200 図）

調査区中央において検出した段石垣である。石垣は鞘橋を渡って西へ直角に折れ曲がる通路に位置し，南北方向に延び，東側に面を持つ。石垣は２段積みであり，高さは 0.77 ｍを測るが，北側はコンクリートの排水路設置に伴う工事により上段の築石２個は取り除かれている。石の積み方は花崗岩と安山岩の割石を用いた布積みである。上段の築石は最大 1.25 ｍの花崗岩で，大振りの石材を横積みしている。下段の築石は小振りの石材を使用している。間詰石は 0.10 ～ 0.25 ｍの野面角礫や円礫である。裏込は施工されていない。頂部の標高は 3.84 ｍであり，段石垣前面の標高は 3.60 ｍであり，石垣によって設けられた段差は 0.24 ｍである。遺物の出土はないが，所属時期は堆積状況からＳＤ１と同時期の 18 世紀のものと考えられる。

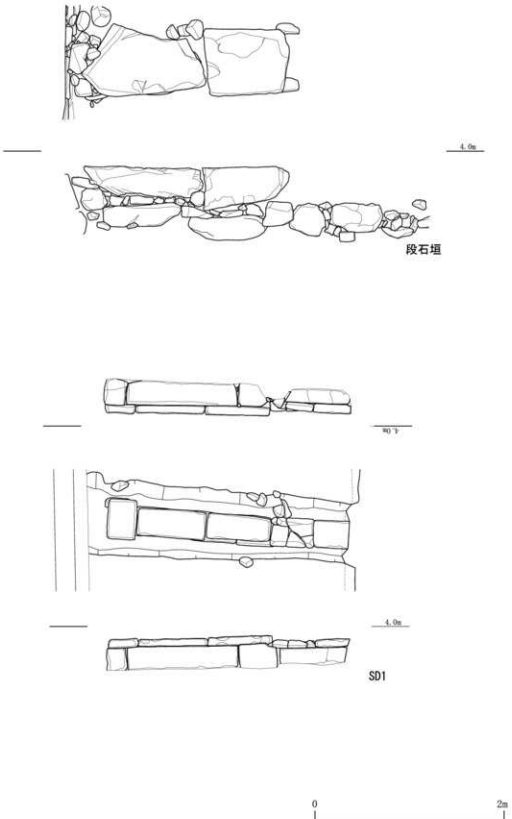
３ＳＤ１（第 200・201 図）

調査区西側において検出した排水溝である。排水溝は，鞘橋を渡って西へ直角に折れ，再び南に直角に折れ曲がる通路の中央に位置し，南北方向に延びており，北端は本丸北側石垣（Ａ面）にある排水口に達する。溝の掘り込みは現地表から５㎝の深さにおいて検出される。北端から 0.90 ｍまでの間はコンクリートの排水路設置に伴う工事により壊されており，検出できた全長は 2.60 ｍであり，南側の調査区域外に延びていると考えられる。溝掘り方の上面の幅は 0.85 ｍ，底面 0.53 ｍ，深さ 0.30 ｍを測る。溝掘り方の中央には豊島産凝灰岩の切石を使用した石組みが設置されている。石組みの幅は 0.32 ｍ，高さは 0.28 ｍを測るが，北端部は幅が広くなり，0.42 ｍである。石組み内側の幅は 0.15 ｍ，高さ 0.12 ｍを測り，底面の標高は 3.64 ｍである。Ａ面にある排水口は上から１段目と２段目の石の間で検出し，幅は 0.45 ｍ，高さは 0.20 ｍである。石囲みの構造は底面の石の両側に側面の石材を立て，その上に蓋の石材を載せている。それぞれの石材の接合部分には水漏れ防止の目的で粘土が貼り付けられている。溝の掘方には淡黄色シルト質細砂が充



1　2.5Y6/2　灰黄色シルト質細砂
2　灰色細砂　（瓦・小石を含む）
3　5Y8/3+2.5Y7/4　淡黄色+浅黄色細砂（漆喰を含む）
4　2.5Y7/4　浅黄色細砂（しっくいを含む）
5　2.5Y7/3+6/2　浅黄色+灰黄色細砂
6　5Y8/4　淡黄色シルト質細砂（固く締まる）
7　2.5Y6/3にぶい　黄色細砂
8　2.5Y5/2　暗灰黄色細～粗砂
9　5Y8/3　淡黄色シルト質細砂

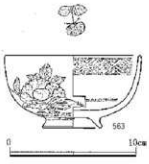
第198図　本丸虎口平・断面図



第199図　本丸虎口段石段・SD1平・立面図

填され，石囲みの溝の内側は僅かにヘドロ状の砂が堆積する。

溝の施工過程は，まず幅 1.85 m，深さ 0.30 mの規模で掘り下げ，その中央に豊島産凝灰岩の切石を底石として置き，その両側に石材を立て，蓋の石材を載せて石組みを造り，それぞれの石材の接合部分に粘土を貼り付ける。石組みの側面と上面に淡黄色シルト質細砂を充填し，暗渠を完成している。所属時期は出土遺物から 18 世紀であると考える。



第200図　本丸虎口ＳＤ１出土遺物実測図

遺物は磁器椀（563）である。563 は溝掘方から出土した肥前系椀である。外面に牡丹の草花文，内面上位に四方襷文，見込みに草花文が描かれる。

4 包含層出土遺物（第 201・203 図）

第 198 図第 1，4～6 層出土遺物について報告する。包含層から出土した遺物は軒丸瓦（T 527～T 535），軒平瓦（T 536～T 541），丸瓦（T 542，T 543），土錘（C 32，C 33），不明鉄製品（M 110）である。

T 527 は左巻き三巴文で，巴頭部は細身で，巴尾部は非常に細長く延びて，先端は繋がって圏線状をなしている。珠文径が小さく，その数は 12 個である。体部に釘穴を有し，凸面はヘラナデ・ミガキが施され，凹面は布目・コビキＡ・タタキ・抜取紐痕が残存する。佐藤分類Ⅱ類 2 である。

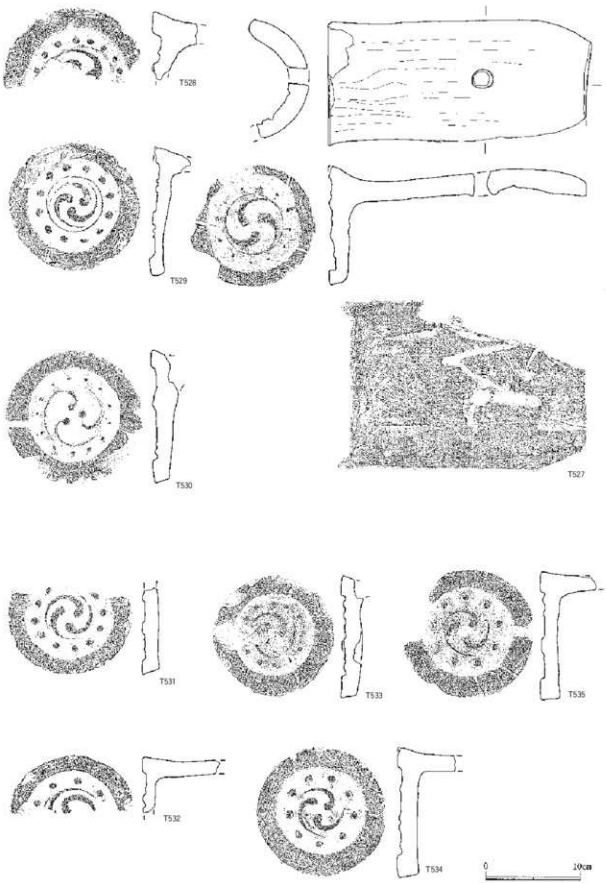
T 528 は右巻き三巴文で，巴頭部がやや大振りで，巴尾が非常に細長く延びて巴の外側に圏線をなす。佐藤分類Ⅱ類 12 である。T 529 は右巻き三巴文で，内区と外区を画する圏線がある。巴頭部は丸く小さい。珠文径が大きく，その数は 12 個である。佐藤分類Ⅲ類 32 である。T 530 は右巻き三巴文で，巴頭部が特に強く屈曲し，巴尾部が細長く延び，珠文径が小さく，その数は 13 個である。佐藤分類Ⅳ類 59 である。T 531 は右巻き三巴文，T 532 は左巻き三巴文である。巴頭部が丸く小さく，巴尾部が細長く延び，円形を指向するように巻き込む。珠文数は 12 個に復元できる。佐藤分類Ⅳ類 78 である。T 533～T 535 は右巻き三巴文で，巴尾が細長く延び，円形を指向せず巻き込む。T 533 の珠文数は 12 個，T 534，T 535 は珠文間隔が広く，その数は 9 個である。佐藤分類Ⅳ類 102 である。

T 536 は退化した唐草文を配する。T 537 は蔓が直線的に延びて下方に 2 転し，唐草外側の内区上半に「～」形の子葉を配する。T 538 は葉脈表現からの転化とみられる棘状の輪郭の下向五葉文を中心飾りとする。唐草は中心飾り上端側面から延び，1 転する。瓦当面上縁に面取りを行う。佐藤分類Ⅳ類 21 である。T 539，T 540 は陽刻線による四葉の花弁をもつ花文を中心飾りとする。T 539 の唐草は中心飾り下側から延び，3 転（下・上・下）し，巌手状を呈し 2 転目がＣ字形に短く巻く。佐藤分類Ⅶ類 28 である。T 5340 は花弁の中心に中房を示す珠文があり，唐草は中心飾り上側から延び，1 転する。T 541 は小振りでさほど肉厚でない宝珠文

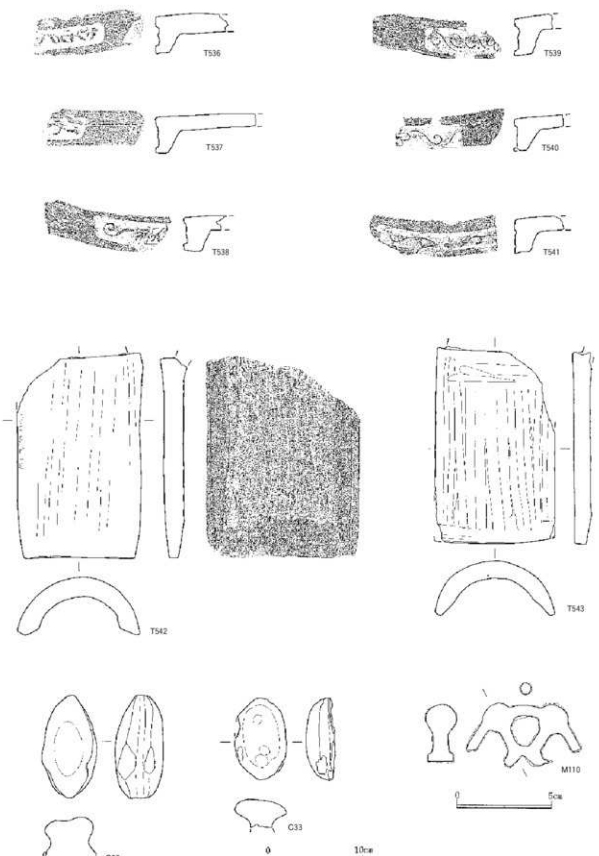
があり，唐草は中心飾り上側から延び，１転する。T 541は小振りでさほど肉厚でない宝珠文を中心飾りにもち，宝珠下半から延びて２転（下・上）する唐草文を伴う。
T 542，T 543は玉縁丸瓦で，凸面にナデ・ミガキが施され，凹面には布目・コビキBが残存する。T 542は胴部凹面側縁の削り幅は狭く，T 543はやや広い。
C 32，C 33は有溝土錘である。C 32の横断面は分銅形をなし，C 33は上下面共に僅かに凹む。M 110は円形を呈し，外輪に二つの膨らみが付き，中央に方形の穴がある。全体として板状でないとか外輪の幅が非常に狭いという相違点はあるが，膨らみを推定すると八ヵ所であることや中央の方形の穴や六角形の窓などから考えると，輪宝の可能性がある。

5 小結

鎌田共済会郷土博物館所蔵の「高松御城全図」では，本丸に入る経路として二ノ丸から橋を渡って本丸虎口を通り南へ折れ曲がり，中川櫓の西側を通って本丸中央に入ることができるように描かれている。段石垣と排水路を検出した今回の発掘調査を基に虎口を復元すると次のようになる。橋を渡って西に折れて僅かに行くと段差0.24 mの石垣があり，それを上がると１段高い通路となる。その通路の中央には凝灰岩の切石を使用した石組みの暗渠が，南北方向に設置されている。その溝は，今回の調査区域外である南側にも延びており，発掘調査を行なっていないため，明確ではないが，本丸の調査においてⅠ面前面に検出した水路遺構と一体となる可能性が高いと考えられる。西の丸から本丸に入るためには鞘橋を渡って本丸虎口を通り、西方の階段を上がり、本丸の西端近くまで行き、再び東側へ迂回しなければならないが、今回の発掘調査の成果や石垣番号1019～1025の調査、絵図史料などから判断すると，本丸虎口からそのまま南行し，中川櫓と中櫓との間を通り，本丸に入るのが本来のルートであったと考えられる。



第201図　本丸虎口包含層出土遺物実測図（1）



第202図　本丸虎口包含層出土遺物実測図（2）

第４章　自然科学分析

第１節　高松城天守台出土漆喰の所見

姫路市立城郭研究室　室長　上田耕三

１ 条件の整理

(1) 漆喰の種類

日本の伝統的左官技術には、表面を土で仕上げる古式京壁と、漆喰仕上げとする漆喰壁があり、日本壁と総称される。

この漆喰は２種類に分けることができる。

一つは、飛鳥時代から使われてきたと考えられている「古代からの漆喰」である。もう一つは、土佐を中心に使われてきた「土佐漆喰」である。土佐漆喰の使用開始時期については、戦国時代頃かと考えているが明確ではない。少なくとも中世まで遡るものではないと考えている。

(2) 古代からの漆喰と土佐漆喰の比較

①古代からの漆喰

材料

消石灰、貝灰、苆（紙や麻）を使い、糊材として古代では米粥、近世になり海藻（布海苔や角又など）の煮汁を使って練り作る。

特徴

・薄塗りが基本。

・色は白色度が高い。

・外部の雨がかりなど条件の厳しい箇所では、耐久力が土佐漆喰に比べ劣る。

②土佐漆喰

材料

消石灰、藁苆（発酵させたもの）を主材料とし、水を入れ臼で搗いて作る。

特徴

・厚塗りが可能。

・塗りたては黄色であるが、数年経過すると白色となる。（古代からの漆喰と比べると黄みを帯びる。）

・耐久性に優れる。

両者の大きく異なる点は、土佐漆喰は、苆に稲藁を発酵させたものを使うこと、貝灰を使わないこと、海藻海苔を使わないことである。

(3)「古代からの漆喰」と近年（主に昭和30年代）の城郭修理

外部の雨がかり部分に漆喰を使用する場合に「古代からの漆喰」は耐久力に弱点があった。このため、耐久力を高める研究が昭和30(1955)年頃に行なわれている。

この漆喰工法は、下塗り用の漆喰に砂を入れる「砂漆喰」（南蛮漆喰）としたものである。表面の仕上げ塗りは、砂を入れない漆喰で仕上げている。漆喰塗り全体としては下塗り上塗りが一体となる厚塗りとなり、強い漆喰を実現している。

2 出土試料

高松城跡出土漆喰は、大別して平面状のものとL字型をした塊のものの2種類がある。断面観察から、どちらも同質の漆喰と判断するが、使用個所が平壁であろうと推測しやすい平面状の試料により検討を行なうことにした。

平面状の試料は、厚さ約6㎜、色は少し黄みを帯びた白色、質感は溶融物のように一体化、硬さは陶器の感じに似る硬さ、砂はみられない、砂はなく、たたくと陶器音がするなどであり、高知城の試料とかなり近いと推察でき「土佐漆喰」の可能性が高いと考える。（別添　実物漆喰試料比較表を参照）

3 文献（修理工事報告書等）

重要文化財高松城二之丸（月見櫓、續櫓、渡櫓、水手御門）修理工事報告書（昭和32年）によると、修理時は「古代からの漆喰」、重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書(昭和42年)では、修理前及び修理時はともに「古代からの漆喰」で「土佐漆喰」ではない。

昭和30年代から40年代にかけて多くの城で修理が行なわれている。当時は「姫路城昭和の大修理」（昭和31年～39年）と同様に、外壁漆喰の耐久力強化が課題となっていたと考えられる。この解決のため、土佐漆喰などを参考に調査・研究が行なわれ「古代からの漆喰」を基盤に、砂漆喰（南蛮漆喰）を用い、塗り回数を増やし厚塗りにするなど、それぞれの地域特性も加味しつつ、独自の工法を考え出し修理に採用しているように考えられる。（別添　文献による考察参照）

4 高松城の漆喰

天守台直下の出土試料は「土佐漆喰」の可能性が高い。一方、高松城修理報告書からは「古代からの漆喰工法」という見解になり、一つの城から二つの漆喰工法が使われていたことが考えられる。この点については、江戸時代がどの漆喰であったかを視点に考えていく必要がある。

5 土佐漆喰の使用

土佐漆喰が江戸時代から確実に使われた城は高知城であることが修理工事報告書から分かる。大洲城苧綿櫓は、昭和34年の修理時に土佐漆喰工法に変更されていることが修理工事報告書から分かる。

松山城は、江戸時代の工法は不明であり、昭和の修理時に土佐漆喰を使用しているが、使用材料を考察すると純粋の土佐漆喰工法ではないことが分かる。
これらにより、江戸時代での土佐漆喰の確実な使用は高知城のみであると考えられる。
土佐漆喰については、四国で大きな影響を与えており、大変興味深いところであるが、研究者がほとんどいない。使われ始めた時期や使用範囲なども明確でない。今後、地元での調査・研究が待たれるところである。

6 結論

高松城跡出土試料は、平面状のものとＬ型の塊状の２種類。天守台前面で出土した資料である(第３章第５節)
平面状のものは、厚塗りであることから、使用場所は外壁の可能性が高いと考える。
Ｌ型の塊は、外部使用と考えるが、使用箇所までは分らない。

平面状のものは、外見から観察する限り「土佐漆喰」の可能性が高いと判断する。
土佐漆喰の発明が土佐において戦国末から江戸時代初期だとすると（私はその可能性が高いと考えている）その広がりを考えたとき、高松城が築城当初から土佐漆喰とは考えにくく、ある時点で修理において塗られたものと考える。当漆喰の使用年代は分らないが、高松における土佐漆喰の初現等が明確になれば、時期を推定できるかもしれない。

また、高松城の現存櫓は修理工事報告書により「古代からの漆喰工法」を基本とする改良工法と判断する。
このため、一つの城から二つの漆喰工法となるが、一般的にどの城も外壁漆喰は多くの修理を受けてきている。このためこのような結果になったものと考える。
姫路城でも「昭和の修理」での漆喰工法の研究から、現在、厳密に分類すると二種類の工法が見られる。

このような状況から高松城の漆喰工法の考察については、「土佐漆喰」の普及状況や時期、当地域の民家を含めた漆喰工法の調査・検討を行なう中で、慎重に結論を導く必要があると考える。

実物漆喰試料比較表

名称	形状	厚さ	色	質感（断面等）	硬さ	苆	砂	その他
高松城	平〔壁〕	6㎜	少し黄みを帯びた白色	溶融物のように一体化	陶器の感じに似る硬さ	見られない	なし	たたくと陶器音がする
高知城	平〔外部巾木部〕	9㎜	少し黄みを帯びた白色	溶融物のように一体化	陶器の感じに似る硬さ	見られない	なし	たたくと陶器音がする
姫路城（大天守廻り）	外壁平部	2㎜	白色	石灰の粒子が見える感じ	ソフトな感じ	多くの晒した麻苆	なし	昭和大修理S31 年以前の漆喰
岡山城西手櫓	外壁平壁	5㎜	白色	表面漆喰2㎜下地砂漆喰3㎜の2層の一体物	硬い	晒した麻苆	砂漆喰	何時塗ったものか不明
岡山城月見櫓土塀	土塀平壁	4㎜	白色	表面漆喰2㎜下地砂漆喰2㎜の2層の一体物	硬い	見られない	砂漆喰	何時塗ったものか不明
熊本城平櫓	外壁平壁	2㎜	白色	石灰の粒子が見える感じ	ソフトな感じ	見られない	なし	何時塗ったものか不明（昭和か）
兵庫県朝来市竹田城下の蔵	外壁平壁	2㎜	白色	石灰の粒子が見える感じ	ソフトな感じ	多くの晒した麻苆	なし	見星山　法樹寺
兵庫県赤穂市花岳寺	外壁平壁	2㎜	白色	石灰の粒子が見える感じ	ソフトな感じ	多くの晒した麻苆	なし	花岳寺（浅野家）

※〔　〕は推測の場合。厚さは約。

重要文化財高松城二之丸　月見櫓・續櫓・渡櫓・水手御門　修理工事報告書	「内外壁の構造および破損状態」より	「工事仕様概要」より	上田の所見	その他
	建物の側廻りは外部大壁、内部真壁の内外二重壁で壁の中間は空隙になっており、内外見え掛り部は白漆喰仕上げであった。 １階南部と２階の一部に当初壁が残されていたが他は昭和８年修理の施工によるものであり壁材料調合と壁下地の不都合により剥落し３階外部北面は特に甚だしく、下地を露出し内部に於いても各所に亀裂を見せていた。	**外部漆喰材料** 漆喰下塗調合 貝灰、板海苔、マニラ苞、川砂、厚１分。 漆喰中塗調合 貝灰、板海苔、油苞、川砂、油、厚１分。 漆喰上塗仕上調合 貝灰、板海苔、真苧苞、油、厚１分。 **内部漆喰材料** 漆喰下塗調合（散伏共調合同断） 貝灰、板海苔、油苞、川砂、厚２分。 漆喰上塗仕上調合 貝灰、板海苔、晒苞、厚１分。	修理前の工法は不明 修理時は、**古代からの漆喰工法を基本に、下塗、中塗に砂を使うなど、耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。 全工程に香川県大川郡志度産の貝灰を使う。貝灰生産が盛んであったことが伺える。**土佐漆喰に貝灰は使わない。** **※土佐漆喰工法ではない。**	昭和 32 年発行 １分＝3.03 ㎜

重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書	「各部の構造形式および技法に関する調査」より	「工事仕様」より	上田の所見	その他
	①外部の大壁は度々塗り替えが行われた模様で、修理前まで塗潰されていた銃眼の上塗漆喰は残っていたが、これに続く大壁面の漆喰塗がないので、補修の際には従来の上塗りを一たん剥ぎ落し、壁土による中塗付けを行った後、漆喰上塗りが施されていた。 この後修中塗は厚４～６㎜程度で長さ約２cm の揉苞を用い土質はややもろい。また、**上塗は厚５㎜で２回塗と認められ、**長さ 2.4cm 程度の同一**晒苞が用いられている**ので、その境目は判然としない ②１階の石落しは、壁の保存のための施工と思われるが、下地壁より、上塗りまで他の壁と異なり**土佐漆喰のごとく全部漆喰壁**になっていた。 壁付けは荒壁、中塗、上塗の順に３回塗りであるが、……、**上塗りは晒苞入れ厚３㎜に仕上げていた**が、以後、上塗りの補修が行なわれ従来の上塗りの上に棕梠による」「ひげ子」を打ち、砂摺り１回、上塗り１回がなされていた。 ③土戸の壁はいずれも近年の補修によるもので、…中塗３㎜のうえに**漆喰２㎜**を塗り仕上げていた。	外部は中塗りを行なわず、大直しの上に直接漆喰塗りを行なった。 **漆喰塗** 大直し乾燥後、下塗、中塗、上塗の３回の白漆喰塗を施した。 ①漆喰下塗調合（散伏とも調合同断） 石灰、砂、マニラ苞、板海苔 ②漆喰中塗調合 石灰、砂、油苞、板海苔、油 ③漆喰上塗調合 貝灰、真苧苞、板海苔、油 内部漆喰塗 白漆喰塗とし、上灰を用い、調合は外部壁に準じて拵え、下塗、中塗の２回塗とした。	修理前の工法は、少し厚塗りであるが**古代からの漆喰工法**と判断する。 修理時は**古代からの漆喰工法を基本に、下塗、中塗に砂を使うなど耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。 **※土佐漆喰工法ではない。**	昭和 42 年発行 修理前の石落し部分が下地から漆喰としているのは、壁強化のための例外工法と考える。

	「技法調査」による	「工事仕様」より	上田の所見	その他
重要文化財高知城天守修理工事報告書	**大壁の工法** 下地の作り方は第２章第４節工事仕様の項に説明したが、（土佐漆喰の製造等が記載）修理前の壁は部分的修理或は１回乃至３回の上塗り施していた。旧の壁は荒打、大村直し（魚れ尾伏せ）、中塗り、上塗りの４回に仕上げてあった。	**左官工事** **大壁** 荒打は竈底漆喰を用いて小舞外面迄塗り立て尾伏塗り厚さ約９分、同様竈底漆喰にて塗り中塗りは漆喰と竈底漆喰を等分に混合し若干の砂を交ぜて厚さ約７分に塗った。上塗りは其の工程を３回に区分し、第１回と第２回は漆喰に約３割の砂を入れ各々厚さ１分に塗り立て第３回目は純漆喰を用い厚さ約２分に塗り立て充分鏡磨きを施した。 **漆喰** **漆喰は土佐古来の製造法による漆喰を使用した。**	**典型的な土佐漆喰工法**	昭和 32 年発行 １分＝3.03 ㎜

	調査事項	「実施工事仕様」より	上田の判定	その他
重要文化財松山城天守外十五棟修理工事報告書	本修理工事は屋根の葺替えと外壁の上塗り替えを主とする工事であったから充分な調査を行うことが出来なかった。	**壁工事** 下塗り大斑直し斑直しには掻き落した土に新しい赤土を入れ藁苆を切り込んだものを用い中塗りには漆喰に川砂を混したものを使用し、塗竪の部分には下塗りから漆喰に川砂を混ぜたものを用いた。何れも**上塗りは土佐漆喰**を用いた。 「第６節　修理銘板」より 猶　**瓦の目漆喰や壁の上塗りには土佐漆喰を使用した。**	**当初工法は不明** **修理は、土佐漆喰** （しかし、昭和 59 年の野原櫓他修理における報告から、昭和 26 年の修理では、古代からの漆喰工法と判断できる。この昭和 59 年の野原櫓や天守等の修理では、土佐漆喰が修理仕様であるが、高知城の土佐漆喰と比較すると、砂漆喰に海苔材を使うなど、仕様に異なる部分がみられため、当初から土佐漆喰と考えるのは疑問が残る。このため、壁の耐久力強化を図った漆喰と判断する。）	昭和 44 年発行

重要文化財松山城野面積他二十棟修理工事報告書	「資料１　工法調書在来の工法」より	「実施の工法」より	上田の所見	その他
	野原櫓 **漆喰仕上げ** ・当初 　― ・昭和 26 年の後補工法 　一般に使用されている消石灰に苎、のりを混ぜた仕上げ漆喰にて厚２㎜に仕上げられている。	**野原櫓** **漆喰仕上げ** 　土佐漆喰を使用 　漆喰砂摺り厚２㎜を摺り付けて漆喰仕上げの基盤とした後、土佐漆喰にて厚２㎜にて鏝で十分押し付け、不陸のないよう塗り上げた。 「施工　３工事仕様　７左官工事」より **野原櫓、天守、仕切門内塀、紫竹門東塀、材料** **苎**　荒壁用は藁苎を６~９cm に切断したもの、中塗用はもみ苎、上塗用は晒苎 **土佐漆喰**　白土灰（普通一般のものより塩を２倍入れ焼き、水を掛けて沸化させたもの）とネズサ（山間部の藁を使用し、ムロに入れ２ヶ月間位ねかした発酵させたもの）を混ぜて粘り込み水切りしたものを石臼で搗き使用する。 **調合**　砂漆喰 　砂、消石灰、貝灰、並すさ、角又 　上塗 　上付　砂、消石灰 　下付（**土佐漆喰**）　藁すさ、消石灰	**当初工法は－と記されており、不明だと判断する。** 　昭和 26 年の修理では、古代からの漆喰工法と判断する。 　現在、土佐漆喰とあるが、高知城の土佐漆喰と比較すると、**砂漆喰に海苔材**を使うなど、仕様に異なる部分がみられるため、**当初から土佐漆喰と考えるのは疑問が残る。このため、壁の耐久強化を図った漆喰と判断する。**	昭和 60 年発行

重要文化財大洲城台所櫓・高欄櫓修理工事総合報告書	「形式技法の調査」より	「総合実施仕様」より	上田の所見	その他
	荒打ち及び塗上げ工法 　塗上げは荒打上に大庇直し厚約３cm、小庇直し厚２cm、中塗 0.6cm。**上塗漆喰厚 0.2cm** の４工程で、大庇直しの壁土には長３cm の藁苎、中塗土には良質の浜苎を混合している。	**壁工事** 　外壁漆喰塗り・外壁仕上げは中塗面に漆喰を用いて砂摺り、下付け、中塗、下塗、上塗の工程で厚 18 ㎜に塗上げ目潰し仕上げとした。 　漆喰調合・各工程に使用の漆喰調合は次によった。 ・縄こすり及び砂摺用漆喰 　土佐石灰、川砂、マニラ苎、角又 ・下付け及び中塗用漆喰 　土佐石灰、川砂、マニラ苎、角又 ・下塗 　土佐石灰、川砂、上晒苎、角又 ・上塗 　土佐石灰、特晒苎、角又、大豆油	修理前は薄塗りで、典型的な**古代からの漆喰工法**と判断する。 　修理時は、**古代からの漆喰工法を基本に砂漆喰を使い、耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。	昭和 45 年発行

重要文化財大洲城平櫓修理工事報告書	「形式技法に関する調査及び施工方法の決定」より	「工事の仕様」より	上田の所見	その他
	白漆喰塗について 白壁はもとは地方の工法に依る白漆喰塗壁であっつたが、壁の強固を期する為非常に強い性質を持つ云う土佐漆喰で仕上げた。材料は土佐から取寄せ、左官も又土佐から呼び寄せて施工せしめた。	**左官工事** 上塗下（厚さ平均２分） 中塗の乾燥を待って、別表の漆喰材料で全体に地斑を修理し乍ら全面に塗付けた。 上塗（厚さ平均１分） 上塗は上塗下漆喰塗の乾き加減を見計らい、厚めに縦斑、塗斑、等の無い様注意して塗付け、適度に水引き乾燥した時に、充分金鏝で押え込み鏝磨きを掛けた鏝磨きは表面を均し光沢を生ぜしめるのみならず質を密にし、硬度と弾力を増加し、為に防水効果を高めるので、**土佐漆喰工法**の一つである。 **材料** 大壁上塗下　砂、石灰、寝苧　※練合せは臼で搗く 大壁上塗　石灰、寝苧　※練合せは臼で搗く ※寝苧 藁苧であるが其の製法に特徴がある。藁を一寸内外に切断し、之を箱に詰め込んで発酵せしめて、軟質部を除去した丈夫な繊維ばかりにしたもので、当工事のものは土佐の商人より買い入れた。なおこの製法は、重要文化財高知城修理工事報告書に詳細に報告されているから参照されたい。	修理前は**古代からの漆喰工法**と推測。 修理時は、**土佐漆喰工法**。	昭和34年発行 1分＝3.03㎜

重要文化財丸亀城　大手一の門・大手二の門・附東西土塀修理工事報告書	「各部の構造形式及び技法に関する調査」より	「工事仕様概要」より	上田の判定	その他
	大手一の門 **壁** 外部の大壁は度々塗り替えが行なわれた模様で、全体に現在（修理時）の漆喰壁まで２回塗り重ねられていた。現在の漆喰上塗りは近年施工されたもので、厚３㎜の下塗、上塗の２回塗りが軒付に至るまで行なわれていた。	**外部漆喰材料** 漆喰下塗調合 石灰、砂、マニラ苧、板海苔、 漆喰中塗調合 石灰、砂、油苧、板海苔、油 漆喰上塗調合 貝灰、真苧苧、板海苔、油、	修理前の工法は、薄塗りであり**古代からの漆喰工法**と判断する。 修理時は、**古代からの漆喰工法を基本に砂漆喰を使い、耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。	昭和38年発行

重要文化財岩山城月見櫓修理工事報告書	「破損及び後修技法に関する調査」より	「工事実施仕様書」より	上田の判定	その他
	内外壁 ———外部の上塗り漆喰は当初のものに更に上塗を付、尚又その後に塗替手入れをしていたもので、もっとも新しく塗られた処の表面は非常に荒びている。	**壁** 上塗漆喰下地付砂漆喰にマニラ苆入りふのりにて練合せ散際付下地塗、上塗白漆喰は石灰をフルイに掛け麻苆を除き上晒苆苆を使用し上塗は鏡磨仕上げとした。	修理前の工法について記載がないので不明 修理時は、**古代からの漆喰工法**と判断する。	昭和31年発行

重要文化財二条城修理工事報告書第一集	「調査報告」より	「工事仕様」より	上田の所見	その他
	外部壁面 白漆喰仕上げで普通土蔵造りと異なることなく、 ——— 壁面は創建当初より何回も補修され塗重ねられてあるが、なおよく旧規が保存されていた。	**壁工事** ①砂摺 下塗２分 （石灰、角又、マニラ苆、川砂） ②南蛮漆喰調合 下塗２分、村直し２分、中塗り１分 （石灰、角又、マニラ苆、川砂） ③上塗白漆喰調合 砂摺５厘、中押５厘、上押５厘 （石灰、角又、苆苆・上押には紙苆も使用、砂摺のみ川砂使用、大豆白絞油）	修理前の工法について記載がないので不明 修理時は、**古代からの漆喰工法を基本に南蛮漆喰を使い厚塗りにし、耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。	昭和30年発行 1分＝3.03㎜

重要文化財松江城修理工事報告書	「修理前の破損調査」より	「修理仕様概要」より	上田の所見	その他
	内外壁の構造および破損状態 ・形式 ———内外見え掛り部は白漆喰塗り仕上げであった。 ・壁下地 ———前記壁の表面は軸部の破損、曲り狂い又は雨漏りのため箇所によっては小舞下地を露出し、又は亀裂を生じている個所もあったが、壁小舞はおおむね完全なものであった。	**砂漆喰及び土佐漆喰塗、材料** ①砂漆喰調合 （石灰、砂、マニラ苆、南蛮苆、布海苔） ②土佐漆喰調合 （石灰、藁苆、布海苔、マニラ苆、砂） 塗方、砂漆喰は前記調合したものを中塗上に厚３分幾斑なく塗立てた。 **上塗材料** ①内部壁、材料調合 （石灰、貝灰、苆苆・白雪、布海苔） ②外部壁調合 （石灰、貝灰、苆苆・白雪、布海苔、桐油） 塗方は前記調合材を練舟で櫂押、切返し充分練返したもの用い、地斑、縦斑なく柱散際を揃え入念に塗り仕上げた。 以上中塗から仕上塗迄の施工方法は、**姫路城の壁仕上げまたは高知城の所謂土佐漆喰につき調査研究**し、地元の気候を勘案して施工した。	当初工法の記載がなく、確認はできないが、修理時の仕様及び姫路城昭和の修理時の漆喰仕様研究等から、当初工法は、**古代からの漆喰工法と推測**する。 修理時は、砂漆喰や土佐漆喰の変形工法を使い、**耐久力の強化を図った漆喰と判断する。**	昭和30年発行 1分＝3.03㎜

重要文化財新発田城旧二の丸櫓・表門修理工事報告書	「各部の構造及手法」より	「工事実施仕様」より	上田の所見	その他
	隅櫓 **壁** 仕上げ塗りは**藁もみ苫混入漆喰**で、厚２分位に２回塗りし、全壁面中塗上に麻ヒゲコ（長５寸位）をほぼ５寸間隔、軒先は３寸間隔に打ち塗込んでいたが、1、2階共出桁より内方の軒裏は鏝を用いずに荒く塗ってあった。	**壁工事** **仕上** 次表「仕上塗調合比」による	修理前は**藁もみ苫混入漆喰**とあり、この地方独特なものであるのか検討を要する。 修理にあたり、**古代からの漆喰工法を基本に厚塗りにし、耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。	昭和35年発行 1匁＝3.75ｇ

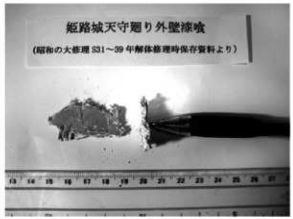
	名称	高松城月見櫓外	岡山城月見櫓	松江城天守	名古屋城東南櫓	新発田城
下塗	石灰（消石灰）	0	1袋	1袋	1袋	**1袋**
	同（貝灰）	1袋	0	0	0	**0**
	砂	0.522切（8升）	0.333切（1/3切）	0.9切	1.178切（1斗8升）	**0.9切**
	苫	マニラ苫250匁	南京苫130匁	マニラ・南京半々240匁	マニラ苫300匁	**マニラ苫250匁**
	のり	板のり250匁	ふのり130匁	板のり270匁	角又300匁	**角又300匁**
第二回下塗	石灰（消石灰）				1袋	
	砂	なし	なし	なし		**なし**
	苫				南京苫300匁	
	のり				角又300匁	
中塗	石灰（消石灰）	0	1袋	1袋	1袋	**0.5袋**
	同（貝灰）	1袋	0	0	0	**0.5袋**
	砂	0.392切（6升）	0.333切（1/3切）	1.5切	少量	**0.4切**
	苫	油苫350匁	油苫230匁	マニラ150匁・藁苫600匁	南京苫300匁	**油苫300匁**
	のり	板のり250匁	板のり130匁	角又150匁	角又300匁	**角又300匁**
	油	大豆油1合	0	0	0	**種油1合**
仕上	石灰（消石灰）	0	1袋	0.5袋	1袋	**0.5袋**
	同（貝灰）	1袋	0	0.5袋	0	**0.5袋**
	苫	晒苫200匁	晒苫130匁	晒苫325匁	南京苫300匁	**晒苫300匁**
	のり	板のり250匁	板のり140匁	角又350匁	角又300匁	**角又300匁**
	油	大豆油1合	0	桐油5合	0	**種油3合**

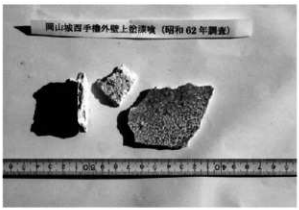
（土佐漆喰）

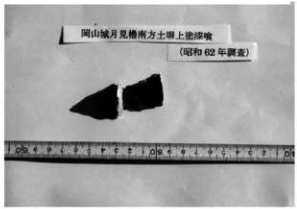
重要文化財弘前城修理工事報告書	「工事概要」より	「工事仕様」より	上田の所見	その他
	天守 外壁は上塗を塗替え、内部は部分的に繕った。	**天守** ①　長押・破風板等壁下地となる木部には粗目の寒冷紗を張り、さらにその上に本麻下げ苧を３寸あきに上中下段の三段に乱打ちとし、下塗漆喰乾燥ののち斑直し漆喰塗を塗り、乾燥を待たずに上塗り仕上げを施した。仕上がり厚さは平均３分。 **②　外壁大壁は全般に在来漆喰を剥取り、斑直し、砂摺りを施し、乾燥後漆喰下塗、下塗の乾燥を待たずに上塗を施した。** ③　各階窓の土戸は旧漆喰を剥落し、麻下げ苧を打ち、下塗漆喰乾燥後上塗仕上げした。仕上がり厚さは２分５厘。 ④　漆喰の調合はつぎのとおりとした。 ・木芯部壁は石灰 1.3 袋（20kg 入）、角又 500 匁、 麻苧 500 匁 **・大壁部分は石灰１袋、角又 350 匁、麻苧 400 匁**	修理前の工法について記載がないので不明 修理時は、**古代からの漆喰工法を基本に厚塗りにし、耐久力の強化を図った漆喰**と判断する。	昭和 34 年発行 1 分＝3.03 ㎜ 1 匁＝3.75 g

大渕城天守復元工事報告書	「実施設計、設計仕様」より	上田の所見	その他
	左官工事 **調合** ・漆喰下塗り 石灰 20 kg（1 袋）に対して、角又 2.0 kg、マニラ苧 1.4 kg、砂 0.02 ㎥を混入し練合せたもの。 ・漆喰上塗り 石灰 20 kg（1 袋）に対して、角又 2.0 kg、マニラ苧 1.4 kgを混入し練合せたもの。	下塗りには耐久力強化のため砂漆喰としている。 基本的には**古代からの漆喰工法**である。 **大渕城では、現存する重要文化財の修理において、古代からの漆喰工法が台所櫓・高欄櫓で、土佐漆喰工法が平縛櫓で使用されている。**	事業完了 平成 16 年９月 報告書 平成 16 年発行

高知城壁漆喰（平成10年調査）

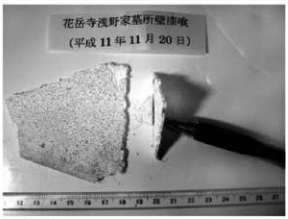

姫路城天守廻り外壁漆喰
（昭和の大修理 S31～39 年解体修理時保存資料より）


岡山城西手櫓外壁上塗漆喰（昭和62年調査）

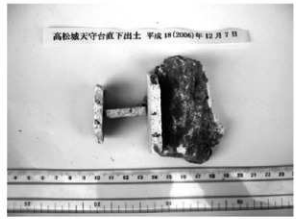

岡山城月見櫓南方土塀上塗漆喰
（昭和62年調査）

熊本城平櫓壁漆喰（平成12年1月）

見星山法樹寺の倉の外壁漆喰（平成10年調査）


花岳寺浅野家墓所壁漆喰
（平成11年11月20日）

高松城天守台直下出土　平成18(2006)年12月7日


高松城天守台直下出土　平成18(2006)年12月7日

高松城天守台直下出土　平成18(2006)年12月7日

高松城天守台直下出土　平成18(2006)年12月7日

第２節　放射性炭素年代測定

㈱吉田生物研究所

１．　はじめに

高松市高松城天守閣掘立柱跡出土の柱材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	試料データ	前処理
2	試料の種類：生材	超音波洗浄
	試料の性状：不明	サルフィックス
	状態：wet	酸・アルカリ・酸洗浄(塩素:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

３．　結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCa13.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCa1 の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼

限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、年中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ±1σ)	14C年代 (yrBP ±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
2	-26.34±0.18	279±20	280±20	1520AD(27.6%)1550AD 1630AD(40.6%)1660AD	1520AD(47.0%)1600AD 1620AD(48.4%)1670AD

4．　考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

中村俊夫（2000）　放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代．3－20.

Ramsey, C.B.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy : The OxCal Program.

Radiocarbon, 37, 425－430.

Ramsey, C.B.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355－363.Reimer, P. J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Bertrand, C. J. H.,

Blackwell, P. G., Buck, C. E., Burr, G. S., Cutler, K. B., Damon, P. E., Edwards, R. L., Fairbanks, R. G., Friedrich, M., Guilderson, T. P., Hoog, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B.,

McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C. B., Reimer, R. W., Remmele, S., Southon, J. R., Stuiver,

M., Talamo, S., Taylor, F. W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C. E.（2004）　IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0－26 cal kyr BP.　Radiocarbon, 46, 1029－1058.

第3節 高松城天守出土柱材の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は高松市高松城天守閣の掘立柱跡から出土した柱材2点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹 1 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）マツ科ツガ属（*Tsuga* sp.）

（遺物 No. 1, 2）

（写真 No. 1, 2）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はスギ型、ヒノキ型で1分野に2〜4個ある。細胞壁には数珠状末端壁がある。上下両端には放射仮道管がある。板目では放射組織はすべて単列であった。ツガ属はツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ〜Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 （1997）
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

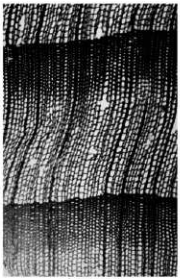
◆使用顕微鏡◆

Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

高松市高松城天守閣出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	柱根	マツ科ツガ属
2	柱根	マツ科ツガ属

P-1

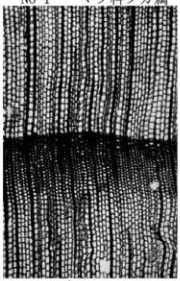


木口×40

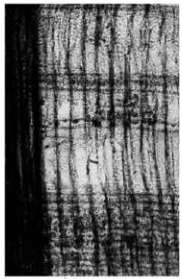
柾目×100

板目×40

No-1　　マツ科ツガ属



木口×40



柾目×100

板目×40

No-2　　マツ科ツガ属

第４節 高松城天守出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は高松市高松城天守地下１階の床面直上から出土した建築部材２点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（広葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）カバノキ科アサダ属アサダ（Ostrya japonica Sarg.）

（遺物 No.1,2）

（写真 No.1,2）

散孔材である。木口ではやや大きい道管（～ 200 μ m）が単独ないし数個放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は年輪界と接線状が顕著である。柾目では道管は単穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と直立、平伏細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は中型である。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～ 750 μ m であった。アサダは北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

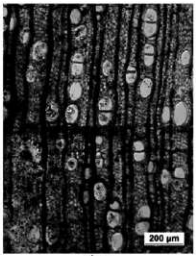
◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

高松市高松城天守閣出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	建築材	カバノキ科アサダ属アサダ
2	柱材	カバノキ科アサダ属アサダ

P-1



木口

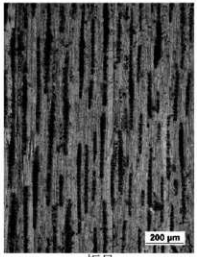
柾目

板目

No-1　カバノキ科アサダ属アサダ

木口

柾目



板目

No-2　カバノキ科アサダ属アサダ

第5章　考察

第1節 遺構の変遷について

今回の調査では，遺構面としては1面しか検出していないが，概ね城として機能していた時期と廃城以降に大別できる。しかし，城として機能していた時期の遺構については，城としての最終段階に存在した遺構を検出しているもので，その構築時期までは不明である。ここでは絵図等との比較を行いながら，遺構の変遷を考えていきたい。

まず，天守台では天守地下1階を構成する石垣を検出した。この地下1階を構成する石垣を含む天守台石垣は，その後実施した石垣解体に伴う調査により，生駒期に築造され，その後の改変はなかったものと推定される。解体については別書にて報告する予定である。また，天守地下1階において，礎石58個と掘立柱跡4基を検出したほか，1階部分においても礎石と礎石抜取り痕を検出した。掘立柱跡から出土した天守の柱材は1630～1660年に伐採されたことが判明しており，柱穴は正保4年（1647）から寛文10年（1670）の松平頼重による改築時に掘削されたと考えられる。礎石は柱穴との位置関係から同時併存していた可能性が高く，少なくとも松平頼重の改築時には機能していたと考えられるが，生駒期までさかのぼるかどうかは不明である。

これら天守に関する遺構については，明治17年（1884）の天守解体に伴いその機能を失っている。なお，地階1階の中央礎石の抜き取り痕は天守解体時に心礎の下の埋蔵物の有無を確認した可能性が考えられる。明治34年（1901）に玉藻廟を建設するまでは天守地下1階は開放した状態であったと考えられ，地下1階で検出した礎石および柱穴以外の遺構はすべてこの時期に掘削されたと考えられる。明治34年（1901）には，玉藻廟の基礎を構築しながら，天守地下1階を埋めており，天守入口を石垣で閉塞している。閉塞した石垣およびその周囲には墨書が認められるが，これらも玉藻廟建設に伴うものと考えられる。

天守台前面においては『旧高松御城全図』（香川県立ミュージアム蔵）に描かれている天守へ上がるための上下2段の石段を検出した。このうち上段の石段は廃城後に石段中央部を崩し天守へ上がれないようにしたように見え，破城の状況を示す可能性が考えられる。また，下段の石段については，その側面石垣の下半は大振りの石材を使用しているが，上半は小振りの石材を使用しており，石段を延長し，傾斜を緩く積直された形跡が見られた。石段に使用されている石材も小さい矢穴が認められ，一度破却された後，上りやすいよう積直されたと考えられ，玉藻廟建設時に積み直された可能性が考えられる。上下2段の石段は玉藻廟建設に伴い，新たに造られた階段によって一部破壊されている。

また，天守台の前面の南側では，本丸南側多聞に伴うと考えられる石垣を検出した。同石垣はさらに西に続き，地久櫓台へと続くと想定されるが，明治34年（1901）の玉藻廟建設に際し，天守地下1階を埋めるため，多聞櫓台を崩し，土や石を賄ったと考えられる。

中川櫓台については『高松御城全図』（鎌田共済会郷土博物館蔵）において櫓名が記載されている。なお，『高松御城全図』は『旧高松御城全図』を写したと考えられるが，『旧高松御城全図』

では鞘橋を渡りきった本丸虎口部分に中川櫓と記載されており，『高松御城全図』では記載誤りを修正したものと考えられる。今回の調査においても櫓に伴うと考えられる礎石を検出した。同櫓台は南半が崩され，石垣幅を狭められており，明治34年（1901）の玉藻廟建設に際し，天守地下1階を埋めるため，多聞櫓台を崩し，土や石を賄ったと考えられる。

中川櫓台の本丸側裾部においては石組みの水路を検出しており，本丸内の排水施設と考えられる。同水路も明治34年（1901）の玉藻廟建設に際し，廃絶したものと考えられる。

さらに中川櫓台の西側裾部では門の礎石を検出しており，『旧高松御城全図』においても本丸虎口から同箇所を通り，天守へ進む道が描かれている。明治34年（1901）の玉藻廟建設時に門の位置を石垣で塞ぎ，西側へ大回りするよう導線が変更されたことがうかがえる。

本丸虎口においては，鞘橋を渡って西へ折れた部分において石段を検出した。このことから，当初は鞘橋を渡り，西へ折れると1段石段を上がる構造であったことがうかがえる。豊島石製の暗渠排水を検出しているが，この暗渠排水の掘り方から18世紀のものと考えられる陶磁器が出土しており，暗渠排水は18世紀以降に整備されたものと考えられる。なお，鞘橋は築造当時から存在したと考えられ，『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（高松市歴史資料館蔵）には「らんかん橋」と記載されており，『高松城下図屏風』（香川県立ミュージアム蔵）においては屋根のない橋として描かれており，当初は屋根がなかったものと考えられる。文政6年（1823）の『讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚』（臼杵市教育委員会蔵）では屋根付きの橋として描かれており，この頃までには屋根つきの橋として再整備されていたことがうかがえる。暗渠排水等の整備との関係が注目される。なお，鞘橋については明治17年（1884）の天守解体に伴い架け替えられたと伝わり，大正3～6年（1914～17）の披雲閣建築に際しても改築されたと伝わるもので，橋の架け替えに伴い橋周辺部が改変されたことが推察される。

第2節 史料から読み解く天守の歴史的変遷

次に，天守の歴史的変遷について検討する。これまで高松城築城に関する一次史料は知られていない。最も古い時期に高松城の築城に関して著した文献としては，香西成資によって寛文3年（1663）に『南海治乱記』として成稿し，以後50余年かけて増補修正し，享保3年（1718）に奉納された『南海通記』（白峯寺蔵）がある。同書では具体的な築城開始年を記載していないが，天正15年（1587）に生駒親正に讃岐一国が与えられ，その後城地を選定し，地鎮を執り行い，同17年（1589）に高松に立ち寄った黒田孝高と藤堂高虎が城地を見分し，黒田孝高に国主の居城としてふさわしい地形であると認められ安堵したと記載されている。このほか，17世紀後半頃の成立と考えられている『生駒記』（丸亀市立図書館蔵）には「天正十六子年細川越中守忠興の縄張にて野原の庄に新城を築き，高松の城と号す」との記載がある。また，天保4年（1833）に生駒家12代親孝が生駒家文書を引用しながら著した『讃羽綴遺録』（由利本荘市教育委員会蔵）には「同十六年野原の庄に新城を築く高松と名く或説ニ細川越中守忠興又黒田如水縄張とも云」とある。天正16年（1588）に築城を開始したという記録はこれら以外の史料でも見られ，同年に

築城が開始されたことが定説になっている。一方で，築城の経過について記した文献はなく，天守の建築時期が不明であるばかりでなく，築城完成年も不明である。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いに際し，生駒親正は西軍，子の一正は東軍に属し，翌6年（1601）に一正に改めて讃岐一国が安堵され，さらにその翌7年（1602）には丸亀城から高松城へ居城を移し，丸亀には城代を置いている。また，一正の跡を継いだ正俊が慶長15年（1610）高松城に入るが，『南海通記』には「正俊世を継テ高松城に居住ス，故ニ丸亀ノ市店ヲ高松の郭ニ移シ丸亀町ト云」とある。丸亀町は高松城の大手正面に位置する町屋であり，築城開始から20年余り経過した段階で大手前が整備されていることになり，築城の完成時期も慶長年間まで下る可能性や，慶長年間に城の改修が行われ，それに伴う都市計画変更が行われた可能性も考えられる。

天守に関する最も古い史料としては，寛永4年（1627）に幕府の隠密が四国を探索した記録である『讃岐伊豫土佐阿波探索書』（東京大学史料編纂所蔵）において「石垣高さ天守ノ台七間計」とあり，既に天守が存在したことがうかがえる。同書には高松城の絵図が描かれており，天守も描かれている。高松城天守を描いた図としても最も古いが，簡略化して描かれていることから，3重の天守であったことしかわからない。また，寛永10年（1633）の『讃岐国絵図』（金刀比羅宮蔵）にも高松城の位置に天守と考えられる建物が描かれている。これによると，3重の層塔型で，4隅の柱と土台を残して塗込めたように描かれている。同図は生駒家の監修で製作されたことから，描写の信頼度は高い［胡2007］とされるが，簡略されており，写実的とは言い難い。一方，寛永年間頃の状況を描いたと考えられる『讃州高松城之図』（国立国会図書館蔵）では，3重の層塔型として描かれているが，各重の外壁は下半分が黒いことから，下見板張りと考えられる。このため，いずれの絵図も写実性・信憑性に欠けるが，少なくとも3重であったことは共通する。なお，寛永15～16年（1638～39）の状況を描いたとされる［森下1996］『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』には「天守四重」と記載されていることから，生駒期天守は3重4階であった可能性が考えられる。

生駒氏は寛永17年（1640）に出羽矢島1万石に転封となり，代わって寛永19年（1642）に松平頼重が東讃12万石の領主として高松に入った。松平家による高松城の改修状況についての一次史料もないが，その改修状況については高松藩士小神野與兵衛が著したものを寛政4年（1792）に斉藤次美が補筆した『小神野夜話』（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）や異本の『小神野筆帖』（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵），『盛衰記』（鎌田共済会郷土博物館蔵）および，明和元年（1764）に松平頼重の日帳を基に記した『英公実録』から読み取ることができ，先学によって指摘されている［松浦1964・木原1989・胡2007］。『小神野筆帖』によると，入部3年目（1644）に高松城の改修に取り掛かり，正保4年（1647）には総奉行朝比奈彦三郎，大工頭喜田彦兵衛によって天守の改築を開始している。なお，『小神野夜話』の批判書として知られる『消暑漫筆』（鎌田共済会郷土博物館蔵）では，当時朝比奈彦三郎は奉行，喜田彦兵衛は大工であったとしている。いずれにせよ，姫路城の天守を模倣しようとしたが，「大荘成事（たいそふなること）」を理由に断念し，小倉城の天守を模倣したとされている。また生駒期天守は3重であったが，3重5階にしたこと

が記載されている。なお，各部屋の名称で最下階が「同下」と記載されていることから，３重４階＋地下１階の構造が読み取れる。また，『英公実録』によると上棟は寛文９年（1669）５月10日，完成は寛文10年（1670）８月６日であることも判明している。これらの史料からすると，天守は正保４年（1647）から寛文10年（1670）の24年間かけて改築されている。改築工事に24年間とすると長期間のように思えるが，「英公日暦」の承応元年（1652）の条に「寛永廿一年六月廿三日之奉書ハいつれも可被致普請之旨付而，未被取掛候所有之由承り届候」とあり，当初計画が進行していない様子がうかがえる。

その後，宝永４年（1707）および安政元年（1854）の南海地震に際してはいずれも「天守櫓屋根瓦落，壁損申候」と幕府に届出が出されている［永年會 1932］が，改築や修築の記録はなく，大規模な改変が行われず明治を迎えたと考えられる。なお，『小神野筆帖』によると当初焼物であった鯱は貞享４年（1687）９月に西側が吹き折れたことや，宝暦７年（1757）９月に鯱が吹き落ち，鋳物にしたことが記載されている。現存する鯱（高松市歴史資料館蔵）は青銅製で，宝暦８年（1758）２月に鋳物師森田新八尉方壽が鋳造したことと，嘉永２年（1849）５月に直造および倅の源兵衛が鰭を改鋳したことが刻印されており，この他にも天守の部分的な補修があったことは予想される。

明治になると，『公文録　高松藩之部　全』（国立公文書館蔵）によると，高松藩は明治３年（1870）９月に今後城の修築は行わないことや，明治４年（1871）４月には順次撤廃していくことを弁官に願い出て許可されている。『年々日記』（多和文庫蔵）などによると，これを受け６月から８月にかけて高松城の一般公開が行われたが，『高松県史』（個人蔵）によると，大阪鎮台第２分営が置かれることになり，廃城を差し控えることとなった。その後明治６年（1873）に分営が廃止になると城内建物の解体が進むことになる。『明治大日記』（防衛省防衛研究所蔵）によると，陸軍が明治13年（1880）に城内の諸建物の調査を行い，保存の見込みのないものは解体売却する伺を陸軍卿に出している。この時には「天守ノ如キモ傾斜甚シト雖城北櫓ニ比スルトキハ稍優レリ」とあり，解体を免れたようで，明治15年（1882）12月30日撮影の古写真（ケンブリッジ大学蔵）にも天守が写っている。その後，明治16年（1883）には城内の建物の存廃についての伺を陸軍卿に出しており，12月４日に許可されている。別紙図面に具体的な建物を記していたと記載されているが，図面は現存しない。おそらくこの時に天守の解体が決定したと考えられ，『年々日記』（多和文庫蔵）の明治17年（1884）４月４日の条に「高松の御城なる天主臺を此間よりこほちかかれりと聞けるか，けに半までくつしたる」とあることから，明治17年（1884）に天守が解体されたことがわかかる。

第３節 天守の外観および内部構造（写真図版16・17）

生駒期天守については，先述のとおり３重４階であったことまでが推定可能であるが，その他については不明である。ここでは，寛文期天守の構造について考えてみたい。まず，外観であるが，高松城天守の古写真は２点が知られているが，いずれも南東方向から撮影されたものである。古

写真から判別できる天守の形態は，3重4階の総塗込の層塔型であり，最上階がその下の階より張り出した南蛮造り（唐造り）と呼ばれる特異な形態が最大の特徴である。この構造は小倉城天守と共通するものであり，『小神野筆帖』の「小倉の形を以て当御天守彦兵衛仕候」という記載を裏付ける。また，地上1階部分が石垣から張り出した構造でもある。初重東面は格子窓が4つ見られ，南面は中央に出格子を設け，その両脇に格子窓を設けている。屋根は東面に比翼入母屋破風，南面に唐破風が設けられている。2重目は初重を90度回転させた状態である。3重目は上下2階に分かれ，下の階は東面も南面も2つずつ窓が見られる。上の階にも2つずつ窓が見られるが，南面中央には華頭窓が設けられている。屋根は東面に入母屋破風，南面に唐破風が設けられている。北西方向は写真に写っていないが，嘉永6年（1853）に作成された『讃岐国名勝図会』（高松市歴史資料館蔵）に北西側が描かれており，南東側とほぼ同じ構造であることがうかがえる。これら外観上の特徴は，文政6年（1823）の『讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚』においても90度向きが異なるが，ほぼ同様な表現で描かれており，少なくとも幕末にこの姿であったことは間違いない。なお，『小神野筆帖』には「高さ17間半内石垣4間」との記載があることから，石垣を除く天守の高さは13間半であり，1間を6尺5寸（197cm）とすると，26.6 mの規模になる。

一方，これまでにも多くの研究者が『高松城下図屏風』に描かれた天守に着目している。古写真と比較すると外観3重4階で南蛮造りと地上1階の張り出しは共通しているが，唐破風や比翼入母屋破風がないこと，櫓や塀の下見板張りとは表現が異なるが，塗込でなく下見板張に見えること，出格子や華頭窓もなく窓の形状が異なることなどに違いが認められる。言い換えれば基本構造は同じで，装飾性に欠けている。小倉城天守を写したとする『小神野夜話』の記載を重視し，小倉城と高松城の両方に共通する南蛮造りが天守改築時に採用されたと解釈すると，寛文期天守の姿を描いたもので，古写真との違いについてはその後の修築の可能性も考えられていた［木原1989］。しかし，『高松城下図屏風』の景観年代については城下の寺院等の変遷等から天守改築前の寛永17年（1642）から同21年（1644）の可能性が高いと指摘されている［野村2007］。これまでの武家屋敷などの発掘調査においても，『高松城下図屏風』に描かれた状況が確認されており，その描写内容はほぼ実態を示していると考えられている。加えて，小倉城の何をどこまで写し取ってきたのかまでは『小神野筆帖』に記載されておらず，生駒期天守が南蛮造りでなかったという確証はないことから，生駒期天守とする考えもある［佐藤2007］。一方で，小倉城を実見した喜田彦兵衛が頼重に設計図を示し，思し召しにかなったとすることから，寛文期天守の当初案で，慶安元年（1648）に松平頼重が小倉城を訪れていることから，その時点で設計変更されたとも考えられている［胡2007］。

『高松城下図屏風』は寛文期天守を描き，修築され古写真の姿となったとするには，城下との景観年代の差を認めたとしても，これまで述べてきたとおり，寛文期以降の改築・修築記録がないことから，その可能性は低いと考えられる。また，生駒期天守を描き，寛文期に古写真の天守となったとするには，層塔型の初例が慶長13年（1608）の今治城天守や，それを慶長14～15年（1609～10）に移築したとされる丹波亀山城天守とされており［三浦1999］，それ以後に層

塔型で南蛮造りの天守を建築した可能性も否定できないが，外様大名による築城が下火になっていく時期に天守が建てられた可能性は低いと考えられる。また，『高松城下図屏風』において櫓と天守での下見板張りの表現の違いも新旧の建物の違いを示している可能性が考えられる。さらに，小倉城が破風のない南蛮造りであったこと［胡 2007］，『小神野筆帖』によると「小倉の形を以て当御天守彦兵衛仕候」とあり，形を真似たことが明記されていることからすると小倉城の天守の写しを描いたものと捉えることができる。よって，『高松城下図屏風』に描かれた天守は寛文期天守の完成予想図で，時期は不明であるが，施工段階での設計変更がなされた可能性を指摘しておく。

また，内部構造がわかかる史料としても『小神野筆帖』の記述が参考になる。「諸神之間東西七間南北六間此畳八拾帖　二之間同五間同六間此畳六拾帖　三之間同九間同八間此畳百四拾四帖　四之間同拾二間半同拾一間半此畳百八拾七帖　同下同六間同五間此畳六拾帖」と各階の平面の規模が記されている。ただし，諸神之間と二之間の両方とも南北６間であり，南北が同じ幅となっている。古写真では東西・南北と３階より４階の方が大きくなっていることから，二之間については東西と南北を誤記したと考えると古写真と一致する。また，四之間については 187 帖と記載されているが，東西南北の長さから計算すると，287 帖半となり，「二」を書き忘れた可能性が考えられる。

今回の発掘調査によって地下１階は野面石の乱積みによる石垣で構築されており，上端で東西約 14m，南北約 12.6m，下端で東西約 13.6 m，南北約 12.2m，深さ約 2.7m を測り，西側に幅約 2.8m，長さ約 4.3m の入口が付属することが判明した。地下１階の床面において礎石を 58 個検出しており，入口の６個を除く 52 個の礎石は「田」の字状に並んだ状態で検出した。礎石の上面では天守の内部構造を解明する上で重要な各種痕跡を検出している。南東隅の礎石上面には南北方向に約 30㎝の直線が刻まれており，礎石上部に据える土台の設置位置を示す可能性が考えられる。また，北西部の礎石にも土台痕跡と考えられる変色や破損が認められた。この線刻と土台痕跡の間は東西約 11.8m を測り，１間を６尺５寸と仮定すると柱の内法が６間となり，『小神野筆帖』の記載が正しいことが裏付けられた。南北方向については土台痕跡は検出できていないが，礎石との位置関係から南北が５間でも矛盾しない。なお，『消暑漫筆』には「御天守下の重東西十三間弐尺南北十弐間弐尺」と記載されており，１階部分の平面規模が『小神野筆帖』の記載と異なるが，発掘調査で実証された『小神野筆帖』の方が信憑性は高いと言える。なお，北西部の礎石で確認された土台痕跡の幅も最低１尺１寸ないし１尺２寸程度であることから，土台の幅もある程度推定できる。

さらに，「田」の字状に並んだ礎石の空白部分の４箇所において柱穴を検出した。このため，礎石と掘立柱を併用した構造であったことが判明した。柱位置は，天守台の中央で柱の内法が３間四方となる位置に相当する。北東と南西の２基は柱が抜き取られていたが，北西と南東の柱穴に残存していた柱材から栂が使われ，1630 ～ 1660 年に伐採された可能性が高いことが示され，松平頼重による改築時に伐採されたことが裏付けられた。

以上の柱位置を整理すると，少なくとも地下1階は内法が東西6間，南北5間となるように設計されており，「田」の字に柱が配され，その中心部に内法が3間四方となる位置に掘立柱が四天柱状に入ることがわかる。

城内の現存する櫓と比較すると，「田」の字の平面形態は長櫓に見られ，四天柱は月見櫓に見られるものであり，これらの形式を合体させたような構造の可能性が考えられる。もっとも，天守完成が寛文10年（1670）であり，『小神野筆帖』によると，その翌年から北ノ丸を新造し，延宝4年（1676）に月見櫓の上棟，延宝5年（1677）に長櫓の完成の記事が見えることから，天守が先に造られたものではあるが，時期的には非常に近い建物であり，類例として参考になりうる。

この他，入口の門の礎石および袖石垣において筋金の錆の痕跡を検出しており，太さ1尺4寸×1尺1寸の門柱を使用していたことも判明している。1階については，礎石をいくつか検出しているものの，原位置を保っているものは少ない。しかし，北西部で検出した礎石の抜き取り痕からある程度の礎石位置の復元は可能である。

建築部材については，『小神野筆帖』によると「古材木ニ安原山の松を伐」とあり，生駒期天守の古材と，高松市南部の塩江町安原山で伐採した松を使用したことがわかかる。一方，天守台出土の掘立柱は椹であることや，城内の現存する月見櫓や長櫓においても椹と松が併用されていることからも，天守においても椹と松を併用していたと考えられる。また，出土した漆喰から土佐漆喰が使用された可能性が高いことも判明した。

各階の部屋の様子については，『小神野筆帖』によると，最上階は「諸神之間」と記載されており，三千体の諸神を祀り，金の厨子や四神の旗を飾った特殊な空間であったことがうかがえる。また，正月，5月，9月に大般若を執り行ったと記載されており，仏事は白峯寺と五智院が交代で務め，神事は白鳥神社が行っていたことも記載されている。大般若は天守で執り行われていたが，その後二ノ丸で執り行うようになり，神拝のみ行うようになったことも記載されている。また，「御天守下の重大広間にて大般若執行有之奉」という記載から，1階は大広間であったと考えられる。さらに，明治4年（1871）の一般公開の様子が『年々日記』に記載されている。これによると，地下1階については「内いと暗くて見えず」とあり，暗いということしかわからない。1階は「梯を上るに窓あれば，明るく広きこといはんかたなし。おどろおどろしきものなり。廻りに床ようの物あれはめぐりつつ」とあり，広い空間であったことが記載されている。「床ようの物」が何を指すのか不明であるが，身舎に対する入側のことを指している可能性が考えられる。『小神野筆帖』の記述と合わせると，大広間の周りに入側が設けられたと推定できる。2階については「梯を上るに下よりは狭けれども、大かたは同じ」であり，ほぼ同じような構造であったことがうかがえる。「又梯を二つ上れは中央に畳などしきて広し」とあるのは最上階のことを記していると考えられるが，畳敷きであったことがわかかる。

第４節　天守の復元図

以上天守の外観および内部構造から現状で推測できる天守の復元図を作成した（P319～342）。外観については２枚の古写真から東面・南面については判明しており，絵図資料等から西面・北面についても対称の形態であることが推察され，ほぼ完全に復元することが可能と考えられる。ただし，天守入口については絵図等にも描かれておらず，発掘調査で検出した柱痕から推定せざるを得ない。天守の高さや各階の規模については『小神野筆帖』より読み解くことができる。

また，内部構造については発掘調査成果から地下１階と地上１階の柱位置はほぼ完全に復元できる。さらに，古写真に写る頬杖から各階の外周の柱位置はほぼ完全に復元できる。これらの構造は城内の艮櫓と月見櫓の構造を併せ持つものと推定できる。しかし，主要構造のうち，階段位置は不明であり，月見櫓と艮櫓の階段を参考に２案推定した。また，最上階は「諸神之間」と呼ばれ，神仏を祀られていたことがうかがえるが，諸神之間の中央に祀られていたのか，壁に沿って祀られていたのかによっては，階段位置が大きく異なると考えられたために，さらに中央階段案と外周階段案の２案推定した。つまり，地下１階から３階までの階段位置で２案，３階から４階の階段位置で２案あり，その組み合わせによって４案の復元案を作成した。

一方，内装の意匠等については発掘調査や史料からは不明であり，復元図には反映していない。また，復元図はあくまでも現時点での推定であり，今後の調査研究によりさらに詳細が判明することを期待したい。

〈参考文献〉

永年會 1932『増補高松藩記』
胡光 2007「「高松城下図屏風」の歴史的前提」『調査研究報告第３号』香川県歴史博物館
高松市教育委員会 2008『むかしの高松』第 21 号
大嶋和則 2008「高松城」『季刊考古学』第 103 号　雄山閣
大嶋和則 2009『史跡高松城跡整備報告書　第４冊　高松城史料調査報告書』高松市教育委員会
木原溥幸 1989「高松城の完成」『香川県史　第三巻　通史編　近世Ⅰ』香川県
佐藤竜馬 2007「考古学の視点から見た「高松城下図屏風」」『調査研究報告』第３号　香川県歴史博物館
高松市 1957『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』
高松市 1967『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』
野村美紀 2007「「高松城下図屏風」の基礎的考察」『調査研究報告第３号』香川県歴史博物館
松浦正一 1964『高松藩祖松平頼重傳』(財)松平公益会
三浦正幸 1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂
森下友子 1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

第5節　参考資料

「書写底本　上」（由利本荘市教育委員会所蔵）

二回十六年新原乃庄尓新城を城へ高松と名へ成説
三郷川越中守忠興又鳥居田如水
郷帳とも云いつれ可来詳也

（※東大史料編纂所蔵は「天保四年二月写」）

「書写底本　土佐阿波探索書」（東大史料編纂所所蔵　影写本）

高松之城八月廿三日より同廿七日迄
（高松城・城下の絵図あり、省略）
一本丸南ノ方百五十足、間ニ〆四十三間、石垣高さ天守ノ台七間計、残る分ハ五間程
東の方二百足、間ニ〆五十七間、内北丸中四五間、二ノ丸と間の堀七八間と見へ申候
二ノ丸中五間計、
此丸高塀と見へ申候
堀のはゞ西之方ハ井間、南ハ中間、南ノ方も天守之とおりハ井間、北ノ方ハ中間程
四方ハ多門、二重ノ矢倉、西南の角三壱つ、北西之角ニ壱つ、北東ノ角ニ壱つ、以上四つ
二ノ丸ハ当くい、北東の方ハ高角ニ矢倉弐つ有、海ノ方へ見不被申候
三ノ丸西之方三百廿五足、間九十三間、此方の石垣六七間
反、内丸西之丸の分井間程くい有、北の角屋敷、南の角ニ矢倉弐つ有、残る分くいなし
石垣高さ五間計、堀のはゞ十三間、此方の石垣六七間
之間ハずれ申候
南ノ方六百廿足、間ニ〆百七十七間、町ニ〆三町ニ三間ニ間ならず
石垣右同前、堀も同前、此方ニ大手門矢倉有、惣なり
門より東くくい御座候共、土おち下地はかりなり、以上ニ北口壱つなり、搦手ニ口壱つ有
東ノ方西ノ間同じ、対面所の北ニ門有、間ニ堀有、門よりハ内ノ丸、東南ノ角ニ壱つ有、数多門井間計
海ノ方ニも矢倉有、残る分くいなり、皆くすれ
一侍かゝ申候、石垣堀右同前
間、町ニ之とかわ、西之方六百八十足、間ニ〆百九十四
ニ間、町三町かわ、土手ニ間計、堀の口十三間、此方
ニ口かなき門、土はしなり
南ノ方千弐百足、間ニ〆三百四十三間、町五町四十三
間、土手堀右同前、此方ニ口門なし、惣あり

東の方西之間同前、町家のうら石垣高さ二間計、堀石
同前、此方ニ口門なし、土はしなり
（中略）
城まわりつくろい、少も無之と見く申候、はしくくそれ
候く共、少もつくろい申とく見く不申候

（※『帝川県史　近世史料Ⅰ』より抜粋）

「表会日雇　四」（政田志人幕田米次会議士管轄館市書）

一　九月十七日、高松御城御普請御手伝之義ニ付、松平伊豆守ゟ彦坂織部被召寄被仰渡候、
其上御奉書到来
高松城定絵図之通、去十日風雨之節所々石垣崩候ニ付而、修復有之
度候ゟ、絵図之通修其意候く、如元可有申請候、猶又雖奉窺来中二年六月中三日
之奉書くいつれも可被申付候、恐々謹言
奉而御奉書之趣申請可被申付候、恐々謹言
右之通之御奉書到来

「小井町夜話　巻一」（栗戸内港歴史民俗資料館所蔵『公定文書』）

一、御城一件、御天守三重にて御座候処、明暦焼て、古材木に安原山の松を伐、表向三重歟、内五重に御建被遊候、大工頭吉田彦兵衛被仰付、幕州姫路城之天守を写被建、夫より重前の小倉の天守を、写取候ゟ申候、姫路は中々大そふなる事故、小倉之形を以、御天守御出来に御座候、則吉田彦兵衛申候、上の重に、諸神諸菩薩御書有、三千体の御子、四神之獣被仰付候、正五九月三度宛大般若執行被仰付候、白峯寺五智院代ゟ代ゟ相勤申候、猶崇手者神井共に鰹出候、御天守下の重大広間にて大般若執行有之、御留主頃・春行・橋目・寺社春行・月番年中鰹出、買物役之者鰹出候て、一切御台所之物を不遣、御買上に成、御城内理共被下候、其後は御天守にて神井計相成、大般若は二の丸上段にて執行被候様被仰付、当時は二の丸にて春行有之候、此入割別帳、大般若は水戸家御仕来にて、此方様も被仰付事に候、
（中略）
一、御城御多門・御天守・御矢倉御普請は、御入部六年目に先初め有、惣普行御北条ニ三部にて御座候、御普請相済候て、御定可仕と彦三部申上候処、幕用無用被仰出、無御構御ゟ無之候、御普請之候面と申物無御座候、御天守其外修繕之足木沢山に有之候処、彦三部申上、不残高新調、売払過分之代銀有之候処、御普請にかゝり候小役人ども迄に人足等に御被下候由、役人ども彦三部くく御礼申候由、　御上にも御機嫌に被為有之由、宝暦十二年午年之正、二の丸は百十七年、御天守は百弐拾四年に相成候由、栗田寛現物語候、栗田氏にも親父可休入道に右屋敷ゟ内左衛門直物語を文之面にて承候由、物語にて候、一説、右御普請相済、御褒美御被仰付候処、彦三部申上候は、此度御普請御物入如何程ニと申事相知、後世相聞くても不宜事存候間、御勘定は御無用にと可然事存候旨、申上候は、　御上にも尤に被思召、御勘定御無用被仰出候由古老物語に候、右御天守雛形は小倉之天守之写

一、御天守三重にて有之候処、喜田彦兵衛雛形仕入、御覧思召に相叶ひ、其通と被仰付候、
一、あり腰壱重取、五重作り替申候、雛形木図、西の御丸藪之内に捨有之、次第に朽捨申候由、
此説疑敷御座候得共記置申候、西の御丸藪之内に立申候を、栗田寛規壮年之時、御番にて
登城致し候節、度々見申候由、物かたりにて御座候、当午年右寛規八十四才に成申候、
（中　略）
一、御天守鯱は、英公被仰付焼ものにて有之候を、数十年後、当殿様宝暦七丑年八月唐金之鋳
物相成、鋳掛新八と申者被仰付候、作事奉行は瀬尾孫太夫掛りにて御座候、
（※『新編香川叢書　史料編（一）』より抜粋）

「小神野夜話　壹」（財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵）

一御城一件御天守三重ニて御座候所崩シ取候て古伐木ニ安原山
之松ヲ伐表向三重腰ヲ取内五重ニ御建被遊候大工頭喜多彦
兵衛被仰付播州姫路之天守ヲ写ニ罷越夫より豊前之小倉之
天守ヲ写取り帰り申候姫路ハ中々大そふなる事故小倉之形ヲ以御
天守御出来ニ御座候則喜田彦兵衛建申候上之重諸神諸菩薩
勧進有三千躰之厨子四神之旗被仰付候正五九月三度ツゝ大般若
執行被仰付候白峯寺五智院代々代ル相勤申候猪熊千倉神拝ニ
罷出候御天守下之重大広間ニて大般若執行有之御留主頭奉行
横目寺社奉行月番年寄中罷出賞物役之者罷出候而一切御台
所之物ヲ不遣御買上ニ成御料理共被下候其後者御天守ニて神拝計りニ
相成大般若ハ二之丸上段ニて執行致候様被仰付当時ハ二之丸ニて執行
有之候此入割別書大般若ハ水戸家御仕来ニ付此方様ニも被仰付候事ニ候
（中　略）
一御多門御天守御矢倉御普請ハ入部六年目ニ弁初メ有之
惣奉行朝比奈彦三郎ニて御座候御普請相済候而勘定可仕与彦三郎
申上候所算用無用与被仰出御銀積り無之御普請之帳面与申物無御
座候御天守其外櫓等之足木澤山ニ有之候処彦三郎申上不残拝
領致売払過分之代銀有之候所御普請ニかかり候小役人共并ニ人足
等ニ開被下候由小役人も彦三郎へ御礼申候由　御上ニも御機嫌被
為有候由宝暦十二年年迄二之丸ハ百廿七年御天守ハ百廿四年ニ
相成候由栗田寛規物語ニ候栗田氏ニも親父可休入道ニ古星野宮
内左衛門直物語ヲ次之間ニて承り之由物語ニ而候一説ニ右御普請相済御
勘定被仰付候彦三郎申上候ハ此度御普請御物入如何程と申候事
相知後世相聞へ候而も不宜奉存候間御勘定者御無用被遊候而可然与奉
存候旨申上候へハ　御上ニも尤ニ被思召御勘定御無用被仰出候由
古老之者物語ニ候　右御天守雛形ハ小倉之天守之写
御天守三重ニて有之候所喜田彦兵衛雛形仕入御覧思召ニ相叶ひ
其通ニ被仰付候
一阿り腰壱重五重ニ作り替へ申候雛形木図西之御丸之御藪之
内ニ捨有之次第ニ朽捨り申候由此説疑御座候へ共記置申候西
之御丸家之内ニ立申候ヲ栗田寛規壮年之時御番ニて登城致候節
度々見申候由物語ニて御座候当年右寛規八十四才ニ成申候

（中　略）
一御天守鰭ハ英公被仰付焼物ニて有之候所数拾年之後　当殿様
宝暦七丑年八月唐金之鋳物ニ相成鋳物師新八与申者被
仰付候作事奉行ハ瀬尾孫太夫掛りニて御座候

「小神野筆帖　仁」（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵『松浦文庫』）

一御天守先代三重にて御座候所崩取候而古材木ニ安
原山の松を伐表向三重有腰を取内五重ニ御建被遊候
大工頭喜田彦兵衛被仰付播州姫路の城天守を写に
参夫より豊前小倉の城を写罷帰り候姫路ハ中々
大荘成事故小倉の形を以て当御天守彦兵衛仕候間
間数等ハ別書に委敷有上の重ニ諸神を三千体神
金の厨子四神旗等被仰付候正九月三度ツゝ大般若
執行被仰付候白峯寺五智院代々代々相勤申候猪熊千倉
神拝ニ罷出候御天守下の重大広間にて大般若執行
有之奉行御留守居番頭横目寺社奉行月番年寄
罷出買物使之者罷出候而一切御台所之物を不遣御買上ニ
成御料理とも被下候其後御天守にて神拝計大般
若ハ二丸上段にて仕候様ニと被仰付当時ハ二の丸にて
御坐候此入割別書大般若分ニ委敷記置尤此大般
若御執行と申事ハ水戸家御仕来ニ付此方様ニも被
仰付候
（中　略）
一御入部三年目慶安三寅年御普請初先二ノ丸より
斧初御玄関鶴の間一番ニ建惣奉行朝比奈彦三郎
水戸より下館二百五十石小姓高松三百石より四百石迄
年寄役相勤候御天守御多門矢倉
御普請ハ御入部六年目ニ斧初有惣奉行同人なり
御普請済候而勘定可仕上彦三郎申上候所算用なしと
被仰付御銀積なし夫故　御城普請と申帳面
なし御天守其外矢倉多門の足木沢山ニ有之候処
彦三郎申上不残致拝領売払過分之代銀有之所
御普請ニ掛り候小役人人足等ニ代割被下候由上ニも御機
嫌之由宝暦十二年辛迄二ノ丸百廿七年御天守ハ百
廿四年ニ相成候由
一御天守三ノ重にて有之候所喜田彦兵衛存ニ而入御覧
思召ニ叶其通ニ被仰付候
一阿り腰一重取五重ニ作り更申候右雛形木図二ノ丸の御
蔵の内ニ捨置之次第次第にくさり倒レ捨り申候近頃
惜敷事ニ候御台所大黒柱朽損ニ付明和五子正月
十一日斧初にて建修復出来九間梁十三間也本の如く出来
奉行中中条伝八作事奉行七条金大夫也

一御天守鰭宝暦七丑年七月廿六日洪水有同年九月
五日ニ又洪水阿弓此時鰭吹落シ木ヲくミ手にて包ミし物
也是をくミ手鋳物ニなり則金師新八と申者鋳立上
多ク作事奉行瀬尾孫大夫なり
（中　略）
棟上寛文九酉年五月十日
一天守五重間数高拾七間半
内石垣四間
天守台石垣上東西拾二間南北拾間半
シャチホコ高六尺五寸貞享四卯九月供（洪）水ニシテ
丸三尺三寸　シャチホコ西手吹折
諸神之間　東西七間　南北六間　此畳八拾帖
二之間　同　五間　同　六間　此畳六拾帖
三之間　同　九間　同　八間　此畳百四拾四帖
四之間　同拾二間半　同拾一間半　此畳百八拾七帖
同　下　同　六間　同　五間　此畳六拾帖

「盛衰記　水」（財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所蔵）

（盛衰記巻之一目録）

五　御天守之事并古来之御城御直シ事

（本文）

五

一御城一件御天守先代三重ニ而御座候処崩取候而古材木ニ安原
山之松を伐衰向三重にて臘ヲ取内ハ五重ニ御建被遊候大工頭喜田
彦兵衛被仰付播州姫路城天守を写シに口夫より豊前小倉
之天守を写ニ行罷帰候姫路ハ中々大そう成事故小倉之天守形ヲ以当国
御天守普田彦兵衛仕候間数等者別書ニ委在之候事上之重諸神
者三十躰神金之厨子四神之旗被仰付候正五九月三度宛大般若
執行被仰付之白峯寺五智院代ルニ相勤申候猪熊千倉神拝ニ被出候
御天守下之重大広間ニ而大般若執行在之御留主居頭奉行横目
寺社奉行月番年寄中罷売売使之者罷出候而一切御台所之物ヲ不遣御
（「御勘弁之己後ニ」朱書）
買上ニ成御料理とも被下候其後候御天守ニ而ハ神拝計り大般若ハ二之丸上段ニ而仕候様と
被仰付当時より二之丸ニも御座候此入割別書大般若左ニ委敷記置候尤此大般
若ヲ執行と之事ハ水戸家御仕来候ニ付此方様ニも被仰付候
（中　略）
一慶安三寅年之御入部三ヶ年目御普請始先二之丸より弁初メ御玄関
鶴之間一番建惣奉行朝比奈彦三郎相勤御天守御多門矢倉御普請
者入部六年目ニ弁初有惣奉行彦三郎之御普請済候而勘定可仕上与
彦三郎申上候処算用無志与被仰付御銀積なく候夫右御城御普請
之帳面等申物諸役処ニなく走者勘定なく候故帳面残り不申候御天守

其外矢倉多門之足木澤山ニ有之候処彦三郎申上不残拝領致売払
過分之代銀有之候処御普請ニ掛り候小役人共并人足等ニ右割物代
払呉候由諸役人□徳付彦三郎ニ礼を申候上ニも御機嫌之事候
宝暦十二午年迄二之丸者百廿七年御天守者百廿年ニ相成候由栗田寛規
物語之栗田氏ニも親父可休入道ニ古屋之宮内左衛門直物語ヲ次之間ニ而被
聞候他物語ニ而御置候御天守ひな形小倉之天守之写シ
一御天守三重ニ而有之候処喜田彦兵衛□て入御覧ニ思召ニ付其通ニ被仰付候
一阿り腰一重取五重に作与申候雛形木図西之丸之御蔵之内ニ捨在之次第へ
くさり倒れ捨り申候近頃おしき事ニ候四人ニ申候右之雛形西丸家之内ニ立□申候
を寛規□盛御城御番ニ罷出候刻段々ニ申候を物語ニ而御置候当其年
右之寛規八十四歳ニ成御台処大黒柱朽損候ニ付明和五子正月十一日斧初之
建修覆出来九間梁ニ十三間之本之如く出来奉行中条傳八作事奉行
七条金太夫之候
一御天守しやちほこ英公被仰付焼物にて有之を数十年後宝暦七丑年
八月秦公御代御五代目之天守□□唐金ニ而鋳物ニなり候度より金物師
新八与申者両方之鋳立てたり作事奉行瀬尾孫太夫之候

「消暑漫筆　壹」（財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵）

五　一御天守先代ハ三重にて候所表向三重内五重に御建更被遊候大工頭喜田
彦兵衛ニ被仰付播州姫路乃天守を写ニ参又豊前小倉乃天守を
写ニ罷帰申候姫路ハ大造成事故小倉之天守の形を以当御天守喜
田彦兵衛仕候上之重ニ諸神有と云々
○十竹曰御天守御普請の節ハ喜田彦兵衛いまだ大工にて在候時なる可し
大工頭になりたるハ余程後乃事也喜田ニ書ハ誤なるへし朝比奈彦三郎ハ
奉行職乃時ならん今の基和家之元親也○御天守魚虎焼物にて
阿り候議宝暦七丑の八月　思召議以て青銅に仰付られ鋳物師新八
鋳立の由けふ存せり御天守の間数之事に実に記す寺屋石垣水の
上面より七間半土台より御天守上の瓦まで十三間半御天守下の重東西
十三間弐尺南北十弐間弐尺なりと写し此ヶ條御普請の事を
委しく記し阿れとも少々違たる事もあるまし本書を兄ハ人其心
得有へし

「高松城天主閣鯱ニ関スル調」（財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵）

高松城天守閣上鯱ハ元焼物ナリシガ穆公ノ命ニヨリ寶
暦八戊寅年二月吉日鋳物師森田新八尉方壽青
銅ニテ鋳造セリ高六尺三寸七分
其後鰭破損ニ付嘉永二年酉五月鰭ノミ改造セリ
作人鍛冶直造及怜源兵衛
銘曰　　鰭裏銘

寶暦八　　讃州高松住　　嘉永二歳　鍛冶　直造
戊　鑄　森田新八尉　　酉五月改　悴
寅年　工　方壽　　源兵衛
二月吉日　作

「講道館図書部」（朱方印）

「高松県史　巻一」（宮田忠彦氏所蔵）

県治原文（交収）

（　中　略　）

明治三年九月十三日伺

当旧藩城郭楼櫓等致破壊候向ハ補理不相加自今撤去失費相省申度奉存候此段奉伺候以上

九月十三日　　高松藩知事

弁官御中

付札

伺之通

明治四年九月兵部省伺

今般当県ヘ分営ヲ被置候ニ付テハ何レ大阪鎮台ヨリ百事御指揮モ可有之哉ニ候得共指当り左之件者為心得奉伺置度奉存候

一兵隊糧倉雑費等ハ各県ヨリ運越候哉又ハ当県ニ於テ相賄可申哉

指令

官員出張ノ上承合セ可申事

一当県之儀ハ分営所之儀ニ付別段常備兵一小隊備置候ニ及不申候哉

指令

追而何分之儀相達候迄従前之通差置可申事

一宮中紅葉山詰当県兵隊当月交代期限ニ付最早為引取跡人数差出候ニ及不申候哉

指令

伺之通

一当県城郭漸次廃毀仕掛申候所此度図面差出候様被仰出候ニ付廃毀指控可申候哉

指令

伺之通差控可申事　印

右之外県庁心得ニモ可相成事件御座候ハヽ承置度奉存候此段奉伺候以上

辛未九月十四日　　高松県

兵部省御中

県治原文（鎮台）（※図面別冊共欠）
明治四年十一月十三日鎮台往復
当県へ分営被建置候ニ付城地朱引境界城中建物図面弐通并畳建具等別冊之通総テ御引渡申候
辛未十一月十三日　高松県
大坂鎮台
第二分営
同四年同月同日右同
当県へ分営被建置候ニ付県庁西隣屋敷地建物共永御貸渡申候事
四年十一月十三日　高松県
大坂鎮台
第二分営

「公文録　高松藩之部　全」（国立公文書館所蔵）

当藩城郭櫓槍等致破壊候向ハ補理不相加自今撤去失費相省申度奉存候此段奉伺候以上
九月十三日　弁官
高松藩知事
御中
伺之通

古今沿革兵制一変藩城廃撤云々熊本鎮所二藩一般之見込ニ付去歳当藩城郭破壊ニ任セ修理ヲ不加趣奉伺候所尋テ伺之通被　仰出候然ル処門艦櫓徒ニ腐朽ニ付シ天物　恭殄スルニ不忍仍テ自今漸次廃撤シ木石ヲ代取シ開墾ノ材ニ供シ無用ヲ転シ有用ト為シ且陋習一洗開化之一助ニ仕度此段御指揮奉伺候以上
辛未四月　弁官
高松藩
御中
伺之通
但開墾之儀ハ精細取調可申出候事

「年々日記　二十八」（多和文庫所蔵）

管内エ布告
自今盆踊被廃止候若心得違右及所業候者於有之者屹度可及沙汰候間兼而其旨相心得可申事
但小児ニ至迄心得違無之様親々より堅可申付事

藩庁

同

今度廃城ニ付明後八日后御松平操屋敷エ藩庁相移候条此段
相達候事

未六月

同

今般廃城伺済ニ付官員及士族卒庶人家族ニ至迄城内拝
見差免候条別紙日割之通勝手次第可罷出候事

辛未六月十四日

明十五日より廿一日　官員
　　士族家族
廿二日より来月十日迄　郷中一行
日限追而　卒

市中一行

右之通朝六ツ時より夕七ツ時限

順路

東西御門ヨリ西丸夫ヨリ桜御門内本丸御玄関より表書院柳杉戸口ヨリ槍之間エ出松之間より
奥向不残披露閣庭上中御門高橋下ヨリ黒御門エ出御蔵内通内町エ出ル

辛未六月

卒市中一行

御城拝見之義来月十七日ヨリ同廿六日迄罷出可申事

別紙相達候也

六月廿四日

藩庁

「年々日記　三十」（多和文庫所蔵）

八月四日

けさとく御城内を拝見つかうまつらんとて、妻娘をゐて、まづ西の御門よりものせるに、士族を始め農商どもの男女市なせり。かくて西の御丸を見めぐり、元の考信閣をも見るに、昔とはやうかわりていとさうさうし。それより桜の馬場を東へものして、巽（たつみ＝東南）の方の御櫓（やぐら）に上りて見るに、いみしき太鼓ありてわが大宮のよりことなり大きなり。己はこの外郭に生まれし者なれば、朝夕音はききなれたれど、始めて見るもめづらし。それより桜の御門を入るに女童どもは仰ぎ見ておほめくめり。さて御本丸へ詣てつるに、まづ鉄の御門いみしきものなり。鉄もて包みて木地は見えず、かかる事より門の訓（よみ）は鉄之門（かなと）の意なりといえるなるべし。内はただ松樹のみ繁り合いて、西の方に庫めきたるもの二軒並び立てり。それを南の方えものせば、三十間はかりの廊ある橋あり、そを渡れば又鉄の御門あり、内に入りて東の方に御天守あり、人々はい入れば皆々入りぬ。内いと暗くて見えず。梯（はしご）を上るに窓（まど）あれば、明るく広きといはんかたなし。おどろおどろしきものなり。廻りに床ようの物あれはめぐりつつ窓より外のかたを見るに、御県の家々いらかのみ見ゆ。梯を上るに下よりは狭けれども、大かたは同じ、又梯を二つ上れは中央に畳などしきて広し。上層のたる木のもとにやあらん、棟の如きいみしき木の覆子の骨のごとく、四方へつき出たり。その木を歩み渡って窓より見渡すに、まづ南の方は阿波讃岐の境なる山々、たたなわりたるもいと近く見え、また御県の町々の家々真下に見下すさまの、かの何とか言う薬をのみたる鵜犬の、

大空を翔（かけ）りしここちはかくもやありけんと、おしはからるるもいみじうおかし。東の方屋島は元よりわが志度の浦なども見ゆ。それより北の方女木男木の二島は真下に、吉備の児島のよきほどに見ゆるもいわんかたなし。まだ上えかかる梯もあれど、甚あやうく見ゆればえものせず。さて大方見はてたれば、梯を下るに手すり網などをとりて、かろうじてやうやうに降りぬ。このおほん天守外よりは三層に見ゆれど、内は五層につくりなしたり。かくてもと来し道を通りて、御玄関に詣でつ。それより上りて所々を拝見つかうまつる。まづ御玄関を経て表の御書院に出るに、妻娘などはあはと打驚くもさることなり。鶴の間・滝の間をへて御上段下段をへ、それより中の御書院、それより松の間・奥の間々、のこるくまなく披雲閣より御庭に下りて、水の御門、それより東の方を通りぬけて、御倉廩にいでて、拝見はてぬ。すべてのおほんしつらいいわんかたなし。御襖など所謂（いわゆる）金はりつけにて、唐めきたる画などいと上手にものせしようなり。中にもをかしきは、御上段の床に唐人のこはしく装束したるが、立たる像の見えたるを、詣づる老嫗（おうば）なんどが、さんせん（散銭）相まき念珠（じゅず）おしもみ、念仏など唱え涙をこぼしたるいとをかし。されど真さまを見しより、己ふと御廃城ゆえかかると思い出てて、いとかしこくて念仏はいわねど、思わずも涙をこぼしたり。

（※松浦正一『松平頼重伝』より抜粋）

「明治　大日記」（防衛庁防衛研究所所蔵）

高松城内在来家屋之内腐朽保存
之御見込無之分売却之儀御上申相成候処
右ハ取調□入用ニ付実際之景況書
御開申被成度此段及御照会候也
九月十二日　笠島半次郎
工兵第五方面
佐□御中

高松城地等区入費仕払伺

一金七拾壱円六拾二銭三厘
右ハ高松城并附属地区入費明治六年三月より同十一年六月迄官有地第二種中ニ係ル分前書之通相成申候右ハ其年度毎ニ支出可致筈ニ候得共暴竟同地方之義ハ旧香川名東愛媛県ト押移り其賦課方不決定ヨリシテ已ニ昨年五月中伺出候次第モ有之旁今日迄遷ニ及候右者年度跨り等甚不都合ニ有之候得共前条ニ申述スル如ク不得止義ニ付此節別途金御渡相成度別紙内訳書相添此段相伺候也
明治十三年八月九日　工兵第五方面提理
陸軍工兵中佐別役成義
陸軍卿大山巌殿

伺之通

但遷延之事由内訳明細表ニ

詳細記載可差出事
九月十八日
（中　略）

高松城建物存廃伺
当方面第二團区内讃州高松城在来建物ハ別紙図面紅黄色之通ニ候処紅色之建物ハ存置黄色之建物ハ追々腐朽ニ及ヒ保存之見込無之候間只今之内売却取計申度此段相伺候也
明治十三年七月廿日　工兵第五方面提理
陸軍工兵中佐別役成義
陸軍卿大山巌殿

（貼紙）「図面工兵局ニ留置ク」

伺之趣聞届候条成規之通代価取調更之可伺出事
九月十八日

高松城建物之内保存見込無之分売却方先般伺出候ニ付同建物景況開申致候様御照会之趣致承知候依而別紙差出候間可然御取計相成度御回答旁此段申進也
明治十三年八月廿七日
工兵第五方面提理別役成義代理
陸軍工兵大尉成澤知行（印）
陸軍歩兵中佐児島益謙殿

高松城建物景況書
高松城内在来家屋ハ総テ朽敗ニ属スト云トモ就中黄色ノヶ所ハ往々修理保存之見込ナク或ハ棟木朽損シ四壁崩潰シ殆ト自倒ノ勢ニ至ル城北渡櫓ハ既ニ軒桁等崩潰雨露浸入シ為ニ腐朽土台ニ及ト雖トモ該櫓ハ城北海面ニ望ム外郭ニシテ廃棄ニ属スルトキハ大ニ城郭ノ景況ニ関シ更ニ外郭仮囲ヲ設ケサルヲ得ザルニ至ル故ニ存之本丸家屋ハ破損スト雖トモ一時屯兵之用ニ略足レルヲ以テ暫ク存置ス天守ノ如キモ傾斜甚シト雖城北櫓ニ比スルトキハ稍優レリト云ヘシ其他紅色ノ分多少腐朽アリト雖トモ外郭或ハ門櫓等ニ付存置ス然シテ黄色ノ部分ヱ修理ヲ加ルモ益ナク却テ莫大空費ヲ要スル而已依之売却スルノ見込ナリ
（中　略）
工兵第四方面本署

旧高松邸倉庫修理之義大坂鎮台より
伺出之趣聞届候条曽テ其署見込之通
金六百拾四円六拾七銭ヲ以テ修繕方可
取計此旨相達候事
但該金額ハ其署定額営繕費内より支弁
可致候事
明治十三年十月廿三日　陸軍卿大山巌

（中略）

高松城建物売却伺
高松城建物之内腐朽之ヶ所取払之義先
般伺出候処伍第一八九六号ヲ以代価取調
更ニ伺出候様御指命相成候ニ付別表相添
此段相伺候也
明治十三年十月八日　工兵第五方面提理
陸軍工兵中佐別役成義
陸軍卿大山巌殿

伺之通
但売却代金ハ会計局へ納附シ其
旨日扱ヲ以テ可届出事
十月廿三日
図面工兵局ニ留置ク

高松城内廃却見込建物概見積表　工兵第五方面提理陸軍工兵中佐別役成義
（表略）
合金弐千三百三拾四円六拾四銭五厘

（中略）

高松城建家存廃之儀ニ付伺
高松城諸建家之儀者星霜久ク且材料粗悪
屋壁構造等モ甚タ不充分ナルヲ姑息ノ修理ヲ加ヘ
纔ニ其傾覆ヲ維持セシモノニシテ今日ニ迨テハ木材
殆朽敗シ風向毎ニ多少崩壊セサルナリ今速ニ存
廃之処分ヲ為サヽレハ他日如何共スヘキ様ナク依
テ実際調査セシムルニ別紙図面黄色ノ部分
ハ腐朽殊ニ甚ク到底修理ヲ施スノ見込無之
其赤色之部分ハ稍堅固ナルヲ以テ之ヲ保存シ
右黄色建家解除材料之内使用ニ耐ヘキモノ
ヲ選抜シ赤色建物修理外邊囲等之用ニ充テ
其他不用ノ物品ハ総テ売却候方御便益ト相考候
間至急御許可相成度尤売却代価之儀ハ解
除使用之上ナラテハ見込難相立ニ付其際取調
開申可仕候此段相伺候也

逐テ本文修理費之儀ハ当方面定額営
繕費ヨリ操合支弁之見込ニ有之候此如
申添候也
明治十六年十月廿九日
工兵第二方面提理別役成義
陸軍卿大山巌殿

伺之通
十二月四日

「年々日記　八十三」（多和文庫所蔵）

四月四日

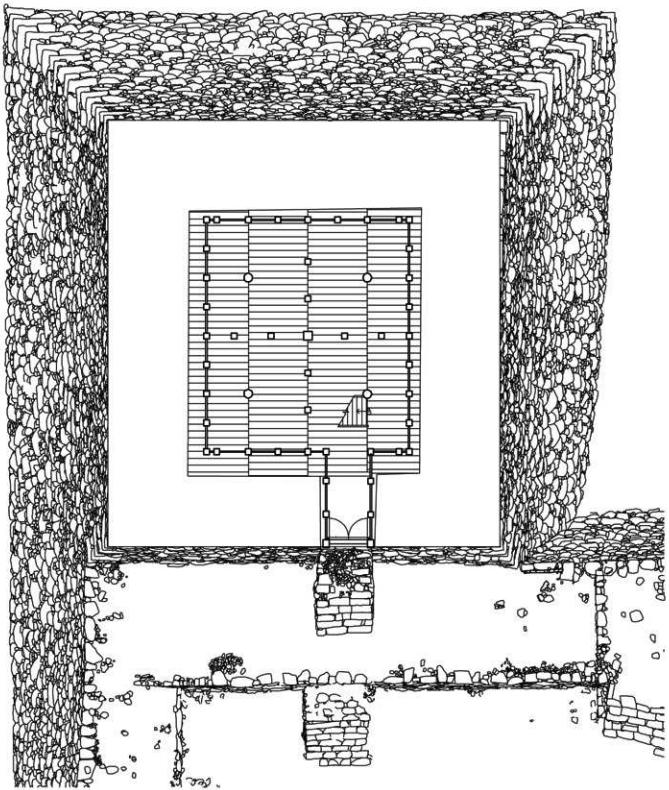
高松の御城なる天主臺
を此間よりこほちかかれりと聞けるか　けに半ばてくつしたるを見る
何となうあハれにて
思ハすも涙をのこへり　婦女のとりくちめなんさる事なかりけり

（欄外）
高松の天主臺を崩せるハいかなる故そ

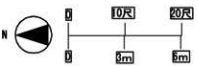
高松城天守推定復元図

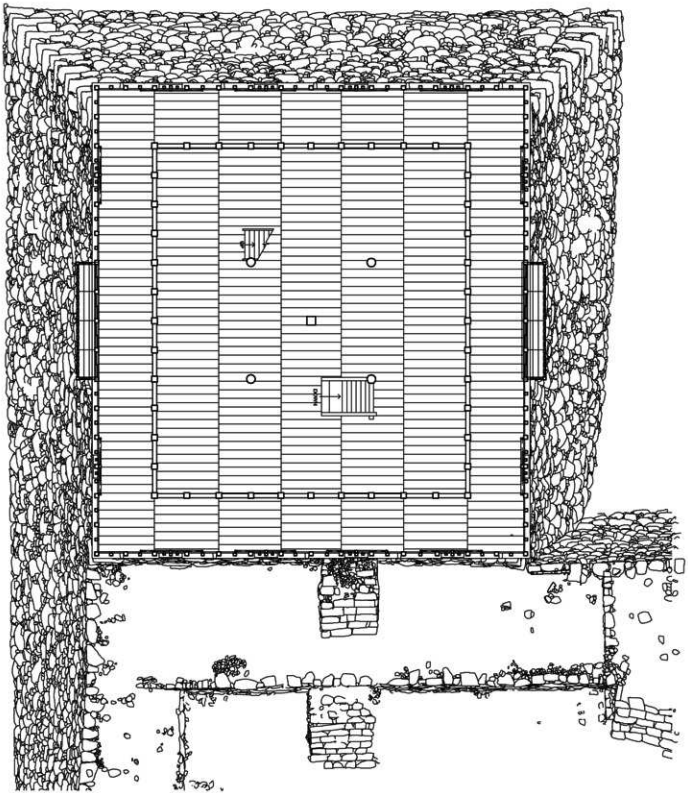
図面リスト	
月見櫓参考	長櫓参考
地階平面図	地階平面図
1階平面図	1階平面図
2階平面図	2階平面図
3階平面図(中央階段案)	3階平面図(中央階段案)
3階平面図(外周階段案)	3階平面図(外周階段案)
4階平面図(中央階段案)	4階平面図(中央階段案)
4階平面図(外周階段案)	4階平面図(外周階段案)
梁行断面図(外周階段案)	梁行断面図
桁行断面図	桁行断面図(中央階段案)
西立面図	
南立面図	
東立面図	
北立面図	
最上階屋根伏図	

※以下の図面は発掘調査成果と古写真等の史料を基に作成した推定復元図である。
　階段の位置や内部の意匠等については不明であり、今後の調査と資料の増加によって修正されるべきものである。

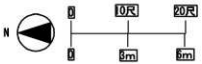


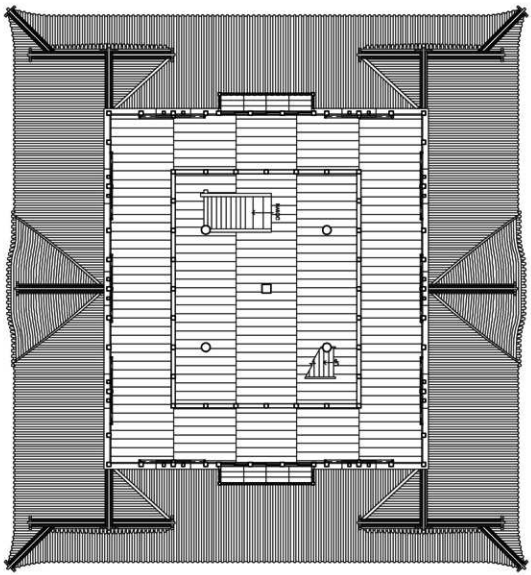
高松城天守復元地階平面図(月見櫓参考)



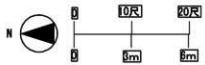


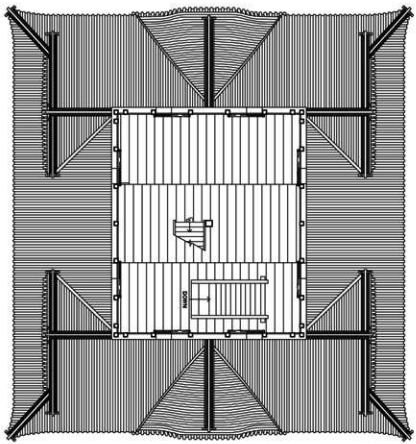
高松城天守復元１階平面図（月見櫓参考）



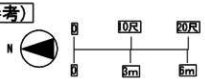


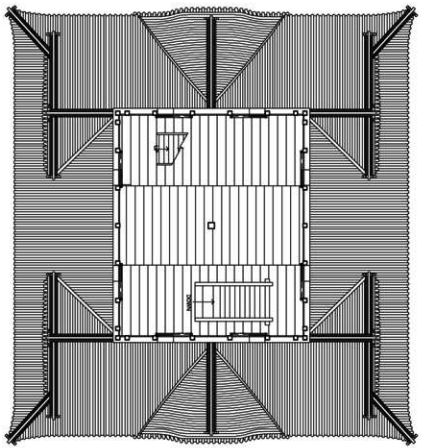
高松城天守復元２階平面図（月見櫓参考）



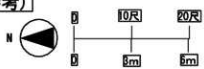


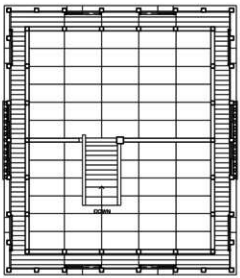
高松城天守復元３階平面図（中央階段案・月見櫓参考）



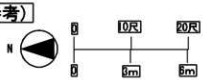


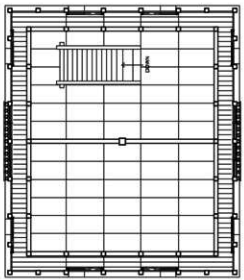
高松城天守復元３階平面図（外周階段案・月見櫓参考）



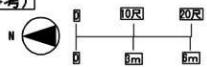


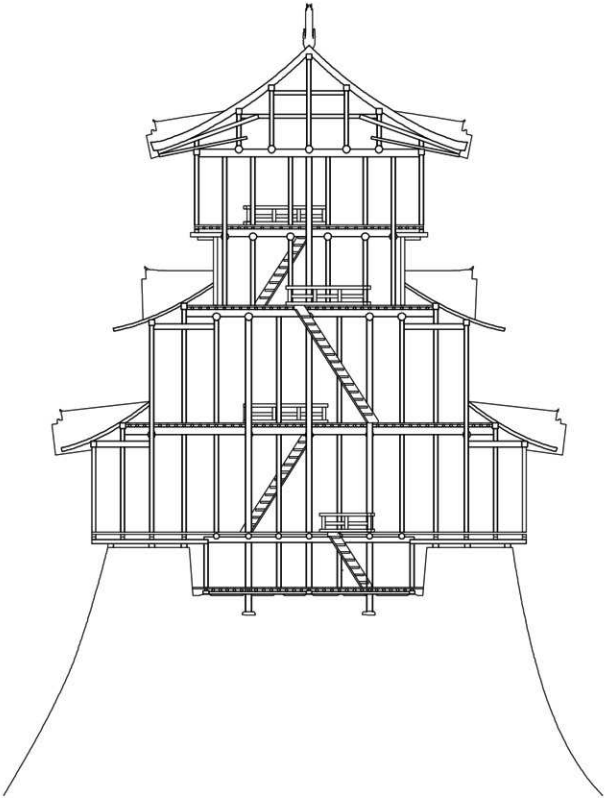
高松城天守復元４階平面図(中央階段案・月見櫓参考)



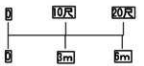


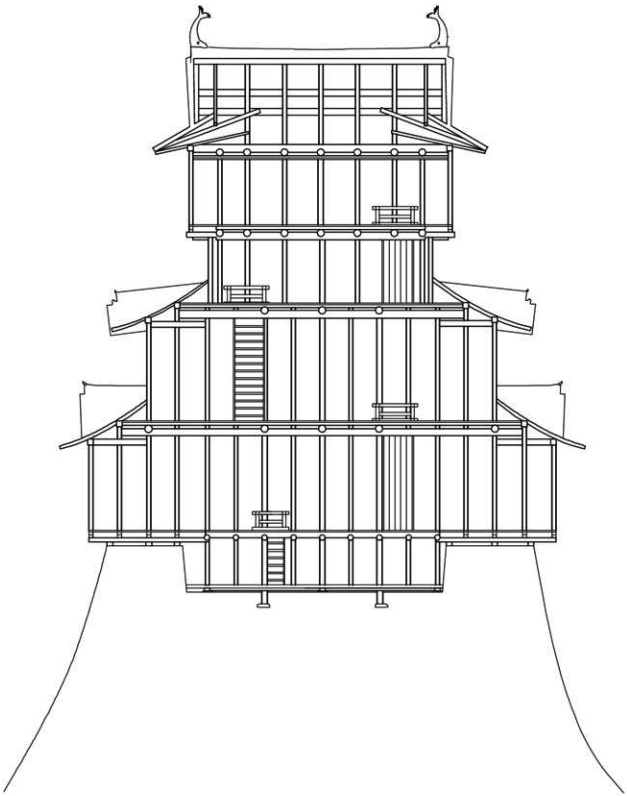
高松城天守復元４階平面図（外周階段案・月見櫓参考）



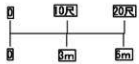


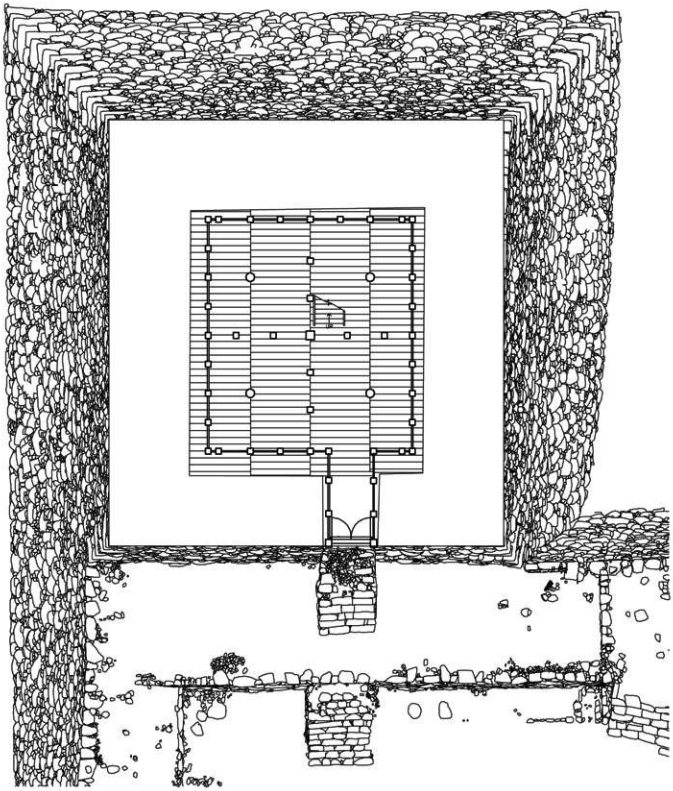
高松城天守復元梁行断面図（外周階段案・月見櫓参考）



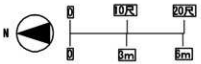


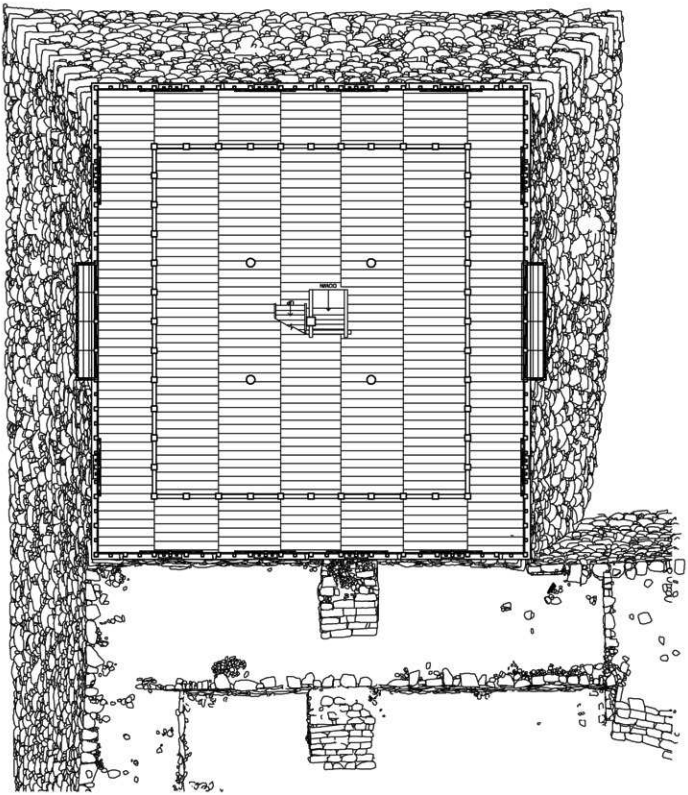
高松城天守復元桁行断面図（外周階段案・月見櫓参考）



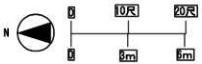


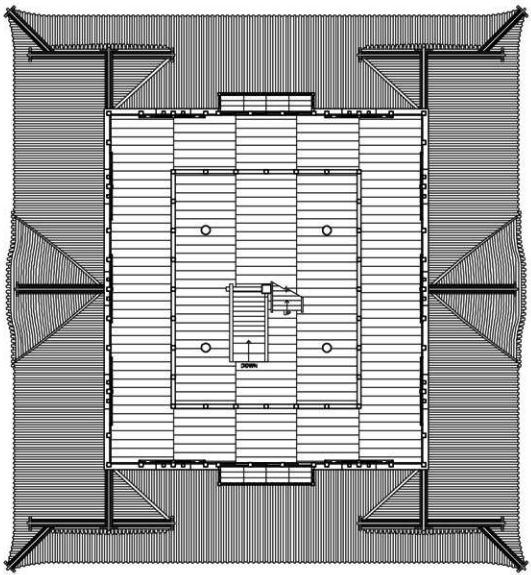
高松城天守復元地階平面図（艮櫓参考）



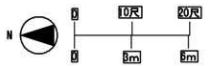


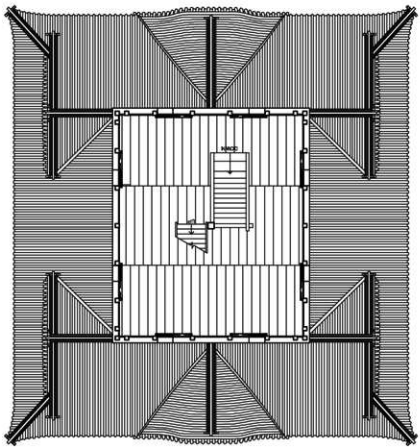
高松城天守復元１階平面図（艮櫓参考）



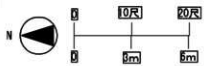


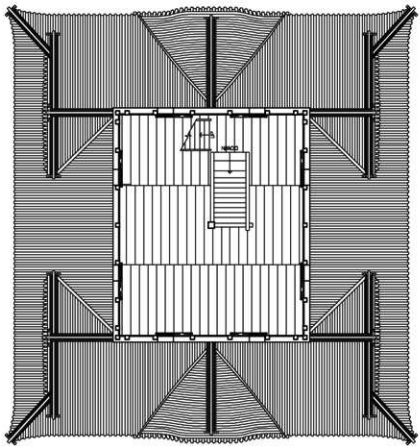
高松城天守復元2階平面図（艮櫓参考）



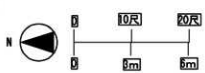


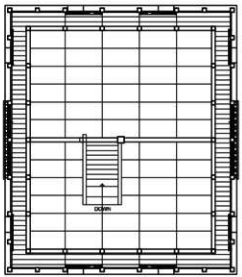
高松城天守復元3階平面図(中央階段案・艮櫓参考)



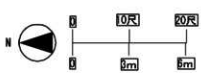


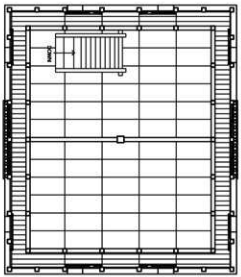
高松城天守復元3階平面図(外周階段案・艮櫓参考)



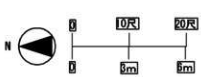


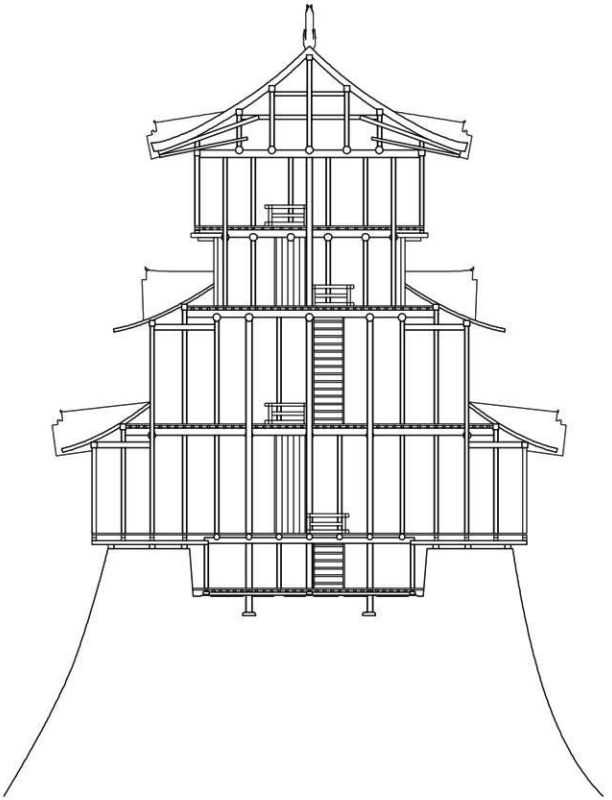
高松城天守復元4階平面図（中央階段案・艮櫓参考）



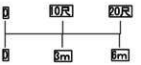


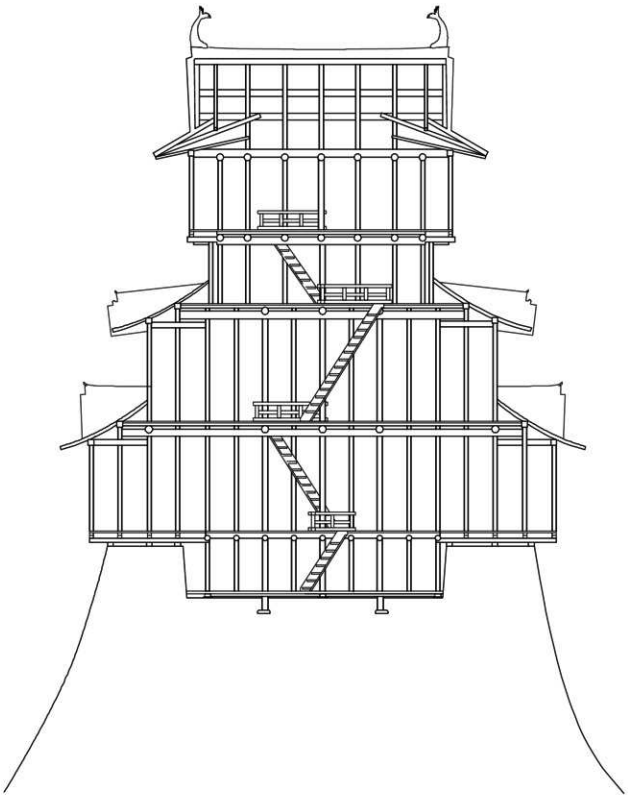
高松城天守復元4階平面図（外周階段案・長櫓参考）



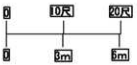


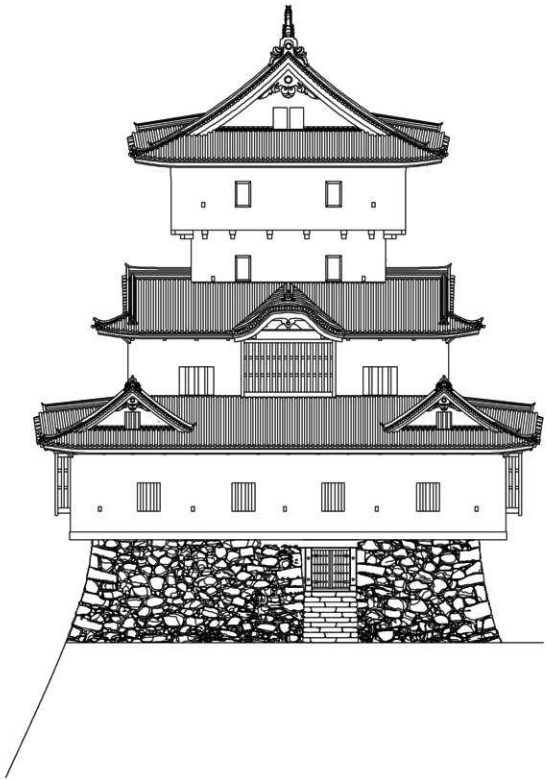
高松城天守復元梁行断面図（中央階段案・艮櫓参考）



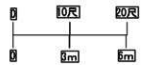


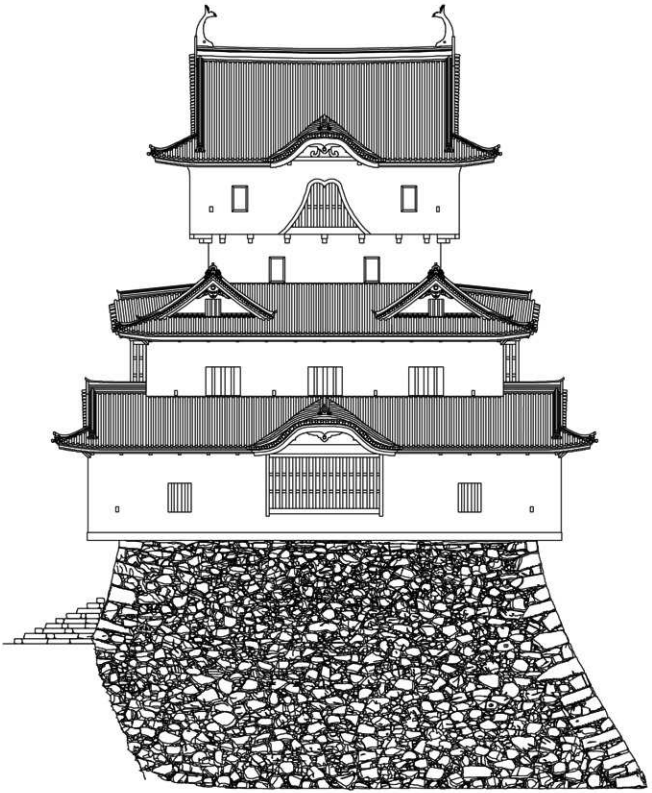
高松城天守復元桁行断面図（中央階段案・艮櫓参考）



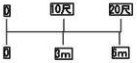


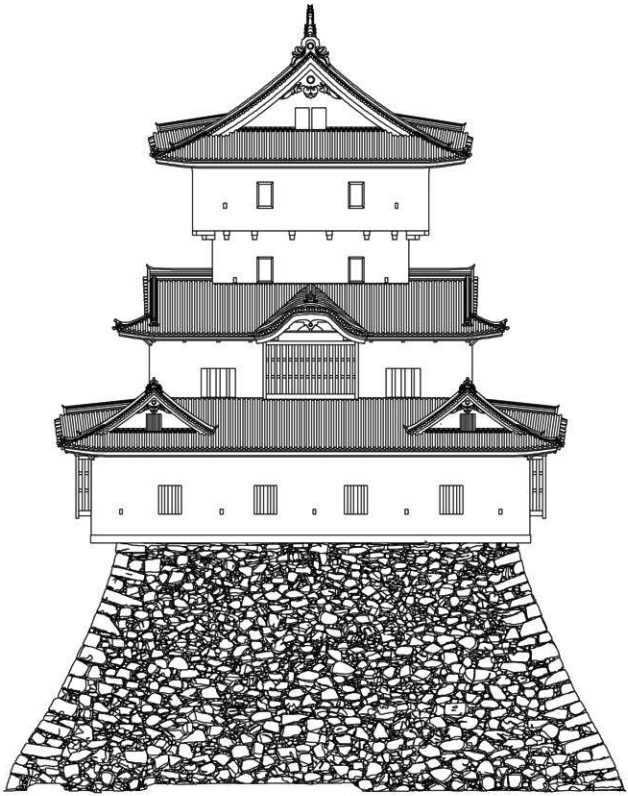
高松城天守復元西立面図



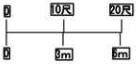


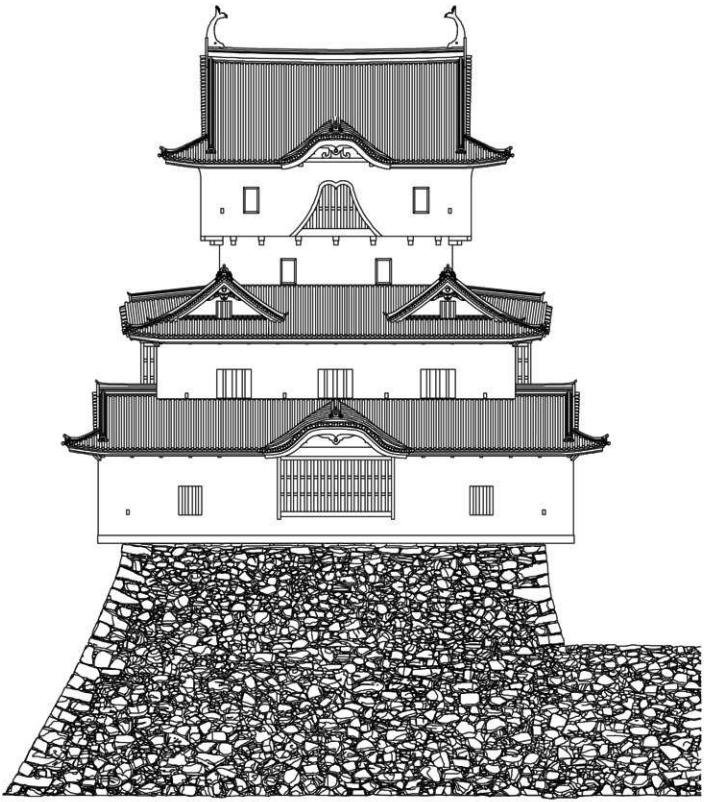
高松城天守復元南立面図



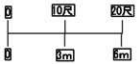


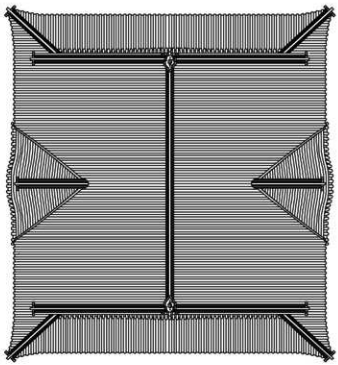
高松城天守復元東立面図



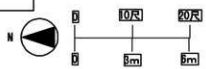


高松城天守復元北立面図





高松城天守復元屋根伏図



土器観察表

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
1	陶器(肥前系) 蓋		9.4	3.9	2.1	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	10YR/1 灰白		
2	磁器(肥前系) 中碗蓋		9.0	5.0	2.6	昆虫・花 圏線2条・花	灰白	透明	青(呉須)	
3	陶器 急須蓋		5.4		1.4	圏線	2.5Y7/2 灰黄	白	濃い青	
4	磁器(肥前系) 碗		6.8	3.0	3.4	染色体様 昆虫文	N8/0 灰白	透明	濃い青・茶	
5	磁器 碗		12.0	4.4	5.8		N8/0 灰白	透明	濃い青	
6	磁器 碗		11.2	4.2	6.1	丸文・集線文	10GY8/1 明緑灰	透明	青・オリーブ	高台:一重方形枠内に変形文・見込・五弁花文
7	磁器 碗		11.4	4.0	4.7	回転ナデ・草花文 回転ナデ	白	透明	青	
8	磁器 碗		11.4	6.2	6.4	回転ナデ・草花文・圏線 回転ナデ・圏線	10Y8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	オリーブ	
9	磁器 碗		10.0	4.0	5.8	圏線13条 圏線3条・昆虫文	2.5Y7/1 灰白	透明	藍色	
10	磁器 碗		11.2	4.2	5.5	回転ナデ・草花文 回転ナデ・昆虫文	N8/0 灰白	淡水	青	
11	磁器(肥前系) 鉢			8.6	(4.6)	○×文・草花文 きりん・草花文	灰白	透明	濃い青・朱・黒・明褐灰・緑	
12	磁器(肥前系) 手塩皿(白磁)		13.4	7.0	3.8		N8/0 灰白	10GY8/1 明緑灰		底面:墨書「アコヤ安五家」
13	磁器(肥前系) 皿			6.0	(1.8)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	淡水	青	底部:刻印「中」
14	磁器(肥前系) 皿			5.8	(1.5)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	透明	青	底部:刻印「中」
15	磁器(肥前系) 皿			6.1	(1.3)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	2.5Y8/1 灰白	黒褐・灰	底部:刻印「中」
16	磁器 皿			6.0	(1.7)		N7/0 灰白	透明	濃い青	底部外面:「中」(焼成後)
17	磁器(肥前系) 皿		10.3	5.8	2.3	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	5B7/1 明青灰	青	底部:刻印「中」
18	磁器(肥前系) 仏飯器		6.2	5.0	6.2		N8/0 灰白	透明	コバルトブルー	
19	磁器 仏飯器		6.5	3.4	6.0	圏線4条・タコ唐草	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明色灰	濃い青・褐	
20	磁器 仏飯器		6.2	4.2	6.1		N8/0 灰白	透明	濃い赤・黒・濃い青・エメラルド	
21	磁器 猪口		4.2	2.8	3.9	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	透明	青	
22	陶器(瀬戸系) 猪口		6.2	4.5	5.5	焼継痕	N8/0 灰白	透明	濃い青・呉須	焼継痕
23	磁器(肥前系) 小瓶		1.6		(5.0)	タコ唐草	5Y7/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	濃い青	御神酒徳利
24	陶器(肥前系) 小瓶			4.0	(8.8)	草花文	N8/0 灰白	5B7/1 明青灰	濃い青	
25	磁器(肥前系) 皿		31.0	19.2	4.9	唐草文 草花文・花唐草文	白	透明	青	墨書「太□成化□□」 刻印「〇〇」
26	磁器 蓋		8.0		0.9	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	緑		
27	陶器(屋島焼) 蓋			4.2	(1.7)	回転ナデ	5YR7/8 橙	2.5YR6/8 橙		刻印(屋島)
28	軟質施釉土器 蓋		8.8	4.0	2.2	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR7/8 橙	2.5YR4/8 赤褐		
29	陶器(瀬戸美濃系) 蓋		11.0	3.4	2.5	回転ナデ 回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y8/2 灰白	青	墨書「口預」
30	陶器(理兵衛焼) 碗			2.6	(1.6)	回転ナデ	5Y6/1 灰	2.5GY オリーブ灰	青・黒・朱	高台:刻印「高」
31	陶器(理兵衛焼) 碗			3.6	(2.2)	回転ナデ・三葉葵紋 回転ナデ	7.5Y7/2 灰白	透明	青	
32	陶器 碗				(2.4)	回転ナデ・紅葉文 回転ナデ	N7/0 灰白	5Y8/2 灰オリーブ	コバルトブルー	
33	陶器 碗				(1.9)	回転ナデ・紅葉文 回転ナデ	5Y7/1 灰白	透明	コバルトブルー	
34	磁器(現平焼) 碗		12.8	7.0	5.1		2.5Y8/2 灰白	金茶		
35	陶器(瀬戸美濃系) 碗		13.6	7.0	3.8	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/3 淡黄	透明		

報文番号	器種	図版	法量(cm)			調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
			口径	底径	器高					
36	陶器 碗		12.4	4.2	5.6	回転ナデ 回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白		底面:墨書
37	陶器 中碗		11.2	6.2	5.2		2.5Y7/1 灰白	5Y7.2 灰白	濃紺	
38	陶器(瀬戸・美濃系) 碗		10.8	4.5	7.2		2.5Y8/2 灰白	5Y7/3 浅黄	青・松葉	墨書「乃」
39	陶器(瀬戸美濃系) 碗			4.5	(3.2)	回転ナデ 回転ナデ	10Y8/1 灰白	7.5Y8/2 灰白		貫入・墨書「アヌ」
40	陶器(京信楽系) 碗			4.2	(1.9)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y7/6 黄		底部:墨書「林鹿」
41	陶器(京信楽系) 碗			4.0	(2.0)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/3 淡黄	5Y8/2 灰白		墨書「開」
42	陶器(備前焼) 碗			5.2	(1.2)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR5/1 赤灰	10R5/2 灰赤		底面:刻印「A」
43	陶器(理兵衛焼) 鉢		15.7		(3.0)	回転ナデ	5Y7/2 灰白	N8/0 灰白	コバルトブルー	
44	陶器 鉢		21.4	9.6	8.3	回転ナデ・花文 花文	7.5YR7/6 橙	2.5Y8/2 灰白	赤(10R4/6)・薄緑・黒	
45	陶器(京信楽系) 皿		8.4	4.2	1.9	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄		
46	陶器(備前焼) 灯明皿		10.8		1.8	回転ヘラケズリ, 回転ナデ 回転ナデ	10R4/3 赤褐	2.5YR5/3 にぶい赤褐		底面:回転糸切り後 回転ヘラナデ
47	陶器(瀬戸美濃系) 皿		12.4		(1.8)	回転ヘラケズリ・回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄		こげ茶・茶・緑	
48	陶器 植木鉢			8.7	(4.0)	回転ナデ 回転ナデ	5YR8/4 淡橙 5YR8/4 淡橙			墨書(解読不明)
49	陶器 水鉢		24.2		(9.5)		5Y8/2 灰白	5Y8/3 淡黄	青	
50	陶器(瀬戸美濃系) 水鉢		38.6		(18.3)		2.5Y7/2 灰黄	7.5Y6/2 灰オリーブ		
51	陶器(瀬戸美濃系) 水鉢			21.2	(6.5)	回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	5Y6/3 オリーブ黄		胎土目・砂目・墨書「小石」
52	陶器(屋島焼) 小瓶			3.0	(5.7)	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	5YR8/4 淡橙	透明	オリーブ	
53	陶器 瓶		1.8	2.8	10.4	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	5G4/1 暗緑灰		
54	陶器(備前焼) 中瓶			6.4	(7.7)	回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ナデ	2.5YR5/2 灰赤	2.5YR3/3 暗赤褐		
55	陶器(屋島焼) ちろり			9.0	(5.6)	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/6 橙	外:薄緑 内:橙		底面:刻印「屋島」
56	陶器(京信楽系) 瓶			11.0	(3.3)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/2 灰白	透明		底面:墨書
57	陶器(大谷焼) 大瓶			10.2	(3.2)	回転ナデ 回転ナデ	10R5/4 赤褐	10R3/2 明赤褐		墨書「東」
58	陶器(備前) 仏花瓶			7.4	(12.2)	18条の沈線	外:2.5YR4/2 灰赤 内:2.5YR6/6 橙			
59	燭台				10.5		N8/0 灰白		青紫・茶・藤	
60	陶器(理兵衛焼) 急須		9.8		(3.2)	回転ナデ・昆虫文 回転ナデ	5Y7/3 浅黄	白	黒 コバルトブルー	
61	土人形				(6.4)		2.5YR5/6 明赤褐			
62	土師質土器 焼塩壷			6.2	(8.3)	ナデ・ヘラナデ ヘラナデ・未調整	5YR6/6 橙	2.5YR7/4 淡赤橙		底面:板目後ナデ
63	弥生土器 壷		26.0		(1.6)	マメツ マメツ	外:5YR6/6 橙 内:2.5YR6/6 橙			
64	弥生土器 コシキ			3.8	(3.5)	タタキ ヘラケズリ	外:7.5YR5/4 にぶい褐 内:10YR5/4 にぶい黄褐			
65	磁器(瀬戸美濃系) 中碗蓋		8.4	3.6	1.9	型紙摺り	白	透明	青・黄緑	
66	磁器(瀬戸美濃系) 蓋			4.0	(1.9)	回転ナデ・網目文	N8/0 灰白	透明	青	高台:一重方形枠内に変形字 内面に茶色染料付着
67	磁器(肥前系) 蓋		8.8	3.5	3.1	回転ナデ, 草花文	N8/0 灰白	5GY8/1 灰白	青	
68	磁器(肥前系) 紅猪口			2.6	1.3		N8/0 灰白	白		
69	磁器(瀬戸美濃系) 小杯		7.4	2.8	3.1	染色体文・ コンニャク印判	N8/0 灰白	透明	紺・オークル	
70	磁器 猪口		6.4	3.0	4.3		N8/0 灰白	N8/0 灰白		
71	磁器 碗		7.6	2.6	3.1	回転ナデ 染色体状	白	透明	青・茶	

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
72	磁器(肥前系) 碗		9.2	4.2	6.0	草花文・圏線 虫虫文・圏線	7.5GY 明緑灰	透明	濃い青	
73	磁器(肥前系) 碗		10.4	4.0	6.4	圏線・2重線文 圏線・2重線文×＋文	白	7.5GB/1 明緑灰	青	
74	磁器(肥前系) 広東碗		11.4	5.4	5.1	草花文 虫虫文	白	10GY8/1 明緑灰	濃い青	
75	磁器 染付碗			4.5	(3.8)	草花文 回転ナデ	N8/0 灰白	10Y8/1 灰白	青・群青	
76	磁器 碗		11.4	4.0	4.7	すすき	N8/0 灰白	7.5GY7/1 明緑灰	緑・茶	
77	磁器(肥前系) 碗		10.2	4.1	5.3	回転ナデ・草花文 回転ナデ	N8/0 灰白	透明	青・群青	高台に略文字
78	磁器(肥前系) 碗		10.5	4.2	5.7	回転ナデ	N8/0 灰白	透明	青	
79	磁器(肥前系) 碗		10.4	4.2	5.0	網目文	N8/0 灰白	7.5GB/1 明緑灰		
80	磁器(肥前系) 碗		11.2	4.4	5.2	回転ナデ・圏線 回転ナデ・圏線・直線文	N8/0 灰白	透明	青	見込みに砂目
81	磁器 染付碗				(1.9)	回転ナデ 菊紋(三ツ葉葵)	白	透明	紺	
82	磁器(肥前系) 碗		15.0	4.8	6.1		N8/0 灰白	透明	濃い青・群青	
83	磁器 皿		5.5	2.6	1.5	回転ナデ	白	5GY8/1 灰白		
84	磁器 皿		5.6	2.8	2.0	回転ナデ	白	5GY8/3 灰白	濃い青	
85	磁器(肥前系) 皿			5.4	(1.3)		N8/0 灰白	流水	呉須	底部:刻印「中」
86	陶器(肥前系) 皿			6.0	(1.9)	山水画	N8/0 灰白	透明	濃い青	底面:刻印「中」
87	磁器(肥前系) 皿		10.0	5.8	2.6	回転ナデ 回転ナデ・山水画	N8/0 灰白	透明	濃い青	底部:刻印「中」
88	磁器(肥前系) 皿		10.0	6.0	2.7	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/1 灰白	透明	青	刻印「中」
89	磁器(肥前系) 皿		13.0	8.8	3.6		N8/0 灰白	透明		
90	磁器(肥前系) 皿		13.0	6.7	3.5		N8/0 灰白	水		蛇の目凹形高台
91	磁器(肥前系) 皿			8.0	(2.6)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	透明	青	蛇の目凹形高台 刻印「中」
92	磁器(肥前系) 皿		12.6	7.6	3.2	山水画	N8/0 灰白	透明	青・茶	釉花・蛇の目凹形高台「中」
93	陶器(肥前系) 皿		10.2	6.0	2.4	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	透明	青	刻印「中」
94	磁器(肥前系) 皿			7.6	(2.2)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	N8/0 灰白	透明	青	墨書(解読不明)・刻印「中」・蛇ノ目高台
95	磁器(肥前系) 皿			8.0	(2.9)	回転ナデ 回転ナデ・花唐草文・唐草文	N8/0 灰白	透明	青	底部:二重方形枠内に「満福」
96	磁器(肥前系) 皿		10.6	7.4	3.2	型紙摺り	白	N8/0 灰白	濃い青	蛇の目凹形高台・ピン痕5ヶ所
97	磁器(肥前系) 大皿		36.0	21.0	4.7	型紙摺り	N8/0 灰白	5G7/1 明緑灰	濃い青	底面にハリ
98	磁器(肥前系) 皿			10.8	(2.9)		2.5YB/1 灰白	透明	コバルトブルー・朱・緑・金	
99	磁器(肥前系) 瓶		1.6		(12.5)	タコ唐草	2.5YB/1 灰白	透明	青	
100	磁器(肥前系) 碗				(3.6)	回転ナデ	白	透明	赤(7.5R4/6)・金・青	
101	陶器 ミニチュア蓋		3.6		(1.7)	ナデ ナデ	7.5YR6/8 橙	白・黄		
102	陶器 蓋		5.8		(1.3)	回転ナデ 回転ナデ, 回転糸切り	5YR6/4 にぶい橙	5Y7/3 浅黄		底面回転糸切り
103	陶器 蓋物蓋		4.4		0.9		2.5YB/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄		
104	陶器 蓋		5.8		(1.4)	ヨコナデ 指ナデ・ヨコナデ	5YR6/8 橙	透明	緑・白	
105	陶器(屋島焼) 蓋(土瓶)		7.2		3.2	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/8 橙	5YR5/8 明赤褐		刻印「屋島」
106	陶器 蓋		9.2		(1.4)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y6/2 灰黄	10YR6/3 にぶい黄橙		墨書「かの」
107	陶器 土瓶蓋		10.0		2.4	回転ヘラケズリ	2.5Y5/2 暗灰黄	5Y5/2 灰オリーブ		

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
108	陶器(屋島焼) 蓋		9.5	4.2	2.4	回転ナデ 底面:回転糸切り	5YR8/4 淡橙	2.5YR5/8 明赤褐		
109	陶器(大谷焼) 蓋		8.2	4.4	2.8	回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ナデ	2.5YR6/6 橙	5YR2/3 極暗赤褐		
110	陶器(屋島焼) 土瓶蓋		9.4		2.1	回転糸切り	5YR5/6 明赤褐	5YR5/8 明赤褐		底面:回転糸切り
111	陶器(瀬戸) 蓋		7.5		3.2		10YR7/3 にぶい黄橙	雪色	黒・赤茶	外側にハリが3ヶ所
112	陶器 蓋		12.8	つまみ径3.5	4.2	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙		暗赤褐(5YR3/2)・淡黄(5Y7/3)	
113	磁器 蓋		11.4	つまみ径3.0	2.7	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	7.5Y7/2 灰白		
114	陶器(備前焼) 中水注蓋		14.0		(1.6)	回転ナデ 回転ヘラケズリ・ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	10YR4/4 赤褐		
115	陶器 杯		5.1	2.9	2.7	回転ヘラケズリ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/2 灰黄		
116	陶器(京信楽系) 柴付碗		12.0	3.6	4.6	回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/4 淡黄	赤(10R4/6)・黄灰(2.5Y6/1)	
117	陶器 碗		12.0	4.6	5.4	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白		
118	陶器 皿		9.2	5.4	3.5	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	透明		全体に貫入
119	陶器(現平焼) 碗		13.8	7.4	5.4		2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/8 黄		
120	陶器(瀬戸美濃系) 碗		11.8	4.8	5.8	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/2 灰白	5Y8/2 灰白		
121	陶器 碗		10.6	4.6	6.0	回転ナデ	7.5YR5/1 褐灰	2.5Y4/1 黄灰		重ね焼痕
122	陶器 碗			3.4	(1.1)		2.5Y8/3 淡黄	透明		墨書「ス 小」
123	磁器 碗			4.0	(2.1)	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明緑灰		墨書
124	陶器 碗			4.2	(2.3)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	5Y7/2 灰白		墨書
125	陶器 碗			4.2	(1.7)	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/2 灰黄褐	10Y6/1 灰		墨書
126	磁器 碗			4.2	(2.9)	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5GY7/1 明緑灰		墨書「口所」
127	陶器 碗			4.6	(4.5)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	5Y6/2 灰オリーブ	黒	墨書:「石口」
128	陶器(瀬戸美濃系) 皿		13.8	6.6	3.6	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/2 灰白	オリーブ灰(10Y6/2)	
129	陶器(瀬戸美濃系) 皿		13.6	6.6	3.4	花盆文	10Y8/0 灰白	7.5Y8/2 灰白	オリーブ灰(10Y6/2)	
130	磁器(理兵衛焼) 碗			6.0	1.7	回転ナデ	10Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白		底部:刻印「高」
131	磁器(理兵衛焼) 碗			3.8	(2.6)		5Y8/1 灰	10Y6/1 灰		底面:刻印「高」
132	陶器(理兵衛焼) 碗			4.6	(1.7)		10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙		底面:刻印「高」
133	磁器 蓋				(1.9)	三葉葵紋・回転ナデ	10Y7/1 灰白	5Y8/2 灰白	樹	
134	陶器(瀬戸美濃系) 皿		12.3	5.0	2.1		2.5Y8/2 灰白		明褐・オリーブ灰・暗褐	刻印(登窯) 墨書「多」
135	陶器 ミニチュア擂鉢		8.0		(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙		
136	陶器 ミニチュア擂鉢		6.4	3.4	2.6	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙	透明	緑・うすい黄・白	
137	陶器 皿		5.0		(2.3)	回転ナデ	2.5Y8/1 黄灰	透明	青・上塗り白	
138	陶器(現平焼) 火入		10.2		(4.3)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/8 黄		
139	磁器(現平焼) 火入		12.2	10.1	5.4		2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/8 黄		
140	青磁(肥前系) 火入		10.6	6.4	7.4		2.5Y7/1 灰白	5Y6/2 灰オリーブ		
141	陶器 瓶			10.0	(2.7)		2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR4/2 灰赤		底面:墨書「斗」
142	陶器 台付皿			10.0	(5.2)		7.5Y8/1 灰白	濃い緑		墨書「ツナ」
143	陶器 火鉢		15.6		(4.5)	回転ナデ	2.5Y8/2 灰黄			外面:刻印「金」

報文番号	器種	図版	法量(cm)			調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
			口径	底径	器高					
144	陶器(瀬戸系) 火鉢			15.0	5.3	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白		墨書(解読不明)
145	陶器 植木鉢			20.8	(5.5)	施釉	2.5Y8/2 灰白	深緑		底部:円孔2ヶ残存
146	陶器(瀬戸美濃系) 水鉢			23.0	(4.0)		5Y8/1 灰白	5Y6/4 オリーブ黄		底部:墨書(解読不明) 見込み部・高台に砂目積が残る。
147	陶器(備前焼) 擂鉢		26.8	14.6	10.1	体:ヘラケズリ後ナデ・ 底:未調整 卸目	外:2.5YR3/3 暗赤褐 内:2.5YR3/3 暗赤褐			
148	陶器(備前焼) 擂鉢		24.6	11.8	8.9	ヨコナデ・回転ヘラナデ ヨコナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐		
149	陶器 擂鉢			23.0	(9.0)	回転ナデ 擂目	外:10R5/4 赤褐 内:2.5YR5/4 にぶい赤褐			
150	陶器 鉢			14.0	(5.4)	回転ナデ 回転ナデ・胎土目	2.5Y8/2 灰白	10YR5/3 にぶい黄褐		底面:墨書「火」
151	陶器(屋島焼) 火鉢				(4.0)	ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/8 橙		刻印 大
152	陶器 髪油壷		1.6		(4.9)		2.5Y6/2 灰黄	2.5Y4/2 灰赤		
153	陶器 ミニチュア壷			2.6	(1.7)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y4/1 黄灰	透明		底面:静止ヘラケズリ
154	陶器 水滴		(4.6)	3.6	(2.0)	型合わせ	2.5YR2/3 極暗赤褐			
155	陶器(備前焼) 瓶			6.0	(5.2)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y5/6 明赤褐	10R4/6 赤		刻印 山八
156	陶器(大谷焼) 瓶(徳利)			4.6	(10.7)		5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐		
157	陶器(京信楽系) 仏花瓶		8.8	6.2	15.6	ナデ ナデ	2.5Y8/1 灰白		深緑	
158	軟質施釉陶器 土瓶			10.6	(1.6)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/6 橙	5YR6/8 橙		墨書
159	磁器 土瓶			7.8	2.7	回転ナデ 回転ナデ	10YR4/4 赤褐	5Y5/3 灰オリーブ		墨書「奥」
160	陶器 土瓶			8.0	3.3	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/4 淡黄	5Y8/4 淡黄		墨書(解読不明)
161	陶器(備前系) 土瓶				(4.4)	回転ヘラナデ 回転ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙		墨書
162	土師質土器 灯明皿		11.0	2.7	1.8	回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		煤付着・黒斑有
163	土師質土器 皿		13.1	9.3	2.5	ナデ ナデ, 回転糸切り	外:7.5YR7/6 橙 内:7.5YR7/6 橙			
164	土師質土器 蓋(焼塩壷)		7.2		1.4	ナデ 布目	外:5YR6/6 橙 内:5YR6/6 橙			
165	土師質土器 蓋(焼塩壷)		7.2		1.6	ナデ 布目	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙			
166	土師質土器 蓋(焼塩壷)		7.0	8.2	1.5	ナデ・布目 ナデ・指頭圧	2.5YR5/6 明赤褐 5YR6/4 にぶい橙			
167	陶器 焼塩壷		6.1		(6.1)	回転ナデ・指ナデ 回転ナデ・指ナデ	外:2.5YR5/6 明赤褐 内:2.5YR5/3 にぶい赤褐			外面:刻印
168	陶器 焼塩壷		6.4	4.4	8.6	横方向のヘラナデ 未調整	外:10R5/6 赤 内:10R5/6 赤			
169	土師質土器 火消し壷の蓋		11.0	16.2	2.7	ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ	7.5YR4/2 灰褐 7.5YR4/3 褐			煤付着
170	磁器(肥前系) 碗		11.6	4.7	6.0	高台:不明な銘 見込:五弁花文	10Y8/1 灰白	透明	5B5/1 青灰	
171	磁器(肥前系) 碗			4.4	(4.7)	回転ナデ・圏線・五弁花文 回転ナデ	N8/0 灰白	7.5GY7/1 明緑灰	青	
172	磁器 小杯			2.6	(1.9)	回転ナデ	N8/0 灰白	透明	外・底:青 内:金	
173	陶器(肥前系) 碗		10.0	4.5	5.6		N8/0 灰白	透明	青	
174	磁器 碗		6.4	2.6	3.1	染付 染付	N8/0 灰白	透明	濃い青	
175	磁器(肥前系) 皿		14.4	9.8	3.8	唐草文	N8/0 灰白	10GY8/1 明緑灰	濃い青	
176	磁器(肥前系) 紅猪口皿		4.6	1.4	1.3		N8/0 灰白	5GY8/1 灰白		
177	磁器(肥前系) 紅猪口皿		4.6	1.5	1.3		N8/0 灰白	2.5GY8/1 灰白		
178	磁器(肥前系) 皿		10.0	4.8	2.7	山水文	10Y8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青・群青	口縁部:茶色

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
179	磁器(肥前系) 染付鉢		33.2		(3.9)	回転ナデ	白	透明	青	
180	磁器(屋島焼) 蓋(土瓶)		9.4		(2.6)		5YR7/6 橙	2.5YR5/8 明赤褐		刻印「大」「屋嶌」
181	陶器(屋島焼) 皿(急須)				2.0	回転ナデ後ヘラミガキ 回転ナデ	外:10R5/8 赤 内:10R5/8 赤			内面:刻印「元光」
182	陶器(屋島焼) 蓋(土瓶)		12.4		3.1	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/6 橙	10R5/8 赤		刻印「屋島」
183	陶器(京信楽系) 壺			9.0	(1.9)	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙			底部:刻印「淑草」「井筒寿」
184	陶器(大谷焼) 小瓶			4.8	(7.3)	回転糸切り	5YR3/3 暗赤褐	5YR2/3 極暗赤褐		
185	陶器(屋島焼) 碗		5.1	3.4	2.0		5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	白・緑	
186	陶器(京信楽系) 灰吹			6.0	(4.8)	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR6/1 灰	外:7.5Y8/1 灰白 内:7.5YR3/4 暗褐		底面:墨書「ラ」
187	陶器(瀬戸美濃系) 水鉢		38.2		(7.3)		10YR8/1 灰白	緑		
188	陶器 碗				(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y5/4 黄橙 2.5Y7/4 浅黄			
189	土師質土器 皿		8.6	6.1	1.1	回転ナデ・糸切り後ナデ 回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙 10YR7/4 にぶい黄橙			
190	瓦器 椀		13.2		(3.2)	ヨコナデ・ナデ ヘラミガキ・指頭圧 ヘラミガキ	N5/0 灰 N5/0 灰			
191	瓦器 椀		18.0		(3.0)	指頭圧後ヘラミガキ ヘラミガキ	N4/0 灰 N3/0 暗灰			
192	土師質土器 杯		9.4		(1.5)	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙			
193	土師質土器 椀			6.4	(1.7)	回転ナデ・ナデ ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙			
194	土師質土器 足釜		24.9		(3.6)	ヨコナデ ヨコナデ・ナデ	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙			外面:煤付着
195	磁器(肥前系) 碗		10.6	3.6	5.4	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青	
196	磁器(瀬戸美濃系) 碗		10.4	3.4	5.2	草花文 昆虫文	N8/0 灰白	透明	濃い青	
197	磁器(肥前系) 碗		11.8	4.8	6.1	草花文	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明色灰	青・黒	高台内に銘状の「福」の銘
198	磁器 小杯		7.0	3.0	3.5	回転ナデ 回転ナデ	10Y8/1 灰白	透明	青	
199	陶器 鉢		15.8	6.5	6.6	圏線5条	N8/0 灰白	透明	青	
200	磁器(肥前系) 皿		13.0	7.8	3.3	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	透明	青	
201	磁器 紅猪口		4.8	1.6	1.5		5Y8/1 灰白	5B7/1 明青灰		
202	磁器(瀬戸美濃系) 碗			4.4	(2.8)		7.5Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	チャコール	底面:墨書「槙」
203	陶器(備前焼) 花入れ				(13.3)	指頭圧	N8/0 灰	2.5YR5/4 にぶい赤褐		七福神(大黒)
204	磁器(京信楽系) 蓋		9.8	3.6	3.3	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	透明	オリーブ灰	
205	陶器(屋島焼) 蓋		9.2	4.3	2.5	回転ナデ・ナデ 回転ナデ・回転糸切り	2.5YR5/8 明赤褐	5YR6/6 橙		底面:回転ヘラ切り
206	陶器(屋島焼) 蓋		9.2	3.6	2.1	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR6/6 橙		墨書「御祐筆所」
207	陶器(屋島焼) 蓋		9.2		3.0	回転ナデ・回転ヘラナデ 回転ナデ	10R4/4 赤褐	10R4/4 赤褐		
208	陶器(瀬戸美濃系) 皿		13.2	6.4	3.5	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/2 灰白	群青	
209	陶器(瀬戸美濃系) 皿		14.4	6.8	3.8	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/3 淡黄	5Y8/3 淡黄		
210	陶器 風炉			15.6	(3.9)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	10YR3/1 黒褐	7.5YR4/6 褐	墨書「記」
211	陶器 風炉			17.8	(4.4)	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	黒		内面:墨書
212	土師質土器 蛸壺		14.0		(5.3)	板ナデ後ナデ 指頭圧・ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙			
213	磁器(肥前系) 蓋		6.3	6.5	1.4	回転ナデ・山水文 回転ナデ	白	透明	青	
214	磁器(肥前系) 蓋		7.2		2.3	回転ナデ・草花文 回転ナデ	N8/0 灰白	透明	茶・緑・淡青	

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
215	磁器(肥前系) 蓋		8.7	3.7	2.8	回転ナデ・染付(蕨)・圏線 回転ナデ・染付(カブ)・圏線	7.5Y8/1 灰白	透明	淡明青	
216	磁器(肥前系) 蓋		8.6	3.6	2.5	回転ナデ・花蝶文・一重方形枠内に変形手 回転ナデ・山形文「成化年製」	白	透明	青	
217	磁器 蓋		10.4	4.2	3.0	回転ナデ・草花文・斜格子文 回転ナデ・宝尽文	白	透明	青・緑・朱	
218	磁器 小杯		5.6×5.2	2.4	1.8	回転ナデ・笹文 回転ナデ	白	透明	明青	
219	磁器(肥前系) 小杯		7.0	2.6	3.6	回転ナデ・笹葉文 回転ナデ	N8/0 灰白	7.5GY7/1 明緑灰	緑灰	
220	磁器 碗				(0.8)	回転ナデ・上絵 回転ナデ	白	透明	紅・黒・水	底面:墨書「口三造」
221	陶器 碗				(2.5)	回転ナデ・圏線	7.5Y8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目釉ハギ・墨書
222	磁器(肥前系) 碗			3.8	(2.4)	回転ナデ・圏線 回転ナデ	白	透明	青	底面:刻印「大」
223	磁器(肥前系) 碗			4.2	(3.6)	回転ナデ 回転ナデ・蛇の目釉剥ぎ	10Y8/1 灰白	10GY8/1 明緑灰	青	墨書
224	磁器(肥前系) 碗		10.1	5.4	5.7	回転ナデ・草花文 回転ナデ・「寿」	白	10GY8/1 明緑灰	青	
225	磁器(肥前系) 碗		10.2	3.8	6.0	型紙染め	白	透明	青	
226	磁器 酒杯			2.6	(1.5)	回転ナデ 回転ナデ・上絵	白	透明	金・青	高台内にコーヒー豆様付着
227	磁器 酒杯		7.0	2.6	2.8	施釉・染付 施釉・染付	N8/0 灰白	透明	青・金	
228	磁器 酒杯		8.0	3.0	3.0	施釉 施釉	白	透明		
229	磁器 酒杯		6.8	2.9	2.8	回転ナデ 回転ナデ	白	透明		「飯酒 商標祝ひ 銅町」
230	磁器(肥前系) 碗			4.6	(4.7)	回転ナデ 回転ナデ	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目釉ハギ・墨書「光春」
231	磁器(肥前系) 碗			4.0	(3.8)	回転ナデ・圏線6本 回転ナデ・蛇ノ目釉ハギ・圏線1本・染付	白	5B7/1 明青灰	青	
232	磁器(肥前系) 碗			4.0	(3.6)	施釉・蛇の目釉剥ぎ・ 重ね焼き痕	白	10GY8/1 明緑灰	青	見込:墨書(解読不明)
234	磁器(肥前系) 碗		10.6	4.6	6.2	回転ナデ・格子文・草花文 回転ナデ・圏線	白	10G7/1 明緑灰	青	
235	磁器(肥前系) 碗		10.4	4.2	6.0	回転ナデ・蝶・圏線 回転ナデ・圏線	10Y8/1 灰白	10GY8/1 明緑灰	青	
236	磁器(肥前系) 碗		7.8	3.8	5.2	回転ナデ・二重網目文 回転ナデ	白	7.5GY8/1 明緑灰	群青	
237	磁器(肥前系) 碗		10.8	3.8	5.4	回転ナデ・圏線 蛇の目釉剥ぎ	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青	見込:墨書
238	磁器 碗		12.0		(5.3)	回転ナデ 回転ナデ・型紙刷り	白	透明	青	内面:赤色染料付着
239	磁器(肥前系) 碗		10.6	4.0	5.8	回転ナデ・圏線5条・染付 回転ナデ・圏線3条	白	透明	青・緑	
240	磁器(肥前系) 碗		12.8	4.7	5.5	回転ナデ・家紋風のコンニャク印版 回転ナデ・玉弁花文	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青	見込みに砂目あり
241	磁器 碗		13.9	6.8	5.7	唐草文・圏線 よろけ縞文・網目文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・緑	底面:刻印「壽」
242	磁器(瀬戸美濃系) 仏飯器		5.6	4.0	4.2	回転ナデ 回転ナデ	白	透明・コバルトブルー		
243	磁器 仏飯器		6.1	4.8	5.9	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	透明	茶・緑・青	
244	磁器 小皿		8.1×8.2	3.7×3.8	2.4	花文・梅花	N8/0 灰白	透明	藍	
245	磁器 小皿		9.8	4.8	2.2	回転ナデ 回転ナデ・鶴・波	灰白	透明	青	
246	磁器(肥前系) 小皿		10.6	4.8	2.7	回転ナデ 回転ナデ・蛇の目釉剥ぎ	白	10GY8/1 明緑灰		
247	磁器(肥前系) 皿			8.0	(1.6)	山水文	白	透明	紺	底面:刻印「中」
248	磁器(肥前系) 皿			5.5	(2.1)	山水文	10Y8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:刻印「中」
249	磁器(肥前系) 皿			6.0	(1.4)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	白	2.5GY8/1 灰白	青	底面:刻印「中」
250	磁器(肥前系) 皿			6.2	(1.6)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	白	透明	ダークグレー	底面:刻印「中」

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
251	陶器 皿			8.4	(2.5)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台 刻印「中」
252	磁器 皿			5.6	(1.9)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:刻印「中」
253	磁器(肥前系) 皿			6.0	(1.9)	山水文	10Y 8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	群青	底面:刻印「中」
254	磁器(肥前系) 皿			5.6	(1.6)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:刻印「中」
255	磁器(肥前系) 皿		10.0	5.9	2.6	回転ナデ・輪花 回転ナデ・山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	高台内:刻印「中」 口紅
256	磁器 皿			8.0	(2.0)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台 刻印「中」
257	磁器 皿			10.0	(1.9)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:刻印「中」
258	磁器 皿			9.1	(1.7)	染付 山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台 刻印「小または山」
259	磁器 皿			5.8	(1.9)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:刻印「中」
260	磁器 皿		10.2	5.8	2.6	山水文	白	透明	青・緑・茶	底面:刻印「中」
261	磁器 皿		10.1	6.1	2.4	山水文	白	5G7/1 明オリーブ灰	青・口紅・茶	底面:刻印「中」
262	磁器(肥前系) 皿		10.0	6.0	2.4	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・鉄錆口紅	底面:刻印「中」
263	磁器 皿			7.2	(1.5)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台・ 刻印「中」
264	磁器(肥前系) 皿			8.0	(2.0)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台・ 刻印「中」
265	磁器(肥前系) 皿			7.4	(1.5)	山水文	N8/0 灰白	透明	青	刻印「中」
266	磁器(肥前系) 皿			8.0	(1.8)	回転ナデ 回転ナデ・山水文	10YR/1 灰白	透明	青	蛇の目凹形高台・ 刻印「中」
267	磁器(肥前系) 皿			7.8	(2.1)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台・ 刻印「中」
268	磁器(肥前系) 皿			7.4	(2.4)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	蛇の目凹形高台・ 刻印「中」
269	磁器 皿		12.6	7.9	3.3	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・鉄錆	底面:刻印「中」
270	磁器(肥前系) 皿		12.7	6.7	4.0		白	10GY8/1 明緑灰		輪花・蛇の目凹形高台
271	磁器(肥前系) 中皿		13.0	7.1	3.7			7.5GY8/1 明緑灰		蛇の目凹形高台
272	磁器(肥前系) 皿		13.2	7.4	3.5		白	10GY8/1 明緑灰		輪花・蛇の目凹形高台
273	磁器(肥前系) 皿			7.2	(2.1)	山水文	白	透明	青	底部:刻印「中」 蛇の目凹形高台
274	磁器 皿			7.6	(2.5)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・緑	蛇の目凹形高台・ 刻印「中」
275	磁器 皿		13.2	7.8	3.2	山水文	白	透明	青・茶	蛇の目凹形高台 刻印「中」
276	磁器 皿			5.4	(1.4)	山水文	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:刻印「ス」
277	磁器 皿			5.4	(1.5)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	刻印「ス」
278	磁器 皿			5.5	(1.7)	山水文	N8/0 灰白	透明	青	底面:刻印「ス」
279	磁器 皿			6.0	(1.9)	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・緑・茶	底面:刻印「丁」
280	磁器 皿		10.2	5.9	2.4	山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・緑・茶	底面:刻印「丁」
281	磁器 皿		13.2	7.8	2.9	山水文	白	透明	青・口紅	墨書「年年八六」・蛇 の目凹形高台
282	磁器(肥前系) 皿		21.5	13.6	3.6	圏線4条・呉須 圏線3条・花鳥文	N8/0 灰白	透明	赤・黒・緑・朱・青	
283	磁器(肥前系) 大皿		23.4	13.0	3.6	回転ナデ 回転ナデ・鶴・草文	N8/0 灰白	2.5GY8/1 灰白	青	
284	磁器(瀬戸美濃系) 鉢		(15.0)	(5.6)	8.0	回転ナデ・梅文・草花文 回転ナデ・草花文・渦詩 底部:「周平製」	白	透明	青・こげ茶・緑	底面:墨書「三十二」
285	磁器(肥前系) 皿			10.4	(2.0)	回転ナデ・圏線 回転ナデ・花鳥文(鶴)	白	透明	青	底面:「大明成化年製」
286	磁器(肥前系) 大皿			18.2	(3.0)	回転ナデ・染付 回転ナデ・山水文	白	7.5GY8/1 明緑灰	青	底面:ハリ4個

報文番号	器種	図版	法量(cm)			調整・文様(外・内)	色調1 (胎土)	色調2 (釉薬)	色調3 (呉須・土絵)	備考
			口径	底径	器高					
287	磁器(肥前系) 染付皿		36.0	21.0	4.7	型紙摺り	白	5G7/1 明緑灰	濃い青	
288	磁器(肥前系) 大瓶			8.4	(18.3)	花蝶文	N8/0 灰白		青・紺	
289	磁器(青磁) 香炉		12.0	5.4	4.2	回転ナデ・削り出し高台 回転ナデ・蔦文様	N8/0 灰白	5GY7/1 明オリーブ灰	5B5/1 青灰	
290	磁器 合子		6.9	6.8	2.1	斜格子文・網目・斜線	白	透明	青	
291	磁器 燗徳利			4.2	(1.0)	回転ナデ 回転ナデ	白	透明		底部:墨書「出戻」
292	磁器 徳利			5.4	(2.6)	回転ナデ・圏線1条 回転ナデ	白	透明		墨書「口丹口奥」
293	磁器 燗徳利			5.4	(3.8)	回転ナデ 回転ナデ	白	透明	青	底面:墨書「小」?
294	青磁 香炉		11.9	7.0	9.4	竹文・笹文 指おさえ・ヘラケズリ	白	10GY8/1 明緑灰		
295	青磁 仏花瓶			5.8	(9.5)	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	5GY7/1 明オリーブ灰		
296	水滴		長さ (3.7)	幅 (2.7)	厚 (2.4)	施釉 施釉	10Y8/1 灰白	透明	赤(7.5R4/8)・ 青・緑・茶	
297	磁器 水滴				(1.9)	染付	白	透明	青	墨書
298	磁器 水滴		長さ 4	幅 (2.8)	厚 2.2	施釉・染付 布目痕	白	透明	青	穿孔2ヵ所
299	白磁 土人形(石塔)			4.6	(1.0)	回転ナデ	白	透明		
300	陶器 蓋		6.8	2.9	1.7	回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ナデ・上絵付け	5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	緑	
301	陶器(京信楽系) 蓋		8.0		(2.4)	回転ナデ・呉須 回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	5Y8/2 灰白	青・こげ茶	
302	陶器(屋島焼) 蓋(土瓶)		8.5		2.5	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙		
303	陶器(京信楽系) 蓋		8.9		(2.5)	回転ナデ・染付・圏線 回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	透明	黒・緑	内面:墨書
304	陶器 蓋		6.2	3.6	1.2	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/2 灰白		
305	陶器 蓋		6.6		2.8	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	透明	青	
306	軟質施釉陶器 蓋				(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/6 橙	2.5YR4/8 赤褐		内面:刻印「屋嶋」
307	軟質施釉陶器 (屋島焼)蓋		11.0	1.6	3.4	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	2.5YR5/8 明赤褐		内面:刻印「屋島」「中」
308	軟質施釉陶器 蓋		12.2	つまみ部 2.2	3.6	回転ナデ・施釉(透明釉) 回転ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	10R5/8 赤		
309	軟質施釉陶器 (屋島焼)蓋		8.6		(1.4)	回転ナデ	2.5YR6/8 橙	2.5YR5/8 明赤褐		内面:墨書
310	軟質施釉陶器 蓋		11.4		(2.6)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/8 黄		刻印「富田」
311	軟質施釉陶器 蓋		9.6		3.3	回転ナデ 回転ナデ	5YR7/6 橙	2.5YR5/8 明赤褐		内面:刻印「屋嶋」
312	軟質施釉陶器 蓋		12.7		3.9	回転ナデ・沈線1条 回転ナデ	7.5YR7/6 橙	2.5YR5/8 明赤褐		
313	軟質施釉陶器 (屋島焼)蓋			4.3	(3.3)	回転ナデ・沈線5本 回転ナデ	7.5YR6/6 橙	5YR5/8 明赤褐		裏面:刻印「屋嶌」
314	陶器(備前焼) 蓋		6.0		1.1	回転ナデ 回転ヘラケズリ・回転糸切り	7.5R4/6 赤	10R5/4 赤褐		
315	陶器(備前焼) 蓋		11.2		1.5	回転ナデ 回転ゲラケズリ	10R5/3 赤褐	2.5YR5/3 にぶい赤褐		
316	陶器(京信楽系) 蓋			4.0	(2.2)	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	N7/0 灰白	7.5Y6/3 オリーブ黄		底面:回転糸切り
317	陶器(京信楽系) 蓋		7.9	2.8	2.2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ・回転糸切り	7.5Y7/1 灰白	透明	オリーブ黄(5Y/3)・ 黒・すみれ	底面・回転糸切り
318	軟質施釉陶器 (屋島焼) 蓋			つまみ部 1.8	(1.5)	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	10R5/8 赤・5YR7/6 橙	10R5/8 赤		墨書「ふ」
319	軟質施釉陶器 蓋		9.8	3.0	2.6	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	5YR7/6 橙	2.5YR5/8 明赤褐		底面:墨書(二重)
320	軟質施釉陶器 蓋		8.4	2.7	1.9	回転ナデ・ナデ 回転ナデ・回転糸切り	5YR7/6 橙	2.5YR5/8 明赤褐		
321	軟質施釉陶器 蓋		9.6	2.1		回転ナデ・ナデ 回転ナデ・回転糸切り	5YR6/6 橙	2.5Y6/6 橙		墨書「中五フ」
322	軟質施釉陶器 蓋			4.0	(1.4)	回転ナデ・ナデ 回転糸切り・墨書	5YR6/6 橙	2.5YR5/8 明赤褐		底面:墨書「出?」

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(鉄絵・土絵)	備考
323	陶器 蓋		15.1	6.6	2.1	回転ナデ 回転ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	10GY7/1 明緑灰・白	黒	
324	磁器 蓋		8.7	3.7	2.5	回転ナデ 回転ナデ・蛇ノ目釉ハギ	白	7.5GY8/1 明緑灰		
325	磁器(大谷焼) 皿		12.4		4.1	回転ナデ 回転ナデ	にぶい赤	黒		
326	磁器 皿		11.4		(1.9)	回転ナデ・唐草文・花文 回転ナデ	5P 8/1 青灰	透明	青	内面:墨書「たこ」
327	軟質施釉陶器 ミニチュア碗		5.0		(1.8)	ナデ ナデ	7.5YR/1 灰白	透明	緑・明黄褐	
328	陶器 碗			2.8	(0.7)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	透明		墨書「ナト」
329	陶器 碗			4.3	(1.1)	回転ナデ 回転ナデ・ピン痕	N8/0 灰白	5Y8/2 灰白		底面:墨書「哀」
330	陶器 碗			3.8	(1.2)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/2 灰白	透明		底面:墨書「小」
331	陶器(瀬戸美濃系) 碗			4.4	(2.7)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/2 灰白	透明		底面:墨書「小」
332	陶器 碗			4.2	(3.0)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5GY7/2 明オリーブ灰		底面:墨書「海」
333	磁器(肥前系) 碗		10.8	4.1	5.1	回転ナデ・圏線・草文 回転ナデ・圏線	白	7.5GY8/1 明緑灰	青・緑青	蛇の目釉剥ぎ
333	陶器 碗			3.8	(1.6)	回転ナデ・上絵 回転ナデ	10YR8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰	オリーブ	墨書「口さ」
334	陶器 碗			3.4	(1.7)	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白		底面:墨書「武」
335	陶器(理兵衛焼) 碗			3.0	(1.4)	回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄		底面:墨書・刻印「高」
336	陶器(理兵衛焼) 碗			3.0	(1.6)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y7/3 浅黄		底面:刻印「高」
337	陶器 鉢		12.0	6.4	6.4	ヘラケズリ 草花文	7.5YR4/3 褐	5Y8/1 灰白	青	底部:刻印 楽亭
337	陶器(理兵衛焼) 碗			4.8	(2.2)	回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/2 灰白		底面:刻印「高」 墨書(解読不明)
338	陶器(理兵衛焼) 碗			4.6	(1.3)	回転ナデ	2.5GY7/1 明オリーブ灰	7.5Y5/3 灰オリーブ		底面:刻印「高」
339	陶器(理兵衛焼) 碗			3.2	(2.2)	家紋	7.5Y8/2 灰白	5Y8/3 淡黄	濃い青	底面:刻印「高」
340	陶器(理兵衛焼) 碗			3.2	(2.2)		7.5Y8/1 灰	10GY6/1 緑灰	青	底面:刻印「高」
341	陶器(理兵衛焼) 碗				(2.7)	回転ナデ・上絵 回転ナデ	N7/0 灰白	7.5Y7/2 灰白	コバルトブルー	
342	陶器(理兵衛焼) 碗				(2.6)	回転ナデ・家紋 回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y7/3 浅黄	コバルトブルー	
343	陶器(理兵衛焼) 碗				(3.8)	回転ナデ・家紋 回転ナデ	5Y8/3 淡黄	透明	コバルトブルー	
344	陶器(備前焼) 碗			4.0	(2.4)	回転ナデ 回転ナデ	10R4/4 赤褐		にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	見込重ね焼き痕 刻印:備前金重製」
345	陶器 碗			4.3	(1.5)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/1 灰白	5YR3/3 暗赤褐		墨書「□□今井口」
346	磁器 碗			3.6	(2.1)	回転ナデ 回転ナデ	10Y8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白		底面:墨書
347	陶器(理兵衛焼) 碗		11.5		(3.7)	回転ナデ 回転ナデ・草花文	2.5Y8/3 淡黄	透明	スカイ・茶	
348	陶器(斑平焼) 碗		13.4	7.6	5.1	回転ナデ・圏線 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/8 黄	茶	
349	陶器(理兵衛焼) 碗				(2.7)	回転ナデ 回転ナデ・上絵付け	7.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	緑・赤	墨書
350	陶器 碗		11.2	5.0	4.3	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄	N5/0黒・5YR3/4 暗赤褐		
351	陶器 碗			4.6	(2.9)	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/1 灰白	N2/0 黒		墨書「大」
352	陶器 碗			5.2	(2.6)	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/1 灰白	N5/0 黒		底面:墨書
353	陶器(瀬戸美濃系) 皿		12.5	6.2	1.6	ヘラケズリ・回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	透明	緑・こげ茶・茶・銅	底面:墨書
354	陶器(瀬戸美濃系) 鳥ノ目皿		26.6		(4.2)	回転ナデ 回転ナデ・目跡	7.5YR8/2 灰白	透明	こげ茶	
355	陶器(理兵衛焼) 耳皿		6.8	2.8	(2.2)		5Y8/2 灰白	7.5Y8/1 灰白		見込み:三葉葵紋
356	陶器(理兵衛焼) 皿			4.5	(1.1)	回転ナデ	7.5Y8/2 灰白	透明		底面:刻印「高」

報文番号	器種	図版	法量(cm)			調整・文様(外・内)	色調1 (胎土)	色調2 (釉薬)	色調3 (呉須・土絵)	備考
			口径	底径	器高					
357	陶器(瑶平焼) 皿		7.6		1.2	回転ナデ 回転ナデ	10Y8/1 灰白	金茶		底部:ハリ2個
358	陶器(瑶平焼) 皿		9.9	5.3	2.3	ナデ ナデ・龍	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/8 黄		
359	陶器(屋島焼) 小皿		(10.6)	(5.0)	2.3	回転ナデ 回転ナデ・上絵付け	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5Y8/2 灰白	青・緑	底面:回転糸切り
360	陶器 皿			3.4	(1.7)		N7/0 灰白	黒		体部外面:墨書「陸口亀太郎」
361	陶器 皿			4.7	(2.1)	回転ナデ・ヘラケズリ	5Y7/1 灰白	N2/0 黒		墨書「口原口口」
362	陶器 皿			4.4	(1.9)	回転ナデ 回転ナデ	10Y8/1 灰白	2.5Y7/6 明黄褐	黒	底面:刻印「新」
363	陶器 皿		12.4	(5.6)	(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	5Y7/1 灰白	7.5Y8/2 灰白	青	外面:墨書「小」
364	陶器(理兵衛焼) 皿		10.4	3.8	1.3	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/2 灰白	2.5Y7/8 黄	緑	
365	陶器(瀬戸美濃系) 皿		12.8	8.0	2.1	指頭圧・回転ヘラケズリ	2.5Y8/2 灰白	透明	緑・茶・こげ茶	刻印「春逸」
366	陶器(瀬戸美濃系) 皿		13.8	6.4	1.7	回転ヘラケズリ・上絵 上絵付け	2.5Y8/2 灰白	透明	暗赤褐(5YR3/4) 明黄褐(10YR7/6) オリーブ黄(7.5Y6/3) 緑・赤	墨書
367	陶器(織部焼) 皿		12.4	5.0	2.0	指頭圧・回転ヘラケズリ 重ね焼き痕	5Y8/2 灰白	透明	緑・オリーブ・ こげ茶	底面:墨書
368	陶器 灯明皿		8.0	3.7	2.8	回転ナデ・静止糸切り 回転ナデ	5YR7/3 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙		見込:重ね焼き痕3個
369	陶器 灯明皿		8.5	3.9	2.0	回転ナデ 回転ナデ・回転ヘラ切り	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙		底部:回転ヘラ切り
370	陶器 蓋		10.6	4.2	2.2	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	2.5Y6/1 黄灰	5Y5/3 灰オリーブ		底面:回転糸切り後ナデ
371	陶器 灯明皿		7.5	3.3	1.4	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	5Y8/3 淡黄		
372	磁器 灯明皿		10.2		1.6	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	5Y8/3 淡黄		底面:墨書
373	磁器 鉢		20.0		(5.3)	三葉葵紋・回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	透明	オリーブ黒(5Y2/2)	
374	陶器 鉢		20.0		(7.3)	回転ナデ・染付 回転ナデ・染付	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5Y8/2 灰白	青	
375	磁器 火入		11.6	7.6	8.5	回転ナデ 回転ナデ	白	緑		
376	陶器 火入		12.4		(4.8)	回転ナデ 回転ナデ	灰白	緑		
378	陶器(備前焼) さや型鉢		12.6	12.4	6.6	回転ナデ・重ね焼き痕 回転ナデ・ナデ	10R5/2 灰赤 7.5Y R 4/1 褐灰			刻印「⊘」
379	陶器(備前焼) さや型鉢		12.7	12.2	7.5	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	2.5YR5/4 にぶい赤褐 2.5YR5/4 橙			外面:刻印「ロ」
380	陶器 鉢		14.4	13.4	7.8	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	10R4/4 赤褐 10R4/4 赤褐			刻印「田」
381	陶器(瀬戸美濃系) 水鉢			14.4	(2.3)	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/2 灰白	7.5Y8/3 淡黄		底面:墨書
382	陶器(瀬戸美濃系) 水鉢			16.6	(2.6)	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/1 灰白	5Y8/3 淡黄		底面:墨書
383	陶器 水鉢			15.0	(2.8)	回転ナデ・圏線 回転ナデ・回転糸切り	7.5Y8/1 灰白	透明	こげ茶	底面:墨書「ノス」
384	陶器(瀬戸美濃系) 植木鉢		21.4	10.2	8.8	回転ナデ・脚3個 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	5G6/1 緑灰		底部:穿孔1個
385	陶器(備前焼) ミニチュア擂鉢		8.6		(2.7)	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR5/1 褐灰	2.5YR4/3 にぶい赤褐		
386	陶器(備前焼) 擂鉢		9.8	4.0	4.2	回転ナデ 回転ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐 5YR5/3 にぶい赤褐			底面:刻印「蔦尾」
387	陶器(備前焼) 擂鉢		32.4	14.4	10.2	回転ナデ・ナデ ナデ・卸目	2.5YR3/4 暗赤褐 2.5YR3/4 暗赤褐			
388	陶器 擂鉢		33.2	14.0	136.0	回転ナデ・ハケ 卸目	5Y7/1 灰白	透明	にぶい赤褐(5YR4/3)	22本単位の卸目
389	陶器 擂鉢		37.7	12.8	16.1	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	5YR4/8 赤褐		
390	陶器(瀬戸美濃系) 火鉢			16.2	(6.5)	回転ナデ・竹葉文 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	オリーブ		内面:墨書「○×」
391	陶器(瀬戸美濃系) 火鉢			16.0	(4.9)	回転ナデ 回転ナデ・ナデ	7.5Y8/2 灰白	緑		底面:墨書「口氏」
392	陶器 甕			8.2	(5.3)	回転ナデ 回転ナデ	N6/0 灰	2.5YR3/3 暗赤褐		墨書

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
393	陶器 壺		34.2		(22.2)	回転ナデ・沈線8条 回転ナデ	2.5YR6/6 橙	N2/0 黒		
394	陶器(大谷焼) 壺			8.8	(9.2)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR3/1 黒褐		墨書
395	陶器(瑠平焼) 壺			5.8	(4.4)	回転ナデ・ヘラケズリ 回転ナデ	10YR7/6 明黄褐	2.5Y6/8 明黄褐		
396	陶器(備前焼) 小瓶			4.0	(5.5)	回転ナデ・ヘラケズリ・沈線4本 回転ナデ	10R4/6 赤	透明		底面:刻印「日」
397	陶器(萬古焼) 瓶			3.7	(8.0)	ナデ・沈線・布目痕	2.5YR4/2 灰赤		黄緑	高台内:墨書・刻印「萬古有節」
398	陶器(大谷焼) 瓶			9.2	(4.3)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR3/2 暗赤褐		底面:墨書
399	陶器(理兵衛焼) 花生		5.4		(8.1)	回転ナデ・亀甲文(上絵) 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	透明	コバルトブルー	
400	陶器(大谷焼) 瓶			8.0	(7.7)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	10R3/2 暗赤褐		底面:墨書
401	陶器(京信楽系) 土瓶				(4.0)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	5YR4/8 赤褐 10YR6/4 にぶい黄橙		外面:墨書
402	磁器(京信楽系) 土瓶			10.2	(4.4)	回転ナデ 回転ナデ	白	透明		体部外面:墨書
403	陶器(備前焼) 畑徳利		7.0		(9.0)	回転ナデ・指頭圧・施釉 回転ナデ・施釉	10R4/3 赤褐	10R5/6 赤		
404	軟質陶器 畑徳利			8.0	(5.6)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	2.5YR5/8 明赤褐 2.5YR6/6 橙			底面:刻印「忠光」
405	陶器 土瓶			5.3	(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	2.5GY7/1 明オリーブ灰 2.5GY7/1 明オリーブ灰			墨書「マキツ」
406	軟質施釉陶器 土瓶			8.8	(2.6)	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	5Y7/4 浅黄		外面:墨書
407	陶器(備前焼) 土瓶			9.0	(1.2)	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	2.5YR6/8 橙 2.5YR6/8 橙			
408	陶器 土瓶			8.2	(3.9)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄	5Y7/3 浅黄		墨書
409	陶器 土瓶			7.8	(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙		底面:墨書「口ハ日」
410	陶器 土瓶			8.4	(3.6)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	暗赤褐(2.5YR3/4)	墨書「奥口」
411	陶器(屋島焼) 土瓶		11.2		(8.3)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR4/8 赤褐 2.5YR4/8 赤褐			
412	陶器(屋島焼) 土瓶			10.8	(7.2)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR5/8 明赤褐 2.5YR5/8 明赤褐			
413	陶器(京信楽系) 土瓶				(2.7)	回転ナデ・鉄泥塗布 回転ナデ	10YR8/2 灰白	鉄泥	明黄褐(10YR6/6)	外面:墨書
414	陶器 土瓶				(3.4)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/6 橙 2.5YR4/8 赤褐			墨書「ネ口」
415	陶器 土瓶				(4.4)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	5Y6/2 灰オリーブ		墨書
416	陶器 蓋				(1.1)	ナデ 回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄 10YR7/3 にぶい黄橙			墨書「十可(河)」
417	軟質施釉陶器 蓋				(1.1)		7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/8 明赤褐		線刻・墨書「口二」
418	軟質施釉陶器 土瓶				(4.3)	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	5YR7/8 赤褐 2.5Y7/6 明黄褐		外面:墨書
419	陶器 土瓶				(0.4)	回転ナデ 回転ナデ	5Y8/1 灰白 5Y8/1 灰白			底部:墨書「四弐」?
420	陶器 仏花瓶				(7.1)	回転ナデ ナデ・ヘラナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/4 淡黄	緑	
421	土師質土器 ミニチュア土器		5.2	2.4	4.4	回転ナデ・回転糸切り 回転ナデ後ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y7/2 灰黄		
422	土師質土器 杯			5.4	(1.2)	回転ナデ・回転糸切り 回転ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙			
423	土師質土器 杯			4.8	(1.6)	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙			
424	土師質土器 杯		12.2	8.2	1.6	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2 灰白			底面:回転ヘラ切り
425	土師質土器 小皿		6.1	3.4	1.2	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙			底面:回転糸切り
426	土師質土器 小皿		6.0	2.4	1.3	回転ナデ・糸切り痕 回転ナデ	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙			墨書「佐吉」
427	土師質土器 小皿		6.3	3.2	1.6	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	7.5YR7/6 橙			底面:糸切り

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
428	土師質土器 蓋(焼塩壺)		7.2	6.5	1.1	回転ナデ後ナデ 布目	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙			
429	土師質土器 蓋(焼塩壺)		7.0	5.9	1.1	ナデ・指頭圧 布目後ナデ	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙			
430	土師質土器 焼塩壺		7.4		(4.2)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/8 橙			
431	土師質土器 焼塩壺		6.9	5.3	9.4	横方向のナデ ヨコナデ・指押圧・ヘラナデ	5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙			
432	土師質土器 鍋蓋			10×9.2	(4.8)	ヘラケズリ ヘラナデ・ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 10YR8/6 黄橙			底面:墨書「あ」
433	土師質土器 鉢		11.2	11.0	6.4	回転ナデ後ナデ・ヘラケズリ 回転ナデ	2.5YR5/6 明赤褐 2.5YR5/7 明赤褐			底面:墨書「平口」
434	土師質土器 植木鉢			12.7	(11.1)	回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10R4/4 赤		底面:墨書「ムリ」
435	土師質土器 (御殿焼)カマド				(12.5)	ミガキ ハケ・指ナデ	10YR7/1 黒 10YR7/4 にぶい黄橙			刻印「みまやセ造」
436	土師質土器 火鉢			20.0	(5.5)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙 5YR7/8 橙			墨書「口瀧氏」
437	土師質土器 火鉢			20.4	(8.3)	回転ナデ ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙 5YR7/8 橙			墨書「瀧氏」
438	土師質土器 火鉢			13.0	(8.2)	回転ナデのちナデ 回転ナデ	5Y R 7/4 にぶい橙 5Y R 7/4 にぶい橙			底面:墨書「富口」
439	土師質土器 煙炉			18.8	(8.8)	化粧土・波状文 粗いハケ	2.5Y8/1 灰白 7.5YR6/4 にぶい橙			
440	土師質土器 七輪			(15.4)	(12.6)	回転ナデ	7.5YR7/1 明赤褐	2.5Y7/2 灰黄		底部:線刻「十八年」「口月十八日」「仕口レ」
441	土師質土器 煙炉			4.8	(1.6)	回転ナデ・回転糸切り 回転ナデ	5YR7/8 橙 5YR7/6 橙			外面:3ヶ所、内面:7ヶ所にヘラ記号
442	土師質土器 煙炉		32.4	25.2	28.7	ナデ・自然釉 粗いヨコハケ・板ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/2 灰褐		口縁内面:煤付着
443	弥生土器 壷		12.6		(1.5)	マメツ・竹官文2個 マメツ	5YR5/3 にぶい赤褐 5YR5/3 にぶい赤褐			
444	弥生土器 高杯		22.6		3.2	マメツ マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR6/4 にぶい黄橙			
445	弥生土器 高杯				(3.8)	マメツ マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR5/4 にぶい褐			
446	弥生土器 壷			8.2	(3.0)	ハケ ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙			
447	須恵器 杯身		18.0		(1.9)	回転ナデ 回転ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰			
448	須恵器 杯身				(1.9)	回転ナデ・回転ヘラケズリ 回転ナデ	N7/0 灰白 N7/0 灰白			
449	須恵器 高杯				(3.3)	回転ナデ・沈線2条 ナデ	7.5Y7/1 灰白 7.5Y7/1 灰白			
450	須恵器 壷				(4.6)	平行タタキ 青海波状タタキ	2.5GY7/1 明緑灰 2.5GY7/1 明緑灰			
451	須恵器 壷				(4.8)	格子状タタキ 青海波状タタキ	7.5Y /1 灰白 5Y7/1 灰白			
452	瓦器 小皿		8.8	5.4	1.5	回転ナデ 回転ナデ	N7/0 灰白 N6/0 灰			
453	瓦器 椀		15.8		(3.3)	指頭圧後ヘラミガキ ナデ・ヘラミガキ	10YR4/1 褐灰 10YR4/1 褐灰			
454	瓦質土器 煙炉			14.8	(7.5)	ヘラミガキ ヨコハケ	黒・黒褐			
455	瓦質土器 羽釜				(8.0)	回転ナデ 回転ナデ	5Y2/1 黒 5Y2/1 黒			刻印「香西」
456	磁器 碗		10.6	4.2	5.7	回転ナデ・呉絣文 回転ナデ・昆虫文	10Y8/1 灰白	透明	青	
457	磁器 碗		10.4	5.2	5.7	回転ナデ・染付 回転ナデ・圏線3条	2.5GY8/1 灰白	透明	青・水色・暗緑灰	
458	磁器 碗			3.3	(1.9)	回転ナデ・染付 回転ナデ・染付	白	透明	朱・黒・緑	
459	陶器(京信楽焼) 碗			3.2	(1.7)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	10Y7/2 灰白		底面:墨書「か」
460	陶器(理兵衛焼) 碗			4.1	(1.4)	回転ナデ 回転ナデ	5GY8/1 灰白	5Y8/3 淡黄		底面:刻印「高」
461	陶器(備前系) 壷		5.2		0.9	ナデ 回転ナデ・回転ヘラナデ	10R 4/8 赤 2.5YR7/6 橙			P-455とセット
462	陶器(備前焼) 小型壷		5.8	2.5	4.5	口縁:回転ナデ 体部:回転ナデ・回転ヘラナデ・沈線	10R4/8 赤 10R4/8 赤			P-456とセット

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(鼠須・土絵)	備考
463	陶器(瀬戸美濃系) 水壺		29.2		(17.2)	回転ナデ・施刻 回転ナデ	白	7.5Y7/3 淡黄		
464	瓦器 椀		13.8		(2.8)	指頭圧後ヘラミガキ ナデ後ヘラミガキ	N5/0 灰 N5/0 灰			
465	磁器 皿				(2.8)	輪火 輪火	N8/0 灰白	透明		
466	土師質土器 小皿		8.5	5.1	1.3	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	5YR6/8 橙 5YR7/8 橙			
467	黒色土器B類 椀			4.4	(1.1)	回転ナデ ヘラミガキ	N5/0 灰 N4/0 灰			
468	黒色土器 椀		17.1		(2.1)	ヨコナデ・指頭圧後ヘラミガキ ナデ後ヘラミガキ	2.5Y8/1 灰白 N5/0 灰			
469	土師質土器 椀		18.3		(3.0)	ヨコナデ・ヘラミガキ 密なヘラミガキ	10R5/8 赤 10R6/6 赤橙			
470	瓦器 碗		13.0		(2.7)	ヘラミガキ・ヘラミガキ ヘラミガキ・ナデ	10YR2/1 黒 10YR2/1 黒			
471	瓦器 椀			4.4	(1.3)	回転ナデ・ヘラミガキ ヘラミガキ	5PB1.7/1 青黒 5PB1.7/1 青黒			
472	須恵質土器 壺			9.4	(4.3)	回転ナデ ナデ	7.5Y6/1 灰 10Y6/1 灰			
473	磁器 皿			7.3	(2.0)	蛇の目凹型高台	N8/0 灰白	透明		ピン痕3ヵ所
474	陶器(肥前系) 碗			7.3	(1.7)	回転ナデ・白土による刷毛文様 回転ナデ・白土による刷毛文様	7.5Y8/2 灰白	5Y8/3 淡黄		
475	陶器(備前焼) 壷		10.8		(2.0)	回転ナデ 回転ナデ・回転ヘラケズリ	2.5YR6/6 橙	2.5YR3/6 暗赤褐		
476	瓦器 椀		16.7		(2.9)	回転ナデ・指頭圧 回転ナデ・ヘラミガキ	7.5Y6/1 灰 7.5Y6/1 灰			
477	土師質土器 皿		9.0	7.0	1.2	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙			
478	土師質土器 杯				(2.3)	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 10YR8/3 浅黄橙			
479	黒色土器 椀			5.7	(1.3)	回転ナデ ナデ	5YR7/4 にぶい橙 7.5Y2/1 黒			
480	陶器(備前焼) 擂鉢				(5.5)	回転ナデ 回転ナデ	10R4/1 暗赤灰 7.5YR5/2 灰褐			
481	土師質土器 杯		10.4		(2.1)	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙 5YR7/3 にぶい橙			
482	土師質土器 杯		14.4		(2.8)	回転ナデ 回転ナデ	10YR8/6 黄橙 10YR8/6 黄橙			
483	土師質土器 皿		7.3	4.8	1.1	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	2.5YR7/6 橙 2.5YR7/6 橙			
484	須恵質土器 杯		17.0		(2.5)	回転ナデ ヨコヘラミガキ	5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白			重ね焼き痕
485	土師質土器 杯		12.2		(2.3)	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙			
486	土師質土器 杯			6.4	(0.7)	回転ナデ 回転ナデ・回転糸切り	10YR8/3 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙			底部:糸切り痕
487	土師質土器 杯				(2.9)	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙 2.5YR6/6 橙			
488	瓦器 小皿				(2.0)	口縁部:ナデ・体部:指頭圧 ヘラミガキ・回転ナデ	5Y2/1 黒 5Y2/1 黒			
489	土師質土器 椀		17.4		(2.5)	回転ナデ後ヘラミガキ ヘラミガキ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙			
490	陶器 碗		9.5		(2.3)	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/4 淡黄		
491	陶器 壷		9.2		(1.0)	回転ナデ 回転ナデ	N6/0 灰	2.5Y3/1～3/3 黒褐～暗オリーブ褐		
492	陶器(備前焼) 壷				(3.1)	回転ナデ・櫛描波状文5本 (単位不明) 回転ナデ	10YR4/1 褐灰 5YR5/3 にぶい赤褐			
493	陶器 擂鉢		22.7		(4.6)	回転ナデ・ヘラナデ 回転ナデ	N4/0 灰 N4/0 灰			
494	土師質土器 皿		7.8	6.1	1.3	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	7.5YR6/4 浅黄橙 7.5YR6/4 浅黄橙			
495	土師質土器 皿		9.5	7.7	0.9	回転ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい橙			
496	土師質土器 皿		10.2	6.7	1.7	回転ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙 10YR7/2 にぶい黄橙			
497	土師質土器 皿		10.5		(2.1)	ナデ ナデ	7.5YR6/4 浅黄橙 7.5YR6/4 浅黄橙			

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(呉須・土絵)	備考
498	土師質土器 羽釜		18.2		(4.0)	ヨコナデ・指頭圧 ヨコハケ	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙			煤付着
499	土師質土器 羽釜		17.8		(3.9)	ヨコナデ・ヨコハケ・指頭圧 ヨコナデ・ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 10YR7/3 にぶい黄橙			
500	土師質土器 火鉢				(8.2)	ヘラナデ	5YR6/8 橙 7.5YR7/4 にぶい橙			内部:煤付着
501	瓦器 小皿		8.2		(2.0)	ヨコナデ・指頭圧 ヘラミガキ・ヨコナデ・ナデ	N6/0 灰 N6/0 灰			
502	瓦器 椀		15.2		(4.0)	ヨコナデ・指押さえ ナデ・ヘラミガキ	N5/0 灰・7.5Y6/1 灰 N4/0 灰			
503	瓦器 椀		16.4		(3.0)	指頭圧後ヘラミガキ 回転ナデ後ヘラミガキ	N4/0 灰 N5/0 灰			
504	瓦器 椀			4.3	(1.1)	回転ナデ・ナデ ヘラミガキ・ナデナデ	黒 黒			
505	陶器(備前系) 擂鉢				(4.3)	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR3/2 暗赤褐	2.5YR3/2 暗赤褐		
506	土師質土器 杯		9.8	6.4	1.5	回転ナデ・板目・ナデ 回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙		重ね焼き痕
507	土師質土器 足釜		32.6		(4.4)	回転ナデ・指頭圧 回転ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄橙		鍔以下に煤付着
508	瓦器 椀		14.0		(2.9)	ナデ・指頭圧 ナデ・ヘラミガキ	N4/0 灰	N3/0 暗灰		
509	瓦器 椀		15.5		(2.4)	ヘラミガキ・指頭圧 ヘラミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰		
510	瓦器 椀			5.6	(1.4)	回転ナデ・ナデ・指頭圧 ナデ・格子状暗文	N4/0 灰	N4/0 灰		
511	磁器 壷		11.2		(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	N8/0 灰白	7.5Y7/1 灰白		
512	陶器(備前焼) 擂鉢		23.0		(5.6)	回転ナデ 回転ナデ	7.5R5/3 にぶい赤褐	10YR5/2 灰黄褐	10R4/4 赤褐	
513	土師質土器 皿		7.7	6.8	1.0	回転ナデ・切り離し後ナデ 回転ナデ後ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙			
514	土師質土器 杯		10.4	6.4	(2.5)	回転ナデ・糸切り 回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙			
515	土師質土器 椀		14.2		(3.4)	回転ナデ・指頭圧 ナデ・ヘラミガキ	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙			
516	土師質土器 椀		15.4		(3.8)	回転ナデ・ナデ 回転ナデ・ナデ	10YR4/2 灰黄褐 10YR4/2 灰黄褐			
517	黒色土器A類 椀		17.6		(4.3)	回転ナデ後ヨコヘラミガキ・ 回転ナデ ヨコヘラミガキ	2.5Y7/3 浅黄 7.5YR1.7/1 黒			
518	黒色土器A類 椀			5.7	(1.6)	ナデ・回転ナデ ヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白 5Y3/1 オリーブ黒			内黒
519	須恵質土器 杯			4.6	(0.8)	ナデ・静止糸切り 回転ナデ・ナデ	7.5Y7/1 灰白 7.5Y8/1 灰白			
520	土師質土器 皿		10.0	5.4	2.1	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/8 明黄褐		
521	瓦器 皿		9.9	4.4	1.5	ナデ・指頭圧 ナデ・ヘラミガキ・暗文	N4/0 灰	N5/0 灰		
522	土師質土器 擂鉢		30.0		(5.5)	ヨコナデ・ヨコハケ・ナデ ヘラナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙			
523	土師質土器 土鍋		30.0		(5.7)	回転ナデ・ナデ 回転ナデ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙			
524	青磁 鉢			5.0	(1.8)	回転ナデ 回転ナデ	7.5GY8/1 明緑灰	10GY7/1 明緑灰		
525	陶器 鉢			7.6	(4.2)	回転ナデ・ヘラケズリ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR3/3 暗褐		
526	陶器 擂鉢		30.0		(10.8)	回転ナデ・ヘラナデ 回転ナデ・卸目	2.5YR5/2 灰赤 5YR5/2 灰褐			
527	陶器(備前焼) 擂鉢		32.0		(4.9)	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR4/2 灰褐 N5/0 灰			
528	土師質土器 皿		8.8	6.7	1.1	回転ナデ ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙			
529	土師質土器 杯		8.8		(2.6)	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/4 にぶい橙 10YR6/2 灰黄褐			
530	土師質土器 杯		10.6		(2.1)	ナデ ナデ	10YR8/4 浅黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙			
531	土師質土器 火鉢			14.4	(4.2)	回転ナデ・ナデ ナデ	2.5YR5/8 明赤褐 5YR6/8 橙			貫通していない円孔有
532	瓦器 皿		9.0		(1.6)	ヨコナデ・指頭圧・ナデ ナデ後指頭圧	2.5Y6/1 黄灰 N6/0 灰			
533	瓦器 椀		17.9		(4.6)	指頭圧・ヘラミガキ ナデ・ヘラミガキ	N5/0 灰 N6/0 灰			

報文番号	器種	図版	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様(外・内)	色調1(胎土)	色調2(釉薬)	色調3(鼻須・土絵)	備考
534	弥生土器 甕		30.0			マメツ マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/6 橙			
535	土師質土器 壷(焼塩壷)		8.0	5.8	1.5	回転ナデ・回転糸切り 回転ナデ	10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白			
536	陶器 杯		8.7	3.0	2.2	回転ナデ 回転ナデ				陽刻線の三葉葵 刻印:平田謹製
537	陶器 碗			5.6	(4.8)	回転ナデ・施釉 回転ナデ	5Y7/2 灰白	2.5Y6/3 にぶい黄		
538	陶器 燭徳利		6.5	5.9	15.4	回転ナデ 回転ナデ	10R5/6 赤	10R5/6 赤		
539	土師質土器 蛸壷		15.1	10.2	22.0	ナデ・ヘラケズリ ナデ・ヘラナデ・指頭圧	7.5YR6/4 浅黄橙	5YR7/4 にぶい橙		内外面:墨書 孔1個
540	磁器 皿			7.2	(2.1)	型打ち成形 型打ち成形	N8/0 灰白	7.5GY8/1 明緑灰		蛇の目凹形高台
541	磁器 皿			10.0	(1.8)	回転ナデ・染付・施釉 回転ナデ・染付・施釉	10YB/1 灰白	透明	淡青色	
542	土師質土器 焙烙		30.8		(3.6)	ナデ・指頭圧 ナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰		
543	土師質土器 杯		8.5	4.1	1.5	暗文				
544	弥生土器 甕		12.9		(8.4)	ヘラケズリ				
545	須恵器 杯身				(3.4)					
546	土師質土器 土釜				(4.4)					
547	陶器(備前系) 擂鉢				(7.4)					
548	須恵器 鉢				(3.5)					
549	瓦器 椀			5.6	(1.5)	暗文				
550	須恵器 擂鉢			15.8	(5.1)					
551	土師質土器 杯		11.9		(2.0)					
552	土師質土器 椀杯		15.8		(2.3)					
553	須恵器 椀杯				(3.2)	回転ナデ 回転ナデ				
554	瓦器 椀				(4.2)	暗文				
555	瓦器 椀			3.3	(0.9)	暗文				
556	瓦器 椀			5.6	(3.6)	回転ナデ・指頭圧 ナデ・暗文	N3/0 暗灰 N3/0 暗灰			
557	須恵器 こね鉢				(2.8)	回転ナデ 回転ナデ・ナデ	N8/0 灰 N8/0 灰			
558	土師質土器 塩焼壷蓋		7.4		(1.5)	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙			
559	土師質土器 足釜				(8.0)					
560	土師質土器 土釜		22.2		(4.3)					
561	土師質土器 土鍋		27.3		(2.8)					
562	磁器(肥前系) 碗			4.0	(4.2)	回転ナデ 回転ナデ・型虫文	白	透明	緑青	
563	磁器(肥前系) 碗		10.8	4.8	5.7	草花文(ボタン) 四方唐文・草文	白	透明	濃い青	

瓦観察表

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T1	軒丸瓦		(6.5)	14.2	1.7	15.4		ヘラナデ	ナデ・指頭圧・ナデ・布目	N4/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰	密	
T2	軒丸瓦		(5.8)		1.7	(7.5)		板ナデ・ナデ	ヘラナデ・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N4/0 灰・N6/0 灰白	密	
T3	軒丸瓦		(3.1)	13.0	1.6	14.1	2.1		板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T4	軒丸瓦		(15.7)		2.2	15.7	2.0	ミガキ	コビキB・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T5	軒丸瓦		(2.4)	13.1	1.9	13.4	1.7		板ナデ・指頭圧・ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	N5/0 灰	密	
T6	軒丸瓦		(9.0)	12.8	1.6	13.0	2.0	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・ゴザ目・コビキB・タタキ	N4/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰・N8/0 灰	密	
T7	軒丸瓦		(4.5)	12.2	1.7	14.5	1.8	ナデ・ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N6/0 灰	N7/0 灰白	密	
T8	軒丸瓦		(3.0)	12.2	1.6	12.8	1.7	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	5Y8/1 灰	N6/0 灰	N8/0 灰白	密	
T9	軒丸瓦		(6.5)	16.0	2.7	17.5	2.8	板ナデ・ミガキ	板ナデ・ヘラナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5Y 灰黄	密	
T10	軒丸瓦					17.4	2.3		板ナデ・指頭圧・ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/1 灰白	密	
T11	軒丸瓦		(3.9)	13.1	(1.8)	13.5	(1.3)	剥離	ナデ・指頭圧・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰	密	
T12	軒丸瓦		(4.3)	12.0	1.6	12.3	1.9	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白～N7/0 灰白	密	
T13	軒丸瓦		(3.5)		1.8	13.7	1.4		板ナデ・指頭圧・ナデ	7.5Y5/1 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T14	軒丸瓦		(17.9)	13.4	1.5	(6.5)	1.8	ヘラナデ・ミガキ	指頭圧・ナデ・板ナデ・布目・コビキB	N4/0 灰	N4/0 灰	N 灰白	やや粗	釘穴
T15	軒丸瓦		(3.6)	13.6	2.0	13.8	1.6		板ナデ・指頭圧・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N6/0 灰	密	
T16	軒丸瓦					13.0	1.4		板ナデ・指頭圧・ナデ	10Y8/1 灰	10Y5/1 灰	10Y8/1 灰	密	瓦当面:キラ粉付着
T17	軒丸瓦		(9.1)	(13.2)	2.0	(7.2)	2.3	マメツ	マメツ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	
T18	軒丸瓦		(7.4)	11.3	1.2	12.0	1.5	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・コビキB・タタキ	N3/0 暗灰	5Y4/1 灰	5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T19	軒丸瓦		(3.3)	12.3	1.9	12.8	1.5	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T20	軒丸瓦		(6.3)	11.7	1.5	12.2	1.3	ヘラナデ・ミガキ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0～N7/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T21	軒丸瓦		(15.9)	13.0	1.7	13.0	1.7	板ナデ・ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・コビキB・タタキ	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	釘穴
T22	軒丸瓦		(14.1)	13.0	1.3	13.3	1.8	ナデ・板ナデ	布目・コビキB・タタキ・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N5/0 灰	10Y8/1 灰白	密	釘穴
T23	軒丸瓦		(3.5)		1.7	(7.3)		ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T24	軒丸瓦		(8.9)	10.0	2.1	11.4		マメツ(ミガキ)	板ナデ・やや粗いナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	5Y8/1 灰	密	
T25	軒丸瓦					(5.7)	1.7		板ナデ・指頭圧・ヘラナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T26	軒丸瓦		4.3		2.2	(7.9)		ナデ	板ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y7/1 灰白	密	
T27	軒丸瓦		(2.9)	12.4	1.7	12.6	1.8	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	N6/0 灰	密	
T28	軒丸瓦		(13.2)	12.0	1.6	12.3	1.5	ミガキ・ナデ	コビキB・布目・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	釘穴
T29	軒丸瓦					12.8	1.8	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	巴・珠文:布目
T30	軒丸瓦		(9.8)	12.3	1.5	13.2	1.6	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T31	軒丸瓦		(5.0)	12.8	1.7	14.0		板ナデ・ヘラナデ	ナデ・板ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N5/0 灰・N8/0 灰白	密	
T32	軒丸瓦		2.9	13.0	1.8	13.7	1.9	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T33	軒丸瓦					(10.5)	2.0		板ナデ・指頭圧・ヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T34	軒丸瓦		(16.9)	12.3	1.8	12.8	1.8	ミガキ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB	N4/0 灰	N5/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	釘穴
T35	軒丸瓦		(4.2)	14.1	1.4	15.4	1.5	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T36	軒丸瓦		(6.3)	16.1	1.6	17.3	1.9	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T37	軒丸瓦		(3.0)			17.5	2.4		板ナデ・指頭圧・ナデ	2.5Y8/2 灰黄	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y5/2 暗灰黄	密	
T38	軒丸瓦		(8.5)	12.7	1.9	13.3	2.1	ミガキ・板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N8/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T39	軒丸瓦		(7.7)	12.2	1.5	12.7	1.3	ミガキ・ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB	N4/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T40	軒丸瓦		(2.3)	12.3	1.6	12.9	1.8	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T41	軒丸瓦		(3.3)	14.5	2.3	15.4	2.2	板ナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	7.5Y8/1 灰白・N3/0 暗灰	密	巴・珠文:布目・刷毛押圧
T42	軒丸瓦		(3.3)		1.9	(6.9)		ミガキ・ナデ	指頭圧・ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	前面:刻印
T43	軒丸瓦		(15.6)	13.6	1.8	(14.0)		ミガキ	ナデ・板ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T44	軒丸瓦		(4.9)	(13.4)	1.7	13.7	2.2	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T45	軒丸瓦		(5.1)	12.2	1.4	13.2	1.9	板ナデ・ミガキ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB・タタキ	N8/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0～N7/0 灰白	密	
T46	軒丸瓦					14.0	2.1	ナデ	粗いナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T47	軒丸瓦		31.2	15.0	2.2	15.6	2.0	ナデ・ミガキ・板ナデ	ヘラナデ・板ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N4/0～N3/0 灰～暗灰	N8/0 灰・10YR8/2 灰白	精良	釘穴2カ所
T48	軒丸瓦		(4.8)	12.4	1.6	12.9	1.5	ヘラナデ	指頭圧・ナデ・板ナデ・布目	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T49	軒丸瓦		(2.8)	12.8	2.1	13.2	1.9	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T50	軒丸瓦		(7.1)	13.1	(1.5)	13.6	1.8	ヘラナデ	指頭圧・ナデ・板ナデ・布目	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T51	軒丸瓦					(12.0)	1.7	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T52	軒丸瓦		(3.3)	12.4	1.7	12.2	2.8	ナデ	板ナデ・ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T53	軒丸瓦		(2.7)		1.7	11.9	1.5	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N8/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T54	軒丸瓦		(3.9)	13.0	1.5	(13.5)		ヘラナデ	ナデ・板ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T55	軒丸瓦		25.2	13.8	1.6	(3.6)		ナデ・ミガキ	布目・コビキB・タタキ・板ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T56	軒丸瓦		29.9	13.2	2.3	(6.7)		ナデ・ミガキ・指頭圧	ナデ・布目・コビキB・板ナデ	2.5Y8/3 淡黄	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/1 灰白	密	抽取組痕
T57	軒丸瓦		(2.7)	13.5		14.6	1.8	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	密	
T58	軒丸瓦					(10.8)	2.0		板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T59	軒丸瓦		(2.8)			(7.5)	1.7		板ナデ・指頭圧・ナデ	5Y7/1 灰白	N5/0 灰	N4/0 灰	密	
T60	軒丸瓦		(4.2)	12.6	1.7	13.3	1.7	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N6/0 灰・N8/0 灰白	密	
T61	軒丸瓦			12.7		13.4	1.9		板ナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T62	軒丸瓦		3.5	12.2	1.8	13.6	1.9	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T63	軒丸瓦					(10.7)	2.3	ナデ	板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T64	軒丸瓦		4.3	16.6		17.9	2.7	ナデ	板ナデ・ヘラナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	粗	
T65	軒丸瓦		(12.0)	12.2	1.7	13.2	1.6	ヘラナデ・ミガキ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB・タタキ	N5/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	釘穴
T66	軒丸瓦		(5.2)	13.2	2.1	13.4	1.7	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N6/0 灰・N8/0 灰		
T67	軒丸瓦		(5.3)		1.3	13.9	1.7	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	N5/0 灰・2.5Y8/1 灰白・10YR8/2 灰白	精良	
T68	軒丸瓦		(3.9)		1.7	12.8		ヘラナデ	ナデ・指頭圧・板ナデ	N5/0 灰	5Y6/1 灰	5Y8/1 灰	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T69	軒丸瓦		(5.2)	13.1	1.9	13.9	2.0	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T70	軒丸瓦		(4.9)	12.7	1.7	12.9	1.8	マメツ	板ナデ・指頭圧・ヘラナデ	5Y8/1 灰	5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	密	
T71	軒丸瓦		(4.5)	12.2	1.5	12.9	1.6	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T72	軒丸瓦		(6.4)	11.9	1.5	12.4	1.5	ヘラナデ	板ナデ・ヘラナデ・コビキB	N8/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T73	軒丸瓦		(6.5)	14.2	1.7	14.6	1.8	マメツ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB	N5/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰・10YR7/2 にぶい黄橙	密	
T74	軒丸瓦		(4.1)	13.5	1.6	14.6	1.8	板ナデ・ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T75	軒丸瓦		(2.5)			17.6	2.3		板ナデ・指頭圧・ナデ・	N8/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	密	瓦当面:キラ砂付着
T76	軒丸瓦					(8.6)		ナデ	板ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T77	軒丸瓦		(4.3)	12.6	1.5	13.0	1.5	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0～N5/0 灰	密	
T78	軒丸瓦		(3.7)	12.3	1.5	12.4	1.7	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰・2.5Y8/1 灰白	密	
T79	軒丸瓦					12.0	1.8	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・ヘラケズリ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T80	軒丸瓦		(3.0)		1.8	11.9	1.6	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	2.5Y3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	N6/0 灰・10YR7/2 にぶい黄橙	密	
T81	軒丸瓦					(8.2)	2.0		板ナデ・指頭圧・ヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T82	軒丸瓦		(3.0)	13.2		14.0	1.8	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰	密	
T83	軒丸瓦		(3.4)		2.0	13.0	2.0	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ砂付着・布目
T84	軒丸瓦		(2.0)	(12.9)		13.3	1.5		板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面・凹面:微量のキラ砂付着
T85	軒丸瓦		(11.6)	12.8	1.6	13.3	1.1	ナデ・ミガキ	板ナデ・指頭圧・指ナデ・布目・コビキB・タタキ	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ砂付着
T86	軒丸瓦		(4.6)		1.5	(5.6)		ヘラナデ	ナデ・板ナデ・布目・タタキ	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	良	
T87	軒丸瓦		(6.2)	(11.0)	1.7	(8.2)		ナデ	ナデ・板ナデ・ゴザ目	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y8/1 灰白	密	
T88	軒丸瓦		(7.3)	13.5	1.7	13.7	1.9	ナデ・ミガキ	板ナデ・指頭圧・ナデ・ゴザ目	N8/0 灰	N5/0 灰	2.5Y8/1 灰白	密	前面:刻印
T89	軒丸瓦		(2.9)		1.4	(7.5)		ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白～N6/0 灰	やや粗	瓦当面:キラ砂付着
T90	軒丸瓦					(7.3)	1.6	ナデ	板ナデ・粗いナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ砂付着
T91	軒丸瓦		(8.2)	13.4	1.5	13.8	1.9	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・布目・コビキB	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	密	
T92	軒丸瓦		(4.3)	12.8	1.6	13.0	1.7	ナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y5/1 灰	7.5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ砂付着
T93	軒丸瓦		(7.4)	12.0	1.6	12.4	1.5	ナデ・ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・コビキB	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	N4/0 灰	密	
T94	軒丸瓦		(10.7)	14.2	1.6	16.6	1.9	板ナデ	布目・コビキB・タタキ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白～N7/0 灰白	粗	凹面:抜取痕痕
T95	軒丸瓦		(2.0)		1.9	13.2	1.7	ナデ	指頭圧・ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T96	軒丸瓦		(7.4)	12.8	(1.5)	13.5	1.6	ナデ・板ナデ	タタキ・ナデ・指頭圧・板ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/1 灰白	密	周縁:キラ砂付着
T97	滴水瓦		(18.4)	27.0	1.8	(9.0)	1.8	板ナデ・ヘラナデ・やや粗いナデ	板ナデ・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	瓦当面:板状痕
T98	滴水瓦		(9.8)	(24.7)	2.1	(9.8)	1.9	板ナデ・粗いナデ	ヘラナデ・やや粗いナデ	5Y5/1 灰	7.5Y4/1 灰	5Y8/2 灰白	密	
T99	滴水瓦		(19.3)	27.4	1.8	10.8	2.2	板ナデ・ケズリ・粗いナデ	ナデ・ケズリ・ナデ	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	2.5Y8/1 灰白	密	
T100	滴水瓦		(8.5)	26.5	2.3	11.3	2.3	板ナデ・粗いナデ	ナデ・やや粗いナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T101	滴水瓦		(13.2)	(23.5)	2.1	9.8	1.8	板ナデ・ナデ・粗いナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	粗	
T102	滴水瓦		(3.8)	(11.8)	2.4	(10.4)	1.7	板ナデ	板ナデ・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	精良	瓦当面:刻印・ハナレ砂付着
T103	滴水瓦		(5.3)	(15.0)	1.8	(7.7)	1.5	指ナデ・剥離	剥離	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T104	滴水瓦			(24.8)		(9.7)	2.3	ナデ	板ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T105	滴水瓦		(13.0)	(19.6)	2.7	12.1	2.2	板ナデ・粗いナデ	板ナデ・粗いナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	2.5Y8/1 灰白・N8/0灰白	密	
T106	滴水瓦		(9.5)	27.4	2.4	11.8	2.4	ナデ	板ナデ・粗いナデ	5Y8/1 灰	N5/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	刻印
T107	滴水瓦		(18.1)	28.9	2.2	12.2	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T108	滴水瓦		(5.7)	27.0	2.4	11.1	1.9	ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T109	軒平瓦		(9.5)	(11.7)	2.0	4.2	2.5	マメツ	マメツ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5YR5/3 にぶい褐	粗	
T110	軒平瓦		(8.5)	(14.6)	2.0	3.5	2.1	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	
T111	軒平瓦		(11.1)	(17.0)	2.0	3.2	1.9	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	2.5Y6/1 黄灰	5Y7/1 灰白	密	
T112	軒平瓦		(9.1)	(8.7)	2.3	4.4	2.1	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T113	軒平瓦		(2.9)	(10.8)	1.3	3.1	1.3	板ナデ・ナデ	ナデ	5Y8/1 灰	5Y6/1 灰	5Y8/1 灰	密	
T114	軒平瓦		(2.8)	(10.3)	1.4	3.6	1.6	マメツ	マメツ	N4/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T115	軒平瓦		(10.2)	(15.5)	1.8	5.0	1.5	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T116	軒平瓦		(10.4)	(13.5)	1.4	3.7	1.6	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T117	軒平瓦		(5.4)	(14.1)	1.5	4.1	1.5	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	10Y4/1 灰	5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T118	軒平瓦		(2.1)	(8.0)	1.4	4.1	1.8	板ナデ	ナデ	N5/0 灰	2.5Y7/3 浅黄	5Y7/1 灰白	密	
T119	軒平瓦		(5.9)	(7.4)	1.6	3.6	1.3	板ナデ・ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T120	軒平瓦		(6.3)	(13.2)	1.5	3.6	1.2	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	N6/0 灰	N7/0 灰白	密	
T121	軒平瓦		(7.2)	(14.1)	1.7	5.4	3.2	板ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T122	軒平瓦		(6.1)	(14.1)	1.7	4.6	1.2	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T123	軒平瓦		(13.2)	(9.9)	2.1	3.4	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T124	軒平瓦		(20.3)	23.7	1.8	4.1	3.0	板ナデ・粗いナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	5Y8/3 灰白	密	
T125	軒平瓦		(6.8)	(18.2)	1.8	5.9	3.0	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	N6/0 灰	N8/0 灰白	密	
T126	軒平瓦		(14.3)	24.9	1.9	4.1	2.3	ナデ・粗いナデ	ナデ・ヘラナデ	5B4/1 暗青灰	5B3/1 暗青灰	7.5YR5/3 にぶい褐	粗	
T127	軒平瓦		(13.0)	(15.0)	1.4	3.6	1.5	板ナデ・粗いナデ	ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T128	軒平瓦		(9.8)	(13.6)	1.4	3.2	2.0	板ナデ・粗いナデ	ヘラナデ	5Y5/1 灰	N5/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T129	軒平瓦		(11.3)	(15.6)	1.8	5.7	2.8	板ナデ・粗いナデ	ナデ	7.5Y4/1 灰	2.5Y8/3 淡黄	N4/0 灰	密	
T130	軒平瓦		(8.2)	(18.9)	1.8	4.5	1.8	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T131	軒平瓦		(14.4)	23.5	1.7	4.2	2.0	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T132	軒平瓦		(7.5)	24.0	1.4	4.4	1.8	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T133	軒平瓦		(9.5)	(19.3)	1.8	4.1	1.6	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰白	密	
T134	軒平瓦		(3.4)	(14.8)	1.4	4.4	1.4	板ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T135	軒平瓦		(8.7)	(12.0)	1.5	4.0	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	2.5Y6/2 灰黄	N6/0 灰・N7/0 灰	密	
T136	軒平瓦		(8.5)	(12.3)	1.6	3.5	1.2	板ナデ・粗いナデ	ナデ	10YR2/1 黒	2.5Y3/2 黒褐	5Y8/1 灰白	密	
T137	軒平瓦		(11.0)	(15.9)	1.7	4.5	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰白	密	前面:刻印
T138	軒平瓦		(5.2)	(12.5)	1.5	4.8	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	N7/0 灰白	密	
T139	軒平瓦		(2.3)	(9.0)	1.5	4.2	1.4	板ナデ	ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T140	軒平瓦		(9.8)	(15.6)	1.8	4.7	1.8	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	N7/0 灰白	密	
T141	軒平瓦		(11.7)	(19.6)	1.7	4.3	1.8	板ナデ・粗いナデ	ナデ	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	N5/0 灰	密	
T142	軒平瓦		(4.4)	(9.0)	1.1	3.9	2.9	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T143	軒平瓦		(12.0)	(16.9)	1.5	2.8	1.5	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N3/0 暗灰	5Y4/1 灰	5Y8/1 灰	密	
T144	軒平瓦		(17.4)	(19.5)	1.7	3.4	1.7	板ナデ・ナデ・ケズリ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T145	軒平瓦		(5.3)	(8.2)	2.1	(4.6)	(2.5)	板ナデ	横方向のナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T146	軒平瓦		(9.0)	(18.3)	1.9	4.7	1.9	板ナデ・粗いナデ	ナデ	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰		
T147	軒平瓦		(12.4)	(12.2)	2.0	3.4	1.3	板ナデ・粗いナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T148	軒平瓦		(9.5)	(12.6)	1.5	4.0	1.3	マメツ	マメツ	5Y8/1 灰	5Y6/1 灰	5Y8/1 灰	密	
T149	軒平瓦		(8.8)	(13.5)	1.8	3.5	2.0	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:刻印
T150	軒平瓦		(5.7)	(15.8)	1.9	4.0	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	5Y8/1 灰	5Y6/1 灰	N5/0 灰	密	
T151	軒平瓦		(8.7)	(19.7)	1.4	3.7	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	10YR4/1 褐灰	10Y8/1 灰白	密	
T152	軒平瓦		(20.8)	(14.5)	1.8	3.4	2.4	マメツ	マメツ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙 7.5Y3/1 黒	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y8/1 黄灰	粗	
T153	軒平瓦		(8.8)	(13.0)	1.5	4.1	1.9	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T154	軒平瓦		(5.3)	(13.0)	1.5	4.1	1.6	板ナデ	ナデ	N8/0 灰	2.5Y6/2 灰黄	5Y8/1 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T155	軒平瓦		(17.8)	(15.0)	1.7	4.0	1.6	板ナデ・粗いナデ	ナデ・板ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N4/0 灰	密	
T156	軒平瓦		(7.2)	(11.0)	1.4	3.5	2.8	板ナデ・ナデ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y5/1 黄灰	N5/0 灰	密	
T157	軒平瓦		(2.8)	(11.2)	1.5	3.8	1.1	板ナデ	ナデ	7.5YR4/1 灰白	7.5YR4/1 灰白	N5/0 灰	密	
T158	軒平瓦		(7.7)	(17.3)	1.8	4.2	1.8	板ナデ・ナデ	板ナデ・粗いナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T159	軒平瓦		(3.5)	(8.4)	1.4	3.2	1.4	板ナデ	ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	密	
T160	軒平瓦		(7.8)	(13.7)	1.5	3.6	1.5	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T161	軒平瓦		(11.0)	13.4	1.6	4.1	1.4	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T162	軒平瓦		(16.7)	24.0	1.6	4.3	1.6	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T162	軒平瓦		(3.8)	(17.4)	1.5	4.8	1.8	板ナデ	ナデ	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	
T164	軒平瓦		(11.4)	(13.0)	1.8	4.4	1.4	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N3/0 暗灰	密	
T165	軒平瓦		(3.4)	(12.8)	1.5	4.0	1.8	板ナデ	横方向のナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T166	軒平瓦		(2.5)	(9.5)	1.6	4.5	2.5	板ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T167	軒平瓦		(6.5)	(10.0)	1.5	3.3	1.1	板ナデ・粗いナデ	ナデ	7.5Y5/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	N5/0 灰	密	
T168	軒平瓦		(10.3) (15.7)	(15.7)	1.5	3.5	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰	5Y6/1 灰	2.5Y8/2 灰白	密	
T169	軒平瓦		(4.5)	(8.3)	1.8	5.6	3.0	板ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T170	軒平瓦		(13.9)	(11.5)	2.0	3.3	1.4	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T171	軒平瓦		(8.0)	(10.9)	1.8	3.1	1.6	板ナデ・粗いナデ	ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	N6/0 灰	密	
T172	軒桟瓦					6.5	1.8	ナデ	指ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T173	軒桟瓦		(2.5)	(5.8)		5.9	1.9	板ナデ	板ナデ・粗いナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T174	軒桟瓦		(11.2)	(14.7)	1.5	3.9	1.5	板ナデ・指ナデ・粗いナデ	板ナデ・ナデ	N8/0 灰・ 2.5GY8/1 灰白	N8/0 灰・ 2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	密	
T175	軒桟瓦		(4.0)	(8.5)	1.5	5.6	1.5	ナデ	指ナデ	N5/0 灰	N5/0灰	2.5Y8/1 灰白 ～5Y6/1 灰	密	
T176	軒桟瓦		(8.0)	(8.4)	1.6	5.9	1.8	ナデ・ミガキ	ナデ・指ナデ・粗いナデ	10Y7/1 灰白	N5/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T177	軒桟瓦		(10.5)	(16.2)	2.0	3.8	1.2	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N 5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T178	軒桟瓦		(12.8)	13.6	1.4	4.0	1.4	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N4/0 灰・ 2.5GY8/1 灰白	N 4/0 灰・ 2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	密	
T179	軒桟瓦		(1.8)	(6.6)		6.1	1.3	板ナデ	ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/2 灰白	密	
T180	軒桟瓦		(6.1)	(8.2)	1.6	3.8	1.7	板ナデ・指ナデ	板ナデ・ヘラナデ	N3/0 暗灰	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T181	軒桟瓦		(3.4)	(7.2)	1.8	7.0	2.0	ヘラナデ	板ナデ・粗いナデ	N7/0 灰白	5Y6/1 灰	N 8/0 灰白	密	
T182	軒桟瓦		(3.9)	(7.3)	1.5	6.4	1.4	ナデ・指ナデ	ナデ・ヘラナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y8/2 灰白	粗	
T183	軒桟瓦		(2.9)	(7.3)	1.8	6.3	1.8	ナデ	ナデ・指頭圧	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	密	
T184	軒桟瓦		(9.3)	(17.0)	1.5	3.6	1.1	板ナデ・粗いナデ	板ナデ・ナデ	N8/0 灰	N8/0 灰	5Y8/1 灰白	精良	瓦当面:キラ粉付着
T185	軒桟瓦		(10.4)	(20.3)	1.8	5.2	1.9	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N3/0 暗灰・ N5/0 灰	N3/0 暗灰・ N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T186	軒桟瓦		(3.5)	(10.0)	1.5	5.6	1.6	ナデ	指ナデ	5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T187	軒桟瓦		(14.8)	(14.5)	1.8	4.3	2.0	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T188	軒桟瓦		(9.5)	(13.9)	1.7	3.4	1.8	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	5Y7/1 灰白	N5/0 灰	2.5Y8/1 灰白	密	
T189	軒桟瓦		(2.9)	(7.8)	1.8	7.5	1.4	板ナデ・ナデ	ナデ・マメツ	2.5Y8/1 灰白・ 2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/1 灰白・ 2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/1 灰白・ N5/0 灰	密	
T190	軒桟瓦		(3.2)	(6.1)	1.6	5.4	1.1	指ナデ	板ナデ・ナデ	N3/0 暗灰・N 5/0 灰	N3/0 暗灰・N 5/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T191	軒桟瓦		(2.3)	6.5		6.3	1.4	板ナデ	ナデ・やや粗いナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T192	軒桟瓦					5.6	1.5	ナデ・指ナデ		N4/0 灰	N6/0 灰	5Y7/1 灰白	密	
T193	軒桟瓦		(2.3)	(6.7)	1.9	5.7	1.6	板ナデ・指ナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰・ N3/0 暗灰	N4/0 灰・ N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T194	軒桟瓦		(4.7)	(6.1)	1.4	5.1	1.4	ヘラナデ	粗いナデ・指ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T195	土塀瓦		(11.0)	(16.1)	1.7	4.3	1.4	板ナデ・やや粗いナデ	板ナデ・やや粗いナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄 ～2.5Y6/1 黄灰	密	
T196	土塀瓦		(13.5)	24.6	1.6	3.9	1.5	板ナデ・やや粗いナデ	ミガキ	N4/0 灰	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T197	土塀瓦		(10.5)	(20.2)	1.8	4.0	1.4	板ナデ・粗いナデ	板ナデ・ナデ・ミガキ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y7/1 灰白	密	キラ粉付着
T198	土塀瓦		(12.8)	(16.3)	1.6	3.9	1.4	板ナデ・粗いナデ	板ナデ・ミガキ	5B4/1 暗青灰	5B4/1 暗青灰	2.5GY8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T199	土塀瓦		(18.4)	29.9	2.3			粗いナデ・ヘラナデ	板ナデ・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y8/1 灰白	密	ハナレ砂付着
T200	土塀瓦		(15.0)	(22.8)	1.7	4.2	1.5	板ナデ・粗いナデ	板ナデ・ナデ	N8/0 灰	N8/0 灰	2.5Y8/1 灰白	密	
T201	土塀瓦		(10.2)	(12.8)	1.5	4.0	1.3	板ナデ・粗いナデ	ナデ	N5/0 灰・ N8/0 灰白	N5/0 灰・ N8/0 灰白	2.5GY8/1 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T202	土師瓦		(9.5)	(17.6)	1.7	4.1	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N5/0 灰・N4/0 灰	N5/0 灰・N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T203	土師瓦		(7.0)	(13.6)	1.7	4.5	1.4	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N5/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰白	密	
T204	土師瓦		(17.0)	26.3	1.4	4.0	1.5	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	2.5Y8/1 灰白	N3/0 暗灰	2.5Y8/1 灰白	密	キラ粉付着・漆喰付着
T205	土師瓦		(18.5)	(16.0)	1.9	4.0	1.7	板ナデ・粗いナデ・ハケ	ナデ・ミガキ	N8/0 灰	N8/0 灰	N8/0 灰白	密	
T206	土師瓦		(10.5)	(16.9)	2.0	4.4	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T207	土師瓦		(25.0)	24.4	1.7			板ナデ・ナデ・ミガキ	粗いナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y7/1 灰白	密	ハナレ砂付着・漆喰付着
T208	鳥衾瓦		(3.5)			13.5	1.9	ナデ・ヘラナデ		N5/0 灰		N5/0 灰・2.5Y8/1 灰白	密	
T209	鳥衾瓦		(14.9)	14.1	2.2	17.7	2.3	ナデ・ヘラナデ	粗いナデ・未調整	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T210	鳥衾瓦		(19.1)	11.3	2.2	13.3		ナデ・ヘラナデ	ゴザ目・ナデ・ヘラナデ・指ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	釘穴1 カ所
T211	鳥衾瓦		(9.8)	6.8	1.4	13.3	1.8	ナデ・ミガキ		N5/0 灰	N5/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	釘穴3カ所
T212	鳥衾瓦		(11.5)	9.7	2.0	12.3		ナデ	粗いナデ・指ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T213	鳥衾瓦		(7.4)		2.4	16.9	2.9	ナデ・ヘラナデ		N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T214	鳥衾瓦		(5.5)		1.4	10.0	1.8	ナデ・ミガキ		10YR+1.7/1 黒	2.5Y7/3 浅黄	5Y8/2 灰白・5Y5/1 灰	密	
T215	鳥衾瓦		(4.6)		1.9	13.6	2.0	ナデ・板ナデ		N4/0 灰		7.5Y8/1 灰白	密	
T216	鳥衾瓦		(16.0)	4.5		(6.3)	1.8	ミガキ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T217	鳥衾瓦		(3.8)	(19.6)	2.6	13.4	3.2	ナデ・ミガキ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T218	鳥衾瓦		(9.2)	(17.3)	2.8	12.8	4.1	ナデ・板ナデ・ミガキ	ナデ・板ナデ・ヘラナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0～N7/0 灰白	粗	
T219	鳥衾瓦					(7.9)	3.8	ナデ	マメツ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0～N7/0 灰白	密	
T220	菊丸瓦		11.4	9.3	1.7	10.0	2.1	ヘラナデ・ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰	密	
T221	菊丸瓦		(4.9)	(6.5)	(1.3)	8.2	1.4	板ナデ・ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	7.5Y 8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉・漆喰付着
T222	菊丸瓦		(2.5)	6.5	1.4	8.4	1.2	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y7/1	密	
T223	菊丸瓦		(4.0)	9.5	1.5	10.5	1.7	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	瓦当面・凸面:漆喰付着
T224	菊丸瓦		(3.2)		1.7	(7.0)			指頭圧・ナデ・板ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰	密	
T225	菊丸瓦		4.8	6.7	1.2	8.6	1.1	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	やや密	
T226	菊丸瓦		(8.0)	11.0	1.3	12.3	1.9	ナデ・ミガキ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y 8/2 灰白	密	
T227	菊丸瓦		11.3	7.0	1.5	10.1	1.4	ヘラナデ・ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	漆喰付着
T228	菊丸瓦		(2.2)	6.7	1.6	8.2	1.5	ナデ	板ナデ・指頭圧	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	5Y7/2 灰	密	瓦当面:キラ粉付着
T229	菊丸瓦		(5.2)	8.3	1.4	10.5	1.5	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ・指ナデ	N5/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	5Y8/1 灰白	密	
T230	菊丸瓦		(3.7)	8.8	1.8	11.2	1.8	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N 4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	キラ粉付着
T231	菊丸瓦		(6.5)	8.0	1.6	10.5	1.3	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	
T232	菊丸瓦		(5.3)	9.3	1.8	10.0	1.8	ナデ	板ナデ・指ナデ・ヘラナデ	5Y5/1 灰	N5/0 灰	N5/0 灰・N8/0 灰白	密	
T233	菊丸瓦		2.1			8.4	1.5	板ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	2.5Y7/2 灰黄	N5/0 灰	7.5Y6/1 灰	密	
T234	菊丸瓦		(3.3)	9.4	1.5	10.7	1.8	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N8/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白・N5/0 灰	密	少量のキラ粉付着
T235	菊丸瓦		(4.3)	11.0	1.5	11.4	1.5	ヘラナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y7/1 灰白	密	
T236	菊丸瓦		(3.5)		1.7	9.8	1.4	ナデ	板ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N5/0 灰	10Y8/1 灰白	密	
T237	菊丸瓦		(4.3)	8.5	1.8	(7.7)		ヘラナデ	ナデ・指頭圧・ヘラナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T238	菊丸瓦		(4.4)	6.3	1.2	9.3	1.7	板ナデ・ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T239	菊丸瓦		(3.1)	7.0	1.5	(5.6)		板ナデ	ナデ・指頭圧・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y8/1 灰白	密	
T240	菊丸瓦		(4.0)		1.7	11.4	1.1	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	N5/0 灰	2.5Y6/2 灰黄	5Y8/1 灰	密	
T241	菊丸瓦		(3.7)	7.0	1.3	8.5		板ナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	2.5 Y 8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白・N7/0 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T242	菊丸瓦		(2.8)	6.6	1.6	9.9	1.7	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T243	菊丸瓦		8.7	3.6	1.5	8.7	1.3	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T244	菊丸瓦		(3.1)	6.6	1.9	9.4	1.7	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	キラ粉・漆喰付着
T245	菊丸瓦		(3.8)	8.8	1.5	9.9	1.5	ナデ	ナデ・板ナデ	7.5Y5/1 灰	7.5Y 5/1 灰	7.5Y5/1 灰	密	瓦当面:漆喰付着
T246	丸瓦		30.8	15.0	2.0			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・ナデ	7.5Y8/1 灰	5Y6/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白	密	
T247	丸瓦		22.6	13.4	1.8			ナデ・ミガキ・指頭圧・板ナデ	ミガキ・布目・コビキB・タタキ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T248	丸瓦		33.7	15.1	2.5			板ナデ・ミガキ	板ナデ・ナデ・布目	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	釘穴1ヵ所・抽取組痕
T249	丸瓦		34.2	15.9	3.0			ミガキ・ナデ	布目・コビキB・ナデ	N8/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T250	丸瓦		26.5	14.5	2.6			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T251	丸瓦		23.8	13.5	1.8			ミガキ・ナデ・板ナデ	布目・コビキB・ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	粗	
T252	丸瓦		21.2	12.1	1.3			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T253	丸瓦		23.3	13.2	1.4			ミガキ・ナデ・板ナデ	布目・コビキB・タタキ	N5/0 灰	N5/0 灰	10Y8/1 灰白	密	
T254	丸瓦		18.1	9.5	1.5			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N5/0 灰	密	
T255	丸瓦		(21.2)	13.0	1.9			ナデ・ミガキ・刷毛	布目・ナデ・コビキA	N5/0 灰	N5/0～N4/0 灰	N7/0 灰白	やや密	
T256	丸瓦		27.5	16.0	2.4			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB・タタキ	N3/0 暗灰～N2/0 黒	N4/0 灰～N3/0 暗灰	N8/0～N7/0 灰白	密	
T257	丸瓦		33.6	15.2	2.3			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	糸切痕・両面:漆喰付着
T258	丸瓦		29.1	13.9	1.8			ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ・布目・指頭圧	N5/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	
T259	丸瓦		31.3	15.2	2.1			ナデ・ミガキ	ナデ・布目	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T260	丸瓦		30.8	14.9	2.3			ナデ・ミガキ	布目・コビキA・ナデ	7.5Y7/1 灰白	N4/0 灰	7.5Y7/2 灰白	密	
T261	丸瓦		24.4	15.2	2.7			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・板ナデ	10Y8/1 灰白	7.5Y5/1 灰	N8/0 灰白	やや密	
T262	丸瓦		32.0	14.7	2.1			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T263	丸瓦		28.0	15.8	1.7			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB・タタキ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	5Y7/2 灰白	精良	
T264	丸瓦		28.3	13.7	1.7			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T265	丸瓦		25.1	14.5	2.1			剥離・ナデ	布目・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	5Y7/2 灰白	密	
T266	丸瓦		(26.4)	15.5	2.1			ヘラナデ	ナデ・布目・コビキB	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	密	
T267	丸瓦		22.1	12.0	1.9			ナデ・ミガキ	ナデ・布目・コビキB	N4/0～N3/0 灰～暗灰	N5/0 灰	N 灰白	密	
T268	丸瓦		(15.7)	13.4	2.7			ミガキ	ナデ・ゴザ目・コビキB	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0～N7/0 灰白	やや粗	刻印
T269	平瓦		32.5	27.7	3.5			粗いナデ・ナデ	ミガキ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	凹面:使用痕
T270	平瓦		31.8	28.1	2.7			粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	凸面:弓状圧痕・凹面:使用痕
T271	平瓦		38.6	33.8	3.1			粗いナデ・ナデ	板ナデ	N5/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	凸面:弓状圧痕・凹面:使用痕・引掛突起
T272	平瓦		(11.0)	(12.4)	(2.2)			粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	凹面:ヘラ記号
T273	平瓦		(20.8)	(21.8)	2.5			粗いナデ	ナデ	N8/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	前面:刻印・凸面:弓状圧痕
T274	平瓦		(28.8)	28.0	2.3			粗いナデ	ナデ・板ナデ	N3/0 暗灰	5B3/1 暗青灰	N7/0 灰白	密	前面:刻印・凸面:弓状圧痕・使用痕
T275	平瓦		(25.0)	27.2	3.3			粗いナデ	ナデ・ミガキ・板ナデ	N5/0 灰	2.5Y7/4 浅黄	N6/0 灰	精良	前面:刻印・使用痕・弓状圧痕
T276	平瓦		(21.2)	(24.2)	2.8			粗いナデ	ナデ・ミガキ	7.5Y4/1 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1灰白・N8/0 灰白	密	
T277	平瓦		(13.7)	23.5	1.9			粗いナデ	ナデ・板ナデ	7.5Y3/1 オリーブ黒	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	前面:刻印・凸面:弓状圧痕

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T278	平瓦		31.2	28.0	1.8			粗いナデ	ナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	2.5Y5/1 黄灰	7.5Y6/1 灰	密	
T279	平瓦		(24.3)	24.3	2.3			粗いナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y8/2 灰白	密	前面:刻印
T280	平瓦		28.5	23.9	2.2			粗いナデ	ナデ・ヘラナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	前面:刻印
T281	平瓦		26.5	(19.0)	1.9			粗いナデ	ナデ・ミガキ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	前面:刻印
T282	平瓦		26.0	(16.7)	2.0			粗いナデ・板ナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	前面:刻印・使用痕
T283	平瓦		(24.2)	(19.4)	2.5			粗いナデ	ナデ・ミガキ	N5/0 灰	5Y4/1 灰	N6/0 灰	密	前面:刻印・使用痕
T284	平瓦		28.5	23.3	2.1			粗いナデ	ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	前面:刻印
T285	平瓦		30.5	27.4	2.8			粗いナデ・ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	弓状圧痕・使用痕
T286	S型桟瓦		(14.9)	(17.3)	1.4			ナデ・粗いナデ	ナデ	N8/0 灰	5Y7/1 灰白	N7/0 灰白	密	
T287	S型桟瓦		(24.1)	(23.9)	(3.0)			ナデ・ミガキ・指頭圧	粗いナデ・ヘラナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T288	棟瓦		(30.1)	(18.2)	2.9			板ナデ・ナデ・ミガキ	ナデ	10BG2/1 青黒	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T289	隅切丸瓦		(27.1)	16.0	2.3			ミガキ・ナデ	布目・タタキ・コビキB・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T290	隅切丸瓦		(20.7)	(14.4)	2.1			ナデ・ミガキ	板ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白・N6/0灰	密	釘穴
T291	隅切平瓦		31.6	28.0	2.6			粗いナデ	ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	2.5GY8/1 灰白	密	凹面:使用痕
T292	隅切平瓦		(14.7)	(16.8)	2.4			粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T293	隅切平瓦		(21.1)	28.3	2.4			粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y8/1 灰白	密	
T294	隅切平瓦		(25.4)	27.6	2.8			板ナデ・粗いナデ	ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	密	凸面:弓状圧痕
T295	片付熨斗瓦		(27.1)	27.4	3.2			板ナデ・やや粗いナデ	板ナデ・ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/1灰白	密	
T296	熨斗瓦		(28.4)	(21.5)	3.0			粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	凹面:掘ビキ
T297	熨斗瓦		(24.8)	(23.6)	3.1			ナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰	密	津喰付着
T298	輪違い瓦		8.5	(9.7)	1.5			ナデ・ミガキ・タタキ	ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	
T299	輪違い瓦		11.0	10.4	1.3			ヘラナデ・ナデ	ナデ	2.5Y7/1 灰黄	N4/0 灰		密	
T300	輪違い瓦		13.1	(12.5)	1.4			ナデ	ナデ	N4/0 灰	2.5Y8/1 灰白	N8/0 灰白	密	
T301	輪違い瓦		10.9	12.1	1.5			ナデ・ハケ	ナデ	2.5GY8/1 灰白	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T302	輪違い瓦		15.0	(14.2)	2.7			板ナデ・ナデ	ナデ・コビキB・布目	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T303	輪違い瓦		11.9	12.6	1.7			ナデ	布目・コビキB・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰		密	
T304	輪違い瓦		13.4	(12.3)	2.2			ナデ	布目・コビキB・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T305	輪違い瓦		14.1	12.5	1.7			ナデ・板ナデ	布目・コビキB・ヘラケズリ	N5/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T306	輪違い瓦		12.2	13.1	2.0			ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	N5/0 灰	N4/0 灰		密	下端:キラ粉付着
T307	輪違い瓦		13.8	(12.4)	1.6			ヘラナデ・ナデ	布目・コビキB	N8/0 灰	N8/0 灰		やや密	
T308	輪違い瓦		15.7	13.6	1.9			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T309	輪違い瓦		14.8	(13.1)	1.9			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・ナデ	2.5Y8/3 にぶい黄	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/3 淡黄	密	
T310	輪違い瓦		13.0	(11.8)	1.6			ヘラナデ・ナデ	布目・コビキB・ナデ	2.5GY8/1 灰白	N4/0 灰	N8/0 灰白	精良	
T311	輪違い瓦		14.0	(12.5)	1.8			ナデ・ヘラナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	ヘラによる刻印
T312	輪違い瓦		(14.8)	14.5	2.8			ヘラナデ・ナデ・ケズリ	布目・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	やや密	
T313	輪違い瓦		13.5	(11.7)	1.5			ナデ	布目・コビキB・ナデ	N8/0 灰	2.5Y7/3 浅黄	N5/0 灰	密	
T314	輪違い瓦		14.3	13.1	1.9			ナデ・ヘラナデ	ナデ・布目・コビキB	N4/0 灰	2.5Y4/1 灰黄	N6/0 灰	密	
T315	鬼瓦		(13.8)	(16.1)	3.1			ナデ	ケズリ・ナデ	N3/0 暗灰	5Y6/1 灰	7.5YR5/3 にぶい褐	やや密	
T316	鬼瓦(把手)		(15.7)	径4.8				ヘラナデ・指ナデ		N4/0 灰	N5/0灰	N7/0 灰白	密	
T317	鬼瓦		(20.9)	(10.9)	高さ(19.3)			ナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	N5/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T318	鬼瓦		(16.0)	(35.1)	3.9			ナデ・ミガキ	指ナデ・ヘラナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T319	鬼瓦		(20.1)	(10.6)	高さ9.3			ナデ・ミガキ	ヘラナデ・粗いナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T320	鬼瓦		(10.0)	(11.7)	高さ(2.2)			ナデ	粗いナデ	2.5Y8/1 黄灰	5Y5/1 灰	N6/0 灰	やや密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T321	鬼瓦		(12.0)	(14.3)	高さ 6.6			ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	
T322	鬼瓦		(10.3)	(17.1)	高さ 9.1			ナデ	ナデ・ヘラナデ・粗いナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T323	鬼瓦		(10.1)	(14.0)	高さ 7.8			ナデ	板ナデ・ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	内部:漆喰の塊付着
T324	鬼瓦		(7.1)	(16.0)	11.3			ナデ・粗いナデ・指ナデ	ナデ	N4/0 灰	N5/0灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T325	鬼瓦		(26.5)	(17.0)	高さ (9.3)			ナデ	ヘラケズリ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T326	鬼瓦 (把手)		14.0	径 3.3				ヘラナデ・指ナデ		N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T327	鬼瓦		(21.3)	(14.3)	高さ (28.0)			ナデ・ヘラナデ・ケズリ	粗いナデ・ヘラケズリ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/1 灰白	密	釘穴
T328	鬼瓦		(18.8)	(13.5)	高さ (17.7)			ナデ・ヘラナデ	指頭圧・ヘラケズリ	N4/0 灰	N8/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T329	鬼瓦		(24.5)	(18.6)	高さ (13.7)			ナデ	ケズリ	5Y8/1 灰	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	密	
T330	鬼瓦		(23.7)	(12.8)	高さ (17.6)			ナデ・ミガキ	粗いヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T331	鬼瓦		(9.0)	(14.3)	4.7			ナデ	ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	2.5Y8/4 淡黄	密	巴文
T332	鬼瓦		(19.4)	(22.3)	高さ 12.5			ナデ	粗いナデ・卸目風7本	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	凸面:キラ粉付着
T333	鬼瓦		(14.1)	(13.3)	4.3			ナデ	粗いナデ	N4/0 灰	N6/0 灰	5Y7/2 灰白	密	
T334	鬼瓦		(37.8)	(18.2)	高さ (18.0)			ナデ・ミガキ	粗いナデ・指頭圧・指ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y8/3 淡黄	密	
T335	鯱									N4/1 灰	N4/1 灰	5Y7/1 灰白	密	
T336	鯱		(14.1)	(18.4)	4.2			ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N5/0灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T337	鯱		(16.8)	(11.4)	2.4					N8/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	密	
T338	鬼瓦		(29.7)	(11.2)	3.3			ナデ	板ナデ・指頭圧・粗いナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y7/1 灰白	密	
T339	鬼瓦							ナデ	ヘラナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	密	
T340	家紋瓦		13.7	13.4	8.6			ナデ	ヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T341	鬼瓦 (三ツ葉葵)									N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y7/1 灰白	密	
T342	鬼瓦		(15.6)	(29.3)	高さ 7.6			ナデ・粗いナデ	ナデ・粗いナデ・ヘラナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	N4/0 灰	N5/0 灰	密	漆喰付着
T343	鬼瓦		21.3	(33.4)	高さ 5.3			ナデ	指ナデ	N5/0 灰	2.5Y7/3 浅黄	N6/0 灰	密	
T344	鬼瓦		(10.5)	(15.8)	高さ 6.9			ナデ	粗いナデ・指ナデ	N4/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	密	
T345	鬼瓦		(13.0)	(9.9)				ナデ		N5/0 灰		7.5Y6/1 灰	やや密	
T346	鬼瓦		(15.0)	(14.7)				ナデ	ナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	5Y 7/1 灰白	密	凸面:キラ粉付着
T347	鬼瓦		(14.4)	(22.2)	4.0			粗いナデ・ケズリ	ナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	釘穴2カ所
T348	鬼瓦 (把手)		(22.7)	10.9	6.1			ナデ・ヘラナデ・粗いナデ		N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y5/1 黄灰	粗	
T349	鬼瓦		(11.1)	(7.9)	2.6			ナデ	粗いナデ・ヘラケズリ	N3/0 暗灰	10R3/6 暗赤	N8/0 灰白	密	凹面:赤色染料
T350	鬼瓦		(17.2)	(25.3)	高さ (11.0)			ナデ	粗いナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T351	平瓦		(12.4)	27.2	2.6			粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	前面:刻印
T352	菊丸瓦		(2.9)	8.7	2.4	11.4	2.0	ナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T353	隅切丸瓦		(22.7)	15.6	2.5			ヘラナデ・ミガキ	ゴザ目・ヘラナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	精良	
T354	熨斗瓦		(14.8)	(15.6)	3.6			ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	精良	
T355	軒丸瓦		(4.1)		(1.9)			ナデ	板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T356	菊丸瓦		(7.1)	9.0	1.7	10.0	1.7	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T357	平瓦		(16.0)	(18.7)	2.7			ナデ	粗いナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y7/1 灰白	密	前面:刻印
T358	軒丸瓦					(14.5)	2.8	板ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T359	丸瓦		13.2	11.0	1.7			ナデ・板ナデ	布目・コビキB	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y7/1 灰白	密	
T360	平瓦		30.7	(17.4)	(2.5)			粗いナデ	ナデ・板ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	7.5Y8/0 灰	密	
T361	輪違い瓦		13.7	12.7	1.9			ナデ・ヘラナデ	ナデ・ゴザ目・コビキB	N4/0 灰	N4/0 灰		密	
T362	滴水瓦		(11.3)	17.0	2.1	11.4	1.7	粗いヘラナデ・板ナデ	ナデ	2.5Y6/1 黄灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T363	隅切丸瓦		(28.3)	(12.9)	2.1			ナデ・ミガキ・板ナデ	ナデ・布目・コビキB	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T364	熨斗瓦		(29.5)	(12.5)	2.2			ナデ	ナデ	N4/0 灰	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T365	軒丸瓦		(11.4)	(13.8)	2.2	15.7	2.3	ナデ	板ナデ・ナデ・布目・コビキA	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T366	軒丸瓦		(4.8)	14.2	2.8	15.6	2.4	ヘラナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T367	軒丸瓦					14.2	1.8	ナデ	板ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T368	軒丸瓦		(2.9)		2.3	17.3	2.4	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T369	軒丸瓦		(6.1)	13.4	1.8	13.3	1.6	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧・布目・コビキB	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y8/2 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T370	軒丸瓦		(20.2)	11.7	1.7	12.5	2.0	ナデ・ミガキ	板ナデ・ナデ・指頭圧・ゴザ目・タタキ・コビキB	N5/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T371	軒丸瓦					(9.1)	2.1	ヘラナデ	板ナデ・ナデ・ケズリ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰	密	
T372	軒丸瓦					(11.5)	(1.8)	ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰	密	
T373	軒丸瓦		(6.0)	(7.5)	1.6			ナデ	板ナデ・コビキB	2.5Y7/2 灰黄	5Y5/1 灰	N6/0 灰	密	「大」
T374	軒平瓦		(9.7)	(17.5)	1.7	3.3	1.7	ナデ	ナデ・ヘラナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T375	軒平瓦		(11.4)	23.9	1.8	2.9	1.6	板ナデ・ナデ	ナデ・ミガキ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T376	平瓦		(18.8)	24.7	2.4			粗いナデ	ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T377	鬼瓦		(21.7)	(12.6)	5.2			ナデ	ケズリ	7.5Y7/1 灰白	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T378	軒丸瓦			(14.1)		(14.1)	2.2		板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T379	軒丸瓦		(5.9)	14.4	1.6	14.4	2.3	板ナデ・ナデ・ミガキ	板ナデ・ナデ・指頭圧・コビキB	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N7/0 灰白	密	
T380	軒丸瓦					(12.3)	1.6	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	密	
T381	軒丸瓦		(3.0)		1.9	13.0	1.9	板ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	2.5Y7/1 灰白	N5/0 灰	N6/0 灰	密	
T382	軒平瓦		(5.1)	22.4	1.3	3.5	1.5	板ナデ	ナデ	N5/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	N8/0 灰白	密	
T383	軒平瓦		(6.9)	(12.9)	1.7			板ナデ・ナデ	ナデ	5Y8/1 灰	N5/0 灰	5Y7/1 灰白	密	いぶしなし
T384	軒平瓦		(10.5)	24.6	1.8			粗いナデ・板ナデ	ナデ・ヘラナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	5Y7/1 灰白	精良	
T385	滴水瓦		(17.1)	27.2	2.1	9.6	2.1	ナデ・粗いナデ	ナデ・横方向の粗いナデ	N8/0 灰	N4/0 灰	10Y8/1 灰	密	
T386	滴水瓦		(19.9)	27.2	2.3			板ナデ・ナデ	ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T387	丸瓦		(20.2)	16.1	2.5			ナデ・ミガキ	布目・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	漆喰付着
T388	丸瓦		34.6	16.5	2.2			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T389	丸瓦		(36.3)	14.6	1.9			ナデ・ミガキ	ゴザ目・コビキB	2.5Y8/1 黄灰	10YR7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	精良	釘穴2ヵ所
T390	軒丸瓦		46.8	12.4	1.9	(6.3)	(1.8)	ナデ・ミガキ	布目・タタキ・コビキB	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T391	丸瓦		(29.5)	12.0	1.8			ナデ・ミガキ	布目・タタキ・コビキB	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	精良	側縁～凸面:漆喰付着
T392	丸瓦		29.1	16.0	5.4			ナデ・ミガキ	布目・タタキ・コビキB	N3/0 暗灰	N4/0 灰		密	
T393	丸瓦		23.7	13.5	1.8			ナデ・ミガキ	布目・タタキ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	精良	凸面:多量の漆喰付着
T394	丸瓦		23.3	13.5	1.8			ナデ・ミガキ	布目・タタキ・コビキB	N3/0 暗灰	N4/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	
T395	軒丸瓦		(14.7)	13.7	1.8	(13.7)	(1.9)	ナデ・ヘラナデ	布目・コビキB・板ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	やや密	
T396	軒丸瓦			14.0		14.0	2.1	ナデ	板ナデ・ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/1 灰白	密	
T397	軒丸瓦		(10.0)	(14.5)	2.7			ヘラナデ	板ナデ・コビキA	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y8/2 灰白	密	
T398	軒丸瓦		(8.6)	13.0	2.5	10.3	2.2	ミガキ・ナデ	ケズリ・板ナデ	10Y R 6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	密	いぶしなし
T399	軒丸瓦		(14.8)	15.5	(2.0)	(15.5)	(2.1)	ヘラケズリ・ヘラナデ	ゴザ目・ナデ・板ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y7/1	密	
T400	軒丸瓦		(8.8)	13.8	(1.9)	(13.8)	2.4	ナデ	板ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N3/0暗灰	N8/0 灰白	密	
T401	軒丸瓦		(4.1)	17.6				ナデ	板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T402	軒丸瓦			(15.9)				ナデ	板ナデ・ナデ	N5/0 灰	N6/0 灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	密	
T403	軒丸瓦			(17.1)				ナデ	板ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N6/0 灰	N8/0 灰白	密	
T404	軒丸瓦		(3.5)	(12.4)	1.8	13.2	1.9	ナデ	板ナデ・指頭圧	N8/0 灰	2.5Y8/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	密	キラ粉付着
T405	軒丸瓦		24.4	13.5	4.6	(6.7)	(1.5)	ナデ	布目・コビキB・板ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N4/0 灰	密	
T406	軒丸瓦		(12.1)	14.7	2.2	14.7	1.9	ヘラナデ	布目・コビキB・板ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T407	軒丸瓦		(3.1)	(13.0)	1.7	15.1	2.3	ナデ	板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰白	精良	
T408	軒丸瓦		(3.1)	(16.0)					指頭圧・ヘラナデ・板ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	5Y8/2 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	口当径	口当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T409	軒丸瓦		(7.3)	13.0	1.7	13.0	1.9	ナデ	ヘラ圧・板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T410	軒丸瓦		(4.8)	12.8	1.7	12.8	2.2	ナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N5/0 灰	精良	
T411	軒丸瓦			13.0				ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	密	
T412	軒丸瓦			(12.8)		12.8	1.5	ナデ	板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T413	軒丸瓦		(7.5)	12.8	1.7	12.8	1.9	ナデ	ゴザ目・板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N8/0 灰	N7/0～N8/0 灰白	やや粗	
T414	軒丸瓦		(19.8)	(16.9)	2.1	(9.4)		ミガキ・ヘラナデ	コビキB・タタキ・板ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T415	軒丸瓦		(16.1)	(9.5)	2.0			ナデ	布目・タタキ・板ナデ	N5/0 灰	N8/0 灰	N8/0～N7/0 灰白	やや粗	
T416	軒丸瓦		(7.8)	17.2	(2.0)	(10.5)	(1.9)	ナデ・ヘラミガキ	タタキ・板ナデ・ナデ	N8/0 灰	7.5Y6/1 灰	5Y8/1 灰白	密	
T417	軒丸瓦		(3.7)	(15.0)		(12.3)	2.2	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5Y8/1 灰白	やや粗	
T418	軒丸瓦		(2.7)	(12.5)				ナデ	指頭圧・板ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5Y8/1 灰白	精良	
T419	軒丸瓦		(3.8)	17.2				板ナデ	板ナデ・指頭圧	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/4 淡黄	5Y7/1 灰白	密	
T420	軒丸瓦		(4.5)	17.4		17.4	(2.8)	ナデ	板ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	密	キラ粉付着
T421	軒丸瓦		(3.0)	17.4		17.4	2.6	ナデ	板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y 8/1 灰白	密	キラ粉付着
T422	軒丸瓦		(4.0)	17.4				ナデ	指ナデ・指頭圧	N 6/0 灰	N 4/0灰	2.5Y8/1 灰白	密	キラ粉付着・凹面漆喰付着
T423	軒丸瓦		(3.8)	17.3	1.9			ナデ	板ナデ・ナデ	N5/0 灰	N8/0 灰	N8/0 灰白	密	キラ粉付着
T424	軒丸瓦		(5.8)	17.5	1.9			ナデ	板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N5/0 灰	5Y8/2 灰白	密	
T425	軒丸瓦		(4.0)	(15.0)	2.0			ナデ	板ナデ・指頭圧	N8/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	やや密	キラ粉付着
T426	軒丸瓦		(2.5)	(8.8)				ナデ	板ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N8/0 灰	5Y8/1 灰白	密	キラ粉付着
T427	軒丸瓦		(20.1)	(15.7)	1.8		2.2	ナデ・ヘラナデ	布目・コビキB	N5/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T428	軒丸瓦		(3.1)	12.8	1.4	12.8	1.8	ナデ	ナデ・指頭圧・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T429	軒丸瓦		(1.9)	(8.5)		(9.7)	1.6		板ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	密	キラ粉付着
T430	軒丸瓦		(12.2)	(13.3)	1.5	(13.3)	1.5	ナデ・ヘラナデ	ゴザ目・タタキ・板ナデ	N8/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T430	軒丸瓦		(13.5)	12.5	13.5		1.2	ヘラナデ	布目・ナデ・指ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白		
T431	軒丸瓦		(11.4)	(9.0)	1.6	13.8	1.8	ナデ・ヘラナデ	布目・ヘラ圧・板ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T432	軒丸瓦		(6.9)	12.5	1.7	12.5	1.7	ヘラナデ	布目・タタキ・板ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0～7/0 灰白	やや粗	
T433	軒丸瓦		(19.0)	14.1	1.5	13.9	2.0	ミガキ・ナデ	布目・コビキB・タタキ・指ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N5/0 灰	10YR8/2 灰白	密	キラ粉付着・釘穴有
T434	軒丸瓦		(4.2)	12.3	1.6	(12.3)	2.0	ミガキ	指ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	やや粗	
T435	軒丸瓦		(7.1)	13.2	1.6	13.2	2.1	ミガキ	コビキB・タタキ・指ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T436	軒丸瓦		(4.8)	12.4	(1.1)	12.7	1.6	ナデ・ミガキ	指ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T437	軒丸瓦		(18.0)	13.9	2.4			ミガキ	布目・コビキB・タタキ・指ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5Y7/1 灰白	密	キラ粉付着
T438	軒丸瓦		(22.8)	12.2	1.6	12.5	1.8	ミガキ	布目・タタキ・指ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T440	軒丸瓦		(4.0)	(11.3)	1.7			ヘラナデ	指ナデ・指頭圧	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y 7/3 浅黄	N8/0 灰	密	
T441	軒丸瓦		(6.0)	14.4	1.5			ヘラナデ	コビキB・指ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N8/0～N5/0 灰白～灰	やや粗	
T442	軒丸瓦		(3.2)	12.2	1.5	12.2	2.2	ナデ	指ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	
T443	軒平瓦		(7.8)	(15.9)	2.1	4.5	2.4	指ナデ・ナデ	ナデ	N4/0 灰	N3/0 暗灰	N5/0 灰	密	
T444	軒平瓦		24.8	24.0	1.6	4.0	1.7	ナデ・板ナデ	ナデ	7.5Y5/1 灰	N5/0 灰		密	
T445	軒平瓦		(8.0)	(15.3)	1.5	3.3	1.5	指ナデ・ナデ	ナデ	5Y8/1 灰	5Y6/1 灰	5Y8/1 灰	密	
T446	軒平瓦		(14.0)	22.5	1.6	3.2	1.8	指ナデ・ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	密	
T447	軒平瓦		(7.8)	(16.2)	1.4	3.7	1.8	板ナデ・ナデ	ナデ	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	密	キラ粉付着
T448	軒平瓦		(16.1)	22.4	1.5	3.7	1.7	板ナデ・ナデ	ナデ	2.5GY8/1 灰白	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T449	軒平瓦		(6.3)	(10.2)	(1.7)	4.2	2.4	指ナデ・ナデ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	密	
T450	軒平瓦		(7.0)	(17.1)	1.3	(3.9)	1.2	指ナデ・ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰	密	
T451	軒平瓦		(12.7)	23.0	1.7	4.2	2.1	ナデ・板ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	
T452	軒平瓦		(10.3)	(15.4)	1.9	(4.6)	1.6	指ナデ・ナデ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y5/1 灰	N5/0 灰	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T453	軒平瓦		(10.7)	(16.1)	1.6	4.4	1.8	指ナデ・ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T454	軒平瓦		(11.5)	(14.0)	1.6	3.5	1.9	板ナデ・ナデ	ナデ	7.5Y8/1 灰白	N8/0 灰	7.5Y 8/1 灰白	密	
T455	軒平瓦		(15.1)	24.7	1.7	4.8	1.7	指ナデ・ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T456	軒平瓦		(9.4)	24.0	1.7	4.2	1.6	板ナデ・ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	密	
T457	軒平瓦		(11.8)	24.1	1.6	4.3	2.1	ナデ・板ナデ	ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	
T458	軒平瓦		(4.8)	(14.0)	1.4	(3.6)	2.1	指ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	密	
T459	軒平瓦		(3.7)	(11.2)		4.6	1.8	指ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	10Y5/1 灰	密	
T460	軒平瓦		(8.8)	(12.5)	1.8	4.0	2.8	指ナデ・ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N6/0 灰	密	
T461	丸瓦		29.5	13.2	1.4			ヘラミガキ	コザ目・ナデ・コビキB	N3/0 暗灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	漆喰付着
T462	丸瓦		20.9	12.8	1.3			ナデ・キラ粉付着	コビキB・タタキ	N5/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	やや密	
T463	丸瓦		20.8	13.0	1.7			ヘラミガキ	布目・コビキB・タタキ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0灰白より白い	密	凸面:漆喰付着
T464	丸瓦		21.8	15.7	2.3			ナデ・面取り	布目・ナデ・タタキ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T465	丸瓦		28.6	15.4	1.8			ヨコナデ・ナデ	ゴザ目・ヘラナデ・ナデ	N8/0 灰	5Y5/1 灰		密	
T466	平瓦		27.3	24.1	1.8			ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	凹面:使用痕
T467	平瓦		31.0	27.8	3.2			ナデ・ミガキ	ナデ	N4/0 灰	7.5Y5/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	凸面:弓状圧痕
T468	平瓦		(13.9)	(13.0)	1.9			粗いナデ	横方向のナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	密	前面:刻印
T469	平瓦		(15.2)	(12.7)	2.2			ナデ	板ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	前面:刻印
T470	平瓦		(13.2)	23.0	1.7			ナデ	ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	粗	前面:刻印
T471	輪違い瓦		12.0	12.3	1.4			ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰		密	
T471	平瓦		(11.0)	(16.3)	2.4			粗いナデ・板ケズリ	ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5Y8/2 灰白	密	前面:刻印有・凸面:弓状圧痕
T472	平瓦		(10.0)	(14.5)	2.9			粗いナデ	横方向のナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	前面:刻印有・凸面:弓状圧痕
T473	平瓦		(20.5)	(21.2)	1.9			ナデ	横方向のナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	密	上面:刻印
T474	菊丸瓦		(5.5)	10.4	1.3	10.2	1.7	板ナデ	板ナデ・指頭圧	N8/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	
T475	菊丸瓦		(5.0)	10.0	1.8	9.9	1.9	板ナデ	板ナデ・指頭圧	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	5Y8/2 灰白	密	
T476	菊丸瓦		(1.8)	(5.1)		5.1	1.4		板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N8/0 灰	5Y8/2 灰白	密	
T477	菊丸瓦		13.0	(8.5)	1.8	(3.8)	2.0	ヘラナデ・板ナデ	板ナデ・ナデ	N 5/0 灰	N8/0 灰	N8/0 灰	密	
T478	菊丸瓦		6.0		1.7			ナデ	板ナデ・指頭圧	N5/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	キラ粉付着
T479	鳥衾		(9.2)	17.9	1.5	17.9	2.2	指ナデ・ヘラナデ	指ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T480	鳥衾		(7.6)	(13.3)	1.4		(2.6)	ナデ・剥離	板ナデ・指頭圧・ナデ	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y6/1 黄灰	N5/0 灰	密	
T481	滴水瓦		(10.0)	26.8	1.8	11.4	3.1	板ナデ・ケズリ・ナデ	板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	凹面:使用痕
T482	滴水瓦		(8.8)	(21.2)	(2.0)	10.0	2.3	指ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰黄	N4/0 灰	2.5Y8/2 灰白	密	
T483	滴水瓦		(17.7)	27.1	2.2	(10.5)	2.2	ケズリ・ナデ・指ナデ	横方向のナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	凹面:使用痕
T484	滴水瓦		(4.9)	(23.2)	2.4	11.6	2.2	指ナデ・ナデ	指ナデ	N8/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	瓦当面裏:円形の凹み
T485	滴水瓦		(8.0)	(23.7)	2.5	(11.8)	(2.0)	ナデ	板ナデ	N3/0 暗灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T486	滴水瓦		(3.5)	(26.4)	2.2	(10.0)	3.0	板ナデ・ナデ	板ナデ	N4/0 灰	10YR6/3 にぶい黄橙	N5/0 灰	精良	
T487	滴水瓦			28.0		10.1	3.0	板ナデ		N5/0 灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T488	滴水瓦		(2.8)			(24.0)	2.2	ナデ	指ナデ、ナデ、指頭圧	N5/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰	密	キラ粉付着
T489	滴水瓦		(15.6)	(15.0)	2.2	(7.6)	2.7	ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	
T490	輪違い瓦		13.2	(11.8)	1.4			ナデ	布目・コビキB	N5/0 灰	N4/0 灰	N4/0 灰	密	
T492	丸瓦		(15.6)	(9.3)	2.7			板ナデ	布目	N8/0 灰	N8/0 灰	N6/0 灰	密	
T493	丸瓦		(16.7)	(12.3)	2.6			板ナデ・ヘラナデ	布目・コビキ痕	N4/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	
T494	平瓦		(15.4)	(13.0)	(3.3)			粗いナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N6/0 灰	密	凸面:記号
T495	平瓦		(13.4)	(12.1)	2.5			粗いナデ	丁寧なナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	凸面:記号
T496	鬼瓦(三ツ葉葵)									7.5Y6/1 灰	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y7/1 灰白	密	
T497	鬼瓦		(12.0)	(8.4)	1.5			ナデ	ヘラケズリ	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	密	
T498	鬼瓦		(24.6)	(10.6)	(3.8)			ナデ・指ナデ・板ナデ	ヘラケズリ	N4/0 灰	N5/0 灰	2.5GY8/1 灰白	粗	
T499	鬼瓦		(61.6)	25.0	17.8			ナデ	粗いナデ・ヘラナデ	N4/4 灰	N4/4 灰	N7/0 灰白	密	

番号	器種	図版	法量(cm)					調整		色調			胎土	備考
			長さ	幅	厚	瓦当径	瓦当厚	凸面	凹面	凸面	凹面	断面		
T500	軒丸瓦					13.5	1.8	板ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N4/0 灰	2.5GY8/1 灰白	密	
T501	軒平瓦		(8.5)	(17.3)	1.7	4.6	1.7	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T502	軒丸瓦					(9.5)	2.1	ナデ	ナデ	10YR5/1 褐灰	2.5YR4/1 黄灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T503	軒丸瓦					(9.1)	1.9		指頭ナデ・指ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y7/2 灰黄	粗	
T504	軒丸瓦			12.5		13.2	1.5		指頭圧・ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T505	軒丸瓦			13.4		13.5	1.4	ナデ	板ナデ・指頭圧・指ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰白	やや良	瓦当面:キラ粉付着
T506	軒平瓦		(16.5)	24.0	1.7	4.3	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N4/0 灰	10Y8/1 灰白	密	
T507	軒平瓦		(8.2)	(17.1)	1.6	4.5	1.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ・ミガキ	N4/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	密	瓦当・凹面:キラ粉付着
T508	菊文瓦		(4.9)	9.3	1.6	10.1	1.8	ヘラナデ	ナデ・指頭圧・指ナデ	5Y8/1 灰	5Y6/1 灰	2.5Y7/2 灰黄	密	
T509	鳥衾瓦		(9.5)	12.1	2.3	17.1		ナデ	指頭圧・ナデ・指ナデ・ケズリ	N4/0 灰	N4/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T510	丸瓦		(23.2)	(11.0)	1.8			ナデ	ナデ・タタキ・布目・コビキB	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	凸面:漆喰付着
T511	丸瓦		(29.5)	16.0	3.3			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・ナデ	N2/0 黒	N2/0 黒	5Y7/1 灰白	密	
T512	平瓦		29.8	25.0	1.8			粗いナデ	板ナデ・ナデ	N2/0 黒	N3/0 暗灰	7.5Y7/1 灰白	密	釘穴1個
T513	鬼瓦		(10.8)	(15.5)	高さ5.0			ナデ	粗いナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	三葉紋？
T514	軒丸瓦		(5.4)	13.2	1.8	13.2	1.4						密	
T515	軒丸瓦				2.1	(8.2)	2.4		ナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T516	軒丸瓦		23.5	13.0	1.5	13.0	0.9	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ・ヘラケズリ・コビキB・網目	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N8/0 灰白	密	
T517	滴水瓦		(8.4)	(9.5)	2.2				ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	2.5Y8/1灰白	密	
T518	軒丸瓦		(15.4)	13.4	(9.2)	13.4	1.4		巴文				密	
T519	菊丸瓦		(7.8)	9.8	1.6	(8.4)	1.8						密	
T520	鬼瓦		(10.0)	(12.6)	3.4								密	
T521	鳥衾瓦		(17.2)	9.7	2.0	(13.6)		ナデ・ヘラナデ	粗いナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	密	瓦当面:キラ粉付着
T522	滴水瓦		(10.5)	(23.8)	2.0	(11.2)	1.7	ナデ・板ナデ	ミガキ・ナデ	N8/0 灰	N5/0 灰	7.5Y7/1 灰白	密	
T523	滴水瓦			27.4		(9.9)	2.2	ナデ	板ナデ・指頭圧・ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T524	瓦		(7.8)	(6.6)	(4.4)			ナデ		N5/0 灰	N6/0 灰	N7/0 灰白	密	刻印「瓦師捨七」
T525	鬼瓦					(6.6)	(2.7)			N4/0 灰		2.5Y8/2 灰白	やや密	
T526	鬼瓦		(23.5)	(14.9)	(7.3)			ナデ	ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	7.5Y7/0 灰白	密	
T527	軒丸瓦		27.8	12.3	2.3	12.8	1.8	ヘラナデ・ナデ・ミガキ	ナデ・布目・タタキ・コビキA	N4/0 灰	N4/0 灰	2.5Y8/2 灰黄	密	
T528	軒丸瓦		(8.0)	(14.8)	2.4	(14.5)	1.4	ナデ	ナデ	2.5Y8/1 黄灰	2.5Y8/1 黄灰	2.5Y8/1 黄灰	密	
T529	軒丸瓦		(4.0)	13.2	1.9	13.8	1.5	ヘラナデ	板ナデ・ヘラナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	7.5Y8/1 灰白	密	
T530	軒丸瓦		(2.7)	13.9	3.0	14.0	1.8	ナデ	板ナデ・ヘラナデ	2.5Y7/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y7/2 灰黄	密	
T531	軒丸瓦		(2.7)	12.2		13.0	1.8		板ナデ・ナデ・指頭圧	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰黄褐	10YR8/2 灰白	密	
T532	軒丸瓦		(8.0)	(12.2)	1.5	(5.9)	1.4	ヘラナデ	ナデ・布目・板ナデ・コビキB	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	5Y8/1 灰	密	
T533	軒丸瓦		(2.7)	12.1	1.7	12.8	1.9	ヘラナデ	板ナデ・ナデ	N4/0 灰	N8/0 灰	N7/0 灰白	密	
T534	軒丸瓦		(5.9)	13.3	1.7	13.7	2.2	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N3/0 暗灰	N4/0 灰	N7/0 灰白	密	
T535	軒丸瓦		(6.3)	(13.3)	1.9	13.7	2.0	ナデ	板ナデ・ナデ・指頭圧	N4/0 灰	N4/0 灰	N4/0 灰	密	
T536	軒平瓦		(7.8)	(11.0)	(2.2)	(3.8)	(1.8)	板ナデ・ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 にぶい橙	10YR7/1 灰白	密	
T537	軒平瓦		(10.6)	(10.0)	1.5	3.7	2.7	板ナデ・粗いナデ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T538	軒平瓦		(4.8)	(13.4)	1.5	(3.5)	2.2	板ナデ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	N5/0 灰	密	
T539	軒平瓦		(6.8)	(13.8)	1.6	(3.8)	1.9	ナデ	ナデ・板ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰	密	
T540	軒平瓦		(5.2)	(12.0)	1.3	3.5	1.9	板ナデ・ナデ	ナデ	N5/0 灰	N4/0 灰	N4/0 灰	密	
T541	軒平瓦		(5.8)	(13.4)	1.5	3.6	1.8	板ナデ・ナデ	ナデ	5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	5Y8/1 灰白	密	
T542	丸瓦		(21.7)	12.9	2.0			ナデ・ミガキ	布目・コビキB・板ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	N8/0 灰	密	
T543	丸瓦		(20.7)	12.6	1.8			ナデ・ミガキ・横方向のナデ	布目・コビキB・ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	N8/0 灰白	密	

木製品観察表

番号	器種	図版	法量(cm)			備考
			長	幅	厚	
W1	刷毛		9.3	9.5	1.7	色素付着部分有
W2	加工木					板目・ミカン割
W3	加工木		15.9	4.8	1.8	板目・先端加工
W4	加工木		7.6	2.0	0.9	釘残存

石製品観察表

番号	器種	図版	法量(cm・g)				石材(素材)	備考
			長	幅	厚	重		
S1	硯		5.5	7.4	(2.0)	118.4	赤間岩	
S2	硯		(3.7)	7.2	1.8	39.6	赤間石	
S3	硯		(8.7)	(8.3)	2.6	285.8	赤間石	「赤間関 大森多量頼澄」・鉄付着
S4	硯		(7.2)	(5.5)	1.7	114.6	赤色岩屑	文字:「赤間関」
S6	硯		(15.0)	7.4	2.3	327.6	赤間石	「赤間関」
S7	硯		(5.0)	6.8	2.8	132.6	花崗岩	
S8	硯		(4.0)	6.6	3.0	84.7		
S9	硯		(6.1)	7.8	3.5	220.6	花崗岩	表面:刻印「六」
S10	硯		(10.0)	(5.2)	2.9	174.8	花崗岩	
S11	硯		(12.4)	7.0	2.6	392.5	花崗岩	
S12	硯		(10.8)	4.7	1.5	108.9	緑泥片岩	表:「木」・裏:「口年口之」「武田姓」「口月吉日虎秀」
S13	硯		(12.2)	6.3	(1.6)	174.8	緑泥片岩	
S14	硯		15.2	6.6	(1.5)	254.3	緑泥片岩	
S15	硯		16.7	7.9	(2.7)	582.5	緑泥片岩	
S16	硯		8.0	5.0	0.4	27.0	玄武岩	
S17	硯		(9.3)	5.1	(1.6)	88.3	チャート	
S18	硯		(15.1)	6.2	2.2	290.1	安山岩	
S19	硯		(4.1)	7.6	(2.4)	99.2	玄武岩	
S20	硯		(4.6)	7.2	2.1	108.0	軽石系	
S21	硯		(5.5)	6.1	2.5	173.6	凝灰岩	
S22	砥石		(3.3)	(5.0)	(0.8)	20.8	砂岩	
S23	砥石		(6.3)	4.6	0.7	29.1		
S24	砥石		(10.9)	6.0	6.4	700.3	砂岩	1面のみ使用
S25	砥石		(4.7)	5.0	(0.8)	18.4	花崗岩	
S26	砥石		(14.1)	7.1	(1.5)	283.3	花崗岩	
S27	砥石		(6.3)	4.9	(1.0)	55.4	赤色岩屑	角を面取り
S28	石鍋		口径 16		器高 (3.3)	18.8		
S29	火鉢?		高さ 13.2	径 35.0	底径 29.0		凝灰岩	三脚
S30	磨石		(15.8)	7.3	7.2	1205.0	花崗岩(庵治石)	
S31	不明		(7.8)	7.5	1.0	52.2	安山岩	
S32	石板		(15.2)	(5.8)	0.4	45.7	粘板岩	全面加工
S33	石板		(9.7)	(6.7)	0.5	57.9	粘板岩	全面加工
S34	石板		(8.2)	(6.2)	0.4	26.5	粘板岩	表裏面:擦痕・側面:鋸痕?
S35	石板		(5.5)	(7.5)	0.4	27.9	粘板岩	表裏面:擦痕
S36	ろう石		(4.9)	0.9	0.9	(7.8)		
S37	石臼(上石)		13.2	(9.0)	(16.8)		砂岩	
S38	層塔(相輪)		(35.0)	19.5	21.0	11.8k	豊島石	
S39	五輪塔(風輪)		13.0	21.0	21.2	6.3k	凝灰岩(天霧)	
S40	五輪塔(地輪)		14.8	15.1	13.0	3.5k	豊島石	
S41	井戸枠		34.0	(47.5)	9.3	18.3k	豊島石	
S45	硯		(7.4)	9.3	2.1	256.2	赤間石	裏面:線刻「間間」

土製品観察表

番号	器種	図版	法量(cm)			重量(g)	調整・文様	色調	胎土	備考
			長さ	幅	厚					
C1	土錘		2.8	1.9	1.8	10.6		2.5Y5/1 黄灰	密	
C2	土錘		3.2	2.9	2.2	21.0	ナデ・指頭圧	7.5YR8/4 浅黄橙	密	
C3	土錘		6.7	3.8	4.8	96.9	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	やや密	
C4	土錘		7.8	4.6	4.7	167.5	ナデ・指頭圧	5YR6/8 橙	やや密	
C5	土錘		8.3	(5.6)	(5.8)	221.9	ナデ	10YR7/4 にぶい橙	やや粗	
C6	有溝土錘		(8.7)	(5.7)	(5.4)	173.8	ナデ・指頭圧	5YR7/4 にぶい橙	やや密	
C7	土錘		8.9	5.3	5.9	223.0	ナデ・指頭圧	10YR8/2 灰白	粗	
C8	土錘		9.1	(7.1)	5.3	313.1		7.5YR7/6 橙	やや粗	
C9	有溝土錘		9.2	5.5	5.4	198.2	ナデ	10R6/6 赤橙	やや粗	
C10	土錘		10.3	(5.3)	5.4	279.4	ナデ・指頭圧	7.5YR7/4 にぶい橙	粗	
C11	有溝土錘		10.3	6.7	6.6	377.6	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	粗	
C12	土錘		10.7	(5.0)	5.4	265.6	ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙	粗	
C13	土錘		3.8	1.1	1.1	4.5		7.5YR7/6 橙	密	
C14	管状土錘		3.8	1.2	1.2	4.9	手捏ね	5YR7/6 橙	やや密	
C15	土錘		5.3	1.2	1.2	6.9		7.5YR5/3 にぶい褐	密	
C16	管状土錘		6.1	3.5	3.5	67.2	ナデ	2.5Y7/6 橙	粗	
C17	紡錘車		6.7	6.7	1.0	50.8	表:ナデ 裏:布目痕	5YR6/4 にぶい橙	やや密	焼塩壺蓋？
C18			12.8	12.2	4.2			N4/0 灰	密	内側にキラ粉付着
C19	玩具(視)		(2.8)	4.3	0.7			7.5YR7/3 にぶい橙	やや密	
C20	将棋の駒(銀将)		2.6	2.4	0.6			胎土:10Y8/1 灰白 透明釉 模様:呉須(明青)	精良	
C21	土人形(虚無僧)		(6.4)	3.6	3.0			7.5YR8/4 浅黄橙	やや密	着色料付着
C22	土人形(サル)		(4.5)	3.5	3.3		キラ粉付着	7.5YR6/6 橙	やや密	
C23	土人形(魚)		(6.3)	2.9	1.8			2.5YR7/8 橙	密	赤色顔料
C24	土人形(城)		(4.0)	2.9	2.9			素地:5Y3/3 暗赤褐 釉:7.5YR7/6 橙	やや密	底と1階の1面のみ無釉
C25	土人形		5.8	4.2	2.5			2.5Y8/2 灰白～7/2 灰黄		
C26	土錘		4.4	1.1	0.9	4.1	手捏ね	10R5/6 赤	やや密	
C27	土錘		(2.2)	0.8	0.8	1.2	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	やや密	
C28	土錘		9.2	(4.4)	(5.2)	175.5	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	
C29	有溝土錘		7.7	(4.7)	(3.8)	99.1	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	やや粗	
C30	管状土錘		5.3	3.9	3.4	63.0		7.5YR7/4 にぶい橙	密	
C31	土錘		9.5	4.6	4.8	179.6		7.5YR7/6 橙	やや粗	
C32	土錘		10.9	5.8	5.1	284.3	ナデ	2.5Y8/3 淡黄	やや密	
C33	土錘		8.6	5.6	(3.0)	99.1	ナデ・指頭圧	10YR8/1 灰白	やや粗	

雑器観察表

番号	器種	図版	法量(cm)			石材(素材)	備考
			長	幅	厚		
X1	歯ブラシ		(11.0)	1.1	0.7	骨・角	
X2	櫛		3.0	8.4	0.5		
X3	革製品		5.2	5.5	0.6		一部表面剥離
X4	革製品		7.8	9.0	1.0		鋲が13個・皮3枚重ねで現存
X5	革製品		4.9	5.2	0.2		
X6	革製品		9.7	5.1	0.3		
X7	貝杓子		(8.0)	8.7	0.2		穿孔2ヵ所
X8	バチ(三味線)		(6.5)	4.8	0.3		差し込み式に加工
X9	紙		(17.6)	(10.3)	0.2		
X10	塑		(20.3)	(36.6)	8.1	土・漆喰・瞰	
X11	塑		(18.0)	(25.0)	5.5	土・小石	
X12	漆喰		(13.6)	(14.0)	(3.1)		
X14	アルミテープ		4.5	3.8	3.1		(14.0)

鉄器観察表

番号	器種	図版	法量(cm)			重さ(g)	石材(素材)	備考
			長	幅	厚			
M1	円形		9.7	9.6	1.5	122.9	鉄	
M2	不明鉄製品		4.8	3.7	0.5	12.3	鉄	
M3	鉄板		3.0	0.2	3.0	4.3	鉄	
M4	不明鉄製品		(7.4)	(7.4)	0.7	25.6	鉄	
M5	げんのう		16.3	3.9	4.3	1115.9		
M6	釘		3.5	0.3	0.4	1.0	鉄	
M7	釘		5.0	0.5	0.5	2.9	鉄	
M8	釘		5.6	0.7	0.7	10.0	鉄	
M9	釘		7.5	0.5	0.5	4.7	鉄	
M10	釘		5.9	0.5	0.6	3.7	鉄	
M11	釘		11.5	0.5	0.4	14.6	鉄	
M12	釘		(12.7)	0.5	0.5	18.7		
M13	釘		18.4	0.8	0.6	57.3	鉄	
M14	かすがい		5.9	2.5	0.5	5.5	鉄	
M15	ヘラ状工具		10.6	0.8	1.2	30.8	鉄	
M16	かすがい		14.2	1.6	1.5	109.9	鉄	
M17	かすがい		15.8	1.2	1.2	144.8	鉄	
M18	釘		14.6	7.5	7.0	36.7	鉄	
M19	不明鉄製品		16.0	1.1	1.2	134.7	鉄	
M20	煙管吸口		7.3	1.1	1.0	10.4	真鍮	
M21	鍵		5.1	0.8	0.2	10.8	鉄	
M22	古銭		2.5	2.5	1.2	3.1	銅	表面:文字有・永の字右側に范傷による痕跡
M23			11.4	2.5	0.2	4.2	銅	
M24	毛抜き		7.4	1.1	0.4	5.8	青銅	
M25	椀型鉄製品		4.7	8.6		350.6	鉄	
M26	不明鉄製品		(18.3)	口径 27.2		408.4	鉄	体部:四角形の穴有
M27	鉄鍋		6.0	7.0	0.5	56.6	鉄	
M28	刃		22.3	2.9	0.6	48.7	鉄	
M29	ノミ(木用)		14.5	2.5	2.2	153.6	鉄	
M30	金槌		8.7	3.9	2.1	380.9	鉄	
M31	不明鉄製品		9.9	1.9		75.0	鉄	2個接合
M32	不明鉄製品		11.1	4.3	(1.5)		鉄	木片痕有
M33	ノミ(石用)		16.2	3.0	1.6		鉄	
M34	釘		16.4	2.0	1.6		鉄	
M35	パール		48.1	2.0		928.1	鉄	
M36	釘		7.0	0.5	0.5	4.4	鉄	
M37	釘		11.2	0.8	0.8	18.7	鉄	
M38	釘		17.1	2.8	0.7	35.2	鉄	
M39	釘		19.0	0.5	0.4	29.1	鉄	
M40	かすがい		15.3	1.0	2.1	165.3	鉄	
M41	かすがい		18.0	5.3	2.0	232.3	鉄	
M42	かすがい		16.4	7.1	0.8	221.1	鉄	
M43	かすがい		17.6	5.6	1.9	186.1	鉄	
M44	かすがい		20.2	7.9	1.6	332.4		
M45	かすがい		18.2	1.1	1.3	139.2		
M46	かすがい		21.5	6.4	1.5	130.8	鉄	
M47	不明鉄製品		10.0	7.0	0.7	26.7	鉄	
M48	不明鉄製品		9.2	10.0	2.5	850.3	鉄	
M49	鉄板		12.6	1.7	4.5	22.2	鉄	
M50	鉄板		32.7	11.0	0.3	624.8	鉄	
M51	飾り金具		6.0	3.5	0.7	18.6	鉄	
M52	部材		(3.8)	2.6	1.1			
M53	飾り金具		4.9	4.0	0.1	6.8	銅	
M54	二銭		径 3.2		0.2	13.9	銅銭	明治16年製

番号	器種	図版	法量(cm)			重さ(g)	石材(素材)	備考
			長	幅	厚			
M55	煙管		7.9	9.0	5.0	9.6	銅	
M56	煙管吸口		11.8	1.4	1.2	26.0	真鍮	
M57	煙管吸口		9.2	1.0	1.0	8.3	真鍮	
M58	煙管吸口		8.5	1.1	径1.1	10.9	真鍮	
M59	簪		12.9	0.8	0.3	7.7	鉄	表面塗銀？
M60	財布		7.0	10.1	0.7	32.0	真鍮？	研磨痕
M61	包丁		18.5	3.1	0.4	39.7	鉄	
M62	不明鉄製品		7.9	6.3	1.6		鉄	
M63	穴あけ		14.8	10.1	5.5	48.3	鉄	
M64	不明鉄製品		20.2	2.0	1.1	238.7	鉄	
M65	不明鉄製品		6.4	4.0	0.4	43.0	鉄	
M66	鉄板		8.8	2.5	0.5	32.3	鉄	
M67	U字形		5.5	5.5		32.2	鉄	5ヶ所の穴？
M68	鍋		(8.1)	(16.9)		532.2	鉄	
M69	鉄板		18.8	2.9	0.7	84.7	鉄	
M70	ボルト		16.9	2.7	2.6	120.0		
M71	釘		9.8	2.8	1.4	129.6	鉄	
M72	釘		8.2	0.6	0.5	9.4	鉄	
M73	釘		9.8	0.7	0.7	13.4	鉄	
M74	釘		20.4	2.1	0.6	16.8	鉄	
M75	瓦釘		11.2	0.8	0.8	20.9	鉄	
M76	釘		14.1	1.6	1.0		鉄	
M77	釘		14.0	9.0	0.7		鉄	
M78	釘		15.3	0.7		19.7	鉄	
M79	釘		15.9	0.7	0.7		鉄	
M80	釘		16.4	0.5	0.4	17.4	鉄	
M81	釘		18.0	1.1	0.5	20.2	鉄	
M82	釘		22.5	0.7	0.7	63.2	鉄	
M83	釘		22.6	1.1	0.6	41.2	鉄	
M84	飾り金具		5.7	5.7	1.0	8.6	青銅	穿孔方向は裏から表・右端の一部が偶発的圧力で裏側へ湾曲している
M85	飾り金具		4.4		0.7	5.7	青銅	
M86	飾り金具		5.7		0.3	7.6	青銅	
M87	銅製飾金具		3.6	5.6	0.1	3.3	青銅	
M88	くさび		8.1	2.0	0.8			
M89	鉄板		(13.1)	2.4	0.3	74.7	鉄	円孔3ヵ所？
M90	釘		12.8	0.6	0.6	14.5	鉄	
M91	釘		5.8	0.5	0.4	3.5	鉄	
M92	釘		8.3	9.1	0.5	13.7	鉄	
M93	蓋		高さ0.8	口径7.1	0.5		青銅	
M94	飾り金具		4.6	5.7	3.6		青銅	
M95	釘		(10.4)	0.4	0.4		鉄	
M96	釘		(6.8)	0.3	0.3		鉄	
M97	釘		(10.2)	0.4	0.4		鉄	
M98	銅銭		径2.6		0.2		鉄	
M99	不明		(7.4)	2.3	0.5		鉄	
M100	釘		2.8	0.4			鉄	
M101	釘		9.1	0.6			鉄	
M102	頭巻釘		(7.3)	0.8			鉄	
M103	釘		(6.2)	0.3	0.3		鉄	
M104	釘		(8.0)	0.4	0.4		鉄	
M105	釘		(12.0)	0.8	1.0		鉄	
M106	釘		(12.8)	0.5	0.5		鉄	
M107	釘		13.2	0.8	0.7		鉄	
M108	釘		(5.8)	0.4	0.7		鉄	
M109	銅銭		径2.5		0.1		鉄	
M110	金具		6.1	(3.4)	1.7	59.0	鉄	